昭和五年十一月三十日印刷
昭和五年十二月十五日發行

上製　新井石禪全集　第十二卷

著作權者　祥雲晩成
編纂者　山田靈林
發行者　飯野政晴
東京府北豊島郡中新井一九三四番地
印刷者　加藤保
東京市神田區三崎町三丁目一二四番地
印刷所　加藤文明社印刷所

發行所
東京市芝公園十一號地八番
大本山總持寺東京出張所內
新井石禪全集刊行會
電話　芝(43)一四八六番
振替東京四五四三二番

（製本　菊池製本所）

福島市　石井松五郎

山口縣福田寺　茅野默仙

山形縣　藤塚熊太郎

熊本第二師範學校長　長谷川藤太郎

秋田縣　池田文一郎

新潟市宗現寺　乙川文獅

東京　小池厚之助
同　幸島基太郎
同　窪田利七
同　小杉甚三郎
同　錦戸右門
同　原邦造
同　池田成彬
同　三井源右衛門
横濱市　駒井久治郎
同　汐田常吉
山形縣　佐藤清治
同　上郎清助
同　富山勘之助
同　戸井嘉作
同　河杉はつ
同　宮田萬作
同　大津作太郎
鎌倉　猪股元嗣

同　小林久吉
同　日本石油株式會社
同　後藤良貞
同　松島不二
同　福井國太郎
同　男爵　阪谷芳郎
同　男爵　中島久萬吉
同　男爵　三井八郎右衛門
同　峰岸半次郎
同　山下兵治
横濱　渡邊福三郎
同　大谷嘉兵衛
同　佐久間權藏
同　鬼頭庄治
同　齋藤虎五部
同　前田茂嗣
川崎市　關口眞太郎
名古屋市　盛田久左衛門

同　渡邊仙藏
同　株式會社博進社
同　小針金三郎
同　三澤延吉
同　大橋新太郎
同　尾上菊五郎
同　藤原銀次郎
同　井上雅二
同　佐藤留五郎
同　宮川作兵衛
同　諸星千代吉
同　原田島十
同　青木正太郎
同　矢島泰治郎
同　松原爲三郎
同　鈴木重次郎
同　市口清太郎
福島縣　橋本萬右衛門

東京 柳　悦耳
同 篠崎　仙司
同 城谷　忠三郎
同 齋藤　義一
同 渡邊　芳郎
同 千葉　利智
同 齋藤　竹之助
同 池田　泰親
同 森永製菓株式會社
同 吉本　天祥
同 柿沼　武兵衞
同 田中　辰三
同 松本　辰三郎
同 能見　愛太郎
同 磯野　銀策
同 大阪商船株式會社
同 三枝　代三郎
同 黑川　透

同 香田　五郎
同 秋田　太吉
同 松屋呉服店
同 菅　禮之助
同 彌永　克己
同 中野高等女學校
同 生野　團六
同 大木　乙彌
同 鈴鹿　ます子
同 淺山　榮治郎
同 木村　久太郎
同 本間　利雄
同 加藤　敬三郎
男爵 內海　勝二
同 松崎　半三郎
同 成溪學園
同 水町　雄次
同 金澤　松治

同 日本郵船株式會社
同 伯爵 松平　賴壽
同 大貫　安二
同 齋藤　龍三
同 渡邊　清
同 澤田　竹三郎
同 猪股　淇清
同 菅原　道男
同 青田　幸吾
同 十文字　俊夫
同 吉本　清太郎
同 落合　泰藏
同 結城　豐太郎
東京 白石　元治郎
同 木部　一枝
同 藁品　榮子
同 丸山　英彌
同 成田　大兆

東京市 谷本敏彦
同 赤星陸治
同 初見五郎
同 石川昌次
同 山田藤吉郎
同 澁谷兼四郎
同 伊吹震
同 星一
同 男爵 古河虎之助
同 三木宗策
同 辻東水
同 篠田千代
同 中村勝五郎
同 眞田祐太郎
同 安部成嘉
同 木村篤太郎
同 龜岡豐二
同 臼井マサ子

同 福川忠平
同 堤長述
同 子爵 花房太郎
同 佐々木啓次
同 田代由三郎
同 國澤新兵衛
同 足立傳兵衛
同 帝國火災海上保險會社
同 淺野泰治郎
同 西丸小園
同 伊東忠太
同 丹羽花子
同 小野重行
同 青木菊雄
同 五十嵐小太郎
同 岡本武尙
同 齋藤てい子
同 岩佐高等女學校長

同 西井濤一
同 菅野與三治
同 又木周夫
同 楡井勝
同 河鰭義三郎
同 小倉敬止
同 大久保重次郎
同 今井芳雄
同 小泉晋一
同 大澤志津子
同 須田信次
同 侯爵 前田利爲
同 持丸兵輔
同 男爵 松岡均平
同 磯村音介
同 小林錡
同 本尾小太郎
同 鈴木由郎

特別會員（次第不同）

大本山總持寺 默照會
同 報恩婦人會
同 心法寺 中谷左禪
同 回向院 本多淨巖
同 一行院 八百谷順應
同 青松寺 杉村哲夫
同 海龍寺 久貝圓之
同 圓德寺 黑島弘禪
同 高岩寺 來馬道憲
同 眞頂院 疋田運榮
同 玉林寺 琳谷元秀
同 津梁院 長澤德玄
同 揩林寺 須田豐光
同 淸久寺 岩倉顯嶺
同 檀野禮助
同 堀田畯次郎

同 三松會
東京全勝寺 伊藤本光
同 光臺院 金子全應
同 慈光院 竹內道骨
同 法音寺 吉野仙宗
同 高林寺 松山大器
同 了眞寺 大辻默堂
同 玉宗寺 續玉麟
同 吉祥寺 岩本宗國
同 淨名院 飯田聖音
同 說音寺 上村慈舟
同 安昌寺 渡邊仙岩
同 潮雲寺 高山德貞
同 護國寺 佐々木敎純
同 本重和助
同 齋藤末吉

同 白字會
同 天龍寺 山本健堂
同 梅林寺 喜谷良哉
同 宗福寺 上杉賢愼
同 泉岳寺 小阪準爾
同 喜福寺 今井鐵城
同 松月院 仲井覺乘
同 青原寺 勝木堪宗
同 總禪寺 大石吟嘯
同 向泉寺 來馬祖道
同 長慶寺 武藤文英
同 大松寺 若松普音
同 天龍寺 牧瑞弘
同 淺草寺文庫
同 堀澤尙中
同 木戶壽榮子

中西重藏
今井夾邦
小野哲郎

文學博士　高楠順次郎
貴族院議員　加藤政之助
相馬由也

護國寺住職　小野方良行
神道派管長　神崎一作
釋默笑

文學博士　宇井伯壽
布哇別院總監　駒形善教
内閣總理大臣秘書官　戸田由美
日魯漁業專務　檀野禮助
妙心寺派執事長　後藤亮一
衆議院議員　戸井嘉作
駒澤大學教授　境野黄洋
智山專門學校長　平澤照尊
外務省亞細亞局長　有田八郎
大覺寺執事　谷内清巖
永平寺監院　上野舜穎
外務省法律顧問　タマス・ペーテ
衆議院議員　小野重行
衆議院議員　野田文一郎
男爵　九鬼隆一
陸軍大將男爵　奈良武次
文學博士　村上專精
古島一雄

醫學博士　月江曹元
本派本願寺執行　後藤環爾
内閣書記官長　鈴木富士彌
東洋大學長　中島德藏
豐山派管長　加藤精神
井上角五郎
衆議院議員　安藤正純
辯護士　濱地八郎
法隆寺管主　佐伯定胤
大谷派本願寺參務　阿部惠水
駒澤大學長　忽滑谷快天
明治製糖社長　相馬半治
衆議院議員　金光庸夫
愛知電鐵重役　田中新七
内務次官　潮惠之輔
衆議院議員　増田義一
増上寺執事長　窪川旭丈
立正大學長　清水龍山

東京日比谷圖書館長　今澤慈海
黒龍會々長　内田良平
政友會幹事長　森恪
前天台宗總務　大森亮順
前政友會總裁男爵　田中義一
文學博士　建部遯吾
文部省普通學務局長　武部欽一
妙心寺派管長　神月徹宗
衆議院議員　高島順作
大谷派本願寺東京出張所長　溪内弌惠
衆議院議員　河上哲太
陸軍中將　原口初太郎
豐山派宗會議長　湯澤龍岳
衆議院議員　高木益太郎
東京帝國大學教授　眞鍋嘉一郎
精神社主筆　加藤咄堂
横山健堂
衆議院議員　西村丹次郎

贊助員

（次第不同）

伯爵 清浦奎吾
子爵 澁澤榮一
內閣總理大臣 濱口雄幸
衆議院議員 高橋光威
法相宗管長 大西良慶
永平寺顧問 弘津說三
拓務大臣 松田源治
貴族院議員 岡田良平
子爵 牧野忠篤
前文部政務次官 野村嘉六
建長寺派管長 菅原時保
三井信託社長 米山梅吉
男爵 福原俊丸
大正大學長 權田雷斧
陸軍中將 堀內文次郎
衆議院議員 山本条太郎

增上寺法主 道重信教
頭山滿
大乘會長 田中舍身
仁和寺門跡 石堂惠猛
鐵道次官 青木周三
文部省社會教育局長 下村壽一
文學博士 井上哲次郎
外務政務次官 永井柳太郎
永松爲治郎
立正高等女學校長 高島平三郎
衆議院議員 紫安新九郎
淨土宗執綱 渡邊海旭
商工政務次官 横山勝太郎
文學博士 西晉一郎
時宗管長 河野頼善
前日蓮宗宗務總監 望月日謙

京城電氣重役 福島甲子三
貴族院議員 土田萬助
衆議院議員 秋田清
內務大臣 安達謙藏
前文部大臣 一橋一太
永平寺貫首 北野元峰
政友會總裁 犬養毅
衆議院議員 床次竹二郎
貴族院議員 水野錬太郎
古義眞言宗管長 龍池密雄
侯爵 大隈信常
農林大臣 町田忠治
建仁寺派管長 竹田默雷
日蓮宗管長 酒井日慎
遞信大臣 小泉又次郎
文學博士 木村泰賢

経営部代表

橋本徳太郎

武内紫明

飯野政晴

豊島武雄

磯部盛紀

同　松本全巖

總持寺布教部　江川太禪

總持寺知客　南調道

同　盛田孝岳

遺弟　水野童龍

同　新井覺禪

同　新井石龍

舊侍局　神谷鐵髯

同　飯塚延英

編纂部代表　山田靈林

柴山邦彥

後藤大用

足立義一

新井石禪全集刊行會

前總裁　故　杉本道山
總裁　總持寺貫主　秋野孝道
顧問　最乘寺主　伊藤道海
會長　總持寺監院　黑田鐵巖
理事長、總持寺監院　祥雲晩成
總持寺後堂　嶽尾來尚
總持寺副監院　水野虎溪
同　孤峰智璨
同　保坂眞哉
同　山本富賢
總持寺副寺　鏡島宗純

『新井石禪全集』の刊行に著手いたしましてより玆に一星霜を閲し、漸く其の完成を見るに到りましたことは邦家教學のため欣快に堪へぬ次第であります。不肖菲才を揣らず斯の盛業を統理するの任に當りましたのは、全く禪師の御盛德を永遠に傳へ禪師の最も心血を注がせられたる民衆敎化の御遺志を奉承致さんが爲めでありました。幸にしてこの有終の美果を收め得ましたことは、言ふまでもなく、總裁秋野孝道猊下、會長黑田鐵巖老師、顧問伊藤道海老師を始め、內外諸彥の熱誠なる御援助の賜物でありまして、其の甚深なる御好意と多大の御淸誼とは不肖等の感激に堪へざる所でございます。

禪門の巨擘佛敎界の權威と仰がれた新井禪師の大雄辯大文章に就いては、今更喋々を要しませんが、其の御遺著御遺稿は實に夥しい數量に上り、隨つて蒐集すれば隨つて現るといふ狀態で、之が輯載には少からぬ凝議と選考とを要しました。從つて發刊期日に多少の遲延を生じたことなども有りましたことを玆に陳謝致します。

昭和五年十二月

新井石禪全集刊行會

理事長　祥雲晩成

院曹洞宗務院教學部長を拜命。十月辭任。
□明治三十九年三月、永平寺副監院、人事部長に就任。
□明治四十一年(四十五歳)八月、滿鮮臺灣に巡教。
□明治四十四年(四十八歳)一月、教學長辭任。大本山永平寺副監院に就任、森田禪師の隨行長たり。
□大正四年(五十二歳)名古屋市常恒會地護國院に轉任。
□大正五年(五十三歳)神奈川縣足柄上郡南足柄村常恒會地最乘寺轉住。
□大正六年(五十四歳)大本山總持寺再建部總裁に就任。
□大正八年曾長代理として滿洲御巡教。
□大正九年(五十七歳)三月、大本山總持寺西堂に就任。同年十二月廿三日、一宗の輿望を擔うて大本山總持寺貫首に御當選。
□大正十年(五十八歳)二月四日、大本山總持寺に御入山。同廿五日、勅特賜大陽眞鑑禪師の徽號宣下あり。同年六月出帆、ハワイ及アメリカを巡教あらせらる。九月廿八日大統領ハーディング氏と會見、十一月三日御歸朝。
□昭和二年(六十四歳)十二月七日、『出生入死、道業隨流、轉身一路、月白雲幽』の遺偈を打して御示寂あらせらる。

新井石禪禪師略年譜

□元治元甲子年十二月十九日、福島縣伊達郡梁川町石井仙助氏の三男に御出生あり、幼名を仙太郎と申上ぐ。

□明治八年（十二歳）の初冬、石井家の菩提寺同町興國寺新井如禪老師に隨うて淺草觀世音に御参詣あり。如禪老師に懇願して落髮、歸鄕して父母の許を請ひ、同年十二月十九日、得度。名を石禪、姓を新井と改め、穆英と號せらる。

□明治十年（十四歳）夏、興國寺に於て立身。同冬十一月廿七日、如禪老師の室に入つて嗣法。

□明治十二年（十六歳）三月、大本山總持寺に傳衣、ついで東京駒込吉祥寺内の曹洞宗專門本校に入學。

□明治十三年（十七歳）三月、埼玉縣北葛飾郡杉戸町善德寺に初住。同年十月、同郡幸松村隨意會地淨春院に轉住。

□明治十五年（十九歳）三月、駒込本校を卒業。同四月一日、大本山總持寺に安居、畔上楳仙禪師の提撕を受けらる。

□明治十六年（二十歳）夏、幸松村淨春院に江湖會を修行。

□明治十七年（二十一歳）埼玉縣第一號曹洞宗專門支校教師を拜命。

□明治二十年（二十四歳）埼玉縣第一號曹洞宗教師取締となり、支校教師を兼任。

□明治二十一年（二十五歳）如禪老師の總持寺後堂に就任せらるゝに侍して上山安居せらる。

□明治二十二年（二十六歳）三月、岳父の病あり、下山專ら看病に盡されしも甲斐なし。同年秋、母を淨春院に迎へて孝養あつし。同年十一月、曹洞宗大學林學監兼教授を拜命。

□明治二十三年（二十七歳）九月、如禪老師病あり十一月遷化十一月大學辭任。

□明治廿五年（二十九歳）十月、新潟縣中蒲原郡橫越村片法幢會地大榮寺に轉住。永平寺出張所詰拜命。

□明治廿八年（三十二歳）新潟縣曹洞宗教導取締並に第二十中學林監理拜命。

□明治三十三年、宗務局詰拜命。

□明治三十四年（三十八歳）制度調査委員就任、新潟縣南魚沼郡上田村常恒會地雲洞庵に轉住。

□明治三十五年（三十九歳）母堂逝去。同年一月永平寺副監

むなり、自愛専一になさるやうに、衲は祈つて居ります』と。禪師は何故この御言葉を御自身に談りかけなさらなかつたのであらうか、肉身が惜しいのでない。佛法の慧命を相續する身が尊い、これを惜しんで自愛せねばならぬ、休養もいたさねばならぬ、と禪師は何故、御自身に談りかけなさらなかつたのであるか。いや、禪師は絶えず、御自身に、この言葉をかけてゐらせられた、禪師は御自身を人一倍愛護なされてゐた。けれども四方八方より願ひ出て、禪師は自愛専一になされることが出來なかつたのである。何といふ悲しい勿體なきことであるか。

しかしながら、それを徒らに悲しんではならぬ。禪師は禪道佛法に、身を捧げつくすことを、御本懐と遊ばされてゐた。吾等は忡々の切情を、道への精進に回向し、以て大寂定中より照鑑あらせたまうてゐる禪師の御恩德に報いまつるべきである。禪師が曾て示された偈がある、虔しみてこれを拜誦したい。

業を勵み分に安んじて克く奉公すべし、死生は命あり復た何ぞ忡へん、須く知るべし佛法は人道に兼ねて、盡く身を以て職に殉ずるの中に在り。

咦

南無勇猛常精進。覺道莊嚴豈に窮りあらんや。

山田霊林謹識

御歸朝になると、親教を冀ふ願書は蝟集してゐる。日に四席、月に百何十席といふ法話をなされた、全國津々浦々にまで巡教いたされて、御休養の寸暇もない。書院にゐらせられゝば、書院に御揮毫を需めて來る、汽車に乗られゝば、汽車に御談話を願うて來る。朝は未明より坐禪讀經をいたされる、夜は深更まで、新聞雜誌への原稿をお認めになる。全く晝夜兼行の御精進にて、何時どれほどの休眠をなされるのか、隨侍の人にすら伺はれない有樣であつた。

かくて禪師は痼疾肺氣腫を重らせられて、月一月と御呼吸が困難となり、停車場の階段が、一氣はおろか、三度も中休みされて、漸くにしてお昇りなされても、脣の色は暗紫色に變つて、今にもことぎれになられるかと憂慮される苦しい呼吸をなされる樣になつた。醫師は勿論、巡教の御中止を忠告申しあげられた、が禪師は『教約を破るに忍びない、生命のある間は勤めねばならぬ』といつて中止にならなかつた。

しかし、月に日に重りゆく難症には抗しがたく、眞夏眞冬は御休養あらせられることゝなり、春秋に於ても病床に安臥せられなければならぬ日が續くやうになり、昭和二年、六十四歳の御年には、御症狀も急轉し、胃癌その他幾種の病を併發せられて病院に多くの日を送らせられ、その十二月七日、終に御涅槃の雲に隱れさせらるゝことに、たち至つてしまつたのである。くりごと申して甲斐なきことながら、餘りにも禪師は、お骨折り遊ばされ過ぎたのである。

禪師は病床にあるものに便りして、よく仰せ下された言葉がある。『肉身を惜しむに非ず、法身を惜し

の輿望を負うて總持寺貫首に當選せられ、翌十年二月御入山になり、二月二十五日、勅特賜大陽眞鑑禪師の稱號宣下を拜授し、開祖瑩山禪師以來の勅願道場の貫首として、上皇祚の無窮を祝禱し奉り、下萬民の福祉を增進する最高の位に昇らせられた。

この年六月、禪師は横濱を出帆してハワイ全島に敎線を張り、更に遠く北米本土に渡り、九月二十八日、白聖館を訪うてハーデング大統領に相見された。大統領は溫顏を以て禪師を迎へ、

予は東洋文化の精髓たる佛敎について、夙に多少の研究を試み、最大の敬意を拂うてゐる。今その高僧たる禪師の來訪を受くることは、まことに欣幸に堪へざるところである。

云々といふ丁寧なる言葉があつた。禪師は大統領と堅き握手をなされ、

衲は日本の佛敎各宗派を代表して、閣下に相見することを悦ぶ、閣下は世界平和を高唱し、正義仁愛を標幟とし、近く軍備縮少の會議を開かんとしてゐられる。佛敎徒たるものゝ欣びこれに過ぐるものがない。

云々といつて、大慈大悲觀自在王菩薩の畫像一軸を贈呈いたされた。

それより禪師は全土を漫遊して、十一月三日にお歸朝になつた。禪師はこの行一路平安ならず、横濱解纜の後、間もなく胸部の大患を發して病臥の人とならせられたが、經過頗る御良好にて、一同の心痛が杞憂に了つたことは、悦ばしい次第である。

師と仰ぎて随侍せられた悟由禪師の御重患である、石禪禪師は不眠不休の看護をなされ、一時半時にても、長く生き延びたまはんことをお祈りになつた、が大正四年二月九日、泊然として御圓寂になつた。

悟由禪師は御圓寂のとき、微かに眼をお開きになり、左のお眼より一滴涙をお流しになつた、御永訣の思召であらせられるかと拜された。石禪禪師はこのお涙を生涯お忘れになることができず、涙によつて禪師を偲び、禪師を偲んで涙を流された。御孝心の厚き、たゞ／＼感泣して仰ぎまつるの外はない。

巡教親化の御辛勞

森田悟由禪師御圓寂のその年、石禪禪師は御年五十二歳、名古屋の護國院に請ぜられて住持職となり、佛教都市として名高き中京の光輝を、いやが上にも輝かしめんことを期し、悟由禪師の眞位にかしづきつつ、その御企圖を進められてゐた。このとき突如として大本山總持寺貫首石川素童禪師より御沙汰があつた。小田原の大雄山最乘寺に轉住し、門葉四千箇寺の佛法を興隆し、大本山總持寺の顧門寺たるの實を示されたいといふ思召であつた。

石禪禪師は御旨を有りがたく畏み、如禪老師の餘徳に扶けられて、この光榮を得たりと悦ばれた。大正五年、最乘寺に轉住し、翌六年、總持寺再建部總裁に就任し、九年の春、總持寺二代峨山禪師五百五十年大遠忌法會の行はるゝに當り、西堂職に昇任せられ、その冬、石川禪師御遷化あらせらるゝに及び、一宗

た。夙業のいたすところ詮なしとは思召しながら、しかすがに恩愛の情濃かに、悲嘆あらせられ、御側離れず幾夜のおとぎ申されて、厚く御靈を弔らはせられた。

この年、禪師は管長の命を拜し、曹洞宗教學部長に御就任になつたが、御位牌を捧持して、東京に出られる御姿を拜し、感泣しないものはなかつた。教育の府にてもあれ、行政の局に當りては、純理に走りて情味を缺く人多き世に、禪師のごとき清純至誠の悃情を有せられる方を、教學部長に仰いだ曹洞宗は幸福であつた。

爾來十年、一日の如く教學の事に努められ、滿洲・朝鮮・臺灣に『戰後慰問使』として御巡教あり、また北海道・九州・本州、分け隔てなく、巡回して、寺院子弟の修道のために、一般檀信の化導のために、粉骨碎身いたされた。而して內地の巡教は多く、大本山永平寺貫首森田悟由禪師に隨侍せられつゝなされたものである。悟由禪師は世に隱れなき明治の大善知識で、行持穩密のお方であつた。

明治四十四年、石禪禪師は部長の榮職を辭されたが、それは御一身の都合によるものでなく、森田悟由禪師の隨行長として、または御代理として全國を巡教せらるゝことに日も足らず、到底、政務をお執りになる暇がなかつたからである。

部長を辭任されて後は、多少お加減のよろしくなかつたお體も、健かにならせられ、專ら巡教に精進されたが、數年を出でざるに、森田悟由禪師が病臥あらせられることゝなつた。如禪老師御他界後は、吾が

禪師は終始一貫、道業隨流ことを以て、心とせられてゐる。道を行ふ營みの催さるゝところ、それが村里であると、都市であるとの分け隔てをなさらない、寺院であると學校であるとの見さかへをいたされぬ。緣に應じ請にまかせて、お出ましになつて十全を盡される。

而もその間にあつて、師父長上に省勤することを怠らず致された。何處にお出ましになつても、鳥の塒に歸るが如く、歸ることを忘れられない。便することを閑却されない、亡き父、亡き師の御墓にも時々御參詣になり、猶ほ老を養うてゐらせられる母上のお許へは、つとめて省勤された。而して御心を迎へ、欲せらるゝにまかせて、その御住所をも、お移しになつた。

禪師が埼玉の淨春院を去つて、新潟の大榮寺に轉住されてからは、間もなく母上も大榮寺に移られた。禪師が雲洞庵に移られてからは、母上も雲洞庵に轉ぜられる御豫定にて、その御室を新築せられつゝあつた。しかるにその御室の竣成しない明治三十五年、母上は大榮寺にあつて、病重らせられた。禪師は痛くこれを悲しみ、布教傳道にお出ましになつてゐるところへ、日に幾たびとなく、容態を報ぜしめられ、都合のつけ得る限りは、母上の御枕邊に侍して、手厚き看護をなされ、御經文を讀んで、母上の御心を安らへまつられた。母上はこれを悅び、御佛の御名を稱へ、禪師に手を執られて、靜かに御逝去になつ

かくて禪師は、六日町に出て『印度哲學研究會』といふ名目にて、會を組織し、月額五錢の會費を集め、目先きの變つた佛教弘通の方途に出られたが、これも亦效果を收めることができなかつた。

しかしながら、禪師は猶も絶望いたされぬ、六日町の弘長寺といふ時宗の寺を席料一圓五十錢で借り受け、三日三夜の連續講演を開かれた。隣寺の眞宗や淨土宗の御住職が同情して、聽衆を集めることに手助けされた。この催は六ヶ月に渡り、繰り返し行はれた、がこれまた效果を收められることはできなかつた。

しかも禪師は、ひるまれる氣色もなく、使命なりと自覺せられるところに向つて驀直に進まれた。恰度このときである。六日町に來合せて、六ヶ月目の連續講演にふと參聽した眼科醫師の茨木政七氏が、禪師の熱誠に感激し、『我れ起つて、その化を扶護せずんば、誰かこれをなさん』と一人子の信念を發し、茨木氏の居住地たる鹽澤町に歸り、有志を募り、百方手を盡し、町内の大伽藍長恩寺に、禪師を請じて大講演を願はれた。參聽者は本堂に溢れ、寺庭を埋むる未曾有の盛況を呈し、禪師の德行を讃仰するもの千百に餘り、禪師の大努力は、こゝに現はるゝ緒が開けた。これより佛教を清新なる意味に於て仰信する運動は隨處に起り、所謂佛教國の實を見るに至つたものである。

禪師が、地方教田の開拓に拂はれた不屈不撓の御努力、これを吾等は銘記しなければならぬ。

てゐらせられた。然るに何たることぞ、定刻を過ぐる三時間の後に至りて漸く、來會したもの僅かに四名であつた。以て當時、寺院に對する人々の親しみは知ることができる。

說敎、法話の高札を出されたところで、勿論參聽するものがない。而して禪師が傳道弘法の御志は愈々至切なるものがある。かくて禪師は冬籠りの田家を訪うて、說敎の押し賣りを始められた。しん〳〵として降りしきる大雪の中を、禪師は棕梠帽子、風合羽、雪靴、かんじきに、身がためをなし、すかりで、おぼつかなくも道踏みつくりする人夫を、前にたてゝ山を越え野を越えて田家を訪ひ、拒まれゝば門口に立ちて、佛法の妙理を說き、譬喩、因緣、事理をつくして講說いたされた。日本の佛敎界に雄飛する曹洞宗のその管長の御親任厚く、重用せられてゐられる禪師が、チョンガリ談り、謠唄ひで世を渡る人々でも、快としない門つけを、北國の風雪を冐していたさるゝ禪師のその御心が慕はしい。

禪師は幾冬も門つけ說敎を繰り返された、しかしながら因緣未だ熟せず、禪師を嘲り笑ふ人はあるが、焚火におあて申して、その音容を仰がうとする人はなかつた。禪師を怒鳴り散らす人はあるが、從つて禪法を聽聞せんとする人はなかつた。

どこまで忍耐强くゐらせられるか、底の分らぬ禪師は、近隣の寺院に招待狀を出し、一堂に會して、布敎興學のことを議し、每月一回の巡回講話をなす申合せをいたされた、が費用だほれになるからといふ理由にて、實現を見ることが出來なかつた。

を願ふもの、永くとゞまつて住持職となられんことを願ふもの、漸くその數を増し、應接されるにその暇がないほどであつた。

明治二十五年、禪師二十九歳、新潟縣中蒲原郡横越村大榮寺の請を容れて禪師は遂にその住職となられることゝなつた。懇囑、辭し難きものがあつたからである。これより禪師は新潟縣下の大善知識として、敎田を耕して荒頽せる信仰心を培ふことに、專ら力を用ひられた。兩三年の後には、新潟縣曹洞宗敎導取締となり、中學林の林長を兼ね、寺院徒弟の敎養、一般有緣の化導、東奔西走、一日の休養もなく、精進いたされた。かくて明治三十四年、禪師三十八歳のとき、同縣下の南魚沼郡上田村雲洞庵の請を受けて、こゝに轉任されることゝなつた。

新潟縣越後の國といへば、今日佛敎國として世に知られてゐるが、禪師の住せられた中蒲原、南魚沼の兩郡は、必ずしも淨信の人のみを以て滿たされてゐる地ではなかつた。寺院に出入することは、葬祭のことあるときに限るものとなし、平日に僧形の人を見ることは緣喜あしゝとなし、後より鹽花を散らして禱むといふ家もあつた。

禪師は頗るこれを遺憾となし、雲洞庵に於て、一日、一百四十名の人々に案内狀を出し、美酒佳肴の大王膳を調へて饗應をなし、寺院に親しく出入する因緣を結ばしめんといたされた。精神的の糧にあらず、全くの無信仰者も舌皷打つ大饗宴の催なれば、必ず定刻までに一同の參集あるべしと、禪師は待ち構へ

禪師が東京に奉職されてゐることにおのづから心惹かれてか、如禪老師は八十歳の高齢をいとはず、請せられるに任せて東京に出で、下谷龍谷寺の授戒會に敎授師をお勤めになつた。勿論、禪師は馳せ參じて終始隨侍いたされた。龍谷寺の授戒會が了ると、如禪老師は禪師と共に、淺草の觀音さまに御參詣になつた。觀音さまの御因緣で、師弟の緣を結ばれたお二方が、觀音さまの御前で、如何に深き感激に落涙なされたか。まことに有りがたき極みである。

如禪老師は東京より梁川町へお歸りになると、間もなく病臥の人とならせられた。禪師は晝夜を分たず看護申上げられた。如禪老師は禪師の手を執り『後事甚だ容易ならず、翼々如として如法に行持せよ』と仰せられ、近侍の人々に法華經を讀ませつゝ、白無垢の著物を召し涅槃衣をまとひ、靜かに大悲呪を御誦みながら仰臥せられ、莞爾と微笑まれたのが、その御最後であつた。

この師にして、この資あり、石禪禪師が、如禪老師より受けられたる薫化の實に偉大なることを拜想して、吾等は老師を虔しみて恭禮しまつらざるを得ぬ。

敎田開拓の御努力

禪師の聲望は夙に高く、畔上楳仙禪師の推讃もあつて、愈々その高きを加へたが、明治二十二年二十六歳、曹洞宗大學林に職を奉ぜられたその頃より、特に廣く高きものあり、遠近より懇請して、一席の法話

な、衲は斃れて後ち止むのだ、佛法修行のために斃れることは、衲の本懐だ』といつも申された。かくて首尾一貫、任期を全うして、二十二年の十月、梁川町にお歸りになつた。土地の人々は慈父に再會する思ひをなして悦び、石禪禪師もほつといたされた。

しかし、石禪禪師は、梁川町に歸りて、耐え忍ぶことのできないほどの悲しみを新に感得された。それは日に夜に老い朽ちてゆかれる母上の、お淋しいそのお姿を拜されるにつけてゞあつた。母上はまだ頽齢と申すほどではない、けれどもこの三月、禪師の父上が逝かれてより、頓にお年を召され、起居お力なげに拜されることが、禪師には堪へ切れぬ悲しみであつた。こゝに於て、禪師は母上に懇願されて、禪師の御住職地である埼玉の幸松村淨春院に、母上の御住居を移し、親しくお側に仕へ、佛菩薩の御前に、朝夕の香華を手向け、讀經禮拜、もつて佛事にいそしむことの悦びを、母上にお頒ち申上げられて、御心安かれと至切に祈り申された。母上ももとより御信心の緣あらせられるお方である、日一日と法悦三昧に入らせられ、身心の健康を御恢復になつた。

禪師はこれより、新たに埼玉の佛法を興隆することにつき、諸般の準備に取りかゝられたが、この秋、曹洞宗管長の命あり、大學林の學監兼教授に就任されることゝなつた。母上は既に法悦三昧に入つてゐらせられるし、學校は本山と異り、時々歸省される便宜もあるので、禪師は悦んで東京に出でゝ、大學林の要職を奉ぜられることができた。このとき禪師は二十六歳である。

至切なる御孝心

明治二十一年の春、大本山總持寺に大僧堂が出來、九月その假開堂式が行はれた。貫首畔上楳仙禪師は特に如禪老師を、後堂職に請じ、大僧堂にあつて修行する一百人の學徒を提撕する大任を依囑された。このとき如禪老師は七十八歳の御高齢であつた。老軀その任に堪へずといつて再三御辭退になつたが、懇囑甚だ切なるものあり、如禪老師は遂に放身捨命の御覺悟を以て起たれた。御住職地である梁川町の人々にも分れを告げて『これがお目にかゝりおさめかも知れぬ』と申され、近侍の人々に遺物の配付までなし、愈々大本山に上られることゝなつた。孝心深き石禪禪師が、如禪老師の悲壯なるこの御旅立ちを見て、ひとり埼玉にとゞまつてゐられることができやうや。禪師は諸般の任務をそれ〳〵他に一任し如禪老師に隨侍して、大本山に上り安居せられることゝなつた。

假開堂式も賑々しく而も嚴肅に行はれ、十一月には如禪老師は大本山の西堂職に昇任なされた。後堂職も西堂職も共に、大僧堂にあつて修行する學徒の指導に身を以て當る頗る重き要職である。如禪老師は、進退動靜、すべて大衆に一如し、朝は二時、夜は九時、未明より深更まで、大僧堂中にあつて間斷なく學徒を化導いたされた。北國の冬は寒氣が嚴しい、老軀には一層強く感ぜられる。石禪禪師は情を盡して『御休養を遊ばされるやう』お勸めなさることが數々あつた、が如禪老師は頭を横にふつて『心配する

禪師が人に痛棒を加へられたことは、お弟子の覺禪師に對しての外は、殆ど全くない。この禪師が、殊に平生は、長者を遇する禮を以て對せられてゐる水野師を、叱責し警策してやまれなかつたこのことは、禪師が如何に『隨喜』の行を尊ばれてゐるかを表はすものである。

隨喜とは、他の人々が道業を修するを見て喜び、その圓滿し成就することを心から扶護することである。水野師には首座を隨喜する行に於て、缺くるところがあつた、禪師はこれを痛く戒められたのである。

隨喜の行は、今日最も世人に缺くるところのものである。互に罵詈し讒謗し排擊してやむことなき世相は、禪師には堪へられぬことであつた。隨喜の行によつて、世を匡正することは、禪師の願行の一であつた。しかるに禪師のお弟子が、この隨喜行に缺くるところあつて、しかも得々然たるあさましい姿を見られたのであるから、禪師はたまらなかつたのである。いな、禪師は道業のために、これを默視なさることができなかつたのである。

禪師は淨春院に江湖會を修せられてより、五ケ年の久しき、埼玉縣下の有緣に隨喜して、一日のごとく、間斷なき淨行を修せられた。埼玉縣に於ける曹洞宗專門支校の教師として教鞭をお執りになつたのもこのときである。埼玉縣の曹洞宗教導取締を勸められたのもこのときである。

は首座たる人に取つては實に大切な日で、大勢の修行者達を相手に禪道佛法の大論戰を行はねばならぬ。禪師が、この大法戰をなされたのは、如禪老師の寺に於てゞあつた。首座たるの力量を十二分に得てゐらせられたことは申すまでもない。しかし時には首座と擧げられた人で、大法戰に堪へざる人もないとはいはれない。淨春院のこの九旬安居に、首座となつた人も、論難說破の力量に於て缺くるところがあつた。敵に虛ありと見て、猪突するに躊躇なき元氣橫溢の修行者達は、大に首座に猛襲した。首座は慘々のめに遇うてやうやく式を了つた。この日猛襲の巨擘は、禪師のお弟子である水野童龍師であつた。水野師は大に得々として式場より退いて、禪師の丈室に上り、大に稱讚の辭を得んと欲せらるゝものゝ如くであつた。禪師は式場にあつて、既に水野師の猛襲を心なき所行として苦々しく思つてゐらせられたところである。丈室に來つた水野師の得々たる面貌を見らるゝや、禪師いきなり策棒を執つて、はつし〳〵と連打三十棒に及んで、やうやくやめられた。平生、柔和そのものゝ如くあらせられる禪師より、この痛棒を受けた水野師は啞然として驚き悚然として恐るゝの外はなかつた。

禪師がこのことを敢てせられし所以は、水野禪の慢心を匡正せらるゝ一事のみにあつたのでない。法戰は今日、一つの法式である。既に式である以上は、式場の主役たるの人に隨喜するの量がなければならぬ、徒らに論難これことゝすべき時でない。飽くまでもその時その所その人の圓成を冀うてやまれない禪師の道心は激發して、遂にこの事あらしめたのである。

ことゝなつた。如何に難解なる教理教論も、一たび新井禪師の思惟を經れば、平易明快、幼童にもよくその意を領ぜしむるの才を、禪師はこの頃より既に有せられてゐたのである。

道業隨喜の御悃情

明治十六年、御年二十歳の夏、埼玉の御自坊淨春院に歸りて、九旬安居の大江湖會を修せられた。九旬安居は釋尊の勝躅に倣ふものである。釋尊は夏雨の降りしきる九十日の間、お弟子の方々と一堂に靜坐して、心の靜觀に精進いたされた。その勝躅に倣うて、禪家に於ては、夏期九旬を制中と稱し專ら安居する古例がある。たゞしすべての禪寺が毎夏これを行ふことは、事實容易ならぬことであるから、特定の寺以外にあつては、時あつてこれを行ふ定めになつてゐる。

江湖會といふも、九旬安居のことであるが、特にこの名の起つたのは、支那の江西省、湖南省の地に、曾て禪が最も隆昌で、こゝへ行つて禪に參じて來なければ、おはなしにならぬといはれたものである。その因緣から、禪の學徒が會して、九旬の安居をなし、三時の勤行、四時の坐禪、禪道佛法の問答商量を大になすことを、江湖會と稱するのである。

江湖會のときには、大勢の修行者の中で、最上位に立てられる人を定め首座といふ。この人はこの江湖會中に、法戰といふ式を行ふ、この式が了ると所謂罷參分上の人となるのである。この法戰といふ式

を説き信仰を談る門出の儀式を行ふことを、轉衣するといふ。
轉衣といふ文字は、衣（袈裟）の色を轉變することを表はしたものである、出世するときには、今まで著てゐた黑の袈裟を改めて、色袈裟とすることが例になつてゐるので、出世の儀式を行ふことを、轉衣するといふ樣になつたのである。
轉衣をなし了つて、禪師は東京に出で、駒込吉祥寺の境內にあつた曹洞宗專門本校に入學された。これより滿三年の間は、その敎程に依準して、專心一意、深く佛敎々相の硏究に沒頭なされた。
この間に於て、卽ち禪師十七歲の三月、埼玉縣北葛飾郡杉戶町善德寺に住職の名儀を出され、同年十月、同郡幸松村隨意會淨春院に轉住された。けれどもそれは重き師命あり、また檀信の懇望にもだしがたく、受諾せられたまでゝ、勿論、寺務には與られぬことをお斷りになつた上のことであつた。
禪師が駒込の曹洞宗專門本校を首尾よく卒業されたのは、明治十五年の三月で、御年十九歲のときである。御卒業になると早速、大本山總持寺に安居なされ、一般の修行僧と伍して、三時の勤行、四時の坐禪、その間の看讀、まことに熱心に大修行をいたされた。このとき大本山總持寺貫首は、畔上楳仙禪師であつた。楳仙禪師は『圓覺經略疏』を大衆のために講じてゐられたが、大衆には難解で全くその深旨を領することができなかつた。十九歲の新井禪師は、言々句々その意を領じ、法悅三昧に入つてゐられた。
かくて新井禪師は、楳仙禪師の御意を奉じ、拔擢されて『圓覺經略疏』の再釋を大衆のためになされる

て名高い如禪老師から嗣法せられた禪師は、實に天下に誰憚るところなき、禪門の大善知識とならせられたのである。

しかし、禪師は法燈を相續することのみを以て、出家の大事が十二分に達せられたものとは、お考へにならなかつた。出家の大事は、寧ろこれからである。出家は法燈を相續して、殿堂奥裡の坐を專らとしてゐるを以て、足れりとすべきでない。出で丶街頭に村里に、佛法の道義を廣く宣揚しなければならぬ、信仰の妙趣を普く通達しなければならぬ。それには愈々益々佛敎の敎學を研鑽しなければならぬ、信仰の妙味を體得しなければならぬ。和漢の學、歐米の學、東西の世態、古今の人情、何から何まで通曉しなければならぬ、と深く心に決せられるところがあつた。

古風を恪遵することに忠實なる如禪老師が、果してこれを諒ぜられるや否や、禪師は決意を言上せんと欲して、幾たびとなくためらはれた。然るに禪師は十六歳の三月某日曉天、坐禪堂にあつて佛祖の靈鑑を蒙るを得、欣然として如禪老師の丈室に上り、豫ねての大志を委曲言上いたされた。如禪老師は冥目して聞き一語を發せられなかつた。がや丶あつて氷然その意を諒ぜられしもの丶如く然諾して、禪師の遊學を許された。

禪師は如禪老師の命を奉じ、先づ遙々能登に行き、大本山總持寺に上つて、轉衣をなされた。轉衣とは、出世の儀式である。世の中から出離して專ら修行をしてゐた人が、再び世の中に顏出しをして、佛法

禪師は晩年の或る夜、近侍の學徒を集めて茶話をなし下されたときに、申されたことがある。

人が一たびするところは、己れ十たびし、人が十たびするところは己れ百たびし、以て及ばざるところを補うて、精進する覺悟がなければならぬ。

しかし、却々その氣にはなれないものである。衲も幼い頃は、己れの他に異るところが眼について『人の十たびするところは、己れは一たびにて足る、人の百たびするところは、己れは十たびにて足る』といふ大それた自惚れをもつてゐたこともあつた、が深く愼しまねばならぬことである。

とお話し下された。これはまことに、お互心して愼しむべきことである。しかし禪師は愼しまれる必要はなかつた。實際に『人の百たびするところは、十たびで足る』お方であつた。佛祖にも讓らぬ烱々たる眼光を輝かせてゐられる如禪老師が、これを知られない筈はない、老師は知つて愈々激しく、禪師を策勵されたのである。

かくて禪師は、十四歳の御とき、罷參分上の人とならせられた。罷參とは既に佛法の大事を諦觀大悟して、參師問法を罷休するといふ意である。禪師は僅か十四歳で、この身分を得られ、この年の十一月には、如禪老師の室中に入つて、嗣法をなされた。嗣法とは佛祖の法燈を嗣續することである。正法眼藏の嗣書の巻には『佛佛かならず佛佛に嗣法し、祖祖かならず祖祖に嗣法す』とあつて、佛の御心を以て心とし、祖師の御行を以て行とする境地に進んだ人でなければ、嗣法することは出來ぬ。嚴肅至上を以

であつた。禪師は遂に、如禪老師に懇願して、十二月十九日、第十二回の誕生日の日を卜し、御歸鄕を待たず、東京に於て出家得度の式を受けておしまひになつた。

禪師の父上は、豫ねてよりこのことあるを心に期してゐられしもの〻如く、驚きもされなかつたが、母上はさすがに驚かれた。御自身の膝下に養育なされたかつたのである。が遂に御承諾になり、かくて禪師は、名を石禪、姓を新井と改め、號を穆英と定められることゝなつた。

既に出家得度なされた禪師の御精進は、實に激しいものであつた。禪家にあつて徒弟を敎養するその嶮峻なることは、實に言語に絶するものがある。殊に如禪老師は禪門師家の典型を以て稱せられる人、その指導の峻烈なることは、子獅子を育てる牡獅子が、斷崖絶壁より、子獅子を蹴落すにも優るとも劣らぬものがあつた。禪師はよくその陶冶に堪へられた。如何に御熱心であるといつても、御年僅かに十二三の禪師である。子供心のいたいけにも、隣家の庭に遊ぶ鷄を捕へ、尻尾に紙切れをつけ、逐つたてゝ遊ばれることなどもあつた。それをたま〳〵如禪老師は見付けられた。如禪老師は十三歲の禪師の頸ツ筋を引つ摑み、吊しあげて打ち擲り、足腰の立たぬほどのめにあはされた。かうした峻烈な叱責にも禪師は善く堪へ忍ばれた、あの柔和なお眼に涙を湛へて忍ばれたのである。

でく＼／なされるのが常であつた。

明治八年の初冬、如禪老師は本山よりのお招きにより、東京の會議にお出ましになることゝなつた。そして石井家へお出向きになり『坊やさんを衲は連れて行きたいと思ふが、駄目だらうか。淺草の觀音さまへ、お禮まゐりがさせたいと御主人もいつてゐられたやうだが、恰度いゝ、衲に借しては貰へぬだらうか。衲が連れて行つて、觀音さまへお禮まゐりもさせ、東京見物もさせませう』と御相談になつた。石井家では異存のあらう筈はない、大喜びで仕度を調へ、如禪老師に依賴して、東京への初旅をさせられることゝなつた。

禪師は幼い頃は、殊に綺麗な可憐なお顏をしてゐられた。ほんの僅かばかりの間ではあり、菩提寺の如禪老師に伴はれて出られるのではあり、今東京に旅立たれるといつても、兩親に於て何心配されることもないのである、が母上は妙に心惹かれて、淋しさに堪へず、旅立たれし後を追うて、如禪老師に請ひ『東京へ連れてお行き下さることは中止にして下さい』と切に願はれた。がしかし、いつもの和順な禪師がこのときばかりは、頑として承知なさらぬ。詮方なく母上は思ひあきらめてしまはれたのであつた。母子の情愛、まことにこのことある歟、これは所謂むしの知らせともいふべきものであつた。

幼い禪師は東京に著くより早く、淺草の觀音さまに參詣し、それより如禪老師の御宿所某寺で、起臥を共にいたされることゝなつた。老師の勤行、寺院の風光、何から何まで、幼い禪師の心を魅するものゝみ

ひなされた。ときこれ昭和二年十二月七日夜の十時三十分であつた。

菩薩道の御精進

禪師は六十四年を一期として、終に戢化なされた。

出生入死、 道業隨流

轉身一路、 月白雲幽

の偈を遺して戢化なされた。四言四句のこの偈、この偈に禪師六十四年の御生涯は、まことによく要約されてゐる。禪師の御一生は、御言葉のごとく全く『道業隨流』ものであつた。

禪師は元治元甲子年十二月十九日、福島縣梁川町石井仙助氏の三男に生れられ、幼名を仙太郎と申された。時代は幕末で恐ろしく落付きのなき世の中であつたけれども、信心深い兩親をもたれた禪師の家は頗る和平であつた。

菩提寺である同じ梁川町の興國寺へ一家打揃うて、御參詣になることも屢であつた。このとき菩提寺の御住職は新井如禪老師で、當時稀有の高僧として、世に隱れなきお方で、檀信の方々にお心を深く用ひなされ、その信心を培ふことに、專ら努められた。石井仙助氏一族の方々にも大にお目かけなされ、特にそのお子達を御寵愛になり、お饅頭を下されたり、お經をおぼえるがいゝぞといつたりして、お頭を撫

發表に耳を澄まし、悲歎あらせられてゐた有樣を思ひ浮べるのである。

禪師は十二月七日、帝大物療科病室に、やゝ小康を得て、新聞を見、ラヂオを聞きて、何を偲び何を考へられたか、御氣分よきまゝのすさびとは決して思はれない。それが畏くもまた悲しい極みである。

禪師はこの日、侍僧に字書をひかしめて『放曠』の字義を詮議いたされた。昨夜、遺偈の中にものされたこの二字が、御氣持ちにしつくりしなかつたのである。而して種々御推敲の結果、遺偈を次のごとくお改めになつた。

出生入死、　道業隨流
轉身一路、　月白雲幽

禪師の御一生六十四年は、實に道業の隨流であつた。世の人の多くは、利慾に引かれ、名譽をあさりて、その生涯を送るのであるが、禪師は名利の外に起つて、寢るも起きるも悉く道のためになされたのであつた。この日に臨んで遺偈の推敲をなされてゐるといふ、かくのごとき御一生、これが道に生き道に死する人の聖き營みでなくして、何であらうか。

かくしてこの日は、早くも暮れて、初冬の夜の月白く雲幽かに更けゆくまゝに、禪師は靜かに仰臥いたされて、お經文を誦してゐられるもの丶如く、幽かに御唇のみ動くのが拜された、それも次第に動かずなり、脈搏も次第に細りゆきて、四邊、闃として聲なく、禪師は遂に全く大寂定中の人となつておしま

と、眞鍋先生は大に躊躇いたされたが、再考三思の後、遂に申上げてしまはれた。

すると、氣息奄々、脈搏も糸の如くに細つてゐた禪師が、俄かに元氣づかれて、『あゝさうでしたか、それで衲も安心しました』と、さも悦ばしさうに申され、生き生きとした眼を見開いて、『有りがたう、有りがたう』と御禮を申された、病室の空氣は忽ち一變した、輝しい春陽に夜が明けた樣な悦びが一杯に充ち溢れた。これはこれ十二月七日の朝のことである。

禪師はこの朝、侍僧に眼鏡を出させ、新聞を取つて御覧になり、またラヂオをかけしめて、放送をお聞きになつた。全く豫後の人のごとき御元氣さであつた。しかし、禪師が新聞に眼を注がれ、ラヂオに耳を澄まされたのは、必ずしも御氣分のよきまゝのすさびではなかつた。

禪師は新聞を見らるゝとき、先づ社會面に眼を注がれるのが例であつた、これは多く人のするところであるが、その精神に於て、他と全く異るものがある。禪師は新聞の社會面を通覧して、世相を知り、道義頽廢の世相を嘆かれるのである。曾て明治天皇が高崎正風男に、新聞の御話を遊ばして暗涙にむせばせられたことを聞いて銘肝してゐられる禪師は、毎日毎日の新聞を見らるゝたびに、このことを心に新に思ひ浮べて悲嘆なされた、禪師はこの朝、新聞を御覧になつて、またこれをなされたのである。

禪師がラヂオの放送に耳を傾けられるを拜するとき、吾等はまた、禪師が大正十五年の十二月、鎌倉の病床に、ひねもすよもすがら、鑛石ラヂオのレシーバーをおかけになつて、大正天皇御重患の御容態

か、それを是非研究して頂きたい。研究のために必要であるならば、遺骸を解剖して下さい。但し世に誤解されることのない様に、意義のあるものにして頂きたい。

と申し述べられました。眞鍋先生はこの切なる御言葉を承つて、感に堪へず、禪師の手を握つて申された。必ず御意志を奉じます、御安心遊ばして下さいと申された。禪師は深くうなづき、合掌して眞鍋先生を拜まれた。

禪師は御自分の身體を不思議な身體だと思つてゐられる、この不思議な身體を、とう〳〵蝕みつくして再び起つことのできないやうにした病は、一體何病であるか、それが眞鍋先生にも解つてゐないものと思つてゐらせられた。禪師は醫學の尊嚴を認め、飽くまでも眞理の探究を欲し、病の正體が解らぬならば、どんな手段を、用ひてゞも、それを究明して欲しいと切に希うてゐられるのである。眞鍋先生はこゝに於て惑はれた。この禪師に、御病名をいつまでも秘して置くことは、果していゝことか否か、眞鍋先生は惑はれた。

思ひ惑うて、先生は本山の方々に御相談になつた。而して遂に『御病名は胃癌であります。不治の難病であります』ときつぱり禪師に申上げられることゝなつた。これを申上げたならば、禪師は絶望して即座に落命されるかも知れぬ、さりながら秘して徒らに禪師の御心を煩はすは、却つて如何なものであらうか

あつた。

このとき禪師は、筆墨を召されて、

出生入死、放曠隨流、
轉身一路、月白雲幽。

と遺偈をお認めになり、靜かに合掌なされたが、お眼には漸次かすみが懸り、お聲はかれて、ものされる御言葉も聽取することができなくなつた。そのときである。禪師はぱつちりと眼をお開きになり、眞鍋先生を枕邊近くお招きになつて申された、——

衲の身體は不思議な身體でありました。幼少より病弱であつたが、病弱であるからといつて、志すところを制して、身體を加減して使はねばならぬといふことは少しもなく、氣息奄々瀕死の狀態になつてからでも、高座に上れば二時間が三時間でも、說敎講說をすることが出來ました。身體といふものは本來さういふものであるのか、或は衲の身體だけが特にさういふ風であるのか、醫學上より說明がして頂きたい。

衲はまた死するよりも苦い苦痛を忍んで、一時間でも長く生き延びることに大に努めました、延命の法といへば、鍼灸、電氣、陰壓呼吸その他如何なることをも敢へてしました、今三年生き延びたならばと思うて、最もこのことに力めました。が、駄目でした。一體、衲をこんなに苦める病は何病であるの

靜かなる御臨終

昭和二年十一月の末からは、殆ど絶食同樣で、何を召しあがつてもおさまらず、お苦みを增すのみであつた。が、禪師は從容として迫らず、一時半時にても長く、生き延びられるだけ生き延びねばならぬことを、確く信じてゐらせられた。

が、しかし、十二月四日の夜半、心臟が恐しく衰弱して、非常なお苦みが來たときには、もはやこれまでなりと御覺悟遊ばされたもの丶如く、眼をつむり、口を閉ぢて、じつと辛抱してゐらせられた。あまりの御苦みであつたので、今まで一度も禪師に用ひられたことのない注射を醫員の方が試みられた。效果は忽ち現はれて胸内の苦悶が取り去られた。禪師は非常に悅んで、眞鍋先生のところへ侍僧を御禮に遣はして『苦痛が一掃して、大變、樂になりました、御恩は一生忘れません』といはれた。實義な眞鍋先生は、この言葉を聞いて泣き出しさうな顏をなされた、禪師が一生忘れませんといはれるその一生は、醫學上より見て、實に風前の燈であつたからである。三日とは保たれたい一生であつたのである。

かくて十二月六日の夜半に至り、容態は刻一刻と差迫つた。

當直の醫員數名、大本山の重役一同その他有緣の道俗は病室の外に肅然として起ち列り哀愁の氣が深く垂れこめてしまつた。靜かに窓外を見れば、寒天の月白く雲幽かにして、寂寞靜謐そのもの丶やうな夜で

を、杖を曳いて漫歩せられることすらできるやうになつた。禪師は喜んで眞鍋先生を拜み、愈々益々醫術の尊嚴を認めて、信賴を深く致された。

肺氣腫療養中のこのときである。禪師は眞鍋先生の請ひを甘受して學用患者となり、臨床講義の材料となつて、二時間あまり、多數學生の聽講せる講堂のベットの上に身體をさらされたことがある。眞鍋先生は眞理を愛し醫學を重んずることに於て決して人後に落ちない方である。而も謹嚴重厚の方であるから、學用患者になつて下さいと禪師に請ふことについては大に躊躇せられたが意を決して遂に請はれた、禪師は『學生の讀本になりませう』といつて即座に快諾されたのであつた。事終つて後、眞鍋先生は深く禪師に謝し、由來、大學の學用患者といへば、官費患者か施療患者であつた。從つて學用患者となる人の身分を卑しめる向きもあつたのである。が、禪師のごとき大宗門の管長として、尊き聖體を以て、學術のためにこの犧牲となつて頂いたので、これによつて學用患者の地位を高め、思ひを高尙にし、自重心を保護することになつた、この意味に於ても誠に有りがたいことであるといつて、厚く禮を述べられた。

禪師は病院にあつても、寺院の生活と殆ど變るところなき營みを常になされた。絕對安靜を要するときの外は、朝夕の讀經禮拜をなされ、坐禪をなされ、讀書、執筆、引つきりなしになされた。來訪の人々にも懇切に應對なされた。何のための御入院であるかと申上げたいほどであつた。それゆゑに禪師の病症は愈々つのつたのだともいはれないことはない。あゝ何たることぞ。

の尊嚴を認むることに於て何人にも劣らぬ方であつた。醫術の指し示すところには、どんなことも無條件で爲された。

禪師が物療科病室に入院されたのは、昭和二年の初夏であるが、それより以前、大正十五年の春にも、ここへ入院されたことがある。肺氣腫で最も苦まれたときであつた。眞鍋先生は診斷していはれた。禪師の胸廓は固定して、呼吸運動が自由にできなくなつてゐる、とても尋常一様の方法では治らない、陰壓呼吸（空氣を稀薄にして吸ひ込む機械によつて、漸次呼吸運動を常態に復する療法）でも試みる外はない。併しこれを試みることに成功した人は殆どない、醫者の指定する期間、この陰壓呼吸を繼續してやる人がない、この病院でもこの機械は二三年この方使つたことがないといはれた。法務多端の禪師は期間の問題でやゝ躊躇されたらしいが、結局、入院してこれをやられることゝなつた。

禪師は實に規則正しく實行された。勿論この治療法は、一日や二日で效果の分るものでない。氣の短い人は中途で廢めてしまふ。禪師は熱心に實行されたけれども、效果は却々現はれなかつた。眞鍋先生がそれを殘念がられると、禪師は『やがて效果が現はれませう』と却つて眞鍋先生を慰められた。

禪師は毎日々々同じことを繰返してやつてゐられた、その熱心と忍耐と努力の結果は空しからず遂に現はれた、少しづゝ輕快に向はれた、初めは二階へ上る梯子段を、休み〳〵でなくば、とても上られなかつたのに、日を經るに從ひ、中休みなしで二階へ昇降されることができるやうになつた、時々は大學の庭

悶も分る。憂慮して種々手當をされた。すると、禪師はいつも苦しいとはいはれないで却つて醫師の方々や看護の方々を慰めるやうに『やがて治まります、やがて樂になります』と仰しやるのが常であつた。實際、また禪師は『やがて治まり、やがて樂になる』ことを確く信じてゐられた。禪師はどんな苦悶の中にあつても、前途の光明を樂しむことを忘れない方であつた。如何なる場合にも、絶望されることがなかつた。必ず前途に光明を認めて、光明に生きるお方であつた。いつでも、清明な輝かしい氣持ちで生きてゐられた。

禪師の病が漸く重りゆく大正の末年であつた、伊勢の龍山に授戒會があつて、大問答が行はれたそのとき、或る人々が『猊下久しく四大不調と聞く』云々といつて、病氣の御見舞ひを申上げたところ、禪師は『宇宙を達觀するに病相あることなし』と答へられた。蓋し、天行は健かなり四時行はれ萬物長ず、春は花夏ほとゝぎす秋は月冬雪冴えてたのしかりけり、天地宇宙を達觀して見れば、健かなる大生命の進展があるのみである。病も死も、大生命進展の上の一時一時の片影に過ぎぬとの御意である。

この大觀の上に、禪師は心を据ゑてゐらせられるから、激しい病苦に襲はれても、取り亂されることがない。『やがて治る、やがて樂になる』ことを確信して心安きことを得てゐられたのである。

併し、禪師はかゝる大信念に住してゐるからといつて、病を輕んじ、病に無關心でゐられたのではない、飽くまでも醫術に信頼して、病魔を退治し盡さねばならぬといふ意氣をもつてゐられた。禪師は醫術

話が濟むと、禪師は直ぐ自動車の中に病體を横たへて、病院へお戻りになつてしまつた。
この四日間、本山で禪師の音容を拜し、親しく御法話を聽聞した人々は勿論、他の總ての人々も、慈悲徹悃なる禪師の大法話は今後、再びも三たびも否、幾十たびも、聽聞し得ることを胸に描き、御病氣全快も決して遠いことではないといふ光明を感得してゐたのである。然るにそれは總て、あだなる願望であつた。噫、何といふあぢきなき世の約束か。この四日間の本山の御法話が、禪師最後の御親敎であると、誰が何とて思ひ設けやうや。而もそれが最後の御親敎となり果てたのである。噫。

病室の御信行

帝國大學物療科第一號病室が、禪師の病臥された室である。決して立派な室ではない、簡素なものである。が禪師は觀世音菩薩の尊像を奉安して香華をたむけ、讀經・唱名怠らせたまはず、ために、おのづから觀音淨土の妙趣が具はつて、禪師病臥の所として相應しからぬものとも思はれなかつた。

禪師の病は胃癌であつた。數年前より肺氣腫の難症に惱んでゐられるところへ、更に胃癌に罹られ、而もそれが腹部の各所に轉移蔓延したのであるから、その苦悶は到底常人の忍ぶ能はざるところである。腹部や胸部が痛み出したときの苦悶は、看護してゐるものが、じつとしてはゐられぬほどのものである。然るに禪師は苦悶を訴へられぬ。苦悶を顏貌に現はされない。併し醫師の方々には、腹痛の發作も胸内の苦

何たる摩訶不思議ぞ、今が今まで、どんよりとしてゐた眼が、輝きに充ち、奄々たりし氣息が調うて、壯者のごとく、音吐朗々として三歸戒を、參詣の善男子善女人にお授けになつた。禪師が籐椅子の吊臺に乘つて上殿せられたそのときより、御樣子をまたゝきも爲し得ないで、はら〳〵しながら仰いでゐた一同は、夢かとばかり悅び、嬉し淚を一杯に湛へて、お拜み申上げてゐた。

禪師は慈悲柔軟のお顏にて、一同に會釋せられ『衲も病氣に好かれて、すつかり足どめをくひ、皆さんには……』と輕い諧謔をまじへて法話をお始めになつた、二言三言お話を進められたそのときである、グツとお聲がつまつて歔欷嗚咽しておしまひになつた。たゞさへ泣きたくてたまらなくなつてゐた參詣の一同は大河の一時に決したるそれのごとくにどつと泣き崩れてしまつた。禪師は再び聲を勵まして法話を致さうとなされた。が、どうしても聲が出なかつた。このとき侍僧は、說敎終了の相圖をなしてしまつた。かくて禪師は侍僧に扶けられ、籐椅子の吊臺に倚つて跳龍室にお下りになつた。

高座よりお下りになつた禪師は、絕對安靜を要する重態の病人であつた。一同も十二分の考慮をもちひて看護申上げた。併し、禪師は病苦に就て、殆ど訴へられない。醫師の方が推察してお手當を致すに過ぎぬ。法會は翌二十五日よりまだ三日間あつた。本山の重役の方よりは御代理を願うてやまなかつた。けれども禪師は法話にだけは、自らお出ましになつた。籐椅子の吊臺に乘つてお出ましになつて、高座に上られた。高座に上られると不思議なお元氣が出て長い御法話をなし下されることができた。二十七日の御法

最後の御親敎

昭和二年十月二十四日、大本山總持寺授戒會の中日であつた。帝國大學物療科の病室より、醫員、看護婦、侍僧に扶護せられて、靜かに自動車で、禪師は大本山の跳龍室にお歸りになつた。お疲れも少くなかつたので、本山の方々は痛くこれを憂へ、ひたすらに御休養を願はれたが、禪師は肯はれず、籐椅子で吊臺を作らしめ、それに乘つて放光堂へお出ましになり、御拜をなされる場所でお下りになつた。

放光堂の奥の壇上には高祖、太祖、峨祖等の佛祖をおまつりしてある。禪師は久方ぶりに香をたきて拜をなすことを、どんなにか悦ばしく思はれたことであらう。お察し申すだに胸が一杯になる。禪師はお拜を致さうとなされた、がしかし長い間の病臥で枯れ細つた四肢は、屈伸自由ならず、崩れる樣に坐わつてしまれた。やゝあつて後、侍僧にさゝへられて禪師は起ち上られた、而して一歩一喘、やうやく、說敎の高座にお著きになつた。

御細心なる御兩親の御心に從ひ御辛勞をかけさる様努て御從順の義務を御守り下され度御修學も大切なれどそれ以上に重要なる御務めあればよし學校の方は遲るゝとも飽まで御身體の鍛錬こそ一大事に付此上とも醫士と御兩親との意を守り十分安心のなるまで御養生奉祈上候

忙中亂筆御判讀願上候　早々不備

戊午六月念六

新井石禪

渡邊馨様

険な遊びをせず智慧をみかきゆく〳〵は立派な人となり世の鏡ともなり玉へかし

大正十四年八月十七日　　　　總持石禪

渡邊健三さまへ

○

渡邊馨氏へ――

復啓　御書面忝く拝見仕候處御發病當時以後の御容態及經過詳細御示し被下御厚意歡悦不少候自今增々御良好との御事安心致候御病後の攝養最も大切と存じ候へば寸毫も御油斷なく御愛重被下度候御尊家は御承知の通御祖父樣家を興され御父君に至り增々家名を揚げ品位を進め今や市内の長者として一般に尊重する所御身樣は恰も三代に當られ候へば家門百年の基礎家運隆昌の根底は實に御身樣に依りて相定まるべく他に懸代のなき千金不換の御身なれば御身を以て至寶とし今後鐵石よりも堅固なる健康を得玉ふ樣祈り上候

御身樣は將來學者技術者を指揮すべき位地に立つべきものなれば學問よりも其品性を養ひ玉ふ事至要と存候乃ち落つきある心胸寛宏なる度量禮儀ある態度溫厚なる風姿は最も修養の標的なるべく從て萬事に

なされ恩を感じてありがたしといふ念をさらず愉快におんはげみ下されたく候是れ御兩親の御思召なるべしかへすぐも御身の健康に注意してあつぱれよき人となるゝやう切に祈りあげ候

いづれ御地に至り御目にかゝりなばくわしく申あぐべし御生母とはみほとけの道より深き御縁を結びしことなればあさゆふ御身の御成人と御出世とを祈念いたしおり候

先は御よろこびかたぐ老僧の志申上候不備

未四月八日　　石禪

渡邊政様方

渡邊良久様

○

渡邊健三氏へ――大本山總持寺より

益々健全に成長せられ明春は彌々學校に入學することゝて御兩親の御喜びは申までもなく衲もまた祝着の至りなり

大切な身なれば衞生を重んじ御兩親のおほせを守り元氣よく活潑にやさしく正直にして友達となかよく危

石禪

渡邊御母堂様

○

渡邊良久氏へ——柏崎在平井福勝寺より

追々御成長なされ今回は小學御卒業の上中學へ御進學の由承はり喜こびに堪へず御生母此世にましまさば如何によろこばれ候はんかと思ひ昔しをしのび深く思ひ出し候さるにても草葉のかげにてさこそおよろこび玉ふらんと念じ居り候

御生母のみこゝろをこめ玉ひし御身ことに慈悲ぶかき父上の御恩海よりも深く山よりも高し此上はますます學問をはげみ品行を正うしてあつぱれ人々の模範とも仰がれ玉ふ御身となり玉ふこそ孝道の第一に候學問も教育もまことの人となるこそ眞の目的なれいかに才智かしこく技能すぐれたりとて人の道を全うせされば孝行とはいひがたし

中學の時代は一生の中一番大切なる時に候少しにても心にゆだんあれば萬事成功しがたし先づ以て御國の爲め親の爲めといふことをこゝろのそこに抱き次には誠實と忍耐と勉强と同情とを以て修養の目標となし人は怒るとも怒らじ人は爭ふとも爭はず善き友に交はりまつすぐなる道をふみ常にきげんよく立ち振舞

は盡未來際窮まりあるべからず聊か看讀の喜びを記し御禮まで如是に候
御家内皆々に宜布願上候　早々不備

大正十一年十二月八日釋尊成道の聖辰

總持石禪（花押）

渡邊政様貴侍

○

渡邊御母堂へ――信州飯田正永寺にて

肅啓　過日は種々御厚情奉謝候陳者おこう殿その後の經過いかゞに候哉御案申上候病床に在
り乍らも常々みほとけの御慈悲を喜び居るとのこと何よりの仕合せなるも年わかき身の今一度の快復切に
祈りあげ候又良久どのも平素十分にその身を鍛錬して病魔に侵されぬ用心第一なり倘ほ不幸のかさなり
し折なれば内外萬端に注意して家事を取締り且御身體も氣づかれの出ぬやう油斷なく養生可被下候
心中常にみほとけのめぐみを喜びひろ〴〵と心をもち愉快なる氣を養なはるゝこと養生の第一なり
時下御自愛萬々又皆々様によろしく申上可被下候　不備

申八月二十一日

小林御令妹漸次御快方最早御安心の事なるべし只御大患後の御衞生第一に候十三日附の御書も同時に接手彼の贊辭は二十七日大雄山に於て金剛水を以て相認可申候

○

同氏へ——大本山總持寺より

肅啓 寒威追日相加候處淸況益々御康安恭賀不斜候
昨朝貴著『聖者の御蹤を慕ひて』御惠贈に接し直に拜見昨夜釋尊成道の前日乃ち降魔の聖夜に於て首尾通讀致候全篇何等修飾を施さゞる赤裸々なる信仰の一路まことに貴く有がたく無限の感激を覺え候之に因て神田渡邊本家の二階に於て重態に陷りし蓮子を慰問せしこと名古屋に於て夢幻の間に御愛兒を見たりし事ども追想し空華に影あり水月亦跡を留むるの感を生じ候
よき人の仰を被むりて信ずるの外別の仔細なき純一無雜の心境に融合し玉へる安心と歡喜とを認め三靈に對する聖き法供養と存じ隨喜に堪へず候
迂衲に對せらるゝ御感想は燕石を以て玉と爲すが如く寧ろ慚惶の至りに候得共艸華山水の間に佛の慈光を拜し墻壁瓦礫の中に佛事の功德を莊嚴せらるゝ信念の御力と思ひ轉た忝なく感じ候
三界に輝く慈光三時を貫く願力三方に漲る妙德三學を該る唯心三心具足し三願圓成し三光のかゞやき

時下御自愛專一是祈候　早々不備

未十月十七日夕　　　　石禪

渡邊政様明窓下

○

同氏へ――信州埴科郡豐榮明德寺客坊より

肅啓　御書面及電報とも當地に於て接手御芽出度男子御安産所謂便生福德智慧之男の御本望不空御祝ひ申上候

此上は增々健全に成長し智仁勇の三德を兼備する樣祝禱致候殊に十一月十五日は最も目出度吉日猶更以て嬉しく存じ候

先は不取敢御祝辭まで　早々不宣

未十一月十九日　　　　石禪

渡邊政様貴侍

九日夜半過失火の厄被爲在幸にして大事に至らざりしは不幸中の幸福『能伏災風火』の靈驗にやあらんずらん同日は凶日と見え迂衲前夜信州を立ちその日正午尾州半田町に至り候その朝篤信の士の鈴谷盛田氏本宅二階より火を失し候これまた屋根に燃え抜けたるも遂に消し止め被申候由御貴家にてもさこそ驚き玉ひしならん火能く物を成し亦能く物を滅ぼす可畏可愼平素御信心の御力能く大難を免かる珍重此事に候觀音經は一應之を見れば意淺きに似たり熟讀審究し去れば字々盡く是れ佛陀の威德文々總に無量壽の神德に非ざるは無し大經も法華も倶に是れ安養の妙莊嚴有漏の穢身そのまゝ淨土の寶蓮に坐臥すること何等の愉快ぞや此上とも御信心願ひあげ候

昔在靈山名法華
今在西方名彌陀
濁世末代名觀音
三世利益同一體

此見地と信力ありなば八萬の法藏も渾て不可思議光中の印影に可有之候

柳染觀音微妙相
松吹說法度生聲

六根門を閉却してこそ此相を觀此音を聞くべし禪門の公案亦不出此外

大正七年六月四日

石禪

渡邊政様

なげかじな死出の旅路にゆく人も生れこん日の遠くあらねば

○

同氏へ―名古屋市泰安殿戒場より

復啓　御書面昨夕接手取る手遲しと拜見せしに良久殿御本家の嗣子に御譲りの事右は過日御本家に參りし折相見し承知致し居りその折も色々訓誨致し置候　蓮子の事を思ひ出せば他人ならず感ぜられ候まゝ今後も時々注意を與ふる樣可致候
令室御分娩の期近づき候由本日も當地着後道了薩埵前にて十一面觀音眞言を默誦し御安産を祈り候　御希望の如く健三ならんことをも祈り申候
りうまちすの藥は別封さしあげ候　昨日折もよく貰ひ受當地に持參せり右は製造元の母大雄山の信徒にて時々贈りくれ候　熱を消するに特効ある爲め腫物創傷より肺炎にまで使用するに宜しとやら曾て茨木先生にも試用を勸めたることあり　幸に効驗あらば亦復贈りあぐべく候

れ來月御地へ參向の折拜顏萬々可申上候御家內御一同樣に宜布御願申上候　早々不備

午五月二日　　最乘石禪

渡邊政樣侍史

○

同氏へ——名古屋周泉寺戒場より

啓　爾後御變りも不被爲在候や御愛兒に對する哀傷さこそと想像御同情不能禁候得共因緣の所致また是非なき事に候得者御諦らめ可被下候

實は昨夜枕頭に一幼兒來り菓子を求む二三箇を與へしに喜悅の體にて立去りし間も無く貴君來られ彼は我が愛兒なり一死再生せしものにぞあると被仰候と思へば忽ちにして夢さめぬ餘りに感に堪へず只今特に讀經致し申候別に御變りもあらずやと思ひ此狀を呈し候

衲も八日午前十一時頃御地着それより學校に赴き十日には千手に參り三日滯錫致し候何れ御目にかゝりて萬々可申上候　不備

粛啓　御祖父御逝去の訃音昨朝接手驚嘆痛悼の至りに堪へず衲法縁を結びてより殆ど二十五年本月末には久し振にて御地に赴き面會親くお話しも致すを得べしと樂み居りし甲斐もなく早く幽明境を隔つるに至りし事悲歎此上もなきことに候
人生無常如何とも致し難く今後は一層家門の和合隆昌を圖り祖母及母の心を安んじ祖父及父上の靈に供養し以て孝の始終を完うせられんこと至要に候　今朝當地に於て回向に及び候
祖母及母上に宜布傳聲可被下候　先は不取敢弔詞申上度まで　不備

酉三月十日　　新井石禪

渡邊貫平殿

○

渡邊政氏（長岡市）へ――羽前大山善寳寺戒場より

粛復　御次男善次郎殿四歳を一期として御逝去被遊候趣　御愁傷如何計りに被爲在候半と拜察し深く御同情申上候
善哉の御法名は直に安位し心香一炷御回向仕候　御弔詞は取込中推敲の暇なく其儘相認め差上申候　何

○

同氏へ——新潟縣北蒲原郡米倉宗福戒場より

拜復　増々御健勝恭賀不斜候

能生町長後任行惱みの由町長は大任也德と識と才とを要す當選復活の希望尤もと存じ候然れども不容易之御任務御心中察上候

和合忍耐の御高慮に係る記念繪畫は子孫永久の教訓ともなるを石川大禪師の御賛御懇望敬承仕候御貴君の御略歷と双幅に關する略記とを添へて提出被下度東京追分最乘寺出張所に御送付被下度候

時下御自愛萬々　頓首

申九月二十二日

最乘石禪

渡邊甚郎様

○

渡邊貫平氏（新潟市）へ——靜岡縣小笠郡南山正林寺より

石禪敬具

少林道眠宗師

○

渡邊甚郎氏へ――駿河燒津貞善院より

拜復　過日は參上却て御恩遇を蒙むり奉深謝候能生町に御移住已に十一春秋其間八回の霜華町長の重任に當り無間斷の御盡力獨り同町の光榮のみに非らず邦家の福祉に候今般滿期御退休の思召過般も高島樣より承り町民は强て御繼勤を懇望せらるべく想像致居候斷然御歸休被遊候はゞさこそ失望せらるゝ事と思ひ居候幾年月の御辛勞其功績千秋不可滅迂衲は盡未來際法緣不斷なるべし只御尊體の御愛護のみ奉至禱候墨跡太だ拙劣一括別封御送り申上候迂衲今後の行履は別送雜誌にて御賢承奉希上候時下自重萬々頓首

申七月念六　石禪

渡邊仁契貴侍

信心の勇みたつ。力は萬事に好し。事に臨み。猪勇の如く驀直に進みなば自他ともに喜悅の境に入るべし
四海同胞を心の友として。互に禮讓を守り共敬相愛せば家國ともに彌榮えん
人も國も豊かになりてこそ文化の進みも長江の水の如くならん
かくありてこそ枝も鳴らさぬ平和の天地も開け波も靜かに風も穩かに安樂の彼岸に達すべし

大正乙丑一月吉日　　石禪

渡邊庄輔仁者　貴右

○

渡邊道眠師（福島縣二本松町少林寺）へ―高岡市龍雲寺戒場より

肅啓　道況益々御清適恭賀不盡に候　過日參堂の際は種々御厚情不堪感謝候
時間なかりしため甚だ遺憾なりしが暫時なりとも多數の人々と法緣を結ぶを得歡喜不斜候　今後一層御
身自重し山門の興隆檀信の敎化に盡瘁可被下候
組內諸大德及總代各位に宜布御致聲是祈候　早々不悉

大正十三年六月十八日　　高岡市龍雲寺戒場

渡邊庄輔氏（新潟縣中條町）へ——大本山總持寺より（二通）

肅啓　時下寒威追日料峭益々御清適奉恭賀候

今回は御曾祖父始め御三靈追善記念の茶托御惠贈其格好及圖繪共高雅純眞忝く拜受仕候

一昨日一凶夫が攝政殿下に對し大不敬を演じたるは國内而已ならず全世界を震駭せしめたる空前の不祥事痛恨此事に候　人心益々險惡危如累卵　目下は實に國難の最中にて唯々憂慮の外無之候

衲も今冬は在山可致身體も稍や快方に相向申候

時下一層御自愛被下度又御令室其他皆々樣に宜布御致辭被下度候　早々不備

大正十二年十二月二十九日

總持石禪（花押）

渡邊庄輔樣　貴右

○

編者曰く『文中○印あるは同氏御家族の名をお讀みこみなされたものです』

賀新禧　本年は四十二齡の由念力堅固以て衆厄を拂ひ大吉祥を得られたく候

白金にも黄金にも勝りて貴きは至誠のかねにぞある

淬勵願固興國基　倶揚大正維新美

○

渡會大孝師（山形縣飽海郡南遊佐村）へ——大本山總持寺より

拜啓　道況益々御健勝欣喜不斜候

過日は村長の御主催にて講演會開筵暫時の寄錫多大の厚遇不堪感謝之至候殊に貴村は自治の實績顯著村內親和人心醇厚好模範地なることを郡衙の方より承り敬仰の念難禁候今後益々向上の精進文化の美を濟さんこと切望罷在候衲幸ひに無事如豫定歸錫致候間御省念被下度候

村長樣及村內重立方並に消防隊青年團員に宜敷御致誠被下度候先者御禮辭まで如斯に候　早々不備

大正十三年六日念八日

總持石禪（花押）

渡會大孝宗師

組內御寺院にも前書同樣宜布御傳聲賴入候

○

團幹事御一同及び道俗諸賢宜布願上候

○

乙丑一月　　石禪和南

恭祝新禧

鷲峰師（廣全寺）へ――

廣全鷲峰老宗師

溫情溢るゝ計りの賀章に接し親しく相見るの感あり昨冬御上京の折は旬餘の御滯錫中劈腹剜心の商量を打すること能はざりしも尊兄は愛國愛宗の誠意は中心證明する所に候本宗も未だ振興を見るに至らず遺憾此事に候只々人々自重して宗風を保任し精神界に向て霧海の南針たらんことを期し以て國力の根本を培養せられんことを切望に堪へず候

我國民は未だ自己の實力を反省することなく徒らに利權を外に求めんとするの觀あり外國力の充實を期し內勤儉力行に志し信念を策勵して共榮共存の理想を實現せざるべからずと存候

歲旦所感

三光瑞氣薰都鄙　祝聖先期奉詔旨

同師へ――安東縣元寶館寓より

肅啓　道況增々御健勝恭賀不盡に候　奉天等へ宛御惠贈の報告狀『工手の友』及び封書共拜手御厚情萬々奉謝候

滿鐵慰問巡錫も無事相勤め本日當地に着　此鄕に於て完了遊滿中は滿鐵より二名又は三名同行殆ど貴族的旅行雲水の境界としては勿體なく被感候　奉天郊外見學の際の如きは警務署より騎馬巡査を附けくれ候へども何等危險の兆候無之程に候　右御安心被下度候

御地罷業行爲の往々有之は社會の風潮より生ずる自然の現象ならんされどそれより種々危險思想を惹起するの恐れあり工場布敎の緊要なることを感じ申候　新開部長の態度幸福の至りに候　寶飯郡敎育會及び陽澤寺の講習延期敬承納手元にては却て好都合決して御心配なきやう御通申被下度候　梅屋寺樣の法會は七月十四日と御改定被下樣願上置候　十三日は是非神戸に滯錫せざるを得ざる事情ありて無止月曜日に願ひたる次第に候

先は要用御答旁如是に候　頓首

未六月二十日　　於安東

石禪

聚福米本老宗師侍史

御歸山の上は鄰峰諸尊德柴山等の諸大士に宜布御鳳聲是祈候御自愛萬々

十一月三十日　　　　石禪敬具

聚福老宗師貴侍

○

啓　彌々工場布敎團設立に決意せられ實行準備に御力を御注ぎの段爲人法慶喜不盡に候いよ〳〵工場に入足可祝　國家今後の發展は商工に在ること必要なれば工場の布敎は實に焦眉の急と申すべし今後の活動彌々出でゝ彌多事なるべし身心共に金剛よりも固かるべし衲亦顧問の勞を取ること厭ふ所に非ず槇も此事に熱中せば自から自利々他の莊嚴たらん　至禱々々

午一月六日夕　　　　大雄山叟

聚福香城大師貴右

○

石　禪（花押）

山口御主人様

佛心者大慈悲是也

ひとのため世のためつくすまごゝろの慈悲はほとけのすがたなりけり

○

米本孝巖師（名古屋市聚福院）へ――大雄山最乗寺より（以下二通）

粛啓　別後御健祥にて工場御巡教法幸無量不堪感激之至候

昨日御書面を拝し歡喜不可言衲信州巡回中好天氣打續候爲め攝生の便宜不少爲めに微恙たも感ぜず二十四日を以て大團圓を告げ翌夜着京二十七日歸山仕候一衆無事目下天王院結制明日上堂原澄道師後堂として出會田中後堂は内安居專ら代香の任に當り被居茲に兩員の願心家を得深く相喜び居候衲明朝下山天王結制に出會し三日より小田原在早川村龜屋方に駐錫暫時靜養三昧に入り可申候

信州に至り製絲工場の現狀を聞き深く布敎の必要を感ずること一層切實なると同時に尊師の志望行持彌々難有さを増し候信州上伊那郡朝日村眞金寺林榮道師年若きも布敎に熱心にて目下岡谷方面に着手致居候尊師の事を申置候間時機を得て岡谷諏訪方面御視察旁布敎被遊ては如何と存候

他は菩薩の本誓也隨處作主圓通無礙なるは禪機の妙用也向後增々御自愛長く興國の行持に精進せられんこと祈等の翹望する所に候

明春二月末は錦地を通過して鎭西に赴き候に付其折拜顏致度相樂居候

先は御祝辭旁御問候まで　早々頓首

大正十四年七月二十五日

總持石禪

山崎林太郎様

○

山口旗之助氏（埼玉縣南埼玉郡堤鄉村）へ——大本山總持寺より

肅啓　不二山滯錫中は不一方御懇情を辱うし且特に香餠を御惠み被下奉深謝候

昨日自動車にて迎へられ倉惶出立大宮板橋を經東都被害地の一角を通過し同情の涙に咽びつゝ歸山仕候當本山も被害甚しく潰倒廿字を超え慘狀痛歎に堪へず候一兩日來人心稍や穩かなりしが如し

先は御禮旁御報まで如是御座候　早々不悉

大正十二年九月十二日

等は寧ろ多少の勞を盡すこそ自己天職の一部を果すもの有之喜悅不過之候御筆記拜見洵に能く行届き敬服仕候唯だ印刷に付して讀者に提供するには多少言葉使ひの稍やくどくどしき點重複なる點少々修正致度その心得を以て校閲致し早速返送可申上候迂衲方には別に寄與すべき處も無之候間可然御取計らひ被下度願上候
先は御禮旁御回答まで　早々頓首

巳五月二十五日　　最乘石禪拜

山崎林太郎樣　貴侍

乍末筆皆々樣に宜布御致誠奉願上候

○

同氏へ――大本山總持寺より

拜啓　酷暑の候益々御勇健の段恭賀不斜候貴市（下關市）市長の重任市會の要望に依り御再任被遊候趣御辛勞は深く察上候得共爲邦家不堪慶賀之至候
貴市與年益々御發展從て內外の要務蝟集晝夜とも吐哺握髮の感可有之と存じ候去れど自未得度先度

有之的野大尉よりも同樣の書狀に接し候へば 幸 の機會につき御高囑に應じ度猶其際地方の青年其他にも來聽し得らるゝ樣致度 存 候 御地は在淨 春 當時の恩地なるに御地にて講話せし事既に三十年の昔となり何となくなつかしく感じ 候 間御貴下に於て萬事小林先生と御打合せ御斡旋被下度 願 上 候 淨 春 院主も昨夜上山せしかば此意を傳へ置 候

時下向寒御尊體一層御加護是 祈 候 御令嗣外御一同に宜布御致誠相 願 候 早々不備

大正十四年十月二十三日

總 持 石 禪 (花押)

山 田 牛 六 樣

○

山崎林太郎氏（東京市）――へ大雄山最乘寺より

肅啓 過日は拜趨病後胡亂の葛藤御叱りも無く種々御寵遇を蒙むり殊に御鄭重なる御謝誼を賜はり 候 のみならず特に不在中御尊來被下 候 趣 御厚情不堪感激之至 候

過日の如き御集りは寧ろ當方より感謝すべき所何卒御繼續相成 候 樣深く希望 仕 候 向後迂衲等參上の場合は會員の一部とも思召し御展待上の御配慮を要せざるのみならず御禮等は一切御見合せ被下度迂衲

精神は所謂寂然不動に願上候
此上は御令息こそ杖なり柱なり御身の御健康ば言ふまでもなし當時流行の投機的事業に引込まれては大變
又御年若く被爲入候得ば夢々酒色の窩中に近づき玉はぬこそ至禱々々
御一家皆々に宜しく願上候　至祝

未一月元旦　　石禪

山田半六大人侍下

○

同氏へ――大本山總持寺より

肅啓　益々御清榮の段奉恭賀候衲亦無異狀豫定の巡錫を了し目下本山授戒會嚴修中に御座候間御省念被下度候
來月は淨春院に赴き候に付十三日に御宿被下候趣忝く存じ候萬事簡素を旨とし不二山前住の積りにて御取扱被下度決して待遇等の御配慮なき樣願上候
右に付本日御地中學校長小林伊三郎先生より同日（十三日）生徒の爲め同校に於て講話希望の旨御書面

の境に御轉地暫時なりとも溪聲山色の間に安靜を試みられ度と存候目下最も大切なる御身御健康は一門福祉の基礎に有之返す〴〵も御用心奉祈候

先は亂筆御禮旁御伺まで　草々頓首

大正二年三月二日　　於駿州耕春

新井石禪

山田半六様　貴侍

○

同氏へ――

新年新日の嘉祥目出度御超歲奉祝上候昨年は遂に一回も伺候せず御無沙汰仕候

末七郎様先般御不快にてありし由承り心痛致候去る二十六日麻布に立寄りし折御快方との事を聞き安心致候

昨年は御運勢甚だ宜しからず御心配の事も多々ありしならん御令息も餘程御加減あしかりし由此上とも十分御加餐祈上候本年は何卒吉祥の日月を御送り玉はり度人間萬事塞翁が馬御尊體は實に中心に被爲在御家內の消長も懸つて御尊體に在り風波の如く立さわぐ臨時の事項は適宜に處理を要するも公明正大なる御

申五月十一日

石禪

山田麻績子様

○

山田半六氏（埼玉縣南埼玉郡粕壁町）へ――駿州より

拜啓　過日參堂の際は却て御厄介樣に相成感謝に堪へず候其後御經過益々宜布被爲入候由何より喜悅仕居候此程は結構なる御菓子を賜はり洵に難有御禮申上候

去る十八日不二山へ參る心得の處同和尙病氣にて入院せし爲め見合致し二十日出立三州に赴き昨日當地へ移錫仕候幸に身體健康晝夜法務に從事罷在候間御安心被下度不二山和尙も格別の事も有之間敷とは存候へ共如何にも身心共に疲勞の樣子につき案居候

又御尊體は幸に御輕症なれば御本復は無論なるも今後萬一にも御再發の事ありては不相成に付御油斷なく御靜養被下度候申上ぐる迄も無之事ながら心を勞せらるゝこと最も病魔をして便りを得しむるの恐ありと承り候へば禪門の所謂放下着の三昧に住せられ些事は勿論煩瑣に亘る事は一切御令息御令弟に御任せ被下唯其大綱を御掌握被遊大概の事は縱ひ不如意の點ありとも安忍地に穩坐被下且時機を見て幽邃閑雅

五日以後一週間位は在京致可と存じ候
御主人にもよろしく御傳聲被下度候　早々不備

未九月三十日　　　石禪

山田麻績子様

○

其後御無音に打過候

御主人樣追々御全快の趣何より嬉しく存じ候未だ服藥を廢するに至り玉はぬ由此上とも無油斷御養生一刻も早く舊に增したる御健康をこそ願はしく候

黑岩先生は天下の英才年齡未だ老たりと謂ふべからず國家の爲め速に恢復せられ永く世の木鐸となり玉はんこと切望に堪へず候

昨日貴狀を拜見し今日特別に祈禱會を修し候仍て寶牘は御手元までさし上げ候先生は此等の事に相當の御信念ありや否や不明なるも其有無如何に拘らず御許樣に於て至心御祈念可被下候

御主人樣にも宜布御致辭是祈候　草々不備

御書面敬讀致し候

○

先般權田様より御婚儀ありしことを承はり大に喜び居りしがその後上京の時とても無く何れ後日御祝詞をも呈せんと思ひ居りしに山田藤吉郎様方へ御縁付との事同氏は衲も久しき以前より承知致し幾度も御目にかゝりし御方にて候

先年膽石の大患ありしが亦復再發との御事御心配の段察しあげ候御本人の御難儀は言ふ迄もなく御身さまの御胸中深く御察し御同情に堪へず候

去る二十七日歸山早速御快癒の祈禱に及び尚亦祈禱の勤修を托して當地に參り申候

非常に御苦痛を成さるゝ御病氣なるを曾て御主人より直接承はりし事有之さこそと御案じ申上候人力神力相合して靈効を現はすものなれば十分の御手當專要に候

又何事も因縁と思召し精神だけは安らかに靜かに常に不動の地に御安住可被下候あまりに身心を勞して御身につゝいゝがありては不相成又よのつね

威徳神通道了大薩埵

の御名號御唱へ下さるべく大薩埵の本地は觀世音にましまし候

衲も來月十五日には追分に出席その後十二月十五日ならでは上京の期なからんと思ひ候十二月には十

○

山田藤吉郎氏及同麻績子氏へ（以下二通）――相州鎌倉跳龍室より

拜啓　益々御健勝に被爲在候條奉恭賀候

過日は特に當莊へ御光訪を賜はるのみならず鎭西へ出發の折は大船に於て萬々御厚配を辱うし遠く國府津まで御觀送被下歸途亦大船まで御出張御迎を蒙り其都度御眞情を籠め玉ひし營養食餌等數々惠賜せられ海山無量の御慈情如何なる深緣かと只々感激仕り候

その後いくぶん氣分宜布本日午後一先當莊を辭して歸山し明日は東京に御約束ありて上京し一兩日にして北越巡錫の途に上り申可巡回は體力に於て聊か無理とは存じ候へども敎約背くに忍びず動中靜を修し苦中に樂しみを占め佛祖の冥護と自己の願力とを頼みとして病軀を捧げ十二月以後は約三ケ月靜養三昧に入り可申覺悟致居候間御省念被下度候

先は御禮辭かたがた御消息まで如是御座候　時下御自愛專一是祈り候　誠恐頓首

大正十五年八月念八日　　跳龍莊

石禪敬具

山田藤吉郎様

麻績子様御侍右

の異狀なく昨日當山へ安着十二日栃尾に立寄りて見附知德寺に宿し十四日午前上野著にて歸京致候

○

山本大應師（島根縣簸川郡出東村萬藏寺）へ——大雄山最乘寺より

拜啓　尊刹戸羅會の際は初中後共に甚大の御道情を辱うし感謝不盡に候來儀の尊宿及檀家の諸賢誠意御盡力被下扶護の恩最も深く御禮難述盡候入會の士女信行の充實せるを視最も快樂を覺え候迂衲爾來依舊東漂西泊幸に健康御省念被下度候過日は御鄭重なる御狀に預り御厚情殊に忝く存候貴刹內外の莊嚴實是れ見聞の巨益今後益々法運の增進祈上候
先は不取敢御謝辭迄如是に候　早々頓首

中五月九日　　最乘　石禪

萬藏尊臺老師

隣峰及檀信諸賢に宜敷御致誠希上候

山田孝如師（新潟縣西頸城郡今井村靈源寺）へ――大本山總持寺より

○

肅啓 道候益々御多祥欣喜不斜 過日は糸魚川奉公團法會引續貴刹に駐錫緩々御厚待に預かり感謝難盡候
殊に今井村の歴史上最も由緒深き兼平公の英靈を弔らはれたるは村内として永久に記念すべき大法會と稱すべし當日は恰も天氣晴朗叢林皆隨喜するかと思はれ且自動車道の大路を開通せられたるは大事業なるも將來長く其便益を受くべし又青年諸氏の御盡力にて城山の攀路をも開かれしは村運發展の吉兆なるべし
翌日より龍襴大衣の開帳 詣亦三千五百名自動車百 回 併而隨雨 大 降未曾有の盛況是實に貴師 の 熱誠と村長殿を始め檀信諸賢軍人分會 青年同窓婦人會 等各團體諸君の協翼と存じ感歎不能措 候 今後增々山門興隆村内安全隆盛伸展の程不堪祝禱
先は右御禮辭まで 如 斯 候 早々頓首

大正十五年九月七日

總 持 石 禪

靈 源 孝 如 宗 師

檀頭及 村 長校長各團體諸賢に別紙同樣宜布御致誠被下度 候 猶早速貴狀 忝 く存 候 迂衲も其後格別

御本師に宣布

○

同師へ——長州萩町より

貞心淳厚にして婦德崇高なる御母堂さま去る十八日觀音大士御緣日の時に於て安らかに御逝去被遊候趣不堪哀悼之情候

さるにても七日には貴刹に赴き緩々一泊せられ歸寺の後御發病とは乍申身心共に御安靖にて大往生を遂げ玉ひしは平素御信念の德と御敎養の力とによるものなるべく七十一年の淨き壽は千百劫の勝緣を結び得て生々世々安穩無礙なるべしと存候

迂衲法緣不淺爲めに精一までも不一方御親切を蒙むり愛念甚深眞是菩薩の行持也昨夕御書面を拜するや直ちに獻香念誦東望遙拜仕候

先者不取敢御弔詞まで　草々不備

大正十五年十月六日

於萩町

總持石禪

天龍健堂宗師侍右

申十月十八日

山本健童宗師　　石禪和南

○

復啓　法躬御健勝御勉學の段恭賀不斜候　且精一儀兄弟も及ばざる程の親交を被むり候事夙因の致す所なるらむと嬉しく忝なく存候

今回は精一痔患に付不一方御配意其道情は書面に溢れ感激の至り　幸に漸次輕快の由安心致候　昨日宏母堂及關野樣來場委細承はり一層難有存候　金圓の事は承知致候間御省念被下度候

肉身を惜むに非ず法身を惜むとは祖訓の切々なるもの相互に法身の長養こそ專要に祈上候　敎界寂寥の觀あり當此時深信篤行の人師を要すること切實なり　希くは其人となり玉はんことを

精一の事は何分宜く御保護　弟と思つて御敎誘被下度候　早々不備

寅二月二十一日　　於西來

雲洞石禪

山本健童禪將

動もすれば輕躁浮薄妄りに一機一境を弄して得々たる者多し迂衲亦其圏中に在るを免れず何卒身心學道の古風を挽回致度畢生の希望に候
向下文長分付來日
老慈師に乍恐宜布御申上被下度尙ほ爲宗門御孝侍切禱

十一月晦　　石禪和南

山本涓潤老兄侍史

○

山本健童師（東京品川天龍寺）へ——（以下二通）

肅啓　今般正泉寺主位に被任候趣隨喜の至祝上候同寺は血盆經出現の道場宗門に取り大切なる靈境たり今後增々山門の興隆を御圖り被下度候雄峰に於ては貴師の送行甚だ遺憾此後とも常在同樣の心を以て法の親しみ賴上候
衲も俊童和尙の代一度拜登せしことあり今尙記憶に存す千葉縣中比較的信者ありと聞く併し敎田は多年荒蕪に歸せしと思ふ弘道利生此所に候先者御祝辭まで　早々不備

過般者『禪榻餘韻』御惠贈を辱うし拜受し且つ敬讀仕候處一字含風雅千篇敷錦繡の觀あり陽春白雪神致禪韻自異詩人之詩一誦可以洗塵襟實是天外の賜奉感謝候永く本山の文庫に藏め可申候

先者乍遲延御禮詞まで如是に御座候　早々頓首

大正十三年十二月初五日　　　石禪敬具

古松道人山口老宗師

○

山本消潤師へ――

皎月老慈師の膝下に御孝侍の事曾て承り歡喜無量

夏以來は雲水の身と爲り南山北嶽を跋渉し漸く歸朝仕候其後歸縣の心得に候處要務四襲不得其暇

來春舊一二月を期し歸菴に決し申候

求道團設立至極難有賛成仕候祖水枯渇の末法時幸に老慈師の在すあり其御行持だけなりとも緇素に稽慕せしむる時は稍や一縷の慧命を相續することを得ん今日の急務道念の修養に在り而して禪風の如き

盛田御主人様

○

同氏へ――大雄山最乘寺より

新年の御祝ひ趙州一味の芳茗並羊羹御惠贈被下枯木堂裏俄然春霞駘蕩の觀あり忝く奉謝候御令室始御連名の賀章に接し恰も親く面晤するが如く興趣不可窮盡深謝仕候

迂衲九日頃上京二十五六日頃まで在京の豫定に候　時下寒天寒地御攝養奉祈候　先は御禮まで不備

午一月五日　　最乘石禪

盛田命昭大人　貴侍

○

山口彰眞師（弘前市千佛閣）へ――

肅啓　御道況益々御健勝に被爲在候條爲法門の慶幸奉至祝候

敎化奉祈候
乍末筆檀信諸賢及山内諸兄弟に宜布御致聲相願候　早々不悉

大正十二年八月一日　　石禪敬具

常安尊老師貴侍

○

盛田久左衛門氏(名古屋市)へ——

肅啓　過日出立の際は御令室特に御見送り被下忝く御禮申上候
慈船禪師の御小傳拜見多少加筆仕候　實は原稿に直接筆を入れ候事は如何にも失禮なれど別に記するの暇なきまゝ枉げて加毫せしもの原稿を汚せし段不惡御思召大野先生に可然御申譯被下度候
日置禪師の御題字は迂衲より相願可申に付原紙御送附被下度候
時下陰霖の欝陶敷候間御自愛專一是祈候　早々頓首

大正五年六月二十一日　　護國石禪

又

一笻烟雨事遊方　鮮水滿山禪味長
行脚六旬何所得　自嗤空手也還鄕

時下爲人法御自愛專一奉祈候

未八月十日　於瑞禪
石禪九拜

常安尊臺尊老師御侍史

○

同師へ——鶴見大本山跳龍室より

拜啓酷暑の折柄聖況益々御健祥四衆御接化被遊候條奉恭賀候殿堂の造營各地の布敎幾多の轉法輪無間斷の行持實に是れ滿洲洞天の慧日と景仰不能措候

迂衲宿痾未全癒候得共春來各處の巡錫幸に無事相勤め近頃漸次輕快を覺え申候間御省念被下度候

近時思想界の動搖日に甚しく鬪諍堅固の記不徒然吾人獻身殉道の時なるべし何卒法身の御自愛恒久の御

未七月七日　於大田

石禪　敬具

常安尊堂老師　御侍史

○

同師（志摩鳥羽港常安寺）へ――越前大野瑞祥寺より

拜復　酷暑の折柄御聖況愈々御健祥にて此程御歸坊被遊候由檀信諸氏の滿悦如何計ならん爲法不堪祝着候

御船中桐生樣始め御同乘朝參暮請談玄談妙浩々地の商量ありしことは想像仕居候

迂衲御厚情を被むり不顧無似滿洲巡錫格別の御叱りもなく完了是偏へに御尊師御庇護の賜と奉感謝候歸國後各地の教約停まるに由なく湘南潭北烟簑雨笠の活計拔舌の業難逃存候御尊示の如く少しく過勞の恐有之今後は精々注意節制可仕候今朝當地に移錫明後日祖山に拜登の豫定に御座候

歸朝偶成

鮮山遼野路悠々　遊戲恰如不繫舟
勿怪禪身無定跡　只隨雲水去還留

未一月念九

石禪九拜

常安尊堂老宗師侍史

○

同師へ——朝鮮太田より

拜復　御尊書昨日於木浦拜受奉敬讀候處御道中御障りなく二十九日御歸山御山內御一同も御安泰に被爲入候趣歡慶此事に候

四旬に近き巡錫中終始御補導被下哈爾賓の月吉林の雨奉天の雲鴨綠江の波隨處形影相從曠劫の勝緣不堪感激之至候滿洲中は全く貴族旅行生來始ての高等行脚德を損ずること幾許恐懼の至りに候入鮮以來稍々雲水式と相成り申候御別れせしより俄に寂寞を感じ靑壯の方々とは方木圓鑿の感なき能はず

　松風の音や夢路の涼み臺

など獨吟仕居候何れ歸京の後詳細可申上候老兄始め皆々樣信徒諸賢特に滿鐵の御方々に宜布御致誠希上候

時下御自愛專一是祈候早々頓首

村山總齡先生　吟榻下

總持　石　禪

○

森口惠徹師（大連市常安寺）へ――伊豆韮山成願寺敎場より

謹而上啓　嚴寒の候御聖況益々御健勝接化無量爲人法奉恭賀候　降而小衲頑健隨分行持罷在候間御省念被下度候

陳者五月十六日東京を發し神戸乘船御地へ拜趨六月は歸路朝鮮經由京城釜山外一ケ所にて都合五日間程を要し六月三十日までに歸京相成樣都合致度旨宗務院及鶴見本山よりの御申聞に候　朝鮮の方不得止ば四日間にても宜しとは宗務院の內意又七月一日頃能州別院の授戒に是非敎授師を相勤むべしとは紫雲臺猊下の尊囑都合によりては馬關より直ちに能州に向ひ候ても宜しと存候　該啓建期日決定せば直ちに可申上候得共右豫め御諒承願上候　朝鮮廻りは安東縣を最終とせば日子の上に格別の差も有之間布被存候

猶土產物（信者へ）の事も宗務院の部員に通じ置候間その員數の概略又品質等御示し願上候　隨行は敎學部より應對及び前講の出來得る人の中にて定むることゝ相成居候

先は右申上度忙中略筆御高免被下度候　誠恐頓首

靈も定めし歡喜し玉ふらんと想像致居り候右に付特に御書面を賜はり忝く存じ候

先は御禮まで如是に御座候　早々可祝

大正十三年六月十八日

總持石禪

村岡ふさ子様

○

村山龜齢氏（横濱市）へ――大本山總持寺より

拜啓　御高堂愈々御安康奉恭賀候今回『銀鈴』秋季版御惠贈を辱うし拜讀仕候乍每度高懐雅情萬物を靈化し隨處風流三昧を打成し山河大地草木國土を包容して悉く神仙の妙境たらしむ實是一毫頭上の神通妙用と感歎不能措深謝の至りに候

『一年間』の御記文を拜して御先考も既に十三回忌を迎へ玉ふを知り懷舊追慕の情に堪へず直ちに獻香して尊靈に御回向申上候

先は右御禮旁如是に御座候時下寒威漸く加るの時御愛玉是祈候　誠恐頓首

大正十四年十一月二十日

水野三右衛門氏（長野縣下水内郡太田村）へ――

○

賀正　迂衲十二月末當地に來り中旬歸京の豫定に候
寶舟面白く拜見致候姉上にも宜布願上候寒中御自愛專一
　堪忍の帆風ゆたけき寶船心たゆまぬ正直のかぢ
　寅一月吉旦
石禪
水野三右衛門樣

村岡ふさ子氏へ――大本山總持寺より

○

復啓　梅雨之候御尊體御微恙を被感候趣何卒無御油斷御養生被下度祈上候
東宮殿下御成婚の御饗宴に御召の光榮に浴し深く感激し奉り增々天恩の優渥なるを拜し獻身以て奉答可仕候殊に皇后陛下兩殿下の麗はしき尊容を拜し感涙に咽び候今回の御慶事天祥地瑞並び臻り國民歡呼の間に御圓成を告げさせられ皇室の御佳運萬々歲貴刀自の御喜如何計りぞや山田閣下の御尊

迂衲東京篤信家の切なる勸めにより暫時當地に靜養來る三十日歸山致候

○

同師へ——越後北魚沼郡廣瀨村興珊寺教場より

粛啓　尊堂宗師益々御健勝恭賀不盡に候

二ケ年餘に亘り檀信の希望に辜き小衲の懇囑に應じ宗門の公務に當り忠實精勤能く其效績を擧げられ候段不堪感激之至候　寺門の整理檀信の熱望に依り今般辭任歸山せられ候事宗務教學の爲め遺憾の極みなるも是亦弘法利生の本誓に酬ゆるもの不得止次第に有之候

扶宗護國の行持は在山と否とを論ずべきに非ず向後益々宗門興隆の大任に當り御盡瘁の程奉悃囑候

猶ほ鶴山に對しては常に擁護の位置に立ち萬端常任幹部同樣御扶翼被下度切に願上候先は特に感謝の忱を表し且つ將來の御依囑まで如是に御座候

乍末筆門葉及檀信各位に宜布御致聲被下度候　時下御自愛萬々　早々不備

大正十三年五月一日　　總持石禪

碩水喆宗尊師侍右

○

宮坂喆宗師（長野縣東筑摩郡坂北村碩水寺住職）へ――豆州熱海村井吉兵衛氏別莊より

肅啓　時下年窮歲盡御道況御安祥化門興隆に御盡瘁の段法幸無量恭賀不盡に候

陳者今般宗務院教學部主事祥雲晩成師財務部長に就任相成候該後任を選ぶに當り其職務の重大なるを思ひ且つ將來宗門教學の進暢を圖るに於て最も適材を擇ばざるべからず彼の栗木師の如き長く教學部主事に任じ數年にして部長となり今は總務の位地に在りて最も宗務院の長老たり斯かる人師を得たきものと存じ候結果是非貴宗師を煩はして教學部主事に就職を請ひ度く決定致候

承はれば貴宗師住山以來傳道方面に向て非常なる御奮勵殊に山門の經營檀信の教務萬端種々の用務あるべしとは深く相察し候得共教學は一宗生命の基本たるのみならず內外の形勢益々之れが恢展に努めざるべからず仍て宗門の大事と迂衲の衷情とを諒察し百難を排して御承諾を蒙むり度く切に御依囑に及び候其就任期は大正十一年二月一日よりに有之候右の趣法類鄰峰檀信各位にも宜敷御披露被下度候

右御懇囑まで如是に御座候　早々不宣

大正十年十二月念七

總持石禪敬具

宮坂喆宗老師　貴右

水野童龍師（埼玉縣北葛飾郡幸松村淨春院）へ——但馬豐岡養源戒場より

○

肅啓　樺島敎田の大開拓爲宗門感謝不盡且法身の健康何より大慶歡喜有餘迂衲彌々名古屋護國院に住名を出すことゝ相成候　雲洞の方は當分從前の通　室橋師兼務の名に於て監寺勤務追て後董選定と協議相纒り候

去る三十日護國院に立寄内披露會を濟ませ候　來る八日より授戒會（御親化）に付かく取りいそぎたるものに候　護國院の僧堂整理中々困難なれど出來得る限り此際改良も施したく就ては貴師來りて講師を勤め被下間敷や正月等は歸院さしつかへなし又春期にもならば何とか代理者をも立つべし當分の處丈にても來つて助化被下候はゞ好都合に候　若しそれも出來ずば一時的にてもよろし何とかさしくり願上度候
常在の準師家も必要に付物色中なり貴師に心當りあらざるか貴意御面示願上候
龍德方丈外みな〳〵樣によろしく

十月三日　　　　石禪和南

不二山方丈

石禪敬具

水上興基老宗師

○

水野梁宗師へ——

肅啓　酷暑難耐候折柄御尊堂御法務御多端の御事と察入候　御歸山中不思懸御怪我被遊候趣御經過如何と深く御案申上候　迂衲宿痾療養の爲め小田原に幽居漸次回復を覺え昨日歸山致候處御懇書拜受忝く奉存候

制度調査御注意難有存候　在山中幹部員を招集し精々注意可致候　今回の調査は宗門の大事深く宗門の狀勢を察し至誠事に當らざるべからず夙夜苦心致候　御身體稍や少康を得玉はゞ寸時も早く御歸京萬々御審議奉煩上候

先は御問候旁御願まで　誠恐不備

大正十一年八月十六日

石禪和南

大泉尊堂老師侍史

同師へ——相州鎌倉跳龍莊より

拜復　道況御清康恭賀不盡に候
客月は胃暑參禪會專ら提撕に任ぜられ不堪銘肝今亦金玉糖御惠與忝く拜味仕候　痼疾容易に治し難き些子の輕快を感候間御省念被下度候
兩刹の住持事御繁務察入候可成早く御歸單の程不堪切望候　殘暑尙嚴御自愛專一祈上候　早々不備

昭和二年八月十日　　石禪　敬具

水野老宗師　貴侍

○

水上興基師（臺北曹洞宗大本山別院）へ——

肅啓　玆迎甲子新年遙祝御道履御萬安候　御赴任以來氣候風土の御障りも不被爲在候哉今後一層法身御愛護臺州に於ける化門の御擴張奉祝禱候　院内及各地布敎師並檀信徒諸君に宜布御致聲相願候　早々不備

大正甲子新年吉日

水野老宗師　侍史

○

同氏へ――大本山總持寺より

諒闇の新年天地肅然當此時法候幸に御安祥欣喜不過之候
臘末攝心入室提撕に任ぜられ屋根の鉗鎚を拈弄せられ法益甚大不堪感謝候其後體操音樂學校にて攝心會
打開の事稀有の淨修に有之今後此種の事行なはれなば眞に活禪風を實現可致と隨喜不盡に候
迂衲病狀未だ快方に至らず日夜藥餌に親しみ皮袋の彌縫に勞するを慚愧の至りに候
時下一層御自愛の上一日も早く御歸單切望仕候　早々不備

昭和二年一月十日　　石禪　敬具

水野老宗師

○

營にて面目一新感入候なせば成るものと被存候來月八日歸京同日又は翌日歸山可致候其後暫時靜養させて戴き可申候時下御法身愛護專一海衆一同亦身心健康奉至禱候山內諸師に宜布御致聲被下度候　早々不備

寅六月二十一日　　立山寺裏

石禪敬具

水野老宗師禪榻下

○

同氏へ――相州鎌倉より

拜復　法身御健祥恭賀不盡に候

本山參禪會中は傳燈遺照御提唱被下忝く謝上候去る二日同會員代表者來訪し大に喜び居り候

大暑の折一層御自愛一日も早く御歸單待上候

賢忠楞嚴兩剎檀信諸氏に宜布御致誠相願候　早々頓首

大正十五年八月四日

石禪敬具

仕候就ては當地よりの直行列車の時間大概御地の着時間都合不宜依て五日午後三時發にて參向仕度左すれば六日午前十一時五十分頃御地着と相成り餘りに早きに失し甚だ申譯無之候得共諸事雲水同然に御接待の程奉願上候就ては御都合に依り同日午後又は夜間より法筵を御開き被下とも毫も差支無之候間御都合次第にて可然御取計願上候

先は右御願まで　早々頓首

一月二十八日

新井石禪九拜

賢忠尊臺老宗師

○

同氏へ——越中立山寺戒場より

拜復　道況彌々御安祥慶幸此事に候　此程御歸單接衆に從事被下候段欣喜不斜候

迂衲病軀御懸念の程御道情忝く候　春來病勢不減動作頗る困難を覺え辛うじて相勤居候　道力の微弱不堪慚愧候

今朝北越より當山へ轉錫致候　當山は大徹禪師建化の大道場規模頗る雄大殊に今回は驚歎に價する大造

○

同師へ——相州鎌倉跳龍荘より

此程は學校の校歌御蒐集被下忝く御禮申上候御書面及愛孃の寫眞及手紙うれしくかあいらしく幾度も讀みました

放送局の方いろ〳〵御斡旋忝く存じ候老病僧呼吸困難のため御約束出來ざれど福井師始め皆々樣先方の覺ある次第にて出來得る限り法音流十方切望に堪へず候各位へ宜布願上候

北但の震災不堪同情之れにつけても各位の無事安泰至禱不盡候

昭和二年三月十五日　鎌倉にて　石　禪

三尾老宗師

○

水野虎溪師へ——大本山永平寺より

拜啓　嚴寒の候聖況愈々御健勝奉恭賀候

束ず來る二月七八日御尊刹に參上し法筵に勤務可致旨臺俊老宗師より御照會を辱うし乍未熟參上可

三尾透關宗師　　　　石禪敬具

○

同師へ——

粛啓　雄峰講習會圓成の狀況御通信稀有の開道場宗門の光榮不過之最後の日の明神嶽跋渉大行道に威德顯現快晴を得たるは薩埵の靈德なるべし尊師護法の念深く獻身の御隨喜見聞兩ら古道人の風あり感喜無量此上とも何卒爲法爲山扶護の勞を惜まざる樣切に祈上候河合師の取計萬事聰明法門の奇珍不堪歎稱候衲無事隨處無礙健康亦稍々良好御省念可被下候

渡支の期切迫定めし御繁忙なるべし萬里の長城を穿却し北支の風光に觸着することや一段の風流山雲海月を擔取して無事御歸朝待入申候時下御自愛萬々不盡

大正十一年八月　　　　石禪

三尾老宗師

石禪敬具

三尾老兄侍右

○

同師へ――布哇堡府より

粛啓　道況益々御健祥御盡力不堪欣悦候

去る七月十八日以後馬哇布哇二島の巡錫を了し今朝歸院幸に身體無異狀明後日は加哇島に赴き可申候御書面只今接手折柄藤岡博士來訪内地の模樣等も承はり申候

當地は米國の治下に立ちて日本人最も有勢なる爲め種々の問題續出寸毫の油斷を許さず我が佛教は一向白人に向つて弘通せられず甚だ心細く被感候衲は到る處日米親善を高唱し且つ社會奉仕の上に於ける佛耶提携の必要を宣傳し多少の反響あるを認め候日本佛教界も向後は世界的宣布の良策を講ずることの急務を感じ候在留同胞は能率に於て卓越せる成績を擧げ居れり聊か心強く思はれ候衲は可成渡米して彼地の實況を視察し將來の進路をも考究致度候併し宗議會前には是非歸國の覺悟に候

時下法身自重萬々至禱　不備

大正十年八月九日　　於布哇堡府

龍吟帖御製本御惠贈を辱うし拜見候處其體裁及印刷並に裝幀共盡善盡美一點の申分なし其丹誠不堪感謝候

震災に付御懇情忝く存候本山も意外の大被害遺憾の極に存候但佛殿放光堂舍利殿僧堂等の稍無難なりしは不幸中の幸と存候大雄山も頗る被害多く何れも復興容易ならざるも枯木花開の日も可不遠と深く三寶に祈請仕居候

先は御禮辭迄早々不備

大正十二年十一月三十日　　總持石禪（花押）

松下竹徑賢契侍史

○

三尾透關師（東京市）へ――

拜復佛敎の爲め種々御盡瘁奉感謝候從尊命別紙序文送呈可然御斧正被下度候

坊ちやん其後健康なりや一粒種の事なれば乍蔭案居候頓首

未三月十八日

○

肅啓　益々御康寧恭賀不盡に候

龍吟帖に老師の咏吟を載するの御思召至極宜敷かる可く候老師の御謙德之を否認せらるゝは貴き御旨意なるも有緣の人々をして文字禪に親ましむるは所謂無形の肖像とも可申に付き御詠草の半又は大部分適宜御登載如何と存候就ては多少平仄の差又は文字の倒置と思はるゝ點に於て聊か加筆を試み候右は本書を汚したる譯なるも別記の暇無き儘ほんの御參考として拙筆を添へたるもの不惡御宥恕可被下候出先にて認め候爲め書面迄も朱字を用ひ候時下御自愛專一に是祈候早々不備

大正十二年八月六日　　石禪

松下竹徑様

咏草中下部朱點を打ちたる分は御登錄可然との印に御座候

○

肅啓　益々御康安恭賀不斜候

石禪

竹徑大兄貴侍

○

復啓　益々御康寧恭賀不斜候

杉本老師喜壽の賀章を纂し介眉の誠を致さんとの思召最と難有事に候　右の序文及題字並に祝詞とも當戒場中に作製し御贈り可申上候帖名は介眉帖又は不老帖等も妙なれど寧ろ鳳鳴帖に對して龍吟帖こそ可然歟と存候　老師の境界洒々落々枯木龍吟の如し其無量壽を祝せる詩歌文章も亦金龍の玉を抱いて遙かに雲外に吟ずるが如く自ら俗調を離れて禪趣の横溢するものある可しと相察申候

衲昨夜東京を發し當地に來り此程は淺草に在り老師亦臨場朝參暮請頗る多忙を極め爲めに御返事も遲了致候段乍恐御海恕可被下候

先は不取敢御回答迄　草々頓首

大正十二年五月八日　　於名立寺

石　禪

松下竹徑賢契貴右

賜はり殊に御令室親裁の煖衣御惠贈重々の御恩意銘肝此事に候

納その後異常なく禪遊を打し居候當地完戒後南蒲原地方へ參り度存じ居候得共寒氣の節に付見合すべく忠告を受け當地より直ちに歸山の事に決定仕候冬期は湘南にて療養可致考に御座候

國家の情勢益々不安の傾向あり焦慮の極みに候

先は右御禮辭まで如是御座候令息益々健康是祈候早々不備

大正十一年十一月念五日　總持石禪

松川默道様

同　慈鑑様　貴右

○

松下竹徑氏（長野縣埴科郡松代町）へ——大本山總持寺より（以下四通）

拜復　益々御健寧恭賀不斜候長國老師古稀の祝詞及跋文乍蕪雜拜呈仕候老師の御健康は祖門の幸福此上とも芥城劫石爲人法御自重奉專禱候　頓首

四月二十三日

同氏へ――相州小田原向松菴より

復啓　極暑の折柄益々御健勝の段恭賀不斜候赴越の際は再三御光訪を辱うし深謝此事に候陽暦盆祭後當地に閑居し靜養致居候幸に日一日に快方を感じ居候間御省念被下度候當地は空氣清爽溫度も只今までの處にては八十二度を超えず靜室端居朝夕函嶺湘海を觀望し時に揮毫物の償債に從事致居候十五日には鶴山に戻り二十一日以後錫を移すべく豫期致居候
時下十分御自愛專一是祈候御令室にも宜敷御致誠相願候　早々不備

大正十一年八月四日

於向松庵

總持　石　禪（花押）

松川十一郎様　貴侍

わが法は濱の松風みねの雲うきよの塵はとゞめざりけり

○

松川默道師へ――大本山總持寺より

肅啓　益々御康寧恭賀不盡に候安善戸羅會中は初中後とも特別の御厚情感謝不斜候今般は御懇書を

町田喜三郎様

○

松川十一郎氏（越後長岡市）へ——大阪より

粛啓　御尊體此程御不例に被爲在候趣承はり驚入候　幸に御快方に赴き候由御病後の御靜養專一に念じ上候　衲格別の障礙なく本日當地に來化致し候

本年は北越稀有の大雪遂に親不知の慘事を惹起し同情の涙難禁　世相無常人力不能及不少不變易の地に向つて大安心を打するに非ずんば精神的大自在を得ること難し火中見蓮の消息こうあらまほし

御令室御子樣方外皆々樣によろしく御致誠希上候　早々不備

大正十一年二月十七日　於大阪

總持石禪（花押）

松川十一郎先生侍史

法身御自重專一至禱

じ玉はんこと切に奉祈上候尚此場合綽々餘裕ある大雅量を御示し被下度願上候
御母堂御令室に別書同樣宜布御致誠相願上候　早々頓首

大正十三年五月念七日　　於知德寺敎場

石禪　敬具

丸田等觀大人侍史

○

町田喜三郞氏（新潟縣北蒲原郡笹岡村）へ――大本山總持寺より

肅啓　嚴寒之候益々御淸祥恭賀不斜候　御書面を拜し御母堂に對する御篤孝の程感じ入候　御老衰の爲め御臥床の由御案じ申上候

人生夢幻の如きも心靈は無量壽なり佛の御慈悲光明は未來までも輝きわたりて無礙圓通なり只その慈光に浴して信心歡喜して大安心に住し玉ふやう御傳へあげ被下度候

先は右申上たきまで　草々不備

甲子一月二十七日　　總持石禪

○

同氏へ——知德寺教場より

拜啓　御近狀如何に候哉政戰に當り熱烈なる御活動も少數の差にて不能果貴意遺憾の極深く御同情申上候

雖然今次の御活動は元來不利の位地に在るを知りつゝ欲止不能止憂國の御精神より出で郡內多數の人々翕然推薦の誠を捧げ九仞の績を示したるは全く貴大人至公至明の德化に依るものと存じ爲めに郡民に多大なる自覺を促がされたれば其功決して虛からず且つ之に依りて貴大人としては最も痛切なる體驗を試みられたらんと存候猶は此政戰に於て國民の選擧に對する道義心及び知識能力の高低を卜せらるべく候

鄙見を以てすれば今の世に眞個報國濟世の誠を以て終始せらるゝ者寥々として曉天の星の如し其主義主張は金玉の如くなるも多くは利害に左右せられ主義主張は以て裝飾の具と爲す者なきに非ず貴大人の如く內外玲瓏至誠一貫の君子を得ること最も難し迂衲が貴大人に在野の君子として政戰に直面せられさるを望みたるは亦た之れが爲めに候

現在の社會相は百鬼夜行の如く奇々怪々を極む今にして一般の自覺を促進せざれば國家の將來憂慮に堪へず只此際毅然として大節を操守し區々たる勝敗を以て喜憂せず萬里一條鐵の御志氣を以て邦家の扶護に任

政狀不利なるを知りつゝ敢然出廬せられ三旬に渉りての御奮闘國是の歸する所國民の進むべき所を横説竪説せられたればたとひ當選はかち得ざりしとするも郡民の覺醒を促がされ候功績は偉大なる者あるべしと確信致し候

貴下公明正大の識見と護國警世の筆舌とは亦是好個の轉法輪なり況や其純眞なる熱情徹底せる誠意は高く眼を國家の大局に注ぎ必ずしも勝敗に拘々焉たらざる事は衆目の視る所に有之候御令室始め同志の諸君は痛恨措く能はざるものあらんも前記の意味に於て各々自ら慰むる所あるべしと存候當此時君子坦而蕩々萬里一條鐵に其志を行ふこと必ずしも其位置に依るべきに非ず行藏兩守其道進退共布其敎以て民心の根柢に培ひ國政の基本を資け玉はゞ最もありがたきことゝ存候御令室等も決して不憂不懼の堅志を操持して一層弘毅の志閑雅の量を發揮せられたく奉至禱候

先は不取敢鄙懷開伸まで　誠惶不備

大正十三年五月十二日　　於長野市盛傳寺戒場

石　禪　敬　具

丸田紹櫻大兄　貴右

此美を推して國民精神の大美を成すべし悲哉凡夫は十二時に役せられ環境に搖がされ此美點を失脚すること多し爲めに正邪を辨ぜず順逆を誤るされど貴大人は此際卓爾として雅量を御示し被下度候恩讐分明此四字非有道者言也と呂蒙の言へるは一隻眼を有すと見るべし

貴大人の胸中只だ國家あるのみ民福あるのみ正義あるのみ勝敗は次なり今の政治家は權謀惟れ事とし民衆亦た目食耳視の漢少なしとせず些子の油斷を許さずと雖も衆に臨みては務めて仁齋の量を量とし茂卿の狹に倣ひ玉はざるを冀ふ

晝夜御多忙さこそと奉察候此際御健康最も至要悃禱不盡恐惶敬具

四月念五日　於林泉庵戒場

石　禪

丸田等觀大人　侍右

○

同氏へ――長野市盛傳寺戒場より

欽啓御當選疑なからんと想像致し居候處僅少の差にて一簣の功を缺き候事遺憾無窮に候

盡人事而俟天命貴下慨世の雄志欲禁而不能禁且つ目下の政情草廬に幽居せらるゝを許されず郡內の

鄙簡を呈し候

貴大人は徹頭徹尾大乘菩薩の大願行に住し大山于其心大海于其心被引春辭兮不游春澤雖見秋色兮更無秋心無罣礙不染汚にし去り玉はゞ黨弊の瞞を受けず黨界を廓清して娑婆即寂光土たらしめん是亦一段の神通妙用たるべし

最近米國議院の態度不堪痛恨國威增進は刻下焦眉の急なり一層の御盡力奉希望候如何に世を憂ひ時を慨するとも胸臆裏に一段の信天地あらば綽々然として餘裕あるべし

是れ養生の第一方と存じ候　頓首

大正十三年四月二十日　　於前橋橋林寺戒場

石　禪　叟

丸田等觀仁者　貴右

○

同氏へ――林泉寺戒場より

拜啓　此程御地通過の折は政戰御多忙中特に御送迎を辱うし且つ數々の寵賜厚く奉謝候

二絕御示し被下感吟仕候人情美の御感想實に至言也社會百般の事象多くは此美點の缺陷より生起す

餘りに亢奮せられざること胸中常に江風山月を懐きて廓落無依なること又國家の爲めには生命財産も惜むべきに非ざれども祖考の遺産を護惜するは子孫を敎養し社會を救護し志業を永續する所以に候得者此事一段の御注意切望に堪へず候

衲老軀多少宜布方に打向ひたらん心地いたし候 先以て御安心願上候

餘は後便萬々　早々不宣

大正甲子四月七日　於建福寺戒場

石　禪　敬　具

丸田等觀仁者　貴侍

世にありて世にそまらざる人にこそ世をすくふべきみちはありけれ

○

同氏へ――前橋市橋林寺より

肅啓　只今宣言書接手敬讀し文々言々肺肝を吐露せられ主義明亮見知公明洵に感喜致 候

石黒氏も立候補の趣 承り候へば黨籍の如何を論ぜず國家重大の時期なれば皇室を中心として我民族固有の大精神を把定し國利民福の爲めに一身を放下し且つ貴大人との交情も君子の爭 たらんことを望む旨

四月三日　　於四日市建福寺戒場

石禪　敬具

丸田紹櫻大人　侍史

○

復啓　實際理地不立一塵佛事門中不捨一法貴仁者憂國の忠誠は遂に臥龍岡に穩坐するを許さず立候補決意せられ候由此程より刈羽郡内の政情を聞き止むなき歸結と相察仕候

既に頭角を雲外に露はされ候上は捲風拏雲騰躍九天凛然電雷の威を現じ沛然甘露の雨を澍ぎ以て蒼生を潤澤せらるゝこと至要に候現代政黨の腐敗議會の墮落は宗教家の無力教育の缺陷と共に國家向上の一路を拮屈險危ならしむされど是れ傍觀すべきことならず革正すべき一大事なり故に眞個至誠純忠の鐵漢を待つこと雲霓も啻ならず願くは千萬人中不觸一人不背一人の氣節を以て勇往邁進せられたく候

今の人多くは良心の痲痺を來し良者を嘲り君子を無し潔白を誚り質直を輕んず是を不是とし非を不非とし順逆を驗別せず臧否を精甄せず目食耳視燕石を抱て珠玉と爲すの輩少なからず故に如何なる世評に逢ふも怒らず怨みず如海の雅量を以て嶄然御進み可被下候抱巖穴之心者可以居臺閣得禮樂之實者可以任將帥貴仁者の如き超流脫俗の君子にして議政に參與せらるゝは寧ろ國家の幸福なり但前述の如く

同氏へ——伊勢四日市建福寺戒場より（以下二通）

粛啓 春寒料峭益々御勇健 奉恭賀候 妙應戒場への御尊簡及柏崎日報忝く拜見仕候 憂國の御赤誠溢れて文章となり言々句々血涙の結晶 涙實出於痛腸殊に鶴唳餘錄は實に是れ一段の好教訓再三拜見仕候 祇合學風 期復古悠々豈可閲年華の一結滿幅の御精神を窺ふに足れり

貴郡の政情頗る混雜の模樣萬不得止場合は立候補被遊候 御覺悟迂衲は寧ろ國家の爲め感激に堪へず先般來屢々尊嚴を冒瀆したるを却つて慚惶に感じ候 但迂衲の憂ふる所は貴大人の御性格は所謂貞而不諒者今の政界餘りに權謀に過ぐ凡聖同居龍蛇混雜の世に於て玉石同視を恐るゝの意に外ならず候 尤も國家重大の時期に於て辟世の賢を學ぶことは國士の忍ぶ能はざる所なるも紛々たる選擧界に立ちて家產を犧牲にするが如きことあらば是亦祖考に對し孝子順孫としての御心情に堪へ難きものあるべし此等の點も十分御諒承被下度候 貴大人は蓋し中行を得て之に與みすべく狂狷に伍して事を爲すに適せずと信じ候 右は甚だ失禮なる申分なれど特別の親情より劈腹剜心鄙見を呈露仕候

首相に呈せられ候 一律は君子千里同風の感あり首相の胸次怡々たるものあらんと相察候

迂衲も乍微力隨處に大詔叡旨の普及國力培養の樞機選擧の公平護國の本務等宣傳仕居候

先は御回信迄如此に候 法務連續文意兩疎鹵 御仁恕被下度候 誠恐不備

丸田等觀大士 貴侍　　　　石禪 敬具

○

同氏へ――靜岡縣硏屋町顯光院より

拜啓 御尊書入微入細 忝く拜見仕候 時局の紛糾坐視するに忍びず憂國の至情止むに止まれぬものあること重々相察し寧ろ邦家の爲め感謝致居候得共今日の政狀は權謀術數其勢を得龍蛇混雜の狀態に有之候を以て公明正大尊君の如きは鬪士として陣頭に立るゝことは却つて其德を傷るの恐れなき能はず飽までも監視後援の地に在りて政局の廓淸を圖り一面東洋文化の進暢に御盡力を賜らんこと御先考の御遺志にも叶ひ將來廣く民心を敎化せらるゝ上に効果多かるべく被存候

迂衲數日來爲風邪發熱せしが只今は稍や平常に復し明日は尾州に飛錫可仕候間御省念被下度候 時下春寒未去 與時御自愛萬々是祈候 誠恐頓首

大正十三年三月八日　　　　靜岡縣硏屋町顯光院客席

石禪 敬具

丸田等觀大人 侍史

丸田大人侍史

○

肅啓 本日顯誠子よりの來書に付別紙御送呈仕 候 內藤氏(順太郎)の著書を披覽し乍今更惡思想の大宣傳に戰慄致 候

神聖なる我が皇國にして一點彼等の汚瀆を受くることあらば噬 臍 尙ほ不可及實に是れ國民一致國本を固むべき重大時機に有之 候 今回の選擧は國民が憲法に與へられたる權利を行使するに堪ゆるや否やを驗すべき絶好の試場なるべし故に衲は尊君の如き愛國誠忠の君子の出世を望むこと切なるも現今の政狀を審觀するに立候補せらるべき時機とは思はれず萬一皎々の身を以て擾々の渦中に投じ玉ふことあらば甚だ遺憾に付闘士たらずして將に將たり韓信たらずして張 良 たるこそ望ましけれ而して專ら東洋文化の宣傳に盡され國民思想の南針として時局を救はれんことを 希上 候

淸浦氏は誠忠の君子是れ衲の認むる所 子も亦た獻身以て最後の御奉公を爲すべき決心と察し 候 只道多荆棘 市中 或出 虎 邦家の爲め憂且つ恐るゝに堪へたり鄙見 固 不足取聊か赤心を吐露して參考に供したる次第に 候 時下御自愛萬々是 祈 候 早々頓首

大正十三年二月念六日

於靜岡縣藤枝洞雲寺戒場

石禪敬具

丸田等觀仁者侍史

○

同氏へ――大本山總持寺より（以下二通）

肅啓　清浦子は誠忠の士と認め居候其の組閣が違憲なりや否やは非所知只大命の重きこと如泰山今後善政を布き以て天恩に答へ奉ること望む所に候然るに彼の護憲論者が其の施政の臧否に拘らず之を排するは衲等の解し難き所只々今後政情の安定こそ所祈に御座候若し今日の如くにして兄弟鬩牆を惟れ事とせば國威を失墜し人心益々動搖して結局外國の侮辱を招くこと大なる者あるべし故に今回の選擧には貴大人の如き誠忠純潔の君子を望む者山々なるも政狀を熟觀するに世の多くは玉石を甄たず薰蕕を一にし但黨心に礙られて正に代ゆるに私を以てするを覺ゆ故に貴大人は此の際政爭の渦中より脫し寧ろ指導の地に立ち文教を以て將に將たるの德能を顯はし玉ふこそ國家の爲め望ましきまゝ過刻鄙見を申上たる者に御座候間不惡御賢察相願候　早々頓首

二月二十四日

石禪敬具

懇篤せらるゝも寧ろ之を謝絶し玉うて依然側面に於て政界を監視し鞭撻し補導せらるゝ様遊ばされたく切望仕居候

今日の重大時機には御貴下の如き至誠愛國高潔恪謹の君子にして立法の府に立たるゝは切に望む所なるも今日の情勢にては或は玉を抱て淵に投ずるの恐なき能はず政友本黨と雖も盡く雄峰居士の如き君子のみとは考られず是々非々は天下の公道なるも非其是是其非の横論妄議も中々に行はれ居候得者如何に考ふるも御貴下は正面に立たるゝよりも裏面に於て指導の任に當り彼の大東文化協會の方こそは眞正面に立て堂々世人を覺醒せられなば御貴下の眞精神を發揚し得らるべくと存候此事は世事に迂遠なる老衲の寢言なるべけれど近時深く感ずる所あり茲に鄙衷を絞り出して御賢鑒に供し候尤も此事は以心傳心御貴下の御胸中にのみ御收め置き被下御令室や御親戚にも御内々に願上候

尚ほ委しく認め度存候も來客多く時間之れなく走りがきの段御宥免奉仰上候　早々頓首

追白　正義のみを以て立たんには其獨を守るの覺悟なかるべからず狂夫走れば不狂夫も亦た走らざるべからず走るは一なりと雖も走る所以は異なれりされど社會の多くは其の異同を視る能はず至誠憂國の君子亦た止むなく黄金を撒じて投票に代ふるの姿なり是の如きは直情勁行寸毫も私心なき御貴下の忍びざる所ならんと存じ衷心忡々且つ恐れ且つ憂ふる次第に候

二月二十四日

迂衲一豎未去呼吸未調活動不如意慚汗此事に候されど分に應じて化門を開き奉公の微衷を致す心得に候明日華族會館に於ける敎化宣揚會に臨み二十二日横濱に赴き翌日出立巡錫の途に上り可申候

北越近日風雪烈しと聞く御自愛專一是祈候　早々頓首

大正十三年二月二十日夕　石禪

丸田等觀大士　貴侍

○

同氏へ——靜岡縣藤枝雲洞寺戒場より

肅啓　迂衲昨日當地へ着杖仕候

此程來仔細に目下の政局に關し管見を試み候現時の社會相は憂慮すべきこと不少顰蹙すべきこと亦た多し公明正大の君子御貴下の如く中心國家を憂ひ皇室を奉護し玲瓏玉の如き行動を取らるゝも浮雲の時に明月を蔽ふあり聖人も亦た道を以て欺かるゝなきを保せず今の政情も商狀も農工も皆な同一の患ありて寸毫の油斷を許さず依つて迂衲熟々顧ふに御貴下には御地の政情如何あるやは知らされど萬一立候補に

侶との聯合にて創立せられたる皇室中心主義大詔普及を標榜して佛教の眞諦を宣布するの機關に候
右申上度まで如是に御座候　早々頓首

大正十三年二月十九日　　　石　禪

丸田等觀大人侍史

○

粛啓　本日首相官邸の招待に應じ各宗管長及代理者打連れて參邸首相及文相より懇切なる御挨拶ありて民心作興に關する談話を交換し午餐の供養を受け乞暇後各宗派會合將來の方針に付協議を遂げ夕刻歸所仕候爾相共最も眞面目なる態度に有之永久的問題として政局を超越し宗教的信念に基き思想を善導すべく商量に及び候國民精神の勝友たることは固より僧俗の別あるべからず僧にして俗なるあり俗にして大菩薩なるあり
古は危邦には入らず亂邦には居らずといへり今は入危邦而濟其危居亂邦而理其亂天下道あれば彌よ其美を添へ道なければ進んで其道を明にし以て國家を擁護し皇室の尊嚴を守護し奉らざるべからず何卒何卒勇猛精進奉願上候

丸田等觀大人侍史　　　　石禪敬具

○

肅啓　此程は劈腹剜心の御華墨くりかへし拜見仕候　高橋雄峰居士等の御意見に關する印刷物も熟讀仕候

政治は國家の政治なるを以て政治家は國家の德教を尊重し國礎を固むるの大使命を負はざるべからず若し言論の自由を以て不臣不逞の行爲を敢てするが如きは其罪萬死に當れり現時政局の紛糾を見て前途寒心に堪へず此際に當り奮然挺身政界の廓淸に任ぜられ候事不堪銘肝候　冀くは勇猛精進の幢を竪て破邪顯正の鞭を揮ひ荊棘を芟除し圓通無礙の眞境を打開せられんことを御尊體益々御自重祈上候

迂衲も明日は首相（淸浦子）の御招きに依り參邸し親しく民心作興の問題を商量し且つ佛教各宗派とも協議して思想善導の方法を構定可致候御貴意の趣も明日なり他日なり委しく首相に傳へ可申上候

二十三日には鶴山を下り巡錫の途に上り隨處敎化に微力を致すべく候　明後日は敎化宣揚會第一回の講演會に臨み澤柳氏と迂衲とにて兩片皮を鼓することゝ相成候　同會は澤柳福原堀内藤山等の人々と佛教僧

が如し唯指道者を得ざると誘惑者の跳梁することを恐る今後益々菩薩身を現じて說法度生被成下度奉切望候

御母堂及令室賢息に宜布御致聲願上候　早々頓首

大正十三年一月念八日　　石禪　敬具

丸田等觀仁者貴侍

○

肅啓　侍僧への御華墨逐一拜見尊皇護國の大義に則り晝夜御飛躍被遊候段爲邦家不堪感謝候

政局の紛糾益激甚滔々天下多く利權に狂奔し眞正愛國の精神日に衰へ候樣被感慨嘆此事に候政界の廓清は全く焦眉の急務に屬す願くは女媧氏となりて補天の美を濟し玉はんことを任重而道遠弘毅の士に非ざれば能はず思想の進移動もすれば國體の神聖を汚瀆し去らんとす實以可慨何卒御健康を第一とし勇猛精進力を發揮して政教兩全の功果を收め玉ふ樣奉切望候

過日芝支院に御來訪生憎歸山後にて遺憾の至に候其際種々の厚賜忝く奉謝候御令室前外皆々樣に宜布願上候　早々頓首

○欽啓　嚴寒の候益御清穆奉恭賀候

迂衲去二十五日佛教各宗管長を代表して宮城及東宮御所に拜趨して賀表及賀牋を捧呈し二十六日久邇宮邸に到りて良子女王殿下を奉送致候天霽氣穩瑞色滿都一點の事故も無之曠古稀有の御慶典も御圓成實是國家興隆の嘉祥と誠惶謹祝仕候明日祥賀の盛儀に列し明後日鶴山に歸錫可仕候顯誠子より介眉壽宴の御狀況及仙翁壽媼に配賦せられし印刷物並に東洋文化の眞隨席上御口述の筆記等拜見致し今朝は特に御惠贈の同筆記に接し再應拜讀父子の親長幼の序親仁の誼敬老の悃一般人の好典型と爲すべく欣喜此事に候殊に賢息の考案に成る福引は其の意匠の奇拔にして趣味深く一々讀了して躬自ら福引に預かるの感あり宴中の老星喜躍の狀想見し得て興味を覺へ候御養母の清琴御令室の調理は必ずや延壽長福の効果ありしなるべし近時敬老の風廢れ年長以倍則不顧之十年以長則嘲之五年以長則凌之の觀あり甚可以慨

近時民心の動搖最も甚しく將來を思ふに轉た寒心に堪へず東洋固有の精神を振興する事焦眉の急と存候政界日に紛亂教育宗教二つながら權威を缺く昨臘の不祥事さへ寒毛卓立を禁じ得ざるに其後某重大事件の内容なる者を洩れ聞き痛恨不能措候教育者の人格を高め宗教者の惰眠を覺醒し億兆一致我が國民的大信念を振作向上せしめざるべからず堅實なる國民性は都城よりも地方に在り有識者よりも無識者に多き

昨年の大震災にも勝る禍難の伏在するを被感焦心の至りに御座候
如仰宗教教育の天職に任ずる者放身捨命以て人心の挽回に努めざるべからず彼の後藤氏（時の內相）の如き甚だ遺憾に堪へざる行蹟あるは慨嘆の至りに候　迂衲の同氏に於ける僅かに兩三次の交際ありしのみにて信仰上に就ては未だ結緣を見るに至らずされど近々訪問して忌憚なき忠告に及び度ものと考へ居候
去三日　三殿下拜賀の爲め宮城內に入りしに御殿は御無事と承はるも沿道の石垣及び多數の倉庫崩壞破損頗る慘狀を極めありて一見涙に咽び候　されど災後御修理の跡更らに無之是れ災民の窮苦に御同情の餘宮中の損傷は其の儘に御忍び遊ばさるゝ御仁慈より出でたるものにて感泣の外無之候
今後儒道によりて忠信孝悌の德を修め佛教に依て安心得道の門を開き以て敬神尊皇の誠を養ひ歡喜交恤の誼を篤うし國本を固め民心を調ふること焦眉の急務なるべし此上とも御盡力奉願上候
臘末御惠贈の御書面は高橋雄峯大人に御回送可仕候　先は御回答旁微意申上候　早々不悉

大正十三年一月五日

石禪　敬具

丸田等觀仁者　貴侍

新禧の祝詞に添て別記の拙作を御目に懸け候晦日芝支院に來り於東京歳旦の儀を修め元日　宮中に參賀當日午前中　三殿下に拜賀午後歸山可仕候如仰バラツク住民の狀態不堪同情冬期の困難被思遣候

御家内中及知己の御方々に宜布御鳳聲相願候　早々不悉

大正甲子一月三日　　於芝支院

石禪　敬具

丸田等觀仁者　侍史

○

同氏へ——大本山總持寺より（以下五通）

肅啓　梅舍新陽霞松帶萬年瑞御尊體益御勇健奉恭賀候

臘月廿九日附の尊書本日正午拜手敬讀仕候處大不敬事件に對する御感想及び憂國の御衷情血涙滴々凝つて文を成し字々忠誠の結晶ならざるは無し再三拜讀御尊意の存する所忝く銘肝仕候午後三時新年御祝詞に接し文化協會の事業を協贊し思想の善導に御盡くし被下候御思召難有存候近時民心の弛緩其の極に達し外襲の思潮に飜弄せられ民族固有の精神に龜裂を來さんとし現在を鑒み將來を察するに

丸田何一郎氏（新潟縣刈羽郡柏崎町）へ――東京市芝公園大本山總持寺出張所より

○

粛啓　帝都復興之第一年を迎へ遙に御高堂の萬安を祝延し且つ慶運無疆を祈上候　鶴山一會無事微軀亦無恙迎新　日月御　省念被下度候　臘末御懇篤なる御華墨　忝く拜見　仕　候　如尊示近時人心の推移益々甚しく東洋固有の美風漸く廢れ帝國の萬邦に卓越せる國民的大精神も不純なる内外の氣風の爲めに混濁の狀を呈し思想の惡化殆ど其の底止する所を知らず實に長太息の至りに堪へず候　昨臘突發せる大不祥事件の如きは夢想だもせざりし逆惡の行爲にして恐懼不知所言一狂者の凶惡必ずしも國民思想の反映には非るべけれども近時蔓延しつゝある惡思潮の感化に出づる者あることは勿論に有之戰慄禁ずること能はざるを覺え候　當此時大東文化協會の設立は精神界萬世の基礎を鞏定し所謂民心の涵養振作を大成すべき一大美擧と隨喜　仕　候　北越の如き淳厚質朴なる處にすら昨今農村に於て不穩の氣漲り將來の結果如何あらんと憂慮に堪へず候

思想を矯正するには思想を以てせざるべからず精神敎化の振興を圖り國民をして其の據る所守る所を知らしむるに非ざれば改善の實を擧ぐること能はざるべし何卒今後東洋文化の淵源に遡り國民的信念の奬勵鼓舞に御盡瘁下され候はゞ國家の爲め幸甚不過之候

雄峯居士の玉作過日拜見感吟　仕　候政務多端の御身を以て此好風流を占取せらる敬服　仕　候　昨日

松浦百英師（茨城縣結城郡孝顯寺）へ——東京市最乘寺出張所より

肅啓　御道況益〻御安祥奉恭賀候

陳者鶴山後董選擧の結果不肖當選の榮を辱うし闔宗の恩意山海無量退省其身鮫力荷山の感なき能はず慚惶の至りに堪へず候　本日大雄に歸錫し明日本山首役の尊宿雄峰に來り請拜を被行來月三日退院の儀を伸べ四日入山式を修するの豫定に御座候間今後一層の御道情を以て萬端御扶護の程奉願上候

國家内外の形勢は教界の負荷をして增々重大ならしむ如本山内寺紀の肅振と宗風の發展とを圖り外教化の普及充實に努むべきは當然に有之就ては今後親化の折貴老師迂衲を補導し隨行長として形影御扶護を蒙り度此段切に懇囑仕候　何れ改めて可爲申上候得共不取敢内意御悃請に及び候　右鄙衷御諒承是非是非御欣諾不堪至禱候

先者要旨御願迄　早々不備

西一月二十六日

石禪九拜

松浦百英尊師侍右

○

的場無學師（北海道美國町觀音寺）へ——越後古志郡山本村龍昌菴戒場より

拜啓　御道履御多祥恭賀不盡に候　國華山御在任弘法利生に御盡瘁の趣御報に接し感喜不斜候
高龍尊臺老師は德望識量兩超常倫　巴港の敎界に光輝を發揮せらるゝのみならず其威德既に北海全
道に彌漫す爲法感謝に堪へず故に巴港は實に北海敎林の精華何卒十分御補導被下候樣奉切望候
近々不老閣猊下御親化の由錦上敷花知幾重奉遙賀候
迂衲八月釧路定光寺結制に出會其際緩々拜登樂み居候處五則戒會とも期日繰上げに相成り且つ八月二
十七日には是非歸坊を要する爲め途中の活計其餘地なきに至り遺憾に存候何れ期日確定の上は更に可申
上候
御山主老師及會中御一同に宣布御致誠奉願上候　誠恐頓首

午六月二十八日　石禪和南

的場老宗師　侍史

候時下雪屋寒強し十分自愛是祈候　不備

大正十二年一月十二日　　石禪（花押）

松田亮孝師　座右

河合師今回宗務院詰となり出張所副監院として本月一日より就任

○

復　大暑の折柄法身堅固の由欽喜無量也此上とも大丈夫の身となりて宗門の爲活動の程念じ上候精一も寂を示し老軀殊にさびしさを加ふ近頃は幾分かよろしく候貴僧は是れより増々進展すべき身なり決して元氣を喪し玉ふまじ是れ肉身を惜むに非ず法身を惜むなり攝養は殊に注意すべし至禱々々

大正十三年八月二日　　石禪

松田亮孝具壽　座右

心靜便身凉

一方案じ居候
如何にも嚴寒の季節なれば病體には一層戒愼を要すされど信念行持の餘慶必ずや神速の快氣を見るべく但し萬事に精神を勞すること最も宜しからずと聞く萬々醫士の注意に任せ一切放下着御療養專一なり衲亦於此地平癒を祈念可致候相尋ぬることも叶はねば以書狀御見舞まで　早々不備

十二月三十一日　　石禪（花押）

松田亮孝宗師

此程は禪鏡子より書面あり衲も昨日歸山大無事に付宜布同人等へも御傳へ被下度候

○

肅啓　久敷消息を缺き相思之情に堪へず有山よりの話しにより漸次健康回復を聞き喜悅不盡候衲も未だ快癒に至らず心臓の鼓動に惱まさるゝ爲めに歩行困難にて活動不能に候精一も稍やよろしかりしが一昨日突然心臓痲痺を發し遂に易簀昨夕舍利を杉戸に送り候誠にふびん千萬悲歎致居候大震災の爲め鶴山甚大の破損雄峰も亦被害不少彼の小田原足柄病院も全滅關東一帶三災の相を現じ痛恨不能措候世相混濁敎家の努力に待つこと大なり貴氏一日も早く健康を復し化門に盡力ありたく切望致

○丸山普山師（熊本縣阿蘇郡北小國村瑞龍寺）へ――大本山總持寺より

拜啓　道況彌御健祥恭賀不盡に候　尊刹戸羅會の際は初中後共懇篤なる御厚遇を被むり感謝に堪へず候　紫雲臺の新築諸般の準備實に容易ならざる御盡力の段深く感入候　納熊本三義學舍に於て御優待を辱うし同地發車後は一直線に車上歸山無事安着致候間　御省念被下度候　檀頭御世話方及隣峰尊宿其他に宜敷御致誠相願候　時下一層法身堅固法運伸暢是祈候　早々不備

大正十五年八月念二

總持石禪

瑞龍尊堂　丸山普山老宗師

山内及入戒諸氏にも宜布御傳聲被下度候

○松田亮孝師へ――（以下三通）

過日は鄭重なる貴書に接し經過良好との事にて安心致し居りしに二十五日より亦復御難儀の樣子聞及び不

由承り候御家門及地方並に不二山に取り實以て大切なる御身何卒御自愛幾久しく御健勝の程奉至禱候

先は右御伺旁如是御座候　早々不備

大正十三年十一月三日　　總持石禪

細谷孝十郎様

○

増田雪巖師（能登國永光寺）へ――大本山總持寺より

拜啓　道況益ゝ御健勝恭賀不盡に候

過般歸朝に際し特に美事なる達祖立像を御寄贈被下實に是れ絶好の記念深く御厚志之程奉感謝候

時下寒氣日相加候折柄爲人法御自愛專一是祈候　先者御禮辭まで　早々頓首

大正十年十二月念一　　石禪和尚

永光雪巖老師座右

昨日尊書を拜し苔清水の國歌感誦仕候今朝御惠贈の『大觀』を拜讀し大局よりの對支觀啓蒙する所甚大昨日も雜誌『後援』に於て御高說に接し親しく音容に觸るゝの感あり快不可言近時の社會相益々文弱薄志信陽の青年諸氏閣下の指導感化を被むること不可少何卒國魂訓鍊への御化導奉至禱候

手にむすぶ玉の清水に影やどす月こそ君がすがたなりけれ

世のちりを姥捨山の苔清水たゞ月のみぞ澄みわたりける

昭和二年八月二十日　　　石　禪　敬　具

堀内信水將軍閣下

微軀少々づゝ快方に感じ候間御休神被下度候

○

細谷孝十郎氏（埼玉縣杉戸町）へ――大本山總持寺より

肅啓　一昨日武州松山町に赴き根本久助君に相見致候折同君は貴下御尊體御少惱の由にて御心配被致居候に付迂衲も案じられ玆に御機嫌御伺申上候昨年九月淨春滯錫の際は特に御光訪を辱うし感謝不斜候其後乍思御無音に打過申候根本君も杉戸駐在中貴下を唯一の資友として親交被致候

○

同氏へ――尾州長源寺より

拜復　大強精進勇猛の金剛身北海に振衣し南滿に曳杖せられ隨處轉法輪の段欣慶感喜奉恭賀候滿洲よりの御玉章も於長州拜受し御多忙中御心に懸けさせられ候御厚情感激に堪へず候迂衲夏來四大不安辛うじて巡錫修行無力を慚愧仕居候過日萩に松陰神社を拜し松下村塾を參觀し懷古の情に不堪候

迂衲は二十一日に歸山して暫くは鶴山と東京との間に滯錫の豫定に候時下一層御自愛爲邦家萬々奉祈候　誠恐頓首

大正十五年十月十一日　於尾州長源

石禪和南

堀内信水將軍　侍史

○

同氏（長野縣姥捨驛拘水菴）へ――鎌倉跳龍莊より

拜復　炎塵を避けて山紫水明の仙境に金剛の靈氣を養ひ玉ふは國幸不過之候

未足慚愧無量に候何れ拜光萬々御高示を仰度願居候過日名古屋市小川氏より瞻仰會雜誌を戴き米國魂と我國の精神とに歸する高説を拜し候此御旨意に從ひなば日米の握手も易々たるものと存じ候燒野原と思想界の御歌は穿ち得て妙一讀不堪感

あれはつる燒野の原を外にして色香を競ふ花ぞうらめし

三界無安何處にか淨邦を求めん只々信劍のみありて入難を救ふべし　虔て將軍の健康を祈る

大正十三年四月七日　石禪和南

堀内信水閣下

○

同氏へ——岐阜縣大井町長國寺より（葉書）

雲深き木曾の川邊にありながらねざめにおもふ君がおもかげ

昨日當地に來り此戒場を今年の最後として休養可仕候
閣下の萬歲を祈る

十一月二十一日　石禪

慈悲の身に將軍もある地藏尊

信水や大海原に月一つ

さつきの庭にちりのこる櫻の花一片を贈りて

庭の面にさくらの花の香をこめてさつきのそらに春風ぞふく

禪僧のこゝろのかげやうばざくら

金剛力彌々御健全に護國の禪御提唱奉祝禱候　誠恐不備

大正十一年五月十八日　　　　石　禪（花押）

堀内信水將軍

○

同氏へ――伊勢四日市建福寺戒場より

拜啓　金剛不壞の尊體增々御勇健大吉祥奉恭賀候

過日は掬水菴の御端書及尊翰を給はり今日は再び御華墨並やまと新聞所載の御高說を拜し奉銘肝候

迷信の御說は實に達人の至言感入候　如尊論國家的大信念の涵養振興焦眉の急務任に宗教に當る者努力

昭和二年九月二十五日　　　　總持石禪

星野保五郎様　侍右

御家内御一同さま及び酒井様始め皆々様に宜布御致誠希　上候

○

堀内信水氏（東京市）へ――秋田縣大森町大慈寺戒場より

粛啓　華墨拝誦御高示不堪感激候　微軀未だ健康に復せず候得共轉地養生の意味にて巡錫開始致し候　信水流れて息まず波瀾滔天の勢を見てはせめて十分の一なりと倣ひ奉らんと思ふも頑石動くこと自在ならず慚愧千萬に候

此地鳥海の峻峯西に聳え滿山白皚々雪氣人に逼り爲めに曉天の冷氣霜を含むかと怪まる日中溫和老櫻猶ほ花を存して風を怕るゝに似たり人氣朴々盤古の趣あり見聞優に靜養に適するを覺え候　此素質を失せずして智德を磨成し國民的勇氣を養ひ得ば如何に嬉しからんと感じ申し候

信水將軍の威德を仰ぎて

たつ波も慈悲のひかりや信の水

名立尊臺　峰翁原道老宗師

檀徒信徒及會員諸賢に宜布御傳誠相願候

○

星野保五郎氏（石川縣鳳至郡櫛比村）へ——鎌倉跳龍莊より

拜啓　時下秋冷相加候處　御尊體御經過如何に被爲在候哉と日夜御案じ申上候　此程祥雲晚成和尙より御樣子粗ぼ承はり申候

御少年の時代より本山の護持に御身を委ねられ其間宗門の爭援あり祝融の大禍あり移轉の大業あり別院建設の鴻恩あり本山未曾有の大變なりしも終始一貫股肱の擁護者として御盡力被下候事は感謝の外無之其偉功茂績は本山の史乘に特筆して不朽に傳ふべきものに候　從つて御尊體の如きは十二分に御壽量を增加せられ度設ひ室內に坐臥し玉ふとも別院の爲めには偉大なる威神力と可相成候

迂衲も一昨年來宿痾相募り客臘以後靜養に從事し猶未至見回復爲めに別院にも意外の缺禮申譯無之候　今後康安に復し別院に登り親しく香を眞前に捧げ度く念じ居候　返す〴〵御尊體御愛護奉至禱候

早々不備

星泰環老宗師

御後任圓滿に決定の趣 不幸中の大幸故方丈大寂定中の御滿足左こそと奉 察候

○

峰翁原道師（新潟縣西頸城郡名立寺）へ——大本山總持寺より

春風駘蕩の佳辰 道況益々清適恭賀不盡に候 尾州守山に宛御惠贈の尊書嬉しく拜見致候
名立淨信會の開設及其方法並內容は誠以て理想的組織にして其感化の佛德將來を資益すること甚大なるべし且明年大遠忌參拜の御用意殊にありがたく感謝仕候青年法悅を感じ勤行講習にいそしむこと布敎上の新機軸にして青年諸氏の修養上多大なる効果又敬老會の御催し是亦行持報恩の淨業孝順獎勵の龜鑑と隨喜不斜候 宗教敎育の缺乏は我國の一大缺陷にして道義の弛緩も之を主因と見るべし此時に當り此擧ある國家の幸福なり今後增々繼續擴張希望此事に候 何卒迂衲の意を會員各位に御傳へ被下將來無間斷不退轉に相續精進奉切望候
時下御自愛萬々 早々不備

大正十三年四月十八日

石禪敬具

佐藤政養先生之御傳拜見致し横濱開發上御地より先生の如き偉人ありし事一向不心付不居非常に難有感候鶴見も既に横濱市となりしことなれば鄉土の大恩人として鐵道開設の懿績と共に廣く之を宣揚し此偉人を偲び可申候

小衲春來病氣未癒今尚安靜を守り居り慚愧千萬に候先は御禮まで　早々不備

昭和二年九月七日　　相州鎌倉比企谷跳龍莊

石禪

藤塚熊太郎様　侍右

○

星泰環師（福島縣信夫郡余目村）へ——大雄山最乘寺より

肅啓　鎌秀泰雅方丈は迂衲と道情相合して恒如兄弟今不幸にして御遷化被遊哀悼不能禁御葬儀には親しく御會葬可致の處教約の已みがたきものあり乍遺憾缺禮不惡御諒恕御法類及檀信各位に宜布御致聲被下度茲に恭く奉表弔意候　泣血不備

大正五年十月二十五日

最乘石禪和南

藤塚熊太郎様

○

同氏へ——相州葉山諸星別邸より

酒田新聞拜見　佛教會之活動地方稀れに見るところ而して毎會獅々吼感喜無量多謝々々時下御自玉萬々是祈候

昭らかに和らぐ御代の春にあひいとゞみくにのめぐみぞおもふ

昭和二年二月二十四日　　相州葉山町堀内諸星邸

石　禪

藤塚熊太郎様

○

同氏へ——相州鎌倉跳龍莊より

肅啓　益々御勇健にて無間斷に教化に御精進被下候事實に是れ肉身之菩薩にして感謝不過之候　酒田新聞を見る毎に北望合掌致居候

之隨身なれば殊に隨喜不能措候

此上とも尊體堅勝眞俗圓融之法門を開闡し社會を善化被下候樣奉祈候　早々頓首

大正十五年十一月三十日　　總持　石禪

藤塚熊太郎樣　淨案下

○

同氏へ――相州鎌倉跳龍莊より

拜復　增々御健祥欣慶不過之候　今回は御懇書及御名菓吳竹澤山御惠贈被下昨日接手忝く拜受仕候　酒田新聞御贈付を蒙り宗教界及社會教育の爲め御盡力の段實に最大の御奉公銘肝此事に候　新帝朝見の御勅語に我國の國是を示し玉ふ洵に以て不堪感激候　日進日新の四字至上之法寶と存候　迂衲呼吸尙甚く困難依然萬事を放下して靜養罷在候　時下御自愛專一是祈候各會員諸師友及佐藤先生等に宜布御致聲願上候　早々不備

昭和二年一月五日　　相州鎌倉比企ケ谷跳龍莊　石　禪

候
時下爲邦家御自嗇專一是祈候　先は御禮辭まで　早々不備

大正十五年六月念六日　　　於立山寺戒場

石　禪

藤塚熊太郎樣　貴侍

いとあつき君が眞ごゝろあじははんたまわる菓子をいたゞきつゝも

○

同氏へ――

拜復　益々御康健に被爲在常恒不斷に佛教の躍動的大精神を發揮し以て社會教化に御盡瘁被下候段邦家之爲め教界之爲め感謝に不堪候

十二月一日より一週間天正禪刹に於て夜間講演を御勤め被下候事殊に難有存候右一週日は禪門に於ける釋尊成道記念日にして臘八と稱し一日より八日晨朝明星出現まで靜坐及演法を修し金剛座上之淨行を偲び修養練磨して佛恩に報ずるを洪範とす此聖日に於て通俗講演を修せらる實に是最上之法供養と存じ聽衆諸賢にも一層眞面目に精神を磨勵し自家本來之面目を莊嚴せらるゝ樣切望仕候天正住持は迂衲

を呈するに至る今後は僧侶の佛教に非ずして民衆の佛教たらざるべからず眞善美の綜合せる教理の下に純淨無垢の信念を鼓吹し以て國民思想の一大整理こそ肝要なれ此意味に於て在家菩薩の教化殊に一段の意義あるものと信じ候

佐藤先生に宜布御致誠相願候時下御自愛萬々　敬具

大正十五年三月二十三日　　成道寺戒場

石　碑

藤塚尊君侍史

○

同氏へ――富山縣中新川郡加加積村立山寺戒場より

拜復　益々御康安奉恭賀候

郡役所廢止の期切迫如何計りか御多忙察上候多年郡政に御盡力被爲遊殊に教化に心血を注がれ其御功績實に偉大なるもの可有之景仰不能措候郡廢後も郡治の爲めに直接間接に御盡瘁を惜ませられず且專ら郡佛教會に御精進を賜はりなば德化の所及甚大なるものあるべし

此度は何よりの羊羹及尊書を惠まれ昨午後落手今朝内佛に供へたる後拜味仕候乍毎度御厚情不堪感激

法義隨所御宣化誠に感激に堪へず候漸次國民の自覺も相進み候跡相見え候得共動もすれば赤化の憂あり是最可憂近代病なるべく候最も恐ろしく被感候

五月押切應請之折御地にも相伺度之處神戸道俗の發願に係る但州城崎之弔靈塔震災一周の當日に於て開眼供養致候爲め直ちに赴神の豫定なる由乍遺憾一日も餘裕なき旨侍局員より申出候

身老少あるも心に老少なし氣に老少あるも理に老少なし須らく能く老少なきの心を執り以て老少なきの理を體すべしとは一齋の語なり吾人も亦是の如き英氣を以て國家に奉じたく候

佐藤先生始め知己の方々に宜布御鳳聲願上候　早々敬具

寅一月十八日　　石禪

藤塚熊太郎先生　貴侍

○

同氏へ——福岡縣田川郡伊田成道寺戒場より

拜啓　御尊書敬讀仕り草卒之際別紙作製入貴覽候

御地方の精神界尊君の信力に依り薰化甚大なるべし感喜感謝窮りなし由來佛教は宣傳不得其宜爲めに衰運

同氏へ——大本山總持寺より（以下二通）

拜啓　益々御康祥奉恭賀候
今回『町村』第四號御惠贈を被むり拜讀仕候本號は東宮殿下行啓記念誌と稱すべく一段の意義を被感候田中氏の高說其他諸賢之文悉く有益の箴言ならざるは無之殊に貴下の盡忠愛國の至誠自治の根本義に關し先帝の仁訓を中心として說示し玉ふ所實に一大信念の發露にして銘肝不能措候
玆に恭く御禮申上候時下寒威漸加爲邦家一層御自玉是祈候早々不悉

大正十四年十一月念一日　總持石禪

藤塚賢君侍史

佐藤先生外知己之御方々に宜布御致聲希上候

○

新陽　啓祚益御健祥奉恭賀候御母堂高壽八旬添四無上之御幸福尙彌榮御康安是祈候
郵貯奬勵之御功績遞相之感狀を被受候趣邦家之爲め欣慶之至りに候多年風敎の爲め御盡瘁眞俗不二の

○

同氏へ——大分縣宇佐郡驛館任聖寺敎場より

肅啓　益々御清適恭賀不斜候

毎度酒田新聞御惠贈本日亦復二十八日三十日の新聞に接し五日より三日間禪學會開催之記事を歡讀し泉流方丈等之御盡力御貴下及佐藤先生等の御斡旋に依るものと深く感謝致候

佛敎各宗等しく禪觀に入る彌陀經に所謂一心不亂は是れ禪也各宗祖師の坐相は皆禪の儀容を備ふ此禪を佛敎の一部とせず法門の全體として擧揚せられたるもの卽ち禪宗に所唱之禪に候身心を調御して亂想を攝し不動の三昧に坐して活動の基礎を固め妄念を截斷し迷執を芟除し大忍力を養ひ智德之源泉を開き而して治生產業の上にも妙法輪を轉じ運水搬柴の上にも無限の法樂を感ず是れ一宗一派の法に非ずして實に總佛敎之根本行と存じ候此法を如實に參究せしめらるゝこと法門の爲め欣喜に堪へず酒田新聞能く其記事を揭げ玉ふ誠に忝なく候

本日は參禪會の中日なるも他時御序の折會員諸賢に宜敷御致聲願上候時下御自愛萬々　頓首

大正十三年十月六日

任聖寺敎場にて

石禪　敬具

藤塚熊太郎仁者貴右

由來御地は佛緣深厚の鄕土にして本間家の如き篤信の士ありて能く範を一鄕に垂る一般の人心純良にして天然に佛心の多量なるを感じ候 近頃は郡佛教會の創設あり各宗の寺院常に和合海に在りて正信の船に棹さし且つ御貴下の如き護法の大士ありて王法と佛法との調和を計り實生活の上に信念の光輝を發揚せらる是の如き素地あるが爲め泉流戒場の盛況を見たるものと信じ感歎不能措候 高岡金澤を巡錫して同地方も餘程宗教的自覺の進境を認められ益々精進の志氣を振起致候

對米問題は刻下の大難關にて深く憂慮仕居候 國權に關する點は飽まで我國の主張を全世界に徹底せしむること至要なるも徒らに感情に走りて輕佻の振舞あらば信を天下に失ふことゝなるべく候 北米は我儘なる富豪の獨息子の如く我儘を貫かんとするの氣勢あり寧ろ憐れむべきものなるも黄金力は或程度までは非を飾りて正を昧ますの場合不少 只我國民は堅實なる人道主義の下に立ちて恒久的に國家の大精神を萬邦に諒解せしめたきものに候

佐藤居士外皆々様に別紙同様御致誠被下度候 郡長様外御一同様にも禪學會員諸賢にも宜布御傳聲願上候 時下御自愛萬々　早々不備

大正十三年六月念六日　能州櫛比總持寺別院にて

石　禪　敬具

藤塚熊太郎様　貴侍

長よりの御懇篤なる御書面を頂戴し歸山後拜見銘肝深謝仕居候行政、宗教、敎育鼎足相依り以て民衆の健全なる覺醒に努むべきは實に刻下の急務に可有之候由來精神界の事は弛緩を致し易く爲めに龍頭蛇尾に終ること多し佛敎家の猛省最も必要と存じ候間何卒精々御策振不堪希望候先は乍遲延御禮迄如是に候時下御自愛萬々是祈候早々不備

大正十一年八月十日　於向松庵

總持石禪

藤塚熊太郎様

○

同氏へ——能州櫛比總持寺別院より

肅啓益々御健祥恭賀不斜候

御地滯錫の折は萬々御厚情を辱うし殊に禪學會及尸羅會とも佐藤先生等と非常なる御盡力を被むり首尾圓成せし段感謝難盡候猶再三酒田新聞御惠贈一層嬉しく忝く拜讀仕候

『親敎の印象』なる記事は過分の稱揚寧ろ慚惶の至りに候迂衲老朽此の急進の時代に善應するの力なく但駈足的に勉強するも猶遲るゝこと幾百千歩自ら愧ぢ自ら鞭ちて聊か天職に盡すの微衷あるのみに候

○

古川碓悟氏（東京市）へ——

貴書拜見候處久敷御病氣にて御惱みの由さこそ御難儀被遊候事と御同情申上候従前一向不存此程某氏より多分支那御漫遊中ならんと承はり喜び居りたる次第に候迂衲も兩三年來健康を害し今に囘復せず半病僧として隨意勤務致居候
貴體何卒療養に注意せられ昔日の如き健康に被復候樣切に祈上候衲も明夜出立名立の名立寺に赴請七月中旬まで東北巡錫の豫定に御座候時下一層御自愛奉至禱候　早々不備

大正十二年五月六日　　石　禪

古川碓悟老兄　貴右

○

藤塚熊太郎氏（山形縣酒田町）へ——相州小田原向松菴より

拜復　極暑之折柄益ゝ御健勝之段恭賀此事に候且御公務御多忙にも不拘常に眞宗教之鼓吹に御盡力被下候段感謝之至りに候六月衲不在中鶴見に御光來被下其際美事なる茶棚及養老の香飴を賜はり且佛教會

○

同氏（越後長岡市）へ――大雄山最乘寺より

肅啓　益々御健祥に被爲入候段恭賀不斜候

春來微軀二竪に被瞞久敷放參罷在候處御懇篤なる御慰問を辱うし奉感謝候四月初旬以來徐に巡錫を試み候得共格別の異狀無之本月中旬歸山老杉寒泉の間に朝參暮請仕居候間乍憚御省念被下度候

兜城懷古詩歌一部御惠與忝く拜誦篇々金玉句々出於眞情實是好箇の記念法供養の上乘なるものと奉感謝候先般は御慈母より米壽の御祝ひを賜はり永井老母特に持參洵にありがたく拜受仕候

迂衲も三十日東都を發し刈羽郡塚山に寄錫し六月一日御地愛宕妙喜菴大般若開繙式に臨み滯錫三日其間少暇を得て拜趨可仕候

山雲海月は拜芝縷陳可仕候國家多事の際一層の御愛玉奉至禱候誠惶頓首

巳五月二十七日　最乘石禪

招隱舍御主人樣　貴侍下

不可解屋御主人　福田良太郎様　侍史

○

福島甲子三氏（東京市）へ——東京芝公園永平寺出張所より

拜啓　過日は特に御代理御光訪種々御懇情を承はり御厚意の段不堪感激候殘鶯集拜見御厚德一層ありがたく曾て地方巡錫中新聞紙上に於て學校御寄附の事を承知候ひしが今その集を拜讀するに及び幾倍の感を添申候序文はその內相綴り座右に呈し奉るべく候

先般旅順に於て御令弟玉汝君に相見し何となく嬉しく存候御高囑の贊等忙中の草稿御寬恕相願候法話集外一品呈上仕候この程御丁寧なる頂戴物深く御禮奉申上候

本日越前へ出發の爲め混雜中にて亂文略筆御高免被下度候早々頓首

七月念九　　新井石禪

福島大人閣下

羅漢帖の序文又は題字の作者は猶熟考の上追て可申上候

同氏へ——相州鎌倉跳龍莊より

拜啓　益々御康寧欣慶不斜候貴著『地藏菩薩の御話』ありがたく拜見仕候
地藏菩薩は觀音大士と共に出家の相を現し光明を放ちて我が總持開祖の前に示現し玉へり依て總持寺に於ては此兩大士を合祀して放光菩薩と稱す殊に地藏菩薩は無佛世界に應現して不請の友となりて無緣の衆生を濟度し玉ふ乃ち諸佛諸菩薩の大慈悲大願行を積極的に實現施與し玉ふものにして文化の大士とも濟生の導師とも稱し奉るべし
華嚴瀧上歌が濱邊に尊像御建立の擧はその功德甚大なるべく此像を拜する者必ずや正念に住し心眼を開き一切の魔障を服することを得べし御祖母いと子刀自の小照書簡は御追慕の記と共に感涙に咽びつゝ拜見仕候冠頭の本願經末尾の御類集御用意の程難有感激致候
迂衲病中筆端澁り文意亦大亂雜只々隨喜の餘り不取敢御禮辭申上候時下嚴暑御自愛專一是祈候　早々頓首

昭和二年七月二十日

總持石禪

○

貴著『家憲』御惠贈被下忝奉謝候

御制定の條目は一般家庭の玉條ともなすべく感入候　家族主義なる我國民間に家憲家法の少なきは遺憾なる所貴著拜見し深く感謝仕候　右御禮まで　頓首

寅一月十二日

總持石禪

福田良太郎様　貴右

○

拜啓　今般御高著『家紋』御惠贈を辱うし感謝不斜候

家紋の意義を明徴せられ國民精神の一大表象なることを說似して一般人に對する好教訓を與へ玉ふものと認め歡喜仕候　先は不取敢御禮辭まで如是に御座候　早々不備

昭和二年一月十一日

新井石禪

福田良太郎様

又五具足の事いろ〳〵御心配を被むり御禮申つくしがたく候代金に不足もあるべしと思ひ候しかし吉祥講の方には御寄附等成るべくおことわりを願ひ若し幾分寄附する御思召の方ありとも出張所にておはなしなどあらばおことわり願ひあげ度萬一にも出張所にて寄附を頼みし抔思はれては出張所にたいしても宜しからずと存じ候不足の分は私の手許より出してよろしきに付そのおふくみねがひあげ候
來月の二十六日には歸京し二十七日には吉祥講相勤め可申候今日は此地にて御回向仕り候
御よろしき時御油斷ありては不相成に付十分御用心祈りあげ候

十月十九日　　　於甲州道喜院
雲洞禪

宏御母堂様

○

福田良太郎氏（東京市外上大崎不可解屋）へ――大本山總持寺より（以下三通）

拝啓　益〻御健祥欣慶此事に候今回内山踊浅野三君御追悼の爲『盂蘭盆』御印刷被遊候事實に好箇の法供養忝なく拝見仕候先は右隨喜の微意を陳べ併せて御割愛の御禮まで　萬々頓首

大正十二年八月二十五日
總持石禪

福田良太郎様　貴右

じみくぢのいでしもふしぎの縁ならんそのくぢ一枚さしあげ候今月の二十七日にはとても間にあはずみなく〳〵様によろしく願あげ候

大禪師さまのこと日夜御案じ申居候母うへさまもからだ大切にいのりあげ候

明治四十年十月十九日午前九時　　門司の石政旅館にて

石　禪

宏　御　母　堂　様

○

同氏へ――山梨縣北巨摩郡道喜院戒場より

當地は停車場より二里人力は一丁もなく禪師さまはおかご私は馬にて石多き道を通りて來り候唯だ富士山のながめは心も淸くなる程よろしくつかれをわすれ申候日中はあたゝかけれど朝夕は寒さつよく候とにかく三千尺以上の高地なれば寒さもむりならず候

昨夜ゆめに母うへにおめにかゝり候そのせつ夜中ねむれぬよし申され候さめての後心配いたしおり候夜中おねむりなきは御からだに大毒なれば日中なるべくおやすみなさらず夜に入りては何事も思はれず成るべくは御しごとをもみあはせて思ひ切て長くおねむりになるやうと祈り候

同氏へ――門司石政旅館より

昨日は一日だけひまなりければこゝより二十里ほどもある太宰府の天神さまにさんけいいたし候これは道眞公が罪もなきにざん者のためさすらひ人となり玉ひついにをはりをとげ玉ひし處に候天神の宮は官幣社にて中々うつくしくにはのけしきよろしく梅櫻松などたくさんありけるも梅も櫻も花はあらず松ばかりみどりの色をなし波の音にもにたらん風のひゞきをつたへ候に『梅はとぶ』の詞さへ思ひいだされ候

うめさくら花さへみえぬ秋の日に松のみひとりつとふ神風

菅公の祈らせ玉ふ天拜山は西にあたりて高くそびへたり

天つかみ國つかみ〴〵ふし拜むひじりも同じ神にぞありける

菅公は御最後まで觀世音を念じ玉ひしことを思ひいでゝ

くらからぬ身も浮雲のかゝる世に普門の月を仰がぬはなし

それより孝謙帝の勅建なる西戒壇院觀世音寺にたちより救世院樣の御回向をなし次に博多によりて御開山が廿四のおんとき支那へわたらせらるゝ折ともづなをとき玉ひし遺地を參詣し七百年前の御辛勞を思うて袖をぬらし箱崎の八幡宮にさんけいし千代の松原のけしきに心をきよめ夜の八時ごろ汽車にてやどにかへり候

天神の宮にて母うへのことを思ひ出し御運いかんとぞんじ二枚のくぢをうけしに私の分も母上の分も同

身のうきを告る彌山の鹿よりもつらきはけふの我が身なりけり

かぎりなきことぶきありとしる身にもかはくひまなき我がなみだかな

夜に入りては軒端をのぞく月に向つてもいとゞ哀れを催し申候

なきはゝのかたみともなれくれぬまもまたで雲間をいづる月かげ

二十六日に葬送をいとなみ二十七日に懺法會を修し二十八日に石碑を建立し且つ分骨の式を擧げ二十九日に發足して歸京仕る考に御座候福島よりも三名參り十日あまり看病いたしまづ〳〵のこるところなき終りを告げ候間乍憚御安心被下みな〳〵さまによろしく御申上被下度奉願候何れ近日歸京の上萬々可申述候

時候不順に付御養生專一祈上候　不一

七月二十四日晩

石　禪

宏御老母樣　御許え

○

安國子氏（東京北品川）へ――越後中蒲原郡深海村大榮寺より

二十一日御したゝめの御書面本日落手ありがたく拜見仕候處乍毎度御親切の深き且つみな〳〵樣のおぼしめし萬事にものうき私を御思ひ被下候ことあまりに勿體なくたゞ〳〵感涙にむせぶのみに御座候十九日には碩宗と共に心ばかりの供具を備へ佛海老師の眞前に就て誦經回向仕候

母も四日以來ほとんど絶食十六日の夜よりは寸時も油斷なく一同看護さりながら苦痛も格別無之精神また平日の如くに付毎朝の理趣分毎夜の遺教を第一の樂みとし信心歡喜の樣子自づから面にあらはれ候ひしも二十日頃よりは一層危篤にせまり水すらもろく〳〵のぞまず數珠をわたしたるに左手に握り終焉まで遂に之をはなさず二十三日の朝八時すぎに理趣分をよみし時はかなはぬ手にてしひていたゞきいとよろこばしげに相見候に付やゝ安堵して朝飯を喫し居候内にはかにやふすかはり高聲によびたるとき唯あいよと一言の返事ありしのみにて無想の境に入り候依て寺内一同を呼び遺經を讀誦せしに誦經後十分程にて全く息斷申候少しも苦痛なく合掌のまゝ手すらも動かさず眠るが如く終を遂げ候ことは悲みの中の喜と存居候間乍憚御安心被下度奉願上候

明らめても明らめがたきは恩愛の情とゞめてもとゞめかねるは哀別の涙一縷の香烟細くのぼりて人はよべども答ふるなし

高祖大師御幼時のことすら思出され申候

○

同氏（栃木縣芳賀郡祖母井町）へ――

拜復 酷暑の折柄益々御健康恭賀不斜候 迂衲病軀に對し親言慈訓感謝不盡に候 當地靜養以來幾分快方に向候樣被感候間御省念被下度候

一刻千金の日月下に懶眠を打すること如何にも慚愧千萬なるも四大不調のため溪深くして杓柄の短きを感じ居候 精々療養を盡し分に隨て奉仕の誠を致し度存じ居候

中越の大水害何れも知音信徒の所在地なるを以て一層不堪憂慮同情の涙に咽び居候 天地不和則水火成禍人民不和則言行生害向後救護及復興の宜きを得んこと祈念仕候

御令室及知己の諸君子に宜布御致辭奉希上候 早々不備

大正十五年八月三日

石禪

平石大人侍史

○

平石大人禪榻下

○

同氏（長岡市鮮滿開拓株式會社）へ――

肅啓　増々御健勝恭賀　不斜候　東都御掛冠の上長陵安身の境界と爲らせ玉ひぬる事數年來の御思召を實現せられたるものと存じ候　今後は御目にかゝるべき機會却て多かるべく樂み居候

衲は永松居士年來の願望たる青年授戒會修行の爲め當村に來り昨日を以て圓成仕候　該法會は同居士先考五十回忌追孝の丹悃に出たるもの其法會の慇懃綿密靜肅莊嚴實に敎界の好龜鑑と被存候　世に信念と誠意ほど力あるものはあらじと感じ候

衲は二十六日中に當地を發し二十八日午前十時新潟着の豫定に御座候　何れ拜眉の際萬々可申上候　早早不備

酉三月二十日　　新井石禪

平石大人貴侍

の徳本たることを全世界に紹介せらるゝことを得ば是れ實に國際上の猜疑を一掃するの指鍼とも相成るべく存じ候

茲に恭しく奉表感謝之意候先は右御禮辭まで　早々頓首

大正十五年六月二十日

於北蒲原東龍精舍

新井石禪

日比野寛先生梧右

○

平石武右衞門氏（栃木縣芳賀郡祖母井町）へ――

拜復　突然御歸還の佳報に接し而も御健全にて四ツ谷郵便局長を御拜命被遊候事爲邦家不堪欣喜之至候今後は時々御音容に接することを得べく樂み居候　衲依舊東奔西馳來る十五日歸京の豫定に御座候近時人心の歸嚮動不得其宜不穩の氣勢日時濃厚なるを被感深く憂慮罷在候何卒一層の檀波羅密可希に御座候　山雲海月分付來日　早々頓首

未十二月八日

石禪

春寒猶料峭御尊體一層御自愛被下度猶院内及隣刹並檀頭御世話人方に宜布御致誠被下度候　先は御禮辭まで　早々不悉

大正十三年四月五日

總持石禪敬具

前松元久田老宗師貴侍

○

日比野寛氏（名古屋市）へ――新潟縣北蒲原郡東龍精舍より

拜啓　貴下益々御勇健奉恭賀候今回貴著『日本國民要訓』御惠贈を辱うし於當地拜受し感謝致居候

昨夜謹で拜讀致候處東洋道德の淵源を說き我が　皇道の精華臣道の大義雄渾該博なる國民道德の神髓說き去り說き來りて涙は實に痛腸より出づ言々句々憂國慨世の至誠に發し實に國民必讀の文字と感激仕候

殊に之を英譯せられたるは我が　皇道臣道を全世界に提示すべき快擧にして深く感謝致し候曾て『臣道論』を拜し乃木將軍の批評に一段の感激を覺え今亦此好著に逢ふ欣幸不斜候皇室はやがて世界平和

蔑視し職務を放閑し自尊自重の念に乏しきことを致す爲めに薫化の效薄く人格の權威を發揮するに至らず是れ敎育界の一部に見受くる弊竇と被感候若し是の如きことあらば高等敎育の不振にもまして戰慄すべき缺陷と思惟仕候迂衲の常に慨歎する所實に在於玆何卒御訓話の因み生徒諸賢に鄙意御傳へ被下度切望仕候先は右御禮辭まで如是御座候　草々頓首

大正十五年三月十二日　　總持石禪

熊本縣第二師範學校長

長谷川藤太郎先生侍史

○

久田前松元師へ――

粛啓　道況益々御健勝奉恭賀候

過日尊刹尸羅會の際は初中後とも特に懇篤周到なる御待遇を辱うし不堪感謝之至候勸戒も致されざるに多數の入戒、殊に隣峯諸賢の熱心なる隨喜檀信各位の親切なる勤務皆是れ貴老師多年德化の致す所と深く欣悦致居候爾後當住獻梁和尚自坊を閑却し迂衲に形影の段是亦感喜に堪へず候

大正十五年八月二十七日

石　禪

長谷川藤太郎先生　貴侍

○

肅啓　益御健祥の段奉南山候　過般は特に遠路佐港まで御光訪を被むり且登校の際は親しく御送迎を辱うし御厚情不堪感激之至候　但時間切迫の爲め滿足なる講演も不出來纔かに談片を印するに過ぎず却て失禮を贏得たるの感あり恐縮千萬に候

然るに却て御鄭重なる御尊書及御謝誼を惠まれ重々の御恩情鳴謝此事に候　折角の御厚志なれば謹而拜受仕候　猶ほ迂衲從來の誓願に基き改めて御寄贈申上候へば茶話會の資又は其他適宜の料に御使用被下候はゞ難有事に候

近時輕佻の風詭激の兆隨處に發生し國家の將來頗る不堪痛憂根本的國礎を民心の上に固むるは國民教育最も切實なりと信じ候　歐米人が公德觀念の深きは幼稚園と日曜學校が殊に其素を養ふと承り候　三ツ兒の魂百までとは實驗上の格言にして小學時代の教養如何は國家休戚の岐るゝ所と存じ候　然るに教職に當る者動もすれば其職を輕視し勝なる傾向ありその結果業に服するに熱心を缺き研究を忽にし兒童を

○

長谷川藤太郎氏(熊本縣第二師範學校長)へ——大本山總持寺より(以下二通)

粛啓　彌　御健祥恭賀　不　斜　候　小國戒筵には特に御來會被下且熊府出發まで　形影相　從　萬々御厚意を辱うし不堪感謝之至　候

一路驀直に歸莊し積債書債を整理し明日歸山尋で北越巡錫に上程　仕候病魔依然として活動を妨害するも急に退散の狀無之不當不觸愛護致　居　候　御高書拜誦忝く奉　存　候　匯和尚も來訪し御地の樣子物語りしに同和尚も被喜　居　候

御地は政争峻烈の由是れ政治思想の向上に依るものならんか師範學生は一層高尚なる理想に立脚し最高文化の民としての範を示し　候　樣切望　仕　候　政争には動もすれば偏執我意策略權謀の間に沒頭して遂に人格の權威を失墜することを免れず敎育家の精神よりすれば甚だ是認しがたきこと多かるべし況や現在の政治家にはよし景仰すべき賢良の士少なからずとするも理想的なりとは稱すべからず古人は君子亦說利害利害本於義理小人亦說義理義理由於利害といへり此語に依て現代を見れば滔々たる天下多く小人の跳梁するに委するの觀ありその弊を脫しその習を離れたる大理想を以て第二の國民を敎養すその任の重きこと臺閣大官に超えたりと存じ貴校學生諸賢の最も優良に勉學せられんことを切望　仕　候

御令室樣に宜布御致誠願上　候　時下御自愛是　祈　候　　早々不備

石禪（花押）

野口源太郎樣

○

長谷川治郎兵衛氏（三重縣松阪町）へ——大本山總持寺より

拜啓　向寒之候益々御健祥奉恭賀候　養泉戸羅會の際は格別の御厚情を被り更に參堂の折は不一方御寵待を辱うし不堪感謝候　其後當本山へ御光訪に預り欣幸不過之候

御先考樣御長壽を保ち玉ふに至らざりしは遺憾の極みにて御哀悼左こそと察上候　御母堂樣　幸に御健勝の段御家門の爲欣悦不過之尙ほ千秋萬歲の御壽福祈上候

世界無比の餅舍は智杵と德臼と相合して福餅を産し佳運重々萬歲の壽餅ともなり人道の鏡餅ともなり世をも照し人をも扶られ可申候

時下向寒御母堂樣始め御こさま一層御安祥祈上候　先は御禮辭まで　早々頓首

大正十四年十一月七日

總持石禪

長谷川治郎兵衛樣　貴侍

大正十一年八月十日

飽海郡佛教會長　中里重吉殿

乍憚副會長樣外御一同によろしく御致誠奉希上候

○

野口源太郎氏（埼玉縣南埼玉郡粕壁町）へ——大本山總持寺より

粛啓　不二山寄錫の折は萬々御厚情を辱うし且幾回となく御見舞被下御禮難述盡候御令孫の横死は御同情に堪へざるも御賢息及其御家族の御無事なりし事何より喜ばしく候　十一日には大宮浦和板橋を經由し東都被害地の一角を過ぎ芝出張所に立寄り午後一時無事歸山仕候京濱の慘狀は言語に絕し當本山も亦被害甚大潰倒建物約二十棟只々驚歎の外無之候　幸にして重要なる大建築物は大半無事且一人の死傷なく日々横濱に弔靈團を出し精々努力せしめ居候　横濱は未だ秩序の回復に至らざるも村邑の人心は稍々安定せし樣に被感候

先は不取敢御禮辭迄如是に御座候　早々不悉

大正十二年九月十三日

べんきやうして兩親をよろこばせることをよろこびて居られますからこの事を忘れ玉ふまじ又いつもかも
ゆくわいにきげんよくたのしくして居るのがみほとけの敎へであります
御兩親さま及びみなさまによろしく申あげ下されかし

巳九月二十日　　　　　　　　　　　　石　　　禪

永松信子孃へ

○

中里重吉氏（山形縣飽海郡佛敎會長）へ――大本山總持寺より

肅啓　頃日熾炎威之候益々御勇健恭賀不斜候　去る六月中迂衲不在の折藤塚君鶴見へ御立寄被下其際御
鄭重なる御書面及び結構なる茶棚並に香餡を賜はり御厚情奉感謝候
御地方は自古佛敎深緣の地にて寺數も從つて多きを以て各宗一致信徒諸氏の應援を受け此際一層努力佛
敎の眞精神を宣傳し以て民衆の德性を啓導し文化發展の基礎を培養する事は實に僧寶の大任務に有之候へ
ば何卒今後益々御策勵被下度不堪切望候
先者乍遲延御禮辭まで申上度如斯御座候　早々不備

石　禪（花押）

永松爲次郎様 侍右

御令室を始め皆々様別紙同様宜布願上候

○

同信子氏へ――名古屋市禪芳寺客席より

御手がみうれしく拜見いたし候

このほどおかみすりの式を拜し感じられたる由なるもあの式はとしめしたる人または御隱居なされしかたのおもにおこなふ式でありますゆゑたゞありがたき事と思はれてこの式をおがみたる因縁をよろこび玉はるべし

あなたの如きとし少き方はおけさをかけたりすることは却て奇をこのむやうになりてよろしくありませぬあなたは此後十分おからだを大切にして大丈夫の身となり御兩親に御安神をあたへきよきたゞしき婦人となりて孝道をつくし神をうやまひ佛さまを信仰してやさしくやわらかにしておちつきある人となり玉ふこそ三郎どのゝ靈に對して第一のなぐさめであります尤も將來りつぱな人となるやう明年中にはわたしの御弟子としてめでたき法號をさしあぐべくそれをたのしみに居て下されたし三郎どのはあなたのたつしやに

こそ賑々敷と想像致居候昨日は婦人會に臨み三郎殿の事青年授戒の事を説きしに一同感激の樣子人情に異なるなし千里同風に候

協調

自他共敬幸福源　主伴相扶德始尊
欲濟勞資親好美　祗當深感衆生恩

右は耕主其他の米人に相示せし駄吟とす當地の人は概して活氣に富み且つ時間尊重の觀念深く加之酒類の禁止喫烟の遠慮とは事務進行風紀護持の上に於て效驗不少と感じ候常に凉風を迎へ常に花果を見る南洋の樂園たるの名に背かず候

とこ春の國とやいはん草も木もながめつきせぬ花のほのるゝ

布哇八島を通じて同胞の多數は廣島山口熊本新潟德島の順序新潟縣人最も能く寺院の爲め手傳ふとやら長岡禪學會よりも御書面を賜はり嬉しく拜見致候

風そよぐ椰子の葉音に夢さめてまどにうれしき弓張の月
香をきそふ千種の花の色まして夏さへ春のこゝちこそすれ

山雲海月情緒難盡先は風光の一端而已　草々不備

大正十年七月十念一　於布哇堡府別院

未十二月念五　石碑

永松御主人様

乍恐福島様及御令室に宜布御致聲願上候

○

同氏へ――布哇保府別院より

肅啓　過般は種々御厚情奉萬謝候

船中少惱に被侵渡布後も旬餘の靜養幸に經過良好去る三十一日より外出を被許入佛開堂の式も圓成禮學講話も既に圓成日面月面些子の罣礙を見ず此分ならば稍々安心ならんと被想候内地の新聞に報導せられ意外の御心配を相懸申譯無之候

當地は十有餘邦の人種雜集する同居地にて正に是れ人種の展覽會に似たり我が同胞最多數を占め居るため米化主義の風潮各方面に顯現衲亦熱心に皇國の精神と佛敎の本義とに基き世界の平和日米親好を高唱致居候

壽子殿御兩親の許に靜養の由如何許りか安心の事と察居候此上とも其心を大海にし愉快に活潑に養生せられたく候（醫士の注意に從ふは勿論）身心調適是れ養生の訣と存じ候信純兩子も不日歸國との事な

未二月十九日

最乘石禪

恒松あい子様

再白　永江氏母上の御手紙なみだと共に拜見法名かきとりそのまゝ御手許に御返し申候東京方面惡性感冒再流行衲の知人も三好愛吉氏はじめ多く逝去せられ轉た人生の悲歎を覺え候

何卒今後とも一層御自愛こま子様にもよろしく又大恒松の孃樣方にも宜布願上候

○

永松爲次郎氏（新潟縣長岡市）へ——大雄山最乘寺より

拜復　御尊堂增々御勇健恭賀不斜候御高囑の箱書本日水田先生に御送呈仕候達磨歟非達磨歟面壁歟面喰歟沒分曉の處些子の影像には認め得べきか自ら獨り呵々大笑致候

近時社會の大煤掃隨處相行はれ塵烟萬丈無暇掩眼果して是れ甚の前兆ぞ社會の大廓清は國民の大自覺に待たざるべからず若し徒らに盲動維事とせば矯角殺牛の結果なからんやと是れのみ案居候社會教育の必要今日より急なるは無し

迂衲紀綱重態のため滯京明後日歸山仕候先は取込中亂筆御返事まで草々頓首

示庫院文數部さしあげ候間御母君にもさしあげ被下度候　早々可祝

五月二十日

恒松あい子様

○

同氏へ――相州大雄山最乘寺より

御手紙拜見致し候處永江女史於阪府御逝去の趣驚入候壯年と申し且つ信念行持他に優れて麗しく將來幾多の好き望みを抱きつる御身を以て突然この不幸なる因緣に遇はれ候事かへすぐ遺憾の至り哀悼の情に堪へず候

一昨日御玉章を披くや悲涙に咽び申候御法名は直ちに淨書して御回向致し候無常憑み難き人生のさま因緣の致す所人力の及ばざるもの有之同女史母上の御愁傷は言ふに及ばず多年教育及宗教上の親き伴侶たる御身にとりておんなげきの程察し入り候

同女史の御連合及母君にも未だ相見せざることなれば御身様より宜布御致誠被下度候猶ほ御身様一層深く健康を御保ち被下樣切に祈上候　早々不備

恒松あい子様
永江壽子様

○

同氏へ――名古屋市護國院より

其後は御變りもなく御勤め被遊候事何より御うれしく存候
先般は御叮嚀なる御玉章に御名産の和佳女ありがたく頂戴仕り候又此程は日置老師の戒會に御母君と共に御加入の由甚深の法縁ことにありがたく存候迂衲も永平寺貫首前の御遷化により日取の變更もこれあり北越に赴き幾箇の敎筵に臨み昨日歸院御惠贈の珍菓に接したる次第に候
歐洲の戰亂未だ歛まらず全世界を通じて修羅の巷と化しなさけなきことには候得共これも人道天道の進むべき階段かと思へば氣力を崩さず增々勇猛精進を要するものと存じ候
されど世の中は動もすれば魔強く法弱きことあり故に眞人は境を治めずして心を治む若し心を治めずして境を治めんとせば煩悶惱亂熄むべくもあらず苟もよく心を治め得ば森羅萬象も古佛の家風明月閑雲も道人の活計なるべし御身さまには增々みこゝろの修養をすゝめられ無邊の風月を胸次に收め不盡の乾坤を眉間に貯はへ日々是れ好日歩々盡く鳥道をふみ法喜禪悅の妙味に法樂を倍增し玉はんこと願上候

新年の御慶おんことほぎ申あげ候

此程は早々と年賀狀をたまはり殊に昨夏の法縁につきよろこびのまごゝろこま〴〵申越されおんうれしく存じ候 思ひもかけず皆々樣とみのりのゑにしをむすび候こと永劫のたのしみこれにすぎずと存じ候衲もその後は相變らず處々巡錫いたし十二月中旬漸く歸京仕り候へども幸にして恙なく超歲致し候へば御安心被下度候

今や御兩處とも敎育に御從事の御身なればその職分として世にこれほど神聖にして尊貴なるはあらじ一人の子弟を善良に敎養するは一寺を建立するにも勝れり眞に是れ菩薩の妙行と申すべし唯だ御女性の身はかよはき處あれば己れは如何にたゞしく身を處するとも時として魔障のうれへなきを保せず此點に就ては十分の御注意願はしく存候

尙ほ人は小我の爲にあやまること多きもの他人の是非をあげつらふこと知らず〳〵いたし易きもの此點は深く自ら戒むるが前賢の敎へと思はれ候山の色溪のひゞきいづれか佛法に非ざる松の直き竹の節たゞしき皆な吾人の好師表なるらめ此上とも御身の健康と修德の發達こそ望ましう存候

小雜誌お送りいたし候へば御覽下されたく存候 早々可祝

子一月吉旦

新井石禪

成瀬先生貴侍　　石禪

○

新年之佳瑞天長地久祝慶不過之候

貴下多年教育に從事せられ誠心鋭意以身垂範其功勞嘉績容易に他の比肩を許さず以是　昨年東宮殿下御成婚の慶儀に當り特に文部省の選奬を受け玉へること實に教育界の光榮にして祝讃此事に　候　此上とも層御自愛永く國民智德の培養に御從事被下度　候

先は右御祝辭申上度　如　是　候　　早々頓首

大正十四年一月

總持　石禪

成瀬涓先生　貴侍

○

中村（恒松）あい子氏（京都市）へ——

少なりとも御役に立つことを得ば望外の幸なるに斯かる御心配に預りては餘りに恐縮に存候折角の御芳志御辭退も失禮と存じ忝く拜受し迂衲施本用の內に使用し御芳志を一般に相頒ち可申に付宜布御禮申上被下度候就ては本月分の小雜誌を御手元まで送らすべきに付御傳言被下度候

迂衲は今後當國及三遠を歷巡し二十六日には歸京の心得に御座候先は不取敢御禮まで　早々頓首

十一月十日　於金城

新井石禪和南

中林老宗師侍史

○

成瀨涓氏——へ（以下二通）

新年之佳運千里同風增々御健祥恭賀不斜候

昨臘修養會の節は多大の御寵遇不堪感激之至候永年敎育宗敎の間に穩健中正なる連鎖を施し人民敎化に御盡瘁被下候事實に好箇の龜鑑と仰ぐべく隨喜此事に候

此度は御丁重なる御菓子料恐入候拙筆別封爲送申候皆々樣に宜敷御致誠被下度候　草々頓首

酉一月三日

外は教職員全部昨月の本山授戒に入會致候信徒に信仰なきは僧侶の怠慢に依ること多し學生に徳操なきは教職員の身業教養の缺如に基くもの不少候

衲は病軀ます〳〵宜しからず帝大物療科にも研究して貰ひしが自然療法の外適法なしとの診斷なりし依て二十七日歸山の後一日も早く安靜三昧に入り二三ケ月は萬緣を放下し去るべく豫定致候

山雲海月は後便に讓りあら〳〵　可祝

大正十五年十一月念二日

總持　石禪

筒井蘭芳様　明窓下

汝若爲法不惜身命　山河大地亦爲汝不惜法

○

中林文英師（山梨縣北都留郡大原村）へ――名古屋市より

拜啓　益々御康寧恭賀不斜候

陳者今般高橋御奥様より日々の行持起草に對する御禮として金七圓御惠贈を辱うし昨日信州より當地に着して受領思ひ懸なき御配意を被むり御厚志忝なく奉存候されど早忙中極めて不完全なる起草多

の途に上り可申候
時下御自愛専一に祈上候 齋藤さま始め皆々様によろしく御致聲被下度候 早々可祝

大正十五年七月二十八日　　　　石　　　禪

筒井蘭芳様

世をいづる聖にましてたふとけれ世にありながら世をすくふ身は

○

細々の御玉章いくたびかくりかへし拜見致し候 履歴書を一讀して從前の經歴中未だ知らざる所を知りその間千態萬狀の行履あるも 盡く教育感化慈善教化の行持ならざるはなし乍今更一段の敬意を表し候

發心道場接心會に安居の事實是好因緣にして其功德無量なるべし洞門の耆宿年ごとに減少し頗る寂寞を感ず原田師や能州本山別院の宇野玄機師等は眞の善知識なり澆季の芬陀梨華とも稱すべし

歸路吉祥山に上り又鶴山に立寄られつることうれし女學校をも來觀せられし由喜ばし今後來られ候時は一席の講演あらまほし精々佛教信念を涵養せしめて人格教育の實を擧ぐべく訓示致し居候 洋人を除くの

筒井蘭芳様

うき波のあるにまかせてうれしけれ慈悲のみふねにのりし身なれば

○

今回は細々の御玉章うれしく拜見致候鶴岡高女校講演後縣の社會主事より禮狀あり且社會教育に關する協議會開催に付選ばれて出席せられ候との事まことにめでたく且うれしく候家柄や富豪の方々を賴りとしては實際有名無實となり易ければ今後は穩健なる思想信念のもとに現代の實生活を理解し味得せし人に非ざれば不相成是れ自然の要求に候此意味に於て萬事進取的態度をとりて御活動被下度候但人情の弱點として能力ある人には他の嫉妬を招ぎ易きものにて骨折りて嘲りを受くることあり此等のことは念頭に置かず高所より環境を視るを要す換言すれば馬鹿の稽古も亦肝要なれ譽れの揚るほど謙虛の德を養ふべきは言ふ迄もなし

九月の總會につきいろ／＼御準備ありがたく候月一回小學校を會場として婦人講座を開設の御思召誠に有益にして且緊要の施設なり是非とも實現切望仕候

猶幾分か呼吸も樂になりしやう被感候この病あらさりせば相當に御奉仕も出來得べきに病魔に禍せられ慚惶に堪へず候來月六日まで當地に安養し七日に九州に出發し二十日ごろには戻り三十日より巡錫

同氏へ――（以下三通）　○

貴書只今接手敬讀致候處御健祥にて常恒敎化に御盡力の段此上もなき嬉しき事にて爲國家爲宗敎感謝致し候

鶴岡縣立高等女學校の請に應じ去る十九日於講堂講演せられ翌日は裁縫學校にて訓話せられつること誠にありがたく候信仰厚く愛國の念深く而も修養にいそしみ玉ふ女性の講演は我國にては甚だ稀れに有之候女子に對する敎訓の如きは女性の體驗と熱情とより流出する感話最も薫化の力あり此等のことには毫しも御遠慮せらるべき理由なし此後とても緣に應じ事に觸れ敎化的講演の多からんを切望致し候

北野禪師に御相見のこと好箇の因緣と深く喜び居候老齢にして巡錫せらるゝ同禪師の如きは古今に渉りて稀有なりまことにありがたき極みに候

衲も病態今によろしからず來月八日歸京の上は暫く閑地に就て靜養すべしとて鶴山役司それ〲場所を選定し居らるゝ由に候尤も近頃の暑さにては病苦も幾分輕快を覺え候へば御心配被下間敷候

梅雨の候精々御自愛可被下度又齋藤さまを始めみな〱さまに別紙同樣よろしく願上候早々可祝

寅六月廿六日　　　　石禪

有髪の僧寶として佛祖の慈光を分與し法界平等の法益に潤ほひ玉ふことの貴さよこの上とも自重自愛専要に候是れ肉身を惜む故に非ず法身を惜むなり

西洋の文明駸々として發展し東洋の文化亦將さに更生せんとする機運に際會するもの﹅如し人心向背の分水嶺に在るの感あり眞純なる教化最も切實なるを覺ゆ何卒爲法倍舊の御精進祈上候

齋藤様にも高橋様外みな〳〵様によろしく願上候

一昨日宮中拜賀　東宮殿下　拜謁玉顔昨年よりも御麗はしく拜し歡喜無量に候

先づは新年の御祝詞まで

丙寅一月三日　　　　石禪

筒井蘭芳様

丙寅新正

初日さす大内山の春がすみいやさかえゆくひかりをぞみる

年の暮に

ゆくとしを惜むにあらねど徒にすぎぬと思へばくやしかりけれ

て佛陀大悲の光明に浴し報恩謝徳の觀念に住し信心歡喜の中に忠孝義勇の德を進め博愛共存のまことを篤うし以て御大詔の聖旨に副ひ奉らざるべからず貴婦人會は幸に齋藤さまを始め精神的に信行に精進せらるゝ地方の指南針として御盡力奉願上候

近頃新らしと稱する女性の振舞いとにが〳〵し又男女間の風儀は米國風をまねて虎を描て猫となすの遺憾あり世の輕佻なげきても猶あまりありなさけなき事に候千代かけて色もかはらぬ松嶺の綠めでたき信念を以て國體を擁護し家庭を齊へて我國の善美なる特色を發揮せばみくにの文化は鳥海の山よりも高く最上の川よりも淸かるべし何卒會員の御方々にも衲の意を御傳へあげ被下度候

時下御身御大切に又齋藤さまにも他の御方々にも別紙同樣よろしく申上可被下候　可祝

大正十三年二月十五日　　石禪

筒井蘭芳樣

○

乾坤瑞氣に滿ち山綠に河水淸し貴法尼ます〳〵御健全御めでたく御超歳祝上候

昨臘は御懇書かたじけなく候大乘禪に載せ玉ひし『禪に參ずるの過程』はいとありがたく拜見致し候

すく度生の行願甚だ弱し是れ遺憾の極みなれば精々奬勵につとむべく念じ居候今や道を傳へ敎へをひろむるに最も重要なる時機なるも其實行遲々として進まず早く普門放光の日あれかしと祈り居候神戸修養こども會は八月一日より歡喜寺に於て林間學校を開き居れりその會のために日訓を製せしもの別封送りあげ候子供への敎訓の參考として御覧可被下候婦人會の方々一同によろしく御傳聲被下度總光寺方丈齋藤御主人さまにもその他道俗各位にも同様ねがひあげ候

石禪

筒井蘭芳様

○

餘寒猶きびしき折柄御安祥にて御法の敎への爲不斷の御盡力かたじけなき事に候齋藤さま外みな〳〵様も御健祥に被爲在候事と察し喜び居り候本山も其後異狀無之候
扨震災後は人心一しほ動搖せる者の如く犯罪も増加せし趣政界の混亂は民心にも種々波動を起し國家の前途容易ならざる者あり眞に治國は到底法律の力の及ぶ所に非ず敎育も亦學校の上にのみ存し其學校も德育の功甚だうすし此上は宗敎の普及を圖るを至要とす僧侶も信徒も一致結合して青少年より一般人に及び

此意味に於て婦人會の發展は實に國家の爲めに喜ぶべき事に候へば此上とも會員御一同を奬勵してますます會の發達に御盡力の程偏へに奉願上候　先づは御禮かたぐ御願迄　早々不備

大正十二年十月十八日

於信州眞淨寺

總持石禪

松嶺佛教婦人會

會長　齋藤つね子樣

副會長　筒井蘭芳樣

幹事世話掛御一同樣

○

同氏へ——大本山總持寺より（以下三通）

有髪の禪尼となつて普く法縁を敷くこと何等の妙行ぞ貴氏の精進力は更に一層樓に上りて普門の願力を發揮せんとの志願ありがたくもまたうれしけれ衲もまた心がけ人境相應のことありと見ば隨喜の御すゝめ致すべし現今の處は地方の傳道に從事せられたく候

各町村に寺院あり其人々がひとしく宗教的文化の運動にいそしみなば國家の大幸なれど今尙ほ活動の力ら

大正十一年六月十四日　　　　　　　　石禪

筒井蘭芳大姉へ

○

同氏其他へ――信州眞淨寺より

肅啓　益々御健勝の段奉欣賀候本夏鶴岡に赴き候折は大雨の中を御送迎被下御厚情感謝の至りに候今回は從前の婦人會を改稱し將來新進の路を開かれ其會則を送り給はり拜見致候誠に結好なる御作製に有之本山役局に回附し認可狀を送るべき旨命示して當地に應請致し候

世界の形勢刻々に變化し我國民の思想も種々に動搖し一面は非常に文化の進展を見るも他面は色々の缺點を生じ國家の將來憂慮すべきこと不少故に今日に於て國民固有の道德を保持し養成して國礎の堅牢を圖ること至要と存じ候民心を調御し道義の觀念を厚からしめ國民生活の安定を圖るには健全なる佛敎の信念を養ふことが第一義なるべし今は官民一致僧俗協力して敎化の充實に努むべき時節と存じ候

筒井蘭芳様

○

過日は思ひがけず一夜の夢を水清き總光寺に托し熱心なる婦人會員の方々に御縁を結び齋藤様の御心こめられし御供養を被むりうれしくかたじけなく存じ候

その後こま〳〵の御手がみまた齋藤御夫妻よりまごゝろ厚きみごとなる羽二重の御惠在山中に到着し直ちに御禮狀さしあげ候あまりにもつたいなく御禮の申あげやうもこれなく候これもみほとけのたまものと思ひありがたく頂戴いたし候

去る九日東京を發し當地に來りつとめ居るも別段さわりもなく日ましに快方に候へば御安心被下度候飽海郡も今後一しほ佛慈のめぐみ深かるべしされど各町村に於ける佛教修養團體の力によらねば普及しがたし松嶺婦人會もいやがうへにもさかんになるやう念じあげ候

柳染觀音微妙相　松吹説法度生聲

實に御信心ほど嬉しきものはあらじ暗夜人なき處に在りても心くらからじ三世のほとけと顏々相對するの心地せらる路は雲外にへだつとも同じ花のうてなの日をくりこそ道の友の御利益なれみな〳〵によろしく願ひあげ候　不備

○

筒井蘭芳氏（山形縣松嶺婦人會）へ——大本山總持寺より（以下二通）

まごころのこもりし御ふみたまはりうれしく拜見致し候入寒以來例年にまして寒氣きびしく雪さへ稀なる積りかたとやら御健康いかゞと案じあげ候

深入禪定の恁麼人は語默動靜の間も解脱の境致に住し菩提の妙趣を樂しみ凝つては安心の三昧となり發しては慈悲の光明となる是れ實に見十方佛の眼ならめ今の世は進取の氣象を練るに急にして返照の工夫を積むに緩なり是を以て動もすれば高遠の理想を叫び乍ら却て聲色の奴婢となるが如し其結果は野生を以て天眞と誤まり報恩を以て卑屈となす一人之れに縛せらるれば帶累せらるゝ者若干人なるを知らず何卒深入禪定の修養あらまほしく候

庭前の梅は霜雪を凌ぎてほゝゑみ申候人もまたかくぞありたけれ

きえ殘る雪の庭面にさく梅は春をまてとのたよりなるらん

冬ながら軒にかすみのかゝれるはほゝゑむ梅のかほりなりけり

ふる雪のさむさをよそにさく梅は世にすむことのかゞみともみよ

大正十一年一月吉旦

石　　禪（花押）

の多きことに御座候飛陽の地光風霽月足以宣揚佛祖之正宗
小衲無事雲水御省念被下度候　早々頓首

八月三日　　　石禪九拜

正宗尊堂老師侍史

○

土田放牛師（長岡市安善寺）へ――山形縣谷地町長谷寺戒場より

拜復　益々御健祥にて無間斷の御活動みな爲國爲法の至誠に出づ感激に堪へず候御書面の趣敬承致候笠井翁最早十三年忌となりし事懷舊の情禁じがたく候當方松浦石龍一同無事に候間御安心被下度候時下御自愛萬々是祈候　頓首

大正十四年九月十日　　石禪

安善放牛老宗師

開基家御主人を始め若山内田等の諸賢實に不惜身命の願輪に駕し盡力到らざる所なきは最も感謝に堪へず候一々に謝狀を呈すること能はず何卒御寺院諸大德を始め講員諸賢に別紙同樣御致誠被下度候

昨日は幸にして天晴れ氣清く中山七里の風景秋光滿地山川清凉の氣に閉され快不可言峯色水光倶に是れ天眞の如是經にて有之候十一時半に無事當山に着仕候間御安心被下度候

水かゞみ七里もとめぬ丹生川のきよきこゝろはしる人ぞしる

大正二年十月一日　　於金山

新井石禪九拜

正宗尊堂老宗師侍史

○

同師へ――江州高島郡今津町曹澤寺客席より

拜啓極暑の候益々御健勝恭賀不盡に候此程は御問候を辱うし不堪恐縮候正雲新命晉山式盛大に圓成被遊候事偏へに老宗師等御庇護の所致感謝不盡に候近來絕て御親書に接せず如何被遊候哉と常に案居候何卒御法身御自重奉祈上候

故大禪師猊下御遷化後何となう心寂しく于今沈欝の氣に擊たれ申候時下世出世とも種々の風波起て荊棘

不惡御思召被下度候　九十兩月も亦御約束と猊下の御伴侍可申上敎筵一兩處被　命居候様なる次第に付
乍餘事御含みまで　奉申上候
小衲性來の不敏到底化門を張るの德量無之唯だ驥尾に附して應分の微力を致すに過ぎず内省慚愧　仕居
候　御尊師は幾年月の久しき萬里一條鐵に承陽高祖の報恩行を勵まれ天下等しくその御誠意に感ぜざるは
無し實に難有御事に候
先は不取敢御申復まで如是候　早々頓首

子一月念五

新井石禪九拜

都築尊老宗師　侍史

道のためつくしてやまぬきみが身は法のはやしの花にぞありける

○

同師へ――濃州金山長福寺客席より

拜復　正雲精舍に於ける今回の大法會は豫想外の大準備にて前後の御辛勞を察し奉り只々感泣の外無
之候　唯だ未熟なる迂衲始終猊下御代理の御待遇を被り恐惶に堪へず候

轉職有感の玉吟精神を披瀝して津々味ふべし御高囑に從がひ別紙額面を書し貴覽に供し候文は貴意を拜察して作製せしものに候來月御地天寧寺授戒中御光來待上候御令室へも宜布御致聲相願候　早々不備

昭和二年三月五日　　總持石禪

千葉喜山賢契貴侍

再申　小衲慢性の宿痾未だ癒えず靜養已に三ケ月尚ほ一二町の歩行にも堪へず心氣丈は人なみなれど無已休養二月上旬より當地に移寓仕居候別に惡くなりしに非ず御心配被下間敷候

○

都築靈源師（岐阜縣大野郡丹生川村正宗寺）へ――東京市芝公園永平寺出張所より

拜復　寒氣殊に烈敷候處道況益々御健勝弘法利生の行願不退轉に被爲在候條法幸無量奉恭賀候今回は御懇篤なる御尊書を辱うし御道情の至切至深なる不堪感激之情候

御地の風光は夙に不老閣猊下より拜承致し是非御地の山川を跋渉して清新醇厚の氣に接し度く豫てより志願仕居候に付今回の御内意實に好箇の機會と喜悅に堪へず候得共三月下旬より六月上旬まで及び六月下旬より七月中旬まで北越及び羽州に敎演の御約束有之日程連續更に餘裕を存せず甚だ遺憾の至り

○

同氏へ——相州葉山諸星別邸より

拝復 益々御健勝恭賀不斜候

今回總務部勸業課勤務市場監督御拝命之趣詳細御報道を蒙り感謝致居候久敷土木部經理課に職を奉ぜられ今也御職務の相異なれる而も日々活躍せる繁劇なる市場の監督に當られ候事一層の御辛勞と察入候殊に市場十三ヶ所商人四百名を超ゆ其御煩瑣如何計りならん

商業道德に於て未だ理想的進境に達し得ざる感有之際とて一瞬間も等閑に附し能はざる重大なる御職司なれば只々御健康且つ御順調に其御重任を完うせられ間接に市場に對する敎化訓練に御留意せられなば好箇の大菩薩行と存上候如何なる部分にも弊習あるは免れざる所況や利を以て目的となす市場の如きは猶更不良分子の混入なきを保せず而して其業たる民衆生活上一日も闕く能はざるもの從て貴意の如く評價の基準監視の緩嚴等に於て人知れぬ御辛勞あることゝ察上候尤も恐るゝ所は不良分子の爲めに道を以て欺かるゝことあるは世に例あり正明の君子が不正漢の魔障を受くることもありと承はる此の點最も御警戒あらまほしく候又謂れなき紛議の勃發を見ることも之れなきを保せず忍容と明察とは第一の整理者なるべし去れど市場の如き眞劍味の多量なる場所に於ての行持こそ無限の興味もあり又無盡の功德もあることゝ存じ候

千葉藤一郎様侍史　　石禪

乍恐安藤雅契に宜布御致誠奉希上候

○

同氏へ――熊本縣阿蘇郡北小國瑞龍寺より

酷暑之候益々御勇健にて御勤務被遊候條欣慶不斜候迂衲病狀未至輕快候得共教約の爲め當地に來り應分之行持罷在候明後日は熊本に一泊し直ちに歸東再び靜養可致豫定仕居候當地は山間の僻陬なるも北里博士出生地にて當山も亦北里一門の開基にて人情朴直夜不鎖戸至極平穩之仙境に有之候

別紙信手書甚以て御疎末千萬御容赦被下度候時下折角御自玉是祈候頓首

大正十五年八月十五日　　石禪

千葉賢契貴侍

昨日は御令嗣様に色々御厚遇且驛迄御送りを蒙り候先は御慰問旁御禮迄　早々不一

大正十二年二月十五日　　　總持石禪

田中壽様　貴右

○

千葉藤一郎氏（名古屋市）へ——湘南葉山諸星別邸より

復啓　酷暑之候益々御健勝恭賀不斜候日夜御公務寸暇可不被爲在何卒御自愛專一祈上候迂衲春來四大不調各醫師の診察を受け候結果去る十六日より當處に療養致居候追日病狀も輕快候樣被感候間御省念被下度候

如御來示輓近人心動搖社會面に不祥事のみ多く爲國家不堪深憂候官民一和上下一心民心之安定に努むべき緊要時期と存候貴職の如きも實に是大乘之菩薩行無上之神聖行持に可有之候

御令室にも別紙同樣御鳳聲被下度候　早々頓首

大正十五年七月二十五日　　　於湘南

昭和二年一月十八日夕　　總持石禪

田中澤一郎様貴侍

御家内様御一同及御本家様御親戚に宜布願上候

○

田中壽氏（埼玉縣北葛飾郡田宮村）へ——大本山總持寺より

肅啓　今回御本家御主人様の御逝去は實に思ひ懸けざる大不幸にて御同情の至りに堪へず候御親戚は勿論地方一般愁雲に鎖され候事なる可しわけても御貴下の御哀愁は如何計ならんかと深く御察し申居候昨日御葬儀に臨み園子様及御令子に逢ひ轉た悲しみを添へ御靈棺に對しては言語に述べがたきほど哀悼の涙に暮れ申候

同氏は資性恪謹胸次清白而して溫情に富み謙德に優れ實に國民の儀表にてあられける今失此人全く國家の一大損失と存じ候雖然御壽命は殆んど宿緣の致す所人力如何とも及びがたきものあり是れまでの天壽と御あきらめ被下此上は靈位に供養し奉ると共に皆々様一層健康を第一とし御一門の幸福祈上候

迂衲目下品川天龍寺法要勤務後信州及但州に飛錫の爲め參趣不相叶何れ來春を期し參堂御靈前に燒香可仕に付御本家樣外御一統樣に宜布御致誠　奉　希　上候
先は乍略儀御弔辭迄　早々不備

明治四十一年十一月念四　　新井石禪

田中澤一郎樣
御母堂樣及御家中樣　御中

○

同氏へ――大本山總持寺より

拜啓　御母堂樣御事去る十五日御逝去被遊候趣承り奉驚入候御病氣の事も存ぜず突然此凶信に接し哀悼の情に堪へず候御一家の一大不幸其御愁傷如何計と察上同情の至りに候於當方も懇ろに御回向に及び候へ共猶御法名及御年齡等御報被下度乃ち當方靈簿に登錄し永久に御冥福に資し可申候
先は不取敢御弔詞まで　早々不備

へ雪道車にて御導き被下餘りの御寵待勿體なく存候午後夜半の法話も盛大に相濟み申候食膳の御馳走は遙かに御地よりの御指圖の由御懇情忝く御禮申上候但あまりに御叮重にて恐入候今後は一段の枯淡を望み候

孃樣の健全何よりうれしく候此上とも御油斷なく金剛不壞之御身と御なり被遊樣熱禱仕候

先は御見舞旁御禮まで早々不備

十一月二十日夜　　　　新井石禪

田中みよの樣

○

田中澤一郎氏（埼玉縣北葛飾郡幸松村）へ——

肅啓爾後御無音に打過ぎ候御主人樣御事久布御病氣の處養生不被爲叶御逝去被遊候趣奉驚入候迂衲多年御厚意を辱うし情誼不淺に御病氣の事すら承知不致意外の御無音不堪慚謝候

御主人千金不換の御身を以て遂に此不幸を見る實に痛歎不過之候皆是因緣の致す所成る可く此上は御繼嗣始め御一同の御健全こそ重要に候

下度候

目下　大詔一下空前之大事到來國民精神之磨勵今日より急且切なるは無之爲國家貴會之旨趣倍層御擴張之程不堪希望候

先は不取敢御回答まで　早々不備

二月八日

雲　洞　石　禪

田中みよの様　貴下

（つ）

田中みよの氏へ――

その後は一向に御無音に打過ぎ本日御約束に基き御宅に參上致し候處御地に轉じ御靜養の趣承はり張合ひなく被感候さるにても御容態は如何に被爲在候哉孃樣の如きは御體重も相增し候趣轉地の効は必ず可有之と存候乍去心身兩方面よりの御養生を要することゝ被存候に付萬緣を打忘れ所謂放下着の境界となり想を物外に遊ばしめ自然の山雲海月を伴侶となし愉然快然之御攝養願はしく存候

本日は漸雨を催ほせしも風少なく溫和の氣候にて安樂を感じ候只宮內まで御主人樣及昌興方丈御迎

一、萬事を節儉して一紙半錢たりとも疎略に致すまじき事
一、約束を重んじて聊かのことも違背すまじき事
一、博奕に類すること又は他の嫌疑を招くの恐れあることは愼みてなすまじき事
一、衞生に注意して飮食を濫りにせず努めて身體衣服又は居室を淸潔にすべき事
一、業務の暇には佛の教を聞き聖賢の道を學びて己れの德性を養ふべき事
一、一家の名譽を重んじて常に其幸福と安寧とを心懸くべき事
一、愛敬を旨とし他人の迷惑するが如きことは斷じてなすまじき事
右之條々家内一同堅く之を遵守して苟にも違犯あるべからず

○

復啓　益々御淸榮爲邦家百事御盡瘁之段欣躍不斜候　迂衲事無異消光罷在候間乍餘事御省慮被下度候

陳者御照會之件迂衲は四月廿四五日以後北蒲原方面へ出張之約有之引續五月六日より一週間四郎丸昌福寺戒會に出勤の都合なるを以て同月初旬にては如何とも差繰相成兼申候　猶明後日より本月中は前記昌福寺江湖會に付滯杖四月十七日以後廿三日頃まで再び同寺へ寄寓の心得に御座候間　同寺へ宛御通知被

御尊慮之趣 拜承九月三日婦人會並に青年會に出席の事敬承仕候 迂衲は來る十九日頃歸菴八月中在菴の心得に候 九月三日には早天參上可仕候 演説筆記云々の事至極の御名案と奉存候

別紙は此頃有志の人に頒ちしもの素より不完全には候得共斯るものを毎家に製し自然子弟をして日常據る處あらしむるは家庭の改善上必要ある一案と被存候 時處に依て適宜に其訓目を定むるの要あるべきは勿論の儀に候はん御參考までに入御覽候

炎威日熾御自愛專一に願上候 早々可祝

七月十日　雲洞石禪

田中みよの様 貴右

家憲

一、毎朝神前に敬禮し佛前及び先祖の靈前に禮拜すべき事

一、朝夕御國と父母と神佛との御恩を忘れまじき事

一、家内和合して互に相扶け相補ひ機嫌克く立振舞ふべき事

一、時間は寶の中の寶と心得て業務を勉强し一刻なりとも無益に過すまじき事

一、堪忍を守りて荒々しき言語又は動作あるべからざる事

九月上旬には是非御伺可申上候只今の處にては九月一日以後十日までには何等の約束も無之候間貴會の御都合に從ひ可申候猶ほ會の例會に於て婦德養成に關する敎理を宣演することは當然の要義なるも其他に於て例會の時間を割き簡易なる經文の一部若くは數節を印刷し一種の講義的法話を營まれ候ては如何に候哉これは迂衲の出席に就てのことならず會將來の御經營に關する事業の一として希望する次第に御座候例せば遺敎經中の八大人覺とか玉耶經とか父母恩重經とか申す平易にして且は日常實行的のものを速寫版に致し會員中の有志又は重立丈にでも配布し例會の翌日とか會日の午前とかを利用し幾分聽者の研究思想の助長をせば頗る有益かと存居候御參考までに申上候
來る十四日午後興國寺婦人會のよし迂衲も同日は出席之心得に御座候
時節柄折角御自愛專一に願上候　早々不一

六月六日　　雲洞石禪

田中みよの様

○

拜復　御書面昨夕當地に於て敬受仕候

田中みよの氏へ――(以下四通)

○

肅啓　此程は色々御寵待にあづかり忝なく謝し上げ候御令孃御大病のおんため中途御歸りに相成候に付その後の御容態如何被爲在候哉と乍蔭御案じ申上候一刻も早く御快復の程偏へに不堪禱祈候

婦人會その他の事に付山々御はなしも申上度存じ候ひしも不果其意何れ他日を期し御相談仕り度相考候檀那樣にもよろしく御傳聲被下度候

先は途中略筆を以て御見舞まで　不備

九月十二日　　　　在永昌院

雲洞石禪

田中みよの樣

○

貴書拜見　益々御康寧に被爲在候段恭賀此事に候昨夏來病氣の爲め永々不在爲夫一層の御無音申上候

同氏及同みよの氏へ――雲州より

粛啓　増々御健勝恭賀不斜候　衲無事巡錫御省念被下度候
陳者來九月御地婦人會及青年會へ講演之緣昨年以來の約束にかゝる北蒲原米倉家宗福寺結制及び授戒會並に新潟市に於ける同窓追弔會の爲め全然期日の餘裕を失ひ色々日割の都合を相圖り候へ共御地へ参上すべき日時を得ず甚だ遺憾に存候　八月二十九日頃ならば布哇行之都合如何にて御伺可相叶存候得共殘暑きびしき折なれば御集り上不便なるべしとも懸念仕り居候
迂衲鶴見大本山御遠忌後當地に來り二十二日東京淺草橋場總泉寺に赴き來月一日より三週間最乘寺開扉に付三日より五日までを除くの外は常在被居候　その頃御上京被遊候はゞ御参詣被下度候　布哇も目下日照罷工事件も未落着に付月末に至らざれば渡布確定不仕候得共多分は布哇行實現すべく被存候
時下御自愛萬々是祈候　早々頓首

申四月十七日　　於雲州

石禪

田中本吉大人

同　みよの樣

御若主人及昌興丈室外皆々樣によろしく御致聲願上候

殿病臥五日にして不幸早世し玉ひし由誠に以て不堪同情御一同樣之御愁傷さこそと御察申上候臨終苦惱少なかりしは不幸中之幸に候
人生無常多くは夙緣之定まる所人力不可及されど子となり孫となる因緣深厚背觸迹を殊にするも纏綿遂に離るべからずさはれ如何に悲むとも追ふべきにあらず御兩親も能々御諦らめ專一その靈を弔ひ猶ほ今後皆々打揃うて健康を保ち被下度候
ちえ子快方に赴きしも未だ全快に至らざる旨被案候寒中は一層御用心被下度候
衲は去る三十日歸山し歳末新年の儀を修し一昨日は宗務開始之爲め職員に垂示昨日は大隈邸之請を受け老侯之一周忌に回向し今日は禪學會明日歸山し十七日頃小田原に赴き暫時靜養可致候小田原は日當りよく日中は六十度以上にて火桶を要せず春暖を覺え候
先は御弔詞まで　早々不備

大正十二年一月十三日　　石　禪

田　中　本　吉　樣

○

洵に有り難く感じ候

御令室之精神界の開發に努力せらるゝ御思召の貴き源吉殿之質直藤藏殿の淳朴全く仁里之良民とや申すべくまことに愉快を覺え候殊に少年の溫和にして信念の徵象ある眞に嬉しく感候

迂衲十八日を以て歸名來月八日までは在院三十餘名の雲衲と相共に曉坐夜坐每夕提唱本日の如きは參拜者數十人般若六座施餓鬼二座而も夜二時間半の垂示と提唱とに倦怠の色を見ず開靜後得も言はれぬ喜びを感じ候是亦三寶龍天の冥助ならんと銘肝致候

先者御禮辭申上度まで如是に御座候　早々頓首

五月廿一日夜　　護國石禪

田中本吉樣侍史

御令室樣及硯一樣御夫妻に別紙同樣宜布願上候

○

同氏へ――

肅啓　客臘末御惠投之華墨漸く兩三日前鶴山に回送せられ候趣にて昨日東京にて披見候處令孫本七

肅啓　陽光山御入佛及授戒會に就き至矣盡矣の御厚配殊に迂衲參堂一宿懇遇無所不至誠以不堪感激之至候
玄照再建の道場本堂祖堂吉祥閣其材料結構及莊嚴共に善美を盡し爲めに地方稀有の入佛式を被營戒會も亦如法綿密にて歡喜致し候是皆貴下等御丹誠の所致感謝不斜候
玆に不取敢御禮辭申上候間御渾家及御親戚方に宜布御致聲被下度候猶御序の折檀信徒御一同にも微意御披露被成下度候
時下御自愛專一是祈候　早々頓首

大正十五年四月二十五日

總持石禪（花押）

高津米治樣侍史

○

田中本吉氏（新潟縣古志郡六日市村）へ——名古屋護國院より

肅啓　御尊候益々御康安恭賀不斜候過日參趨之砌は深厚無限の御親情を蒙むり乍毎度只々感謝之外無之候殊に地方信衆の熱心にて且つ眞面目なる迂衲等の道念に對し幾多の鞭韃と感化とを與へ裨益不鮮

總持　石禪　敬具

高島順作様　貴侍

○

高津米治氏（長野縣上水内郡神郷村）へ――大本山總持寺より（以下二通）

肅啓　増々御健勝奉恭賀候

過日御尊宅に寄錫の折は不一方御厚遇を辱うし難有奉感謝候再度御立寄り致し親好を蒙むること深き御因縁と感じ居候今後益々御渾家輯睦御家運の伸暢是祈候

先は不取敢御禮辭まで如是に候　早々不悉

大正十三年十月一日

總持　石禪（花押）

高津米治様　貴右

時下一層御自愛是祈候御家内御一同外皆々様に宜布御致誠希上候

○

迂衲も御不幸を承はるや直ちに内佛前に於て献供誦經遙拜御回向仕候又今後適當の機會に於て拜趨し御靈前に上香可仕候
茲に恭く奉呈弔辭候　早々頓首

大正十四年一月念二日

總持　石禪（花押）

高島順作殿　貴侍

○

拜啓　益々御康安奉恭賀候　今回龍光蘭若授戒會修行に關し多大なる御外護を辱うし以御庇蔭江湖會をも並び修することを得たるは山門の幸榮不過之候
猶迂衲到着の折は御一宿を願ひ深厚なる御款待を被むり完戒後も御多用の處特に直江津まで御送りを戴き御禮難述盡候　拜別後車中無異狀歸山致し氣候も稍や順調に復したる爲め病氣も幾分輕快を感じ候間乍他事御省念被下度候
御令室御賢息等に別紙同樣御致誠相願候　先は不取敢御禮辭まで　草々頓首

大正十五年七月八日

立不可能と相成無止同日午前十一時十八分當地御發車途中高岡市に御立寄午後四時五十分高岡御發車同夜八時四十分御地御到着の事に改定致候夜に入りての御着は定めて萬端御不都合とは相察候得共萬不得止儀に付此段御了承被下度候翌日は午前九時過御地御出立にて時間は餘裕も有之に付御着の夜は御休息を願ひ翌朝御佛前に御親香相成樣致度此段併せて御了承被下度候

先者右得貴意度迄如是に候　早々不宣

大正三年五月二日

於金澤松山寺戒場

大本山永平寺貫首隨行長　新井石禪

高島順作殿

○

同氏へ——大本山總持寺より（以下二通）

拜啓　御母堂わさ子樣御事去る十六日九十一歲を一期として遂に御逝去被遊候事驚入候

世に稀れなる御高齡に被爲在殊に御信念最も深く眞情溢るゝ計りの御孝養を受けられつゝ御永眠被遊候ことなれば最も幸福なる御生涯にて有之候へ共御至孝なる御身には如何計りか御愁傷と恐察罷在候

○

同氏へ——大本山總持寺より

年賀の狀うれしく披見しました昨年もおたよりありがたふ存じます
御祖母さまもおたつしやなによりうれしく御祝ひ申上ます文字もみごとにかゝれ日にまし御成人なにより
も喜ばしこの上ともにからだをお丈夫にして勉强し好き友達に交はり何事にも正直で親切で愉快ではたら
きずきの人となつて下されよ
そして御祖母さんを喜ばして孝行の道を全うしてたまはるべし

寅一月十三日　石禪

田中淳様

○

高島順作氏（新潟縣西頸城郡能生町）へ——金澤市松山寺戒場より

肅啓　益々御健勝恭賀不斜候
陳者當大禪師猊下貴宅御一泊に付御着時間等豫定の上侍局より申上候處當戒場の都合上七日早朝御出

光陰は矢の如し本年も一日にせまり候明年はいとゞめでたき年を迎へ早く御孫の御成人を見て御安心遊ばすやう願上候堪忍は第一の力信心は第一の樂み健康は第一の福この上とも御身御大切にねがひあげ候先は御禮まで　早々不備

大正十一年十二月三十一日　　石禪

田中ふさ子様

○

田中淳氏（同）へ――大本山紫雲臺より（繪葉書）

新年おめでたう。　丑どしなれば牛の如くどつしりとおちつきありて力つよく勉強し體力をきたへ操行を正しくし祖母様に早く御安心させるやうに祈ります

大正十四年一月　　鶴見

紫雲臺

田中淳様

たりき

　はるあきのさかひもわかずとこ夏のはしまぞ花の浄土なりけり

去る十九日より五日間授戒會修行思ひしよりも盛大に極まじめに行なはれ満足いたし候　海外御授戒會のはじめに候　得度をうけたる人も三十人ほどこれあり候

　ほのるゝのみのりの園にさきそろふ花にたなびく紫の雲

淳殿何とぞたつしやにそだちよい御子になりておばあさまやみなさまに安心をさせて下され又御老母さまによろしく願上候　時せつ柄御身御大切に

大正十年八月二十六日　　　於ほのるゝ別院

石　　禪（花押）

田中　ふさ子様

○

久しく御無音に打過ぎ候　處増々御機嫌好く令孫も彌々すこやかに成長の段なによりおんめでたく存じ候　此度は御てがみ及けつこうなる漬物わざ〳〵御恵送被下かたじけなく御禮申上候　衲も十六日より小田原にまゐりて休養いたし昨日歸山致し候　身體もおひ〳〵すこやかに相成候間御安心被下度候

○

同氏へ――布哇マアイ島満徳寺より（繪葉書）

粛啓　益々御健祥又令孫も元氣よきことゝ察し候　衲も船中より少々不快なりしが追々よろしく相勤め居候へば御省念　やはりせわしく御ぶさた致し候　みな〳〵さまにも然るべく御傳聲ねがひ上候

七月十九日

馬哇島パイア満徳寺にて
石　禪（花押）

田中ふさ子様

○

同氏へ――布哇ホノルヽ別院より

復啓　御老母御病氣入院の趣驚入候　最早御退院遊ばされつらんと存じ名古屋に宛此狀を認めたるも尚ほ心に懸り早速三寶に御全快を祈請致し候

淳殿御丈夫の由殊に御老母の病床に於て可愛い態度にて慰めたること御老母のよろこびさこそと察し居候

當地は氣候よろしく勤め易く候　約一ケ月かゝりて三つの島を巡回いたし不自由の中にもたのしみあり

田中ふさ子様

博多御母堂御滞名に候はゞ別紙同様よろしく願上候

○

同氏へ——東京最乗寺出張所より

拜復　増々御健祥喜び居候

このたびは何よりの好物なる御地名産の漬物大樽御恵送被下且つ御書面を拜しまことにありがたく早速てふだい致し且昨日新年初祈禱大般若會に婦人會及吉祥講の矢野様等にも膳部にそなへ一同大よろこびにて候ありがたく奉存候

祇幸に無事二十日まで在京二十二日に歸山致し候三月にはゆる〳〵御目にかゝることを得べくたのしみ居り候

悪性の風流行の折柄十分御用心被下度候先は御禮まで　早々

申一月十六日　　　石禪

田中ふさ子様御許へ

未六月十九日

於奉天　石禪

田中ふさ子様

同　淳様

○

同氏へ――越後柏崎町洞雲寺道場より

肅啓　過般は參趣色々御厚待を被むり御禮申盡しがたく候　此度はまた御書面及何よりの御惠贈千萬忝く奉謝候

御主人様のみかくれ玉ひしは惜みてもあまりある次第にて只々人生の無常を感じ候　されど定まれる因緣いかにともいたしがたし此上は御身を御大切にして御靈への御供養向後御家門興隆の御計らひ御追善の第一に有之候　靈也元來不生不滅未來永劫の樂果を御莊嚴被下候様不堪切望候　時下御自愛萬々　不備

未八月二十日

最乘　石禪

水衆と朝に鐘聲を味ひ夕に溪韻に參じ寒殺闍梨の中又一段の春風を占取致居候
御地は一層嚴寒の事と想像致居候　何卒爲人天御自愛萬々是祈候　至祝不盡

戊午一月吉辰　　　　最乘石禪

大乘玄外尊宗師　貴右

○

田中ふさ子氏（名古屋市）へ――滿洲奉天興禪寺より

肅啓　御主人樣御逝去との御事最乘寺へ宛御通知被下候趣於當地傳承奉驚入候
御病氣は何にておわせしや御煩ひの模樣は如何に被爲在候ひしや御業務の上より見て今日以後最も御大切なる御身御家の爲め御子孫の爲め内外に涉りて殊に重要なる御身況や溫厚篤實の御性質一しほ哀惜の至りに堪へず候
迂衲兼て汽車中に於て御目にかゝり常にその御人格を景慕致し居り候ひしに思懸なき御不幸言の葉にも盡しがたき悲みを覺え候　早速御俗名を記して床上に安じ燒香御回向仕候　何れ七月十四日御地へ參上の豫定に付その折親く御悔み可申上先は不取敢御弔詞まで　早々不一

もなく單身孤影籍を移し十一月より漸次內部の整理を願ひ僧堂の認可を得今や一新生面を開くべき途中に有之候 本日出會先より歸山來月中は在院の覺悟に有之候

御道情の深厚なる特に御名產の珍菓實澤山御惠贈を辱うし慥に安着乍每度實に美事にて一同感歎致候 早速高祖及二祖太祖 並 慈船禪師の眞前に獻供仕 候 其御さがりは一同に分與し賞 味可仕 候 御地は寒威最も强烈に相成 候 事と存候 爲 人 法御長養專一に祈上候 道俗各位に乍 憚 宜敷御致誠被下度候 誠恐頓首

大正卯十二月二十九日　　護國石禪九拜

大乘尊堂老宗師　侍史

○

同師へ——大雄山最乘寺より

改歲令辰萬象皆和　尊臺丈室彌御健祥被迎新年佛法候段奉南山候 今般は特に壽餅及菓諠御惠贈重々の御道情不堪感激之至候

迂衲醫師の勸告に從ひ臘月中大半小田原海濱に靜養歲晚より歸山晨昏の行持無恙相勤め居候 幾多の雲衆

し配役丈適宜御濟ませ被下度猶各老師に別紙同樣奉願上候
當方隨行は水野和尙北海道布敎の約ありて都合不相叶仍て左の三名同行致候

室侍　室橋廓芳力生
直壇　伊佐是察力生
戒侍　星見鐵明力生

尙ほ迂衲の精神只々傳道の一事をのみ惟れ主眼とし毫も形式や待遇等を好まず萬事雲水同樣に取扱あるやう唯々法敎の擴張のみ希望する所に御座候
山雲海月は相見の時に分付致候　早々不一

明治四十一年四月二十四日

雲洞石禪和南

寶圓賢明老禪將　侍右

○

大乘寺玄外師(北海道余市町)へ——名古屋護國院より

拜啓　御道況愈々御康寧奉恭賀候　迂衲九月下旬俄に當院へ移轉の止むなきに至り何の支度すべき暇

あめつちの深きめぐみを白糸の一すぢなりとあだにつかふな
雪霜のうきをも忍ぶ梅にこそあかきこゝろの花やさくらん
あめつちの道はかわらじ春秋とうつるすがたをそのまゝにして
世をてらすひかりめでたきみ佛も己が心のすがたなりけり
寒嚴法身長養專禱

二月十八日　　　在宏邸

雲洞石禪

寶圓賢明具壽　榻下

○

同師へ――越後雲洞菴より

肅啓　道況益々御多祥恭賀不盡殊に法要前五日如何計か御多忙と察入候
此程再三の來書一に其意を傳承致候如貴意海上は不安心陸地とせば啓建の前日午後三時過秋田着なればその日の中に貴刹に到着困難なるべくと存じ候右はその時の模樣にて電報可致若し途中一泊となれば五日には午前十時頃までに到着可致心得に候仍て啓建の午前到着の場合は泉流老師又は永泉老師を煩は

鷹照賢明宗師

○

同師へ——東京北品川宏邸より

殘寒甚嚴法候道履多幸不堪欣躍今回は遠く壽餅を被贈又産物の珍品被惠今朝落手道情の切實なる山々嬉敷受納仕候衲事浴療其功を奏し身體の七分は平快致候處北越の寒氣に觸るゝは頗る危險なるを以て當分當邸の御世話になり靜養致居候間御安心被下度候

征露の皇軍毎戰必捷是れ獨り武勇の超絶なるのみにあらざるべし神祐佛護豈に爭ふことを得んや此の際に當り佛の眞子たる者宜しく精進の幢を建て金剛の劍を揮ひ法輪を活轉し法乘を活動し以て國恩と佛恩とに酬ゆべきなり

義海道英等戰地にて健在桂芳は去る十五日東京を發して出征の途に就けり德禪一明は東京に在り兵式法要に忙はし泉田永昌寺は仙臺に入營中々容易ならず乍去眞俗不二の妙諦に通徹すべき好箇の時節なるらん貴下も亦た出藍の衲子一院に打坐するも隨機說法晝夜常轉法輪あらん事を

尋ねみよ心の外の心こそ敎の外の敎なりけり

貴下も不幸中道にして本師に別れ住山日淺し何かと心配なるべし乍去世相如是行住坐臥道念を培養し利生報恩是れ事とせば出息入息皆な是れ轉大法輪に非ざるは莫し貴子の稟性眞直與道相應向後須らく萬里一條鐵に踏破し佛祖の眞風を宣揚せらるべし聖胎長養の家訓亦た最も至要に候　至禱々々

八月三十日

雲洞石禪

膺照賢明宗師

○

同氏へ――伊豆伊東より

恭賀新正

早々被賜祝章不堪滿悅候小衲舊痾未癒臘來當地浴療頗感輕快候に付近々歸京東京北品川千年杉宏邸に假寓の心得に候間貴書を下さる時は右宏邸に御宛被下度候

住務劇忙の際益々長養道胎歡慶不啻閑中の參學は易く忙裡の辨道は難しお互に辨道中に坐臥經行するに於ては閑と忙とを論せず動靜を打して一如不二ならしめんこと不堪希望候　餘は後便　草々

一月吉旦

鷹峰透關師（京都市）へ——大本山總持寺より

拜啓　御道況愈々御健勝恭賀不盡に候

過般『傑僧卍山』の高著森田氏の妙手に依て出現し御惠贈を辱うし忝く拜戴仕候宗統復古の偉聖其志念行持歷々分明其一言一行悉是佛祖の轉法輪其一動一靜無非衲子之良警策讀去讀來感激の涙に咽び候卍山不朽之聖業著者の御盡力鷹峯老師の御願行の所も深く感謝仕候玆に謹で奉表感謝意候　誠恐頓首

大正十五年五月五日

總持　石禪敬具

卍山會御代表　鷹峯透關老師　侍史

○

鷹照賢明師（秋田縣由利郡小友村寶圓寺）へ——東京北品川宏邸より

貴書歡讀殘暑難凌處法體益々康寧珍重不斜候

迂衲咽喉病に罹り七月十八日上京醫療を受け于今全快せず當邸の御世話を被り寓居致居候併し幸に身體は追日強壯に赴き候間安心可被下候九月中には歸山の豫定に候

大正十三年四月十五日

總持　新井石禪

瓜生彰德會　谷川孝山殿

○

拜啓　道況彌々御康寧奉恭賀候

過般瓜生刀自銅像除幕式の折萬端御款待を辱うし不堪感謝候　該銅像は容貌慈愛の德現はれ如何にも如接其人　殊に地藏菩薩の尊像相並んで奉安せられ一層意味深く被感候

大野樣始め一般篤志家の御盡力亦難有感入候　何卒宜布皆々樣に御致誠奉願上候

爾後迂衲無恙如豫定巡錫致居候　間御省念被下度候先は御禮辭迄　早々頓首

大正十四年九月二十五日

總持　石禪

長樂孝山老師侍史

○

谷川孝山師（福島市長樂寺）へ——

拜復　御書面只今拜受十二月三日より七日迄提唱及講演の事承知致候碧巖錄一則より五則迄御印刷宜布願上候

迂衲は十二月一日午後御地通過梁川方面に趣き可申而して三日には多分同所一番にて參上の豫定に候萬一一番にては時間遲了に候はゞ二日の夜出福可致候此の度は全くの微行に付御迎ひ等は都て御見合被下度候七日には夜行上京相成候樣御含置被下度候

先は取急ぎ御回答まで　早々頓首

十一月十五日　　石禪和南

長樂尊臺老師侍史

○

同師へ——大本山總持寺より（以下二通）

肅啓　瓜生彰德會の御旨趣拜見仕候先賢の偉德を彰揚し後進に懿範を示さるゝの美擧中心賛同仕候依て乍些少別紙爲替を以て微意を表し候間御納受被下度候先は右御回答まで　不備

高雲石龍師（熊本縣天草郡本村東向寺）へ——大本山總持寺より

拜啓　道況益々御健祥奉恭賀候

三月上浣錦地巡錫之際は遍照明德共に御出會敎授の導師として萬端御攝化被下且野衲に對し特別の御法愛不堪感激之至候

猶今回は特に天草案內を御惠贈被下難有拜受仕候一部の小冊子山川風物名勝舊蹟其他人事の全體を網羅し且貴刹は四箇本寺の筆頭として舊記をも掲錄し殊に天草佛敎再興の槪要を認得するに堪へたるは誠に喜ばしく候

貴刹は一島の甲刹尊師亦鎭西之光明幢今後益々御康安化道御恢弘の程奉至禱候

先は御禮辭まで　早々頓首

大正十五年五月五日

總持　石禪敬具

東向尊董　高雲老宗師　侍史

○

谷口虎山師（長崎縣北松浦郡山口村洪德寺）へ——大本山總持寺より

拜啓　尊堂老宗師道況益々御健祥奉慶賀候　過日拜趨の折は甚深なる御厚待を辱うし殊に病中の爲一層御配意を煩はし恩光無量奉感謝候

守拙老師御納骨の佛事に臨む事を得たるは法緣殊に深きを感じ追慕の涙轉た新なるを覺え申候　老師以來三世の薫化一般檀信徒諸氏の信念歸心は其態度の上に表現し難有感じ候　只一晝夜に過ぎざる法筵に甚大の御歡待を蒙むり不堪慚惶候　何卒法緣及檀越諸賢に微意御致誠奉願上候

老病于今不及快方隨意同樣に巡錫行持罷在候　去れど氣分には別條無之候間御省念被下度候

先者御禮辭迄如是御座候　早々頓首

大正十五年三月十七日

總持石禪敬具

洪德尊堂　谷口老宗師　貴右

本日糟谷大修宗師御示寂の報に接し驚愕哀悼只々悲涙に咽び候　宗門多事の際此有爲の人師を失ふ實に遺憾無此上候

高橋老尊君侍史　　石禪和南

○

拜復　御道履益々御康安恭賀不盡に候

今回御自坊の御整理及地方御化導の御都合にて一時東都を御引揚御歸山被遊候由地方に取りては敎化の標榜を得たるべきも東都殊に本山としては寂寞を感じ遺憾に堪へず候

乍去時々御上京に相成宗門の內外に於て御盡力被下事と信じ候從つて本山及迂衲に於て文筆上今後御願申上候場合御都合の許す限りは如從前御隨喜被下候事に呉々も御願ひ申上候殊に太祖大師大遠忌に就ては御扶護を煩す事も可不少此段も何卒御賢承相願候

右御回答旁御願まで如斯に御座候　早々不悉

大正十一年十二月念八日

石禪和南

高橋竹迷老宗師　貴侍

高橋竹迷師へ――(以下三通)

○

粛啓　道況御勇健欣喜不過之候　衲幸に無事御省念被下度候
碑文惠贈複雜なる事歴を簡約網羅好箇の文字忝く謝上候
相見在于邇委曲面晤萬々　不宣

酉五月念一　　石禪敬具

竹迷老宗師　侍右

○

拜啓　過日は御光訪奉感謝候
其日寸暇を得ざりし爲め當地着後別紙相認入尊覽候間十分御加斧願上候　題號の文字甚不出來　希くば貴手に於て書替被下度候
今回は特別の御骨折不堪感激候　先は取込中右御願まで　早々頓首

十一月十八日

なにかと御不自由勝ならんと同情いたし居候　昨年の震災にかゝり一瞬間に財物生命ともに失はれし人々に比すれば如何なる事もあきらめ得べし此上は精神生活の充實こそ寧ろ徳を積み功を累ね菩薩行を修むる方便ともなりぬべし御母君の如きは御信心堅固にて萬事に御あきらめありて世に在り乍ら淨土のたのしみをも得玉へばこれぞまことの幸福にやあらん貴孃は猶以て山の如き不動の精神を持し如蓮華不着水の大安心こそ願はしけれ

釋尊は凡夫は自在を欣ぶも菩薩は不自在を樂しむと示されける佛の慈光は只信水にのみ影を涵し玉ふ成佛の勝因は慈悲の田地にのみ種えらるべし迷へば十方皆苦界悟れば隨處盡く樂土この上とも御家内中身體健康安心和合ひとへに祈る所に候　あら〳〵可祝

大正十三年二月九日　　石　禪（花押）

松浦衣子様

おんはゝさま及御令妹によろしく申上可被下候

大休禪師もはや八回の御征月思へば夢のうき世なりけり代理をもて献香致さしめ候
御母堂御令妹によろしく申上げ可被下候　早々不一

壬戌二月九日

石　禪（花押）

松浦衣子様

○

昨年大震災以後いかゞ被遊つらんと案じ居りしに鎌倉に移られける由その地名も知れざりければ只々御無事にてあれかしと祈り居りしにこたび御住處相分り本日は故禪師の御命日なれば一筆さしあげ候御母ぎみも令妹も御安祥ならんと察し居候

大震火災は一朝にして京濱はじめ幾百萬の同胞に禍しその厄に生命を失ひし人々も少なからず實に無常の世とは申ながらむざんといふも餘りなりみな是れ夙業の所感たれをか恨むべき當本山も火災を免かれつるも被害甚大にて復興容易ならずされど一人の怪我せし者なきはせめてもの仕合せなりき衲は當時山形市にあり程經て歸山せり昨年末より在山し本月末よりは巡錫の途に上り可申候

御先考は正路潔白の君子におわせしが圖らざる御災難にて幾許の御辛勞あらせ玉ひつらん不幸御逝去後は

切の事と感じ候彌々御成立の上は顧問の事も承知仕候趣意書會則は鄙意の所存無遠慮に加筆仕候されど多忙の身の漸く今宵の小時間を利用して拜見せしことゝて太だ不十分なるべく被存候へば可然御取捨被下度候御貴君多年の御熱心感歎の外無之此上とも法敎の爲め國家の爲め精々御盡力奉祈候　早々頓首

申二月二十七日夜

最乘石禪

菅原與右衛門様

○

杉浦衣子氏へ——(以下二通)

過日は再度御來訪ありがたく存じ候

昨春思ひ懸なき御不幸御母堂はじめみなさまの御心中さつし上げ同情の涙にむせび候さだまれる夙縁なれば是非もなし只この上は御一同ます〳〵健康を保ち將來いとゞ御安心の域に進み玉ふの御運こそ大切なれ波浪の出沒するが如き世の海には佛慈のみふねにのり信心のかぢをとるこそ肝要ならめ幾度の風波をも凌ぎ候うちにはやがて安養の彼岸に達し申すべく候

○

菅原榮吉氏（山形縣東田川郡山添村）へ――信州下伊那郡神稲慈恩院客席より

肅啓　益々御健勝信行御精進恭賀不斜候

御筆記拜見御信念之熱誠不堪感激之至候　不日閲讀多少加筆の上御返璧可申上候　昨夜十數枚拜見實に完全と可申上御筆記と認め一層感入候　慈船禪師も既に御入滅早く一歳に垂んとす唯だ法寶の舍利のみありて儼然不朽洵に難有存候

先は不取敢御挨拶まで　早々不備

十二月一日

新井石禪

菅原榮吉様

○

菅原與右衛門氏へ――相州大雄山最乘寺より

肅啓　增々御康寧恭不斜候

兩度之御書面拜見多年の御希望なる修證義會御開設の事不堪隨喜候　其の御旨趣は實に現代に於て一層適

國家益〻多事多難宗門の使命彌〻重きを加ふ挺身奮闘すべき緊要の時機なるも寸進尺退の狀勢あるは遺憾なり老兄何卒法身自重不退轉に大機大用の發轉不堪切望候

先は御禮旁々如是に候　早々不備

於高岡

石禪敬具

菅原洞禪老宗師貴侍

○

同氏へ――

拜啓　益〻御健勝不堪恭賀候　御新刊の貴著『美譚感話』御惠贈被下非常なる興味を以て拜讀致居候所記何れも好箇の活教訓一般修養上裨益するところ甚大なるべく又教材としては最も有益なるものと被信玆に感謝の意を表し候　早々不備

大正十四年十一月三日

石禪敬具

菅原洞禪高師

熱誠の結晶自ら餘韻の高遠なるを感じ候別送『禪門の觀念法』お役に立ち候はゞ幸甚の至りに候何れ些子の閑暇を得ば鄙稿重ねて尊覽に呈し可申候

目下北越に在り當地は流石に思想も平穩なれど時運の所致青年の胸臆裡何物か潜在する感あり凡耶聖耶枯木巖前岐路多し修養の必要轉た切實を覺え申候　早々頓首

十二月三日　　石禪和南

菅原老宗師

○

同師へ——高岡市より

肅啓御懇書忝なく拜見致候貴著『禪門偉傑傳』正に接手材料正確行文流麗古哲の面目躍如禪的修養上最も有益たるを感じ難有閲覽致候

酒田に於て御母堂に面會歸途余目まで送り被下嬉しく存候恰も迂衲と同年齢との事にてなつかしく感じ候酒田より郡山經由にて當地に着朝參暮請罷在候東山北陸の地は人氣純朴信念も亦不淺日々愉快に勤め居り候

柴山賢君高鑒　　　　總持石禪

○

菅原洞禪師へ――(二通)

拜啓　修養世界社御創立愈々雜誌御發刊の趣爲邦家不堪感激の至候此上は唯々法身を自重せられ精精愛護を加へられ候事至禱罷在候愚稿近日何か起草可致候

尙一喝社の方も不相變御補佐の程不堪希望候迂衲依舊奔走裡に坐臥致居り候間御省念被下度候

先は右御祝辭旁々當用のみ　匆々不悉

十二月二日　　　　新井石禪敬具

菅原老兄

○

拜復　老宗師筆硯益々御勇健に被爲在候段奉恭賀候『修養世界』は迂衲愛讀中の尤なるもの老宗師

○

同氏へ――大本山總持寺より

復啓　益々御健勝奉南山候　大行天皇御登遐不堪哀慟之至候
過般は松浦師御地留錫種々御厚情を辱うし且同師に托して御地の名産御惠贈を被むり更に同師によりて御傳言をも承はり乍毎度御親切の段感謝不斜候
迂衲も昨春來の病氣漸次昂進起居にも多少の苦惱を感じ候爲め醫師の注意に依り客臘初より萬事を放下して靜養致居候原田君御高囑の拙毫敬承仕候近々中執筆可致候別紙は尊君の御意中を描したる積りに候白雲去來するも青山元不動只此不動の安心以て萬難を排して彼岸に達し得べくと信じ候御尊體の健康家内安泰こそ最も所祈御座候先右御禮旁御回答まで　草々不備

昭和二年一月一日

總持石禪

柴山得造様

榮枯由來花の開落但我が操守曾て變せず故に其志益々堅し得失畢竟雲の出沒獨り信念のみありて終に動せず故に其樂しみ彌々深し

昭和二年一月一日

柴山得造様 貴右

總持 石禪

○

同氏へ——尾州長源寺より

拜啓 益々御勇健奉恭賀候

本日在印カルカツタ日本領事館吉原氏より別紙回送し來り候 六月中御貴下に呈すべき鄙書誤つて同氏宛の封筒に入れしものなるべく疎漏申譯無之候 依て御詫旁 別紙入御覧候

迂衲近頃病魔に被襲十分安靜し能はざる爲め病勢次第に相募り甚だ困居候 只生死岸頭一日なりと有意義の活計をと苦患を忍びて巡錫仕居候

御尊體何卒彌が上にも御勇健祈上候 早々頓首

大正十五年十月十一日

於尾州長源 石禪

柴山得造様

御渾家御一同さまによろしく御致誠是祈候

大正十三年七月　　　　　　　　總持石碑（花押）

柴山得造様 貴右

柴山得造君の銀婚式を祝して

相生の松のみさをのいろ添て八千代をいはふにはのひな鶴

○

拜啓 益々御安康珍重不斜候

今回布哇報知社御發行の『日本語學校に關する試訴及附帶事件』御惠送を辱うし難有拜受仕候之を拜讀するに日本系兒童教育上重大問題たる本件に對し敢然試訴を提起し獻身的努力を以て終始一貫熱血を注ぎて奮闘せられ照魔鏡前最後の勝利を占取し玉ひしことは世界人道の爲めに感謝所不能措候 茲に不取敢御禮辭申上候

御渾家各位に宜布御致聲奉願上候 早々頓首

大正十五年六月二十日

柴山得造様 貴右

御令室始御家内御一同別書同様よろしく願上候

○

肅啓 益々御健祥恭賀 不斜候 過日は御芳簡を 辱うし殊に銀婚の御慶典を被爲擧候由欣慶不過之奉賀候 布哇に於ける同胞發展の爲又別院の教運振興の爲終始一貫特に率先御盡瘁の段感謝難盡候 時勢の變轉は種々の難問題を續發し常恒御辛勞の御事と深く察入候 米國移民法の實施の如きは甚だ遺憾の極なるも此際に於ける國民の態度は最も愼重を要すること丶存候 內地にても輕擧に出でんとするもの有之邦家の前途を思ひ憂慮致居候 直接の影響ある布州としては色々の點に於て御高配如何計りと同情仕居候 要するに我國民は世界の正道に立ちて眞實中正穩健の大經を履み正義平和博愛の事實を示し人道の範を垂るゝの覺悟こそあらまほしく存候

御令室始め賢息御一同に宜布御致聲願上候 尙別院總代諸賢にも同樣に相願候 迂衲も各地巡錫し此程漸く歸山爲めに御返書も遲延致候 幸に近頃は老軀も稍健康に向ひ候得ば御省念被下度候

別紙祝詠御笑覽可被下候 草々不備

皆々様にも宜布御致誠是祈候　早々不備

大正壬戌一月吉旦

總持石禪（花押）

柴山得造様

○

拜復　益々御健祥之段恭賀不斜候　別院の經營及其進展に付毎々多大の御盡力を辱うし不堪感謝候　日本語學校問題の事は布哇報知紙上に於て承知致し且邦人の最高幹部として御盡瘁の事をも存知し其前途に就き有利なる解決を翹望致居候　大陸に於ける大審院の判決も意を強うするものある由喜悦罷在候　日米間に於ける種々の問題都て正義人道を經とし博愛共存を緯とし平和圓滿に解決あれかしと祈居候　災後の京濱は漸次復興の緒に就き當本山も徐に回復の歩を進め居候　世界の形勢不穩の氣潜在するを覺え民心の趨向動もすれば詭激に趨らんとす寸時も油斷ならざる狀態に有之敎化の普及最も緊切を感じ居候　今後も不相變別院の繁興御扶援奉希上候

總代諸君外檀信御一同に宜布御致誠奉願上候　早々不備

大正十三年一月三十日

たちさわぐ波間をわけてゆく船にこゝろやすくもわたる海原

令室令息始め別院信徒諸賢に宜布願上候　早々不一

大正十年九月十日午前十時　　渡米船中

石　禪（花押）

柴山得造様　貴右

○

同氏へ――大本山總持寺より（以下四通）

遙かに佳運の年と與に新なる慶福を祈上候

早速御祝詞を賜はり忝く存候

來示の如く太平洋上平和の曙光を現出すること實に世界の幸福なり今後御地に於ける日米兩國民の間互に偏見を避け和敬を守り眞箇親善の實を擧げんこと不堪切望

昨年は尊堂の御不幸御追念禁じがたくおわしますべし此上は御令子かた〴〵彌々身心共に健全に御發展なさること追善の第一義なるべし別院の事萬々御外護願上候

家內和合業務精勵操行方正快活進取此事御子様方に懇囑致し候

若州臥龍院戒場
不老閣隨行監院
新井石禪

桂昌文雄老宗師

檀信各位に別紙同樣宜敷御致聲被下度候

○

柴山得造氏(布哇)へ――渡米船中より

肅啓　在布中に於ける御厚情の甚大なる感謝不斜候出帆以來天穩波靜恰も靜室に在るが如く愉快に航海致居候

御母に別れ玉ひて何程か御愁傷の御事ならんされど八十歲の長壽を保たれ御令妹の孝事御貴君等の御孝心自然に母君の慈腹に感應道交せしことなるべし此上は御令息等が衷心よりさゝぐる香華こそ無字の大經卷として尊靈を慰さむることを得べし御尊體の御顏面に於ける御病氣根治を見るまで御油斷なきやら祈上候

人生は滄溟の波浪一起一伏不斷の變化あり此間に處して悠々進行する巨船は不動の信念にも似たり

時下寒氣相加爲法御自玉祈り上候　早々不悉

昭和二年十月十日

歡喜泰仙老宗師

山内御一同こども會諸氏にも宜布願上候

○

清水文雄師（福岡縣八幡市桂昌寺）へ——若州臥龍院戒場より

肅啓　過日大禪師猊下尊刹入佛會御親化の際は多大の御道情を辱うし不堪感激候
新寺の創建教勢の開展事太不容易然るに數年を經ざるに今日の如き成功を彰はし玉ふは全く道念の深厚
と外護の信力に依るもの感歎不可盡大禪師猊下御滿足不斜此上とも一層の努力を望むとの御仰せに有之
候間此旨檀信諸氏にも宜布御披露被下度候
猊下益々御健勝にて昨日當戒場へ御安着被遊候間御省念被下度候先は依命御禮辭申上度迄　早々
頓首

大正三年三月十七日

○

汐川泰仙師(神戸市歡喜寺)へ

拜啓　道履益々御多祥願行堅固常恒敎化に御精進被遊候條法幸無量至福不盡候
迂衲昨春來の病氣増々相募り客臘來靜養三昧に送光致居候得共猶不至見快癒無止放下萬事休臥仕り居候
右の次第に付き本年は乍遺憾御地に參上相成兼候此の段不惡御賢承之上修養會婦人會諸賢に宜敷御披露願上候尙夏中は會代表として高橋鶴子樣より御見舞を戴きしも當時は入院中とて筆を手にせず爲に御禮狀も不差上只々衷心感謝致居り候
只今とても別に疼痛などは無之も呼吸困難時々微熱を發し容易に解散せず帝大物療科及久賀博士等時々來診せられ手當不怠氣分も亦如平生に候得共長々臥床のため筆硯に親しむこと能はず何方へも御無沙汰申譯無之されど幾分づゝか宜しき方に付き深く御心配被下間敷候猶御厚情の餘り特に御見舞に御出被下候樣のなきやう豫め爲念御辭退仕り候
本月二十一日より本山授戒會には兎に角歸山隨意に勤行可仕候今後の經過等は侍僧より可令申上候條會員諸賢に別紙同樣御致誠相願ひ候

正應舜瞳宗師

鄰峰檀頭世話人各位に別紙同樣宜布御披露被下度候

○

常勝保忍師へ——大雄山最乘寺より

肅啓　御道況益々御健勝恭賀不盡に候　尊刹尺羅會の際は初中後とも不一方御厚情を蒙り感謝不斜候

仕山日淺きにも不拘二大法會を雙修せられしこと其御辛勞如何計りならむ御本師大寂定中の御滿足さこそと察入候

閑居老師及鄰峰尊宿並に檀信諸賢の御厚誠千萬無量別啓同樣宜布御致聲被下度候　制中は一層自愛難務芽出度圓成奉待上候

納事昨夕歸山致候間御省念被下度候　早々不備

己五月十七日

最乘石禪敬具

常勝堂頭保忍老禪匠　榻下

て衆望歸之世の中は矢張正直なり統一の御教訓涙をもて敬讀致候尓も二十一日歸山致候へば貴意と同旨にて敎訓可致候貴下公私とも益々多忙此上は健康こそ第一なれ爲國家御自愛是祈候御家内御一同に宜布　早々不備

大正十五年十月十八日　　石禪

坂井德治樣　貴右

○

正應舜瞳師（新潟縣中魚沼郡眞人村）へ――大本山永平寺より

肅啓　御尊刹御親化戒會の際は初中後共御懇情に預かり殊に天地人物相和して盛會を極め桃李不言下自成蹊是皆貴宗師及道俗諸氏の御熱誠の所致祖門の光輝不過之不老閣猊下に於かせられ特別御滿足被爲在候向後九旬無爲法運隆昌不堪希望候先者不取敢謝辭申述度依命此段啓申致候　早々不備

十月二日

不老閣隨行監院　新井石禪

定光方丈より近頃一向たよりなしいかゞせしやと案居候

○

同氏へ——静岡市顯光院より

拜啓　今般商業會議所會頭選擧に當り滿場一致にて御當選被遊候段不堪祝慶之至候　衆望の所歸此重任に推選せらる實に最上の榮譽に候　されど其使命の重大なる今後幾多の御辛勞可有之候付一層御自愛の上爲邦家御盡力祈上候　先は御祝辭まで　早々不備

大正十五年七月十二日

新井石禪

坂井徳治様

正義こそ力なりけれべらんめい

○

同氏へ——大本山總持寺より

拜啓　益々御勇健恭賀不斜候　市議選擧の結果新聞にて承知最大多數の得票公平無私の眞人は求めずし

石禪

坂井徳治様 貴侍

○

同氏へ――相州鎌倉跳龍莊より

新年之嘉祥天長地久萬福萬福
昨冬は懇書を賜はり殊に御叮重なる御歳暮又新年には昆布澤山御寄贈御親情不堪感謝候
統一も健全にて勉強し此頃は一身上の紀律整理作法威儀もめつきり正しく相成りしやう被見受候試驗成績は本人も豫想より宜しからざる樣申し居候間是れ皆奮勵の力を發揮すべき好刺撃に付撓まず屈せず健康を第一とし益〻快活に熱心に勉強すべき旨申聞置候去る十二日の如きは朝四時に佐藤氏同道僧堂に來り坐禪致し而も自動的に入堂せしとの事にて感入候毎〻父上の志はかくこそあれと訓示致し候
時下御自愛萬〻是祈候　早〻不備

大正十四年一月十三日

石禪

坂井徳治様

心は大山の如く八風を受けて動ぜず量は大海の如く百川を容れて厭はず世の中を夢と觀ずれば苦しみもなく悲しみもなし萬境を空とさとりてこそ花もあれ實もあれ

大正十一年七月三十日　石禪

坂井德治樣　貴右

○

同氏へ――大本山總持寺より

肅啓　再三の御書面忝なく拜讀致し候故主に對せらるゝ御追恩の眞情殊にありがたく御忌服明けの御記念帛紗無限の感激を以て頂戴仕候

近時報恩の感情一般に薄弱に流れ爲めに凡百の爭議動もすれば醜陋を極め國家の前途寒心すべきこと不少貴下の御誠意に對し一道の光明に逢着するの感有之候

定光方丈は如何かと御健否を案じ居候衲も舊痾未全癒も近來稍輕快を覺え尚油斷なく攝養致居候先は御禮旁如是御座候　早々不備

大正十一年八月十三日

同氏へ――大本山總持寺より

恭賀新年

寒氣追日相加はり候折柄層一層御自愛是祈候猶ほ當本山及迂衲とも常恒御厚情を辱うし感謝不能措候殊に昨春開祖大師大遠忌及震災復興等に關しては多大の御援助を被り不堪感激候將來も亦宜布御厚誼之程奉願上候　敬具

大正十五年一月一日

總持寺住　新井石禪

佐藤梅太郎様

○

坂井德治氏(北海道釧路港)へ――相州小田原齋藤別莊より

貴書拜見　方向を變じ上海に御渡り無事御歸道祝着に堪へず候鶴見へ御立寄の處不在にて遺憾千萬に候衲人々の勸めにより目下當地に靜養致し居候

世の中は萬事廻轉燈籠と一般にて無常憑みがたし向後とも居治不忘亂處安不忘危益々勇猛精進して菩薩の大行を大乘的に實踐可被下候

○

同氏へ――越後西頸城郡今井靈源寺客房より

極暑の候増々御健勝恭賀不斜候
今回は御懇切なる御問候殊に御悃儀として澤山の郵券御惠贈御芳志忝く深謝仕候御老母様始め御一同も御健全ならんと祝意を表し居候
衲は六旬に渉り滿鮮の巡錫日程の割合に勤務多きため隨分無理なる程活動せしも幸に無事首尾好く完了致候間御省念被下度候

雲を追ひ水に隨ふ身にしあれば旅路も家のこゝちこそすれ

雲水の境界頗る安樂に有之候　先者御禮旁御問訊まで　早々頓首

未八月一日　　最乗石禪

佐藤梅太郎様

此上とも御自愛專一に上祈候御老母様御一同によろしく御致聲被下度候

○

佐藤梅太郎様

御母堂始めみな〳〵様によろしく願上候

さき匂ふ花にもましてうれしきはこゝろにひらくさとりなりけり

足ることを知る人ぞしる世にありて兜卒のそらにまさるたのしみ

○

粛啓　高堂益々御健祥の段恭賀不斜候

陳者迂衲春來久敷病褥に臥し療養罷在候處深く御尊慮に被爲懸特に御鄭重なる御慰問を辱うし御厚情不堪感激の至候御蔭を以て漸次輕快に趣き候に付四月以來徐々巡錫を試み候へ共別段異状無之今や全く本復に立至り候條乍憚御省念被成下度候仍て乍略儀以書面御報旁深く御禮申上候

時下御自愛程千萬奉祈候　誠惶不備

大正六年五月十日

新井石禪

佐藤梅太郎様

謹啓 去る六日拙衲晉山式祝國開堂會修行の際は特に御懇篤なる祝電の榮を賜はり式禮一段の光彩を添へ首尾圓成を得て感激の至りに堪へず深く陳謝の意を表し候
聊か蕪辭を呈して御厚禮申上度得貴意候 敬具

大正五年十一月二十日

最乘寺住職 新井石禪

佐藤梅太郎樣

○

復啓 益々御安寧恭賀不斜候
迂衲病氣に付今回特に御鄭重なる御見舞を辱うし御芳志難有奉多謝候 漸次輕快に趣き候に付去る五日より徐々巡錫を試みたるに別段異狀も無之候 條御省念被下度候 明日當地を發し永平寺に立寄り二十四日には北蒲原中條廣嚴寺に着の豫定に候
先は御禮旁御報まで如是に候 早々頓首

巳四月念一

最乘石禪

佐藤梅太郎様

○

同氏へ――奉安殿護國院より

粛啓　益々御健勝と喜居候　迂衲の事御心配被下忝く存候　近頃は至つて達者に相成候間御心配被下間敷候

來る十一日より各地巡錫の途に上り可申候　御老母外皆々様に宜布願上候　早々不一

辰二月一日

名古屋市奉安殿護國院

新井石禪

佐藤梅太郎様

六の環のめぐる道しば露ほどもさわりなき身となりにけるかな

○

同氏へ――大雄山最乘寺より（以下三通）

貴書披見　益々御健祥欣幸の至に候　衲無事各地巡錫　御省念被下度候　轉地營業の由今が最も大切なる時故油斷なく熱心と勤勉とを以て成功祈上候　自愛萬々

大正十年八月十三日　　　　石　禪

○

佐藤梅太郎氏（新潟縣南魚沼郡東村）へ――雲洞菴より

復啓　毎度御懇篤なる御書面　忝く存候

迂衲無事昨日當山に移錫本日北國に赴き明晩の汽車にて上州及尾州巡錫の途に上り候　幸に健全御省念被下度候

御地も本年は田畑好況の由　喜居候　各自の心田も亦恭儉の養ひを增し道德の實を結び唯心淨土の良果を擧ぐる樣御盡力不堪希望候　軍國の青年はその結緣殊に貴重なるものあり

御母堂樣始め皆々樣に別紙同樣宜布御致誠仰上候　身心の御健康一大事に候　早々頓首

九月廿二日　　　　雲　洞　石　禪

歸路御立寄被下候はば難有奉存候奉安殿は上野老師後任と決定實以て好都合御安心被下度候檠道始め皆々樣に宜布奉願上候　時下御自愛萬々　頓首

十月四日　　最乘石禪

知足菴御主人禪床下

○

佐藤利三郎氏（北海道函館市）へ——越後楞嚴寺より（葉書）

拜啓　錦地大火御安否如何と案じ居候處幸にして災厄を免かれしとの御事安心致候被難者の大厄不堪同情候此上にも御勵發至禱致居候先づは御挨拶まで　草々不備

酉四月念三　　石禪

○

同氏へ——布哇より（葉書）

後も幾久敷御擁護の程切望不盡候當地も別狀なく微軀亦無事應分の行持に從事して眞前に奉仕致居候間御省念被下度候

總代諸賢外檀信各位にも宜布御致辭願上候時下御自愛萬々　頓首

大正十四年八月三日　　石　禪

酒　井　幹　樣

星　野　保　五　郎　樣

侍史

○

三戸貞三氏（北海道國縫）へ――栃木縣田沼町西林戒場より

復啓　札幌に於て各地局長御來會を期とし殉難死者の大供養會御修行且つ親ら僧形となり式後御法話被遊候趣御書面並に小樽新聞に依り恰も目睹するが如く其尊嚴なる法要諧衆之感動さこそと察し入り大休大禪師大寂定中の御悅び如何計りならむと想像し抃舞仕候又珍果澤山御送附被下忝く拜受六湛師翁の眞前に供し且一統にて供後の妙味を喫却し雲外萬里の御芳志を感謝仕候

迂衲も十一月六日晉山式擧行に決定遠方なれば札幌の諸兄弟にも御招待御遠慮申上候得共吉祥山御慶弔の

候事全町諸人の御厚意に出づるとは申し乍ら諸賢の御斡旋の致す所と存じ甚大の謝意を表し候又留錫中は無間斷の御盡力綿密周到不堪感激是偏へに　太祖大師二世禪師及び歷世諸禪師の御遺恩と感泣致候

衲爾來無事巡錫を了し候間御省念被下度候

別院は開祖法身常在の靈境本山萬代の聖域此上とも永久に御守護被下候樣奉悃請候御地信徒各位を始め全町民諸君に迂衲感激の衷情宜布御披露被下度候先は御禮辭申上度まで如是に候　早々不備

大正十一年十月十五日

總持石禪

酒井幹樣
星野保五郎樣
澤田彌七郎樣
小林駒太郎樣
各位貴下

○

拜啓　三伏の候益々御健祥の段奉恭賀候

今回は早々と御伺候を辱うし乍毎度御厚情不堪感謝候別院は終始一貫御護持を蒙り銘肝此事に候今

の新聞にて承知し感喜罷在候
秋初長谷戒場には特に御光來御禮筆紙に盡し難く候今回は圓通大士の御寫眞と光丘文庫の撮影忝く拜受仕候

右文庫には　皇太子殿下御行啓被遊候趣萬世に記念すべき聖蹟にて圖書も爲めに一段の光輝を發揚すべく一般民衆に與へ玉ひし無形の德化は偉大なるものあるべく被感候其折には文庫の役員として御奉迎被遊候儀不朽の光榮と奉賀候今後とも一層御愛玉の上思想啓發正信鼓吹に御盡瘁の程奉祈上候

乍筆末藤塚仁者に宜布御致誠相願候　早々頓首

大正十四年十二月十六日

總持石禪

佐藤清治先生貴右

○

酒井幹氏其他（石川縣鳳至郡櫛比村）へ――大本山總持寺より（以下二通）

肅啓　各位益々御安祥の段歡慶不斜候

客月初入山の折は熱誠各般の準備に被當且つ金澤までも御歡迎被下猶入院の折は盛大なる御歡迎を賜はり

得べしと被存候

迂衲能州を辭してより北越に來り刈羽の海邊に錫を駐むること七晝夜去る七日當處に移錫し忽ちにして疊嶂聯溪裏の人となり朝に松聲を聞き夕に白雲を眺め原始的なる人々と相接し恍として身は盤古氏の治下に在るが如し行雲流水の活計また面白き事に御座候 斯かる山家にも矢張生活問題の惱み不少益々社會政策充實の至要を感じ候

此程は藤塚樣よりも御懇書を戴き深く喜居候 酒田新聞も數度御惠贈に預り每紙多大の興味を感じ候

欲窮千里目更上一層樓 今後益々佛敎の民衆化に於て御宣布被下候樣奉切望候

時下御自愛萬々 早々頓首

大正十三年七月十二日

石禪 敬具

佐藤清治先生 貴侍

○

同氏へ――大本山總持寺より

拜復 寒威日相加候折柄益々御剛健に被爲在且時下法筵に臨み御誘化被下候事藤塚仁者より御惠贈

健康は第一の福足るを知るは第一の富慈悲は第一の寶佛法は第一の樂しみこの上とも御家内打そろひてすこやかに堪忍を守り和合を旨として平和諸樂の間に家運の繁榮遊ばさるやう祈り上候
御主人御老母を始め若主人外皆々樣並に入戒せる方々等にもよろしく御傳聲可被下候　可祝

大正十三年七月十日　石禪

齋藤もと子殿

觀音大士の御名號さしあげ候

くもりなき補陀羅の月をすみわたる温海のそこにみるぞうれしき

○

佐藤清治氏（山形縣酒田町）へ――

肅啓　清況彌御剛健恭賀此事に候　七月一日附の華墨兩通追尾回送漸く本日接手拜讀仕候
御地留錫の折は外護の菩薩として多大の御盡力を蒙り爲めに禪學會も參禪の高流多數に上り晨朝の入堂寔に以て感歎に堪へず貧道莽鹵の提唱も針芥相投ずるの分ありしは望外の幸榮に有之候　御地人心簡朴信田地亦肥沃の質あるを感じ候　知識階級の諸君子にして指を禪致に染め玉はゞ却て眞純なる活信仰を培養し

激に堪へず候酒田にては長德方丈を始め篤信の方々特に入戒又は參詣せられ今生後世永遠の法緣を結び歡喜無量に候

四十餘年振りにて御地の靈泉に浴し溫度好適浴後の氣分爽快限りなし身心ともに極樂の境に入るの感あり且御地信仰の正念純良精密一層うれしく存じ候扨昨夕當地に安着不相變佛祖の眞風に浴し居候間御安神被下度候

乍末筆御老母始令室賢息外內外の皆々様に宜布御致聲相願候先は御禮辭まで早々不悉

大正十三年六月十五日　於高岡戒場

總持石禪（花押）

齋藤小四郎様

○

齋藤もと子氏へ（同）――新潟縣頸城郡保倉大安寺戒場より

此程はまごゝろあつき御手紙うれしく披見致候

みのりのゑにし結びぬる上は永劫同じ佛座に在るが如し羽越線開通後は交通の便もよろしければ亦もや參り上ぐる機會もあるらん殊に御地の方々とみのりの緣を結びつるも少なからねば猶更と思ひ候

同師へ——高岡市龍雲寺戒場より

粛啓　道況益々御康安恭賀不盡に候

過般貴山へ寄錫の際は甚大の御道情を辱うし檀信各位よりも深厚なる御待遇に預り感謝難盡候殊に爛光清池の間に半日の安息を得たるは最も嬉しく感じ候御地方人心純眞風俗醇厚國民として將來頼もしく被思候間此上とも信念を培養して模範的仁里の出現こそ望ましけれ一層法身自重山門興隆祈上候

檀頭御世話人諸賢に別紙同樣御致誠可被下候　早々不悉

大正十三年六月十三日

總持石禪（花押）

玉川堂頭老宗師

○

齋藤小四郎氏（山形縣西田川郡溫海）へ——高岡市龍雲寺戒場より

粛啓　益々御健勝恭賀不盡に候

過日寄錫の折は御懇篤なる御待遇を辱うしその後松嶺に御來訪酒田戒場まで御送り被下重々の御厚意感

同師へ――越後十日町智泉寺戒場より

拜啓　過日上山の際は初中後共特殊の御厚遇を辱うし　甚以て感激の至奉深謝候　初登山の迂衲には本堂の莊嚴境地の清幽庭園の雅致何れも地方稀れに見る所殊に檀頭御世話方を始め各位外護の狀態眞淳質直全く信心歡喜の至情に不堪者の如く被感如何にも難有欣悦致候　且御法類門末諸師隨喜の模樣如何にも和合海中に游泳するの感あり近頃になき愉快を覺え轉た謝悃の情を添へ申候

衲去る十日正午能の別院に赴き朝參暮請一如大衆三物秘辨を提唱し十五日午後對眞上堂を勤め翌日當地に着場候間　御省念被下度候

先は右御禮辭申上度如是に候　時下爲人法御自愛萬々　頓首

未九月十八日　　於北越智泉道場

最乘石禪敬具

玉川尊堂宗師

法類門末及檀頭御世話人各位に別啓同樣御致誠奉願上候

未一月三十日

玉川尊臺丈室 貴答　　　　石禪和南

○

同師へ――名古屋市外萩野村松音寺より

拜啓　御書面拜見　敬承仕候就ては大山善寶寺老師よりの御書面も有之候に付御尊刹を九月四日より八日まで又は五日より八日までと御定め被下度奉願上候　九月一日より三日まで善寶尊刹へ參堂の豫定に御座候　鶴岡和合會は八月下旬中に開筵ならば參り可申御回答に及び置き候

右は忙中略書御回答まで　早々頓首

未三月十一日　　　　石禪和南

玉川尊堂老宗師

迂衲十四日より三十日まで三河國設樂郡武節村正壽寺戒場に赴き申候

大正十一年五月二日

金野仁三郎様

○

齋藤玉秀師（山形縣東田川郡泉村玉川寺）へ――伊豆韮山成願寺戒場より

拜啓　道況彌御安祥不堪恭賀候

今春轉法輪に付招請を被むり歡慶不盡舊來不淺法緣あるを以て是非參堂隨喜致度は山々なるも春來五月中旬まで教約連續一日の餘地も無之五月十六日よりは滿洲巡錫　七月十日頃歸國其の後九月八日頃までの間なれば是非都合して登山建化門頭に補佐の行持を打すべし乍去七八月は炎暑之候に屬し九月は上旬なるを以て炎蒸未去且時期遲了に付御不都合なるべく相察し十一月は一日より七日頃まで善寶方丈の御招きを被むり居候得共其の前後にては餘りに相遲れ可申洵に以て遺憾至極なるも實に不得止次第に付當方の都合を叙して御申譯旁々御照會仕候間檀信諸賢に宜布御申上被下御都合の如何御回示被下度候

衲は來月四日歸山仕候　右取急ぎ　早々頓首

昨冬宗會後意外の結果を來し尊師までも帶累するに至れること遺憾千萬に候　あの場合他に展開の路なく乍不本意豫想外の結果を見るに至り候段不惡御諒承被下度候　向後之に酬ゆるの時あるべくと豫期致居候

時下寒威日加爲人法御自玉專一是祈候　早々不備

昭和二年二月十日

石禪　敬具

永光尊堂老宗師

○

金野仁三郎氏（秋田縣能代港）へ――大本山總持寺より

復啓　過日圖らず御目に懸り今回御懇書並に御地名産春慶塗盃臺御惠贈に預り　忝く御禮申上候

先考泰榮信士に御別れ追孝の志念切に其御舍利を當山に被納候　御芳志不堪感激候　至誠幽明に徹し慈光三際に輝く祠神如神在　今後朝夕御回向と與に益々健康を圖り　精進御勤修其天職を御盡し被遊候事追孝の第一義に可有之候

先は御禮辭旁如斯に御座候　時下御自愛萬々　早々不備

同師へ——大雄山最乘寺より

拜復　御道況益々御健祥御敎育奉恭賀候
過般は雨中雄峰へ御光臨不堪感謝候今回仰越趣謹而拜承乃ち十六日十七日兩日の中にて午後拜登可仕候可然御決定被下時間等は追分出張所まで御示し被下度願上候久しく御無沙汰是非拜登致さんと存じ居りしに願うてもなき機會と喜び居候
先は不取敢御回申まで　草々頓首

申六月六日　　　石禪九拜

孤峰林長老師　貴侍

敎職員諸賢にも宜布御致聲願上候愚徒三吉禪暢頑是なき者萬事御警策奉悃望候

○

同師へ——相州鎌倉跳龍莊より

諒陰之新年天地肅然　尊候幸に法身健寧欣喜之至りに候　微軀尙碌々毘耶城に靜居し慚惶不少候

同師へ——參州新城町永住寺戒場より

○

肅啓　増々御健勝恭賀不盡に候　御尊刹御殿堂再建の偉業玆に收　其功去る十四日を以て落慶の祝典を擧げさせられ候條祖門の慶事不過之候　迂衲各地流轉の爲め昨夕漸く御案内狀に接したるに依り祝電を呈するの機をも失し不堪遺憾仍て別紙聊か祝意を表し奉り候　間不惡御容納被下度候

先は御祝辭迄　誠惶不備

大正六年十月十九日

最乘石禪九拜

賴岳尊臺老尊師　貴侍

恭奉賀賴岳大蘭若殿堂落慶之祝典

金剛願力鑄心肝　再建殿堂新寺觀
賴岳從斯風月足　一天龍象簇華壇

大正六年十月吉祥辰

最乘石禪拜上

用の件本年よりとせんには時期相遅れ候得共教科書は永遠の事なれば篤と主任部に申談置候何れ御上京を待ち萬々可申上候

時下御自愛萬々是祈候　草々頓首

九月念一　　　　石禪敬具

孤峰尊老兄侍史

○

肅啓　不老閣猊下諏訪御宿泊之際は前後共不容易御盡力且特に遠方御送迎被成下猊下も殊に御滿足被遊貴宗師及道俗各位に宜敷御挨拶に可及旨　被　仰　聞候　條右可然御披露被下度候

先は御禮辭申上度如　斯　に御座　候　草々頓首

大正元年十月二十日　　　　甲州道喜院戒場

新井石禪敬具

頼岳尊堂老宗師

孤峰智璨師へ——（以下三通）

○

拜復　法杖自辭帝都東船北駕接衆度生法幸何事如之御尊囑敎科書云々敬承致候　唯々目下院内の傾向迂衲の鄙見と稍や見解を同うせず成否難豫期も精々主張する考に候

禪史の不備今昔の齊く憾みとする所尊兄今日の擧は禪史界に一道の曙光を放ち得たるもの歡喜の情難禁爲夫序文不思涉冗語却不堪恐惶不文の點は御削正被下度候

迂衲明旦北海道札幌中央寺に赴き月末歸京の心得に候　向下文長分付來日唯希爲法尊躬愛護

七月九日　　石禪九拜

烏石老兄侍史

○

拜復　道況愈御清寧奉賀上候

講習院生の件貴兄には餘りに滯水の觀あるも御希望に付今回の如く取計申候

禪史二部正に拜受敬誦　簡而備　全篇の組織禪派幾多之源流脈絡貫通　御研鑽の功勞不堪感佩敎科書採

駒形善教老宗師　近侍　　　　石禪和南

○

兒玉九十師（東京市外明星中學校）へ――大本山總持寺より

拜啓　益々御健祥奉恭賀候

陳者豫而御經營の明星中學校彌々官省の認可を得來月より授業御開始の段不堪祝慶候其趣意書を拜見致し理想の存する所を諒知し隨喜不斜候今後御豫定の方針に依り順調に伸展し學天の明星として敎育界に一新天地を打開せられん事を可期而待茲に不取敢表祝意候　早々不備

昭和二年三月七日　　　　石禪敬具

兒玉九十先生侍史

迂衲宿痾未癒療養罷在候

○

同師へ——相州葉山諸星別莊より

復啓　法身增々勇健傳法救迷情に御精進敎界の欣幸不過之候
菊地慧琳上座の逝去は豫て難症とは聞きしが斯く早く逝去とは思はざりし誠に不堪哀悼候　但臨終の態度正念往生の跡歷々悲みの中にも隨喜致候　本日は六七日に付此莊內の持佛壇にて御回向致候　別紙御傳達の上猶ほ口頭にて宜布御致誠相願候
日曜學校開設の由何より嬉しく存し候　渡布の折より心中希望し居りしも時期遲れたれば如何あらんと懸念せしが意外にも百名餘の應募ありしとは不思議とも稱すべき成績是れ多年の敎化と總代及信徒諸賢の御後援の力と思ひ難有感じ申候　債務整理も順調に進行の由貴師無間斷の努力誠に宗門の殊勳者とも謂ふべく深謝此事に候
老衲宿痾不癒四月御忌後親化先を代理勤行として葉山へ再來靜養致候　格別苦痛もあらねど呼吸困難の爲步行不可能目下呼吸體操と經行練習致居候　幾分快方を感じ候へば御安心相成度候
時下法身愛護專一に祈上候　猶院內一同總代諸賢佛心會婦人會諸君に宜布御傳聲可被下候　早々不備

昭和二年五月四日

葉山町堀內諸星別莊內

駒形善教老宗師　貴右

○

復啓　法身益々堅勝化門彌開展別院の整理順調に相進み道光追日發揚の段歡喜無量乍去不斷の御辛勞さこそと察入候圓通大士贊の儀敬承接手次第題書可仕候山本金井西村氏等の諸賢御健全にて形影扶護の段不堪感激候菊地萬吉氏肋膜の疾患相重り御臥床の由同情の至りに候佛天の加護御快癒懇禱致候

衲靜養已に三ヶ月氣分頗る快方に向ひたるも呼吸依然困難歩行不任意療養致居候到底全治は望みがたからんもせめて三四丁位の歩行に任へるやうと祈居候

北越稀有の降雪西頸城尤も甚し魚沼は先々平年の狀態なる由に候當本山も別狀無く宗勢依然不振衲の意圖も病魔に礙られ萬事多障是亦人生の常ならん

總代諸賢佛心會婦人會諸德に宜布御致聲被下度候　早々不備

昭和二年二月二十七日

駒形善教老宗師　　石禪

院內及信徒諸賢に宜布御鳳聲是祈候　早々不備

大正十四年十二月十八日

石禪敬具

駒形老宗師　貴右

○

肅啓　法身增々健全にて化門伸展勇猛精進の段法幸無量獅子吼不盡

迂衲昨年來病症一變して氣腫に惱まされ呼吸困難のため歩行不如意頗る難儀致居候幾名醫の診察を受けしも空氣療養の外良術なしとの事にて暑中鎌倉に休養せしも成績の見るべきものなし少し氣永に養生すべき病質の由に候坐して居れば格別の苦痛なし依つて隨意勤行の約にて巡回致居候

御地總代諸賢及檀信各位の御外護にて增々發展青年會館の如きよくあれ丈の事業をなし得たるもの哉と驚歎し且つ感謝致居候さるにてもその熱誠と努力とは實に不堪感激何卒よろしく御致誠被下度候

時下健康保任第一院內及各布教師諸大德に別紙同樣願上候　早々不備

大正十五年九月十三日認

石禪

即惜法身也御健康第一に願上候　早々不備

大正十四年立春

石　禪（花押）

駒形尊師貴右

○

粛啓　道况益々御剛健常恒無間斷の御活動法幸無量不堪欣慶候

佐々木宮坂兩師渡布に就ては初中後共非常の御厚待と御盡力とを被むり候趣殊に米大陸まで爲佐師御先導被下候事感激の外無之候猶青年會館の建造佐師の報告に依り豫想以上の建築なることを知り其經營辛勞と信徒諸賢の外護翼賛との絶大なるを知り歡喜難述盡候宮坂師は去る十一日歸朝せしも巡錫中にて相見せず同師も一先歸省し再び上京して詳細報告の豫定なる由に候

迂衲氣腫發病後已に兩三歳未だ快方に至らず爲に歩行困難を感じ活動を試ること能はず宗勢教運日に非なるを感ずるも積極的革正運動の第一線に立つ能はず慚愧千萬に候一月十日以後約五十日間思ひ切つて休養致し治不治を試驗可致候貴師異邦に在つて宗門を荷擔す其功勞莫大なり只々健康のみ最大至要に付夙夜吉祥を祈候

ありて好都合に有之候後醍醐帝御陵及後村上帝の御陵にては涙を絞り申候

○

粛啓　今回本重様御渡布に付此書を呈し候

御就任以來無間斷の御活動爲教界隨喜不斜候大遠忌及觀音大士銅像御建立に關し特別の御盡力を蒙り檀信諸賢等不容易の御援護不堪感激之至候猶當方の近況は本重様より御聞取被下度候本山復興工事も大概竣工致し三月十五日を期して觀音大士除幕開眼式を修行し當日は勅使門の開門式をも併修候久邇宮殿下其他の宮殿下御台臨被遊候事に御内定の様子にて喜居候記念事業たる横濱に於ける總持館の少年教化及少年保護の成績も簡易宿泊所の成績も宜布本山背後（境内に接續せる高地）の光華女學校も目下鶴見高等女學校の認可申請中にて教場増築中に候第一接賓の崩壞跡へは社會傳道館を建設すべく已に工事に着手致居候

世界的思潮は形式より精神へと進みつゝあるも伽藍儀式等を呪ふが如きは決して完全なる批判とは言ひがたし赤裸々なる精神に返り更にその精神より眞純なる儀禮と莊嚴とに進みてこそ信仰心を滿足し養成することを得べしと存じ候此意味に於て御地別院の内容形狀萬々相完きを祈望致居候

本重様に御托し申上候拙著三十冊は貴宗師信徒總代五員諸賢其他に可然御配呈被下度候非惜肉身

し大觀音の銅像も昨臘末御安座來る三月中旬除幕開眼式を擧行可致候　衲も病氣未だ回復に至らず呼吸不調に付常恒療養致居候　勉强好きの身も爲めに三分の一だも活動不相成獨り自ら慚愧致居候

別院も債務の償還事業の發展實に容易ならず只貴師の確志誠實熱心能く此の局に當るを得たり爲めに檀信諸賢の相呼應するあり敲唱双擧以て其步武を進む是皆護國護法の大行持而も世界人類の福音たり多謝多謝

勝沼先生目下御閑散の身となられ候趣今後は益々同人の指導に任ぜられ布哇に於て理想的に日米親善の實を擧げて移民地に於ける人道模範を示されたく切望罷在候　本洲に於て青年會館御成功今村上人より『同胞』御惠贈隨喜罷在候　御會見の折宜しく御禮辭願上候　婦人會より御惠與にかゝる鳳梨は誠に美味にして衆と與に歡喫し其度毎に布哇談を試みて樂しみと致居候

古語に善く身を養ふ者は常に病を病なきに治し良く心を養ふ者は常に欲を欲なきに去るといへり衲は無病の病を治せざりし爲めに頑痾に犯さる何卒豫後の御注意專一に祈上候　早々不備

大正十四年一月七日　　石　禪（花押）

駒形善致老宗師　貴右

再申　客臘は當山開祖に御緣深き七朝天皇の御陵及伊勢大廟畝傍御陵を參拜し宮內省よりも夫々御案內

き様致度應分注意を與へ居候
御地總代諸賢及檀信各位も皆御無事にて可被爲在此上とも一層御康寧御外護祈上候　柴山様山本菊子様等より御書面あり嬉しく感じ居候　後藤令室も無事着布の由安心仕候　民子殿も菩薩行感入候　暑きにつけ寒きにつけ布哇が近かくあらば抔といつも話題に致居候　されど其地に在りての經營は察するに餘りあり何卒玉體自愛不退轉に化門の恢張是祈候
院内各位及檀信徒諸賢によろしく願上候　早々不備

大正十三年七月念四　　　　石禪　敬具

駒形老宗師　貴右

○

新年之嘉瑞萬里同風貴師法身堅固被添法壽奉祝不盡昨冬は澁川師に托し珍菓を澤山御惠贈を辱ろし且御懇書を賜はり不堪感激候　加之檀信諸賢より本山震災御見舞及大遠忌獻供等段々の御厚志銘肝の外無之候　令室四大不調なりし由深憂に堪へず幾久しく加養健康至禱罷在候
『禪の光』嬉しく拜讀致候　會館設置の雄擧切に御成功を祈り候　本山災後の復舊工事も概略竣功

種の難問題續出國民之奮起すべき重大時機なるに內治の成績も意の如くならず憂慮に堪へず候貴師何卒一層の健康を保ち化門を擴張して國際道德の發達に御盡力奉仰上候

院內及皆々樣によろしく願上候　早々不備

大正十二年十二月十八日

石禪　敬具

駒形老宗師

○

盛暑の時節道況益御勇健恭賀不盡に候

去る二十日水谷長太郎氏來訪し布哇寄港の際は意外の御待遇を蒙りしとて幾度か感謝被致居候猶其際貴師の健全に奮鬪せられ居る樣子を說似せられ不一方欣悅致居候財政の整理化門の擴張檀信の接待百事一身に聚まり御辛勞如何計なるらん實以て宗門の幸榮に候

衲も巡錫三ケ月餘り此十七日漸く歸山し十九日より報恩攝心會を打し昨日圓成し明日よりは居士大姉の攝心會開始致候衲も五月以降身體漸く健康に赴き只今は動悸も和らぎ氣分も宜しく相成候間御安心可被下候米國に於ける排日法の施行は遺憾千萬なるも我國は此際一層愼重の態度を取り輕擧盲動の振舞な

○

同師へ——大本山總持寺より（以下七通）

粛啓　久敷御無音に打過ぎしが道況益々健祥利生三昧なるべく喜居候　各布教所及別院總代並一般信徒會員諸賢も御別狀あるまじと思ひ遙に祝福致し居候

九月一日の大震災は京濱を焦土となし相州を中心として千葉埼玉山梨茨城の一部を侵し戰慄すべき慘狀を呈し候　壞劫三災之襲來歟と思はるゝ程に被感候　本山も待鳳館を始め崩壞せる建物不少　殿堂全部に大破損を來し候　佛殿放光堂僧堂跳龍室が比較的輕微なりしため法要には格別の支障を感ぜず不幸中の幸に有之候

衲は宿痾未だ癒えず息苦しき爲め意の如く活動し能はざるも平日の法用や布教にはさし支無之幾分づゝかよろしき方に候　藥用は怠らず精々自重致し居候間先々御安心可被下候　近頃頓に寒氣を覺え布哇の氣候なつかしく候

別院の經營及教化門庭の施設御辛勞如何計りと察入候　石龍は雲洞祥雲師は宗務院に健在來馬師は震火の爲め赤裸々となり氣の毒千萬に候

加州に於ける排日問題の爲め近頃歸朝者多しと聞き布哇の狀況案じ居候　我國之威信未だ大に擧らず種

貴地信徒諸氏平穩和融殊に總代小林榮之助氏の御外護の如き洵に不堪歡喜候氏は卒直之君子信念亦不淺從前多少の行違ひあつて疎音となりしのみ若し機に投合せば大なる力となり玉ふべし凡そ教師の任に在るものは内に不平なく外に讎敵なし縱ひ一時反對に立つ人あるも不恨不憎惡言是れ功德なりと觀ずれば却て吾が善知識と爲りぬべし

木村氏の病は全治頗る難し同情に堪へず島津氏東京に入院せば代理慰問せしむべし秋崎氏の逝去不堪哀悼令息令室の心事感歎の至りに候佛心是神心奉佛卽敬神なり義夫氏の高雅誠信洵に菩薩乘の範とするに足れり東京龜井戸天神の滑川と申す方亦た深く佛乘に歸し常に佛心相應せざれば菅公の靈に奉ずるの資格なしとの信念を抱持せり衲は於本山安英上座の爲めに御囘向可申上候

別院敎團負債整理は最も重大事なり寺檀ともに其辛勞實に容易ならずと察し居り候演藝會擧行の事は日布時事の記事にて承はり能所の御盡力深く感激致居り候觀音大士の事は敬承候昨年渡布以來旣に一年朝夕なつかしく思ひ出し居候何卒御一同に宜敷御致誠此上とも文化的活動至禱不盡餘は後便萬々早早不備

大正十一年六月念七日

於富山縣眞如院

石禪（花押）

駒形老宗師

場也道人の住處選佛場に非るはなし衲は常に貴師を初め佛心會員教團員婦人會員諸君子の幸福を祈り其發展を悃禱して息まず山本夫人及坊ちやんも達者の由橋本様進んで御世話下さるよし山本古橋村田等の諸大士も相變らず萬々御取持ち下さることなるべし衲も今一度御地に參りたく切望の念不能禁候
各宗監督諸賢山本男爵勝沼先生等に宜敷御致誠被下度候　舊總代の方々にも現總代之諸賢同様宜敷御願申上候
餘は後便に可申述先は不取敢御禮旁近況御報まで　草々不備

大正十一年五月一日　　石　禪（花押）

駒形老宗師

○

同師へ——富山縣眞如院より

肅啓　本月六日貴書於當地受讀致候　法身増健康にて繁劇なる開教の要務に當り獻身努力の段喜悅不過之候　衲春來四大不調なりしも日一日快方に向ひ目下各地巡錫　當地より越に向ひ七月十三日歸山後約一ケ月間小田原にて休養可致候

候

衲三月中風邪の氣を受け醫士の切なる勸告に依り巡回を中止して靜養に專らなりし爲め健康增進四月十一日以後の御忌十六日の晋山開堂も無事圓成その後も引續き氣分宜敷まゝ來る八日頃より親化を躬行する考なれば御安心被下度候

去る十五日金井氏一行漸く來山團體の關係上宿泊も出來ず甚だ遺憾その際佛心會發會の寫眞を見て愉快極まりなし自身もその中に在るが如き心地せらる尙ほ布哇信徒の御意嚮等詳細聽取し隨喜不斜候

山本氏兩度來山せられ嬉しさ限りなし尋て森田氏御一行來山情致密々只緩々と宿泊の出來ざりしこと殘り惜しく感ぜらる昨日磯部夫人始めて來山ゆる〱の御籠り三兒同道久々ぶりにて可愛き顏を見て最と嬉し子供達も內地の寒さにて弱りし樣子一番小さき子は上陸以來風邪にかゝり爲めに昨日漸く來山するに至れりとかや昨曉石龍は代理親化先へ侍者として出發せし後にて遺憾なりし

布哇別院善後の整理不容易貴師の大願行持に待つこと最も多し幸に貴師健康を保持し勇猛精進守成の大任を盡されなば洞門の幸榮不過之候今朝も佛心會寫眞を熟覽して親く面會するの感あり又磯部夫人に御托しの婦人會よりの祝賀鬼武龜谷兩夫人よりの祝賀ありがたく納受いたし候侍局より輕少ながら回信の意を表せしむべし何卒皆々樣によろしく願上候

佛心とは大慈悲是れなり文化向上の進修是れなり忍辱精進是れなり椰子樹の下芭蕉葉の邊悉く是れ道

肅啓　衲渡布以來甚深無量の御孝事殊に大陸への同行終生記念すべき一大事因緣と感謝不能措候　桑港よりの狀に接し思ひの外早く歸布被下信徒諸氏も定めし安心且つ歡喜せられつらんと察し嬉しく存候　衲も歸來一日も休息の暇なく強て勤め居れり健康には異狀なきも息ぎれ強し依つて一月に入りなば暫時靜養すべく候　當地の寒きに付布哇の氣候戀しく候

別院も善後整理之事容易ならさるべく精々御盡力被下度尙ほ磯部宗師と協議敎化の進展を御圖り被下度候　御世話人諸賢各宗監督婦人會別して後藤小出小黑古橋光長山本村田菊地等の御方々御近きの諸氏に別紙同樣宜敷相傳へ被下度候　院內の御內侍及孃にもよろしく願上候

時下一層自重自愛專一に候　耕地の道俗各位にも同樣願上候　不備

大正十年十二月十一日　　石禪

駒形善敎老師

○

同師へ——大本山總持寺より

肅啓　過日は鄭重なる書信及敎團並婦人會役員名簿御贈り又晉山に付格外の御祝賀御寄贈不堪感激之至

同師へ――（以下二通）

米國巡錫も恙なく滿了し歸布せられ且つ其後も再度御書面嬉しく披見致候告別以來旣に九旬玉曆改端壬戌之新日月を迎ふ貴師幸に無事增〻化緣を恢暢せらるゝこと何喜過之

衲亦無事臘來健康上些子の障礙あり半ば勤勞半ば靜養致居れり去れど格別の事もあるまじ世は無常なり山口實岩和尙遷化せしこと驚悼に堪へず世上には原宰相之凶變大隈侯の病歿悲風難息社會人心の推移益〻五濁世の相を示す實以て可慨四國協約は太平洋の平和を保障する關鎖なるも列國呑噬之毒牙尙ほ脫せざるに似たり佛敎は依然として日午に三更を打し居れり噫〻

貴師願くば法身を愛護し徐行式に敎線の擴張所祈に候衲寸時も布哇の地を忘れず寒氣强きにつけいとど思出し居候

院內御一同及檀信徒諸賢に宜布願上候　至祝

大正十年一月吉日　　石　禪（花押）

駒形善敎老具壽

○

駒形老宗師

○

同師へ――滿洲安東相晉寺より

粛啓　便船の都合上月末迄御滯錫寧ろ諸般の御支度上好都合と存じ候布哇は熱帯地域に屬すべければ氣候の御障りなく御健全に傳道の偉功を建てられたく不堪希望候　衲も無事昨日當安東に着昨夜之講演にて滿鐵の囑托を完うし　幸　に道俗の滿足を得たるものの如し嗚呼布教　哉　彼の　基　教徒の如き其熱心努力感歎の至り彼此相較して慚愧不少候

御出立前親しく相見を得ず遺憾不可言乍去君子同風相離而不相離衲は長く貴下を以て室内の鳳雛とも思ふべし貴下亦衲を見る事親の如くなるべし只今來賓續々筆を執るの暇を得ず略書以て健康を　祝　上候　頓首

大正八年六月念一日　　於安東相晉寺

石　禪　敬　具

駒形善敎老宗師

○

粛啓　御尊刹戸羅會之際者初中後一貫多大之御厚情を辱ふし不堪感激之至候殊に御法類及隣峰之尊宿並檀頭世話人各位之御盡力至矣盡矣深く感謝致居候往復共雪路之事とて青年諸氏等にも一層の御骨折を相懸け不堪恐縮永久に記念して其厚意を銘肝可致候間皆々様に宜布御致聲願上候
九旬無爲法運益隆昌是祈候　先者御禮辭まで　頓首

大正七年五月八日　　最乗石禪和南

善照尊刹駒形老宗師　侍史

○

貴書敬讀致し候處雲洞補佐萬々御盡力感謝不盡に御座候今回海外布教師に被命雲洞辭任の趣一面爲宗門歡喜無量なると同時に雲洞僧堂の爲めには多大の困難を招致することゝなり恰かも暗夜に燈火を失するが如し何卒御後任に付十分御協議之程奉願上候
山雲海月は拜眉可申上候　早々頓首

未三月廿五日　　石禪和南

○

草柳駒子氏（相州小田原）へ――大雄山最乗寺より

粛啓　梅雨の候鬱陶敷折柄御恙も不被在候哉過日大雄山開扉の折特に御參拜被下忝く存候
其後覺禪力生に御托し御令孃の遺帯御惠贈洵に淨潔美麗の御品御袈裟として永く之を披奉し御菩提を弔らひ可申候
何れ七月十六日頃には箱根神社參詣の途次御伺可申上と存候
時下御自愛是祈候　早々不備

申六月二十八日　　　　最乗石禪

草柳駒子様

○

駒形善教師（布哇ホノルヽ曹洞宗別院）へ――大雄山最乗寺より（以下二通）

間此段不惡御了承被下今後益々親密に御後援の程不堪切望候衲病軀未癒暫時閑地に靜養仕居候
御貴下も一層御自重希上候　早々不備

大正十二年二月十日

石禪敬具

圓德黑島老宗師貴下

〇

倉田松濤氏（東京市）へ――大本山總持寺より

肅啓　御母堂樣御事御養生不被爲叶御逝去被遊候趣承り奉驚入候　御孝心最も深く被爲在候事とて御愁傷如何計りと察入り不堪哀悼之情候御病氣の事すら不存甚だ御無禮致し候不取敢以使僧弔問申上候　七十七歲の御高齡にて安らかに御終焉の由是實に平素御信念の所致且つ御孝養厚きに依る者と想像致候　迂衲父は六十一歲にて歸奠し母は七十二齡師僧は八十歲にて寂し候　哀別離苦の情は恰も早世せられたるが如く被感哀痛絕言語候　御尊念も斯くあらんと切に同情に堪へず候　靈性超生滅相覺道融去來跡御追孝の眞情豈有幽明之別　玆に恭く奉表弔意候　誠惶不備

大正十三年十二月十六日

總持石禪敬具

新年御目にかゝり親しく御高見をも承り且つ鄙見をも披陳致度候先は御回答旁々御願まで如是御座候　早々不備

大正十一年十二月念八日

石禪　敬具

黒島老宗師　貴侍

○

粛啓　過日鶴山へ御招き申上候折御風邪にて御來山不相成遺憾に存じ候其後御恢復とは相察し候得共餘寒尚未消折柄なれば十分御用心被下度候去る五日御來山の諸師に對し申上候事は御聞取被下候事と察し候即ち本山出張所監院任命の事由に候

客臘特に來山御忠告に預かり深く其御好意を謝し上候得共既に内命決定後に有之候を以て之を變更することは實に容易ならず再三熟考の上御忠言に對し一層その責任を重んじ將來を誡勗することゝし只將來は一層諸師の御意見を尊重し本山の使命を果すべく致度その趣諸師に御報告致しその御諒解を求むる所存なりしも未だ十分に行渡らず殊に御貴下に對し親しく御報告に及ばざりしことを聞き一月初旬特に御光來を乞ひしが書面遅着の由にてその機を逸し候爲め更に改めて去る五日の御來山を仰ぎたる次第に候

○

黒島弘禪師（東京向島圓徳寺）へ――大本山總持寺より（以下二通）

拜復　御書面本日接手敬讀仕候過日は御來山の上御懇切なる御忠告深く感謝仕候然るに今回御希望に副ふ事を得ざりしは甚だ遺憾の至りに候へ共既に任命を了したる（公然の手續以外なりしも）上之を變更する事は容易ならず幸に御忠告の次第を承はり候得ば今後は十分に警戒し宗務上の綱紀を肅正せしめ且つ豫て御進言に預かり候事も其一部分を或る形式の下に實現し以て貴師等の御要求に從がひ度種々苦心を凝らし居り候儀に有之候

合想事親しく申上度は山々なるも發表の時期に達せざる點も有之候爲め遠慮致居候就ては今後は何彼に宗務及本山の上に於て萬事御後援を賜はり宗政上の內外に一大刷新を加へ宗門の發展を促進候樣御扶援相成度切に願上候

彼の一仕論の如きも議論上行詰りの結果假定せしこともありし由なるも武山側の者は其後斷然之に反對し最後にて其方針を確守せしものに候貴宗師等との間に於て今少しく融通交和の機會あらば相互諒解する所ありしならんも事毎に疎隔を來すが如き狀態あるは甚だ遺憾に存候迂衲事理に迂遠只其心情のみ宗門の平和と諸師等に對する親厚とを望むこと最も切なり何卒迂衲の微衷を察し宗務上從前の過失は或點まては之を恕し專ら力を今後の整理と進展とに注ぎ被下度不堪切望候

内の狀勢も時代と與に一大進展を要すべき重大なる使命あることは言を俟たず殊に太祖大師大遠忌營辦に關する各般の準備は着々之れが進行を圖らざるべからず本山に取りても宗務院としても實に容易ならざる時機に有之候へば萬一内部の一致を缺き若くは外部の動搖を招くが如き事あつては本山の不幸之より大なるは無之候

依つて迂衲は去月以來思ひを凝らし慮を焦し月初より幾數回の内議に諮ひ結局此際は是非々々　貴老宗師の道念に訴へ枉げて出張所監院の職を繼ぎ被下候事を切望致候中村方丈等の御話しに依れば種々御要務の爲め赴任を許さゞる御事情有之候趣に候得共本山及宗門の事態は實に前述の如くにして　貴老宗師の諾否は本山の安否に關し宗門休戚の繫る所なるを以て萬難を排し千障をさし繰り敢然御承諾を蒙り度奉懇囑候其事情の詳細は筆紙の能く盡す所に非ざるを以て今回特に本山伊藤副監院を專使として上山せしめ迂衲の衷情を披瀝して親く御賢慮に訴へ候間十分御聽取の上本山の爲め宗門の爲め斷乎として御就任御承諾相成度茲に切に御願申上候書不悉意萬々御洞察被下度候　早々不備

大正十一年十二月四日夕認

總持貫首　石禪　敬具

黒田鐵巖老宗師　貴侍

昭和二年五月四日

總持石禪

菊地亥四男様

母堂きん子様

○

黒田鐵巖師へ――大本山總持寺より

肅啓　寒氣追日相募り候處　惟　尊臺老宗師道況益々御清穆之段法幸無量恭賀不盡に候　迂衲幸に瓦全御省念被下度候　過般議會中は親く御歡待可致餘暇なき爲め意外に缺禮仕候

陳者今般當本山出張所監院杉本老宗師辭任被申出右は夏以來の御要求にて不得止事と存じ候　其後任を選定するに當り此程　貴老宗師始め正眼善篤等の諸師連署の御書面に接し且特に中村岩山の兩師上山せられ愛山護法の誠意より懇切なる御建議に預り深く感激致候得共熟々內外の形勢を察し宗門多數の意向を考慮するに最も圓滿に且堅實に進むべき路は　貴老宗師の御就職を煩はすの外他に適當の術なきことを認め候

明年は改正宗憲を實施すべき宗門革新の時機なるのみならず之に關する幾多の準備と施設とを要し且つ宗

菊地萬吉様及御家內　御中

○

粛啓　御尊父萬吉様養生不相叶遂に三月二十四日を以て御逝去被遊候趣奉驚入候御年齢の上からも猶ほ前途ある御身にて不幸御夭折の段遺憾の至りにて哀悼難禁候貴下始め御母上の御愁傷さこそと察し同情に堪へず候

唯御臨終の際家族知己の方々と握手して正念往生し玉ひし由殊に彼岸法會中に御永眠なされしこと旁以て慈光圓通大安心を得玉ひしことゝ存し悲しみの中にも聊か法悦を感じ候

迂衲も夙縁深厚なりしにや渡布の際に特別の親しみを得その後數回書信を交換し不一方懐味を感じたるを以て取分け愁歎の涙に咽び直ちに徳光院の靈名を內佛に安じ本日は六七日に當るを以て特に御回向に及び候

父君遠く布哇に渡り幾多の苦辛を重ねたることなれば能く其志を繼ぎ擧家一同健康を第一とし家業を開展し一家和合輯睦能く父君の靈を祠り母上に安心を與へられ益々幸運を招徠せらるゝ様切望致候

先は右御弔詞まで　早々不備

以後天氣つゞき元旦抔はめづらしきあたゝかさにて有之候一月と二月丈は人々の勸めにまかせ鎌倉にて休養致居り時々治療の爲め東京に赴き候されど氣分はよろしく精神は日々是好日に候間御安心被下度候

御令室及令息御夫妻御康安の由何よりの幸福この上福壽長久にて家運興隆祈上候先は御賀詞やら御禮やら千萬無量に候みな〳〵さまによろしく御致聲願上候　早々不宣

大正十四年一月七日

總持石禪（花押）

菊地萬吉樣

○

御新詞を賜はり忝く存じ候

御一家無事被迎乙丑之新天地欣慶不過之候寒さの折御怪我の局處御痛みなきやと案居候御令室及賢息愛子御健祥何よりの御事向後增々渾家和合勤儉努力好運の開拓專一に祈上候別院の外護宜布願上候

早々不備

大正十四年一月三十日

總持石禪（花押）

菊地萬吉様
同きん子様

○

新年の嘉運目出度く迎へられ候事と祝し上候昨臘は細々の御書面忝く拜見仕候

昨年六月には不測の御災難實に戰慄すべき大危險に遭はせられ御怪我なされ候事御手紙により今更ながら驚愕の外これなく候爲めに長々の御療養さこそ御困難被遊候御事と御同情に堪へず候

過般澁川師上山の折は折惡敷不在にて面會を得ず歸山後委しき傳言に接し御厚意ありがたく奉謝候震災の御見舞やら觀音大士大銅像建立の御寄附やら御信心のまごころ海山かたじけなく感謝致居候本山も

昨年末までに大半復興の工事も竣成し觀音の大銅像も別紙の如く十二月二十九日に御安座來る三月十五日を以て除幕開眼の御供養可致豫定に候

雜貨小間物御開店の事は『禪の光』にて承知し業務の御繁榮を禱り居候別院も漸々隆昌不堪歡喜候貴下及御令室を始め間藤西村鬼武光永河合古橋等の諸仁者不斷の御盡力誠に以て銘肝の至りに候

當地晩成石龍皆無事獨り衲は痼疾未癒只今はX光線の治療を試み居候昨冬降雪早かりしか十二月中旬

菊地萬吉樣
同きん子樣

○

肅啓　益々御健勝恭賀不斜候　過日は御親切なる御書面忝く拜見致候
關東の大震火災は空前の慘狀を呈し痛恨の至りに候　今亦大不敬事件勃發國家の爲め遺憾の極みに候　當本山も亦多大の震害を被り候得共　幸にして火を失せず死傷者を出さず徐ろに復興に從事せしめ居候
衲は近頃身體も快方に向ひ明年二月下浣まで在山致候　此程橋本萬槌樣來山久々にて御目にかゝり御地の話を聞き嬉しく感じ候　病氣の爲め寒氣を恐るゝ身は時々御地の事を思出しなつかしく存候　別院も漸々に盛大に相成候由なにより嬉く候　皆々樣の御盡力感謝に堪へず觀音大士は慈悲忍辱の御姿なればみなみな樣も堪忍の衣をまとひ慈愛の室に住し信仰の力を養ひ福壽海無量の功德を成就せられたく候
鬼武間藤龜谷古橋等の方々惣代各位光長小黑等の方々に宜布御願申上候　此上とも一層御身御大切に祈り居候　早々不備

大正十二年十二月二十八日

北里雄平様　侍史

御親戚及瑞龍檀信の方々に宜布願上候

○

菊池萬吉氏（布哇ホノル、市）へ――大本山總持寺より（以下五通）

遙かに御佳運の年とゝもに新たならんことを祝し候早々御祝詞に預かり忝く存じ候
昨年は御地長々の滯錫初めより終りまで一方ならず御厚情御禮申盡し難く候殊に得度の式を遂げ盡未來際つきせぬ因緣を結びぬること嬉しさ忘れがたし今後增々御健勝にて御令息も無事御成功永久の御安心祈上候
內地は稀らしき寒氣にて信越方面未曾有の大雪なりとぞ御地の溫暖にして花實に富める樂園いとなつかしく候鬼武間藤龜谷の諸氏もおすこやかにおはすらん相互に家內和合福壽長久を祈りあげ候
世は何事も平和を大切とす心の平和家の平和國際の平和之を妨ぐるものは貪婪憎嫉なり一身一國みな同じ共々に眞純なる平和を保ち現在に淨土を莊嚴致したく候
御令息は將來望み多き身なれば常に慈愛忍耐精勤の三德を守り品行上些かの誘惑にも應ぜざる樣切に祈望致候猶皆々樣にも宜布御致誠可被下候頂戴の眼鏡は日々大切に相用ひ居候先は御禮旁　至祝

大正十一年一月吉旦

○

北里雄平氏（熊本縣阿蘇郡北小國村）へ——大本山總持寺より

拜啓　益々御健勝の段恭賀不斜候　御兩親樣を始め御令室御賢息皆々御安康の御事と察し欣喜罷在候　瑞龍寺授戒會の際は初中後共周到なる御厚情を辱ふし特に御送迎を賜はる而已ならず歸途に圖らずも三義學舍に一宿を賜はり清潔なる新室に於て緩々休息し且萬事萬端水も漏さぬ御展待只々銘肝罷在候　殊に靈夢山頭には紫雲臺を新築し水路を開き其他一切の設備咸く御盡力の致す所深謝筆紙に盡し難く候　加之早朝親く寺庭を淨め冷水を撒し玉ふの行持を拜し不一方感激致候　又御本宅と御隱寮との間も水田を其まゝ稻草の青葉に波うつさま如何にも難有御兩親の御思召の程も被察歸山後信者の人々にも此事を物語り居候　山岳重疊綠樹陰森風光神秀凉味可掬窓前籬外宛然たる一大庭園と謂ふべし而して世の所謂珍草奇花よりも稻葉莖一段の風趣を感ぜずんばあらず誠に奥ゆかしさ極りなく被存候　御別れしてより途中一點の障礙なく如豫定歸山致候間御省念被下度候

先は不取敢御禮辭申上候　御兩親樣御令室樣に宜布御致誠被下度候　時下折角御自愛是祈候　早々頓首

大正十五年八月念二日

總持石禪（花押）

五月二十一日　善根にて

木村隆観殿　雲洞石禪

○

木村雲外師（朝鮮鎮南浦道海寺）へ——大本山永平寺より

寒威猛烈　恭惟　老宗師法躬萬安奉南山候

陳ば板垣翁壽年祝詞從貴命絹地を汚し候處種月方丈より不老閣猊下に御揮毫を乞とて白紙二枚迂衲へ送られ絹本に認めし後にて冠履顚倒大に恐縮を覚え候得共劒既に去る舷を刻するに由なくそのまゝ差上申候間宜布御取計被下度候

本年は一層布教的大活動所望不盡に候　時下萬々自重

二月十四日　石禪和南

木村老宗師侍右

松岩隆観力生 座下

○

同氏へ――越後刈羽郡善根村淨廣寺教場より

貴狀本日此地に於て落手披見せしに愈々住持職辭令下附に相成たる由何よりの喜び何よりの幸 迂衲の歡悅比するに物なし檀中の滿足亦た此上あるまじと存 候

衲昨年來の病 未 癒 も兼ての約束なれば兩三日前當地に來たれり二十七八日には歸菴する心得に 候 併し幾分快方なれば安心可有之 候

扨住持職になれば猶ほ以て各種の事に付責任が重くなり中々容易ならず屋根の心配會計の用意檀務寺役頗る錯雜なるもの爲 夫 自然俗化し去りて世俗と同一の狀態になり易きものなり而れども忙中の禪と申すことあり修行は生々世々なり師匠は三寶なり何卒從晝至夜僧堂裡の王三昧を離れず左轉右轉に道を修し法を行はれ 候 樣不堪希望 候 又力の及ぶ限りは老人でも少者でも一言半句の法を施し佛道の勝緣を結ばしむるを第一とし又時々に布敎の筵を開き宗風を擧揚し玉はるべく賴入 候 衲も他日其地に至らば寄錫可 致 候 呉々も賴入 候

又身體を大切にし組寺方の交際等は和順を旨とし自己の行持は嚴格ならんことを要す 至切不可窮盡

喜悦不少候その內御藥を願出づるもの可有之宜布御取扱被下度候何れ再會萬々謝悃可仕候
時下暑威昂進御自愛專一是祈候　頓首

申七月七日

最乘石禪

春日縞吉先生侍右

○

木村隆觀師（山形縣飽海郡田澤村龍雲寺）へ――越後雲洞菴にて

本師遷化せられたる由哀悼の情に堪へず世に父母師僧に別るゝ程恐しきことやある生死即涅槃と徹證するも恩情は亦格別なり從晝至夜師恩を忘れず行持供養せらるべし
貴和尚は道念深きを以て衲は子の如く思ふぞかし一生を通じて其道念を保任せられよ是れ第一の孝行なり師席を繼ぎなば一層堅固に自覺々他を勵まれよ　穴賢

三月十一日

雲洞石禪

力誠を捧げ斯道に奮勵し玉ふ補成の功その宜しきを得たるものと思ひ深く敬意を表し候
今や昭和の第一春を迎ふ昭明は文化の發展を稱すべく和協は國家の治平を見るべし智は德を待て明かに和
は道を得て完し此上とも貴校能所共に健康にして精勤輯睦して向上せらるゝ樣切に奉祈上候
先は右御禮まで　早々不備

昭和二年二月十七日

新井石禪

東京家政女學校
牛込高等女學校
校長　河村常子樣

教職員諸賢後藤君及生徒諸氏にも宜布御致誠願上候

○

春日嬌吉氏（東京市）へ――越後北蒲原郡鴻沼村光賓寺より

肅啓　過日は初て拜顏圖らず感應の靈話及び濟生の御高志を承はり不堪感激候
今亦滋養素外二種の妙藥御贈り被下一層ありがたく御禮難述盡候氣管支病者及び虛弱者に披露一同の

御全快までは萬事を放下して醫師の仰せに打任せ心中には觀音大士の御慈悲力を喜び福壽海無量の光明に浴され安心三昧に任せられなば人力佛力相合してその効驗大なるものあるべし衲亦切に三寶の冥加を祈り上候

かはむらのきよきながれにみほとけのひかりをやどす慈悲の月かげ

大正十一年八月二日

石　禪（花押）

河村常子樣

○

拝啓　殘寒猶嚴しく候處益御健祥の段奉恭賀候衲こと昨春以來病勢漸次相募り醫師の御勸めに昨臘以來萬緣を謝して靜養致居候得共痼疾未だ快方に向はず爲めに御無沙汰にのみ打過候段申譯これなく候

今般會報創刊號御惠贈に預り大歡喜心を以て拜讀致候創業以來三十五年を過ぎ終始一貫女子教育に渾身の力を致され純眞なる國民精神を經とし健全なる信念を緯とし醇厚中正の淑德を增進せしむべく努力精進せられたること好個の大菩薩にして教育界の爲感謝措く能はざる處に候而して是れ教職員諸賢が同志戮

○

川村常子氏（東京市牛込高等女學校長）へ―大本山總持寺より（以下三通）

肅啓　過日來御病氣御臥床の由承り驚き入候　先刻電話を以て御伺ひ候處昨日よりも御容體宜しき趣き聊か安堵致候得ども大暑の折柄特に朝夕氣候の激變も有之候へば層一層御療養被下度候
御尊體の健否は學校の進運に關するもの有之候に付衲も昨夜より御平癒の御祈念致居候念彼觀音の功德力福壽の海無量ならんことを切望に堪えず候
先は不取敢御見舞まで　早々不備

大正十一年七月十八日

總持寺

石　　禪（花押）

河村常子様

皆々様に宜敷御致聲被下度候

○

肅啓　過日はわざ〳〵後藤師をして遠路御訪問種々頂戴物いたし忝なく御禮申上候御病氣も追々御快方の趣何より嬉しく候

前記の如く佛教主義の女學校なるを以て其盛衰消長は佛教の威德にも相關すること不少儀に有之候條右事情を諒察し且つ教育上佛教上關係甚深なる事を洞鑑せられ該學校移轉改築事業を了する迄の處同師の不在を認容せられ度此段特に御依賴に及び候　猶詳細の事は吉祥院方丈に申通じ置き候まゝ御聞取被下度候

先は右懇囑まで如是に御座候　早々不悉

大正十二年八月十三日

大本山總持貫主　新井石禪

長泉寺檀家總代

川端六兵衛殿

川端莊松殿

佐々木仙太郎殿

川端安太郎殿

猶檀家一同にも別紙同樣宜敷御致聲相願候

笠井幾太郎様
同　きよ子様

○

川端六兵衛氏其他へ――大本山總持寺より

肅啓　益〻御健祥にて寺内外護に御盡力被下候段不堪感謝候

陳は貴寺住職後藤道鑑殿事多年東京新小川町家政女學校に勤務し寺務を閑却被致候爲め今般本師吉祥院福田南舟師特に上京せられ後藤殿の歸寺を被促候右は御尤の次第にて各位及檀信徒氏の御意志も萬萬酌量致候得共右家政女學校は河村常子女史佛教主義に依りて創立し苦辛艱難の結果遂に今日の隆運を呈し校舍の狹隘を感じ大正八年以來移轉改築の計畫を起し仁人志士の賛助を得近き中に愈々事業に着手する事と相成候其の爲め目下内外の要務蝟集し該學校に取りては千載一遇とも謂つべき時機に有之候而して其幹部は外援者を除きては河村女史を始め何れも婦人の方々なれば細大の事總て後藤殿を頼りと致すのみならず同氏の教育に熱誠にして萬事に親切なる廣く内外の信用を高め居候事とて此際同氏にして退身せば學校の事業にも容易ならざる頓挫を來す事に可相成候

びか推しいたゞき早速着用いたし候年老いて病ある身には一しほうれしく感じ候今春はさむさもつよく御地は雪も深かるべければ十分御用心御一同健康第一に祈上候先はとりあへず御禮まで　可祝

大正十四年二月七日

石禪

笠井幾太郎様

同　清子様

○

肅啓　先般安善寺へ寄錫の折は御先考の御追善にて種々の御供養を被むり今回は亦みごとなる柿澤山わさわさ御惠贈本日着早速佛前に供し且拜味致し候處十分の甘味ありて一同も大喜び多數の人々にも分與し相共に御厚情を感謝致し候

本山授戒も明日圓成今日までは萬事好都合に有之候へば御安心被下度候

先は不取敢御禮まで　早々不備

大正十四年十月二十六日

明は函根と鎌倉とを隔てず

　世を照す補陀羅の月の影すみて六の暗路も光りとぞなる

北野禪師齋藤家別莊に御靜養とやら御すこやかとは申ながら御老體殊に當春御病後の事なれば精々御守護申上くだされたく候

かへす〴〵も御身の御用心せん一九分までは醫戒を守るの要あり一分は心の力にて養生を扶くること肝心ならめ

佐藤どの外一同によろしく　可祝

　昭和二年八月四日　　石禪

　片桐慈光様

○

笠井幾太郎氏（新潟縣長岡市）へ―大本山總持寺より（以下二通）

寒さきびしき折ます〳〵御すこやかにおんくらしの事何より嬉しく候

此たびはまごゝろこめて御あみ玉はれし肌着を贈り下され御こゝろづくしの程うみやまありがたくいくた

昭和二年一月十六日

片桐慈光法尼　光明臺右

毎朝川合氏の靈に御回向致居候

○

同氏へ――相州鎌倉より

一昨日佐藤女史わざ〳〵御つかはしかず〳〵頂戴もの乍毎度御親切の程御禮のべつくしがたく候貴體も腎臟に多少御さわりありとやら總じて病は輕きうちに治すること至要なれ內臟のやまひは猶更なれば何卒御身を輕視せず十分に醫療をも施し大丈夫の御身となり玉はれかし福澤桃介氏も腎臟にて手術を施されにしその後の經過大によろししとのこと承り喜び居り候

私も病勢甚だつのりしため此身を人まかせにして二ケ月程入院せしも格別の効見えずその內あつさもきびしくなりしかば去る二十一日當莊に移りしに二十七八日ごろより少しづゝ呼吸もやはらぎ餘程樂になり五六丁位は靜かに散歩し得るやうになりたりやはり物療の効能ありしものかとも被思只今は極々氣まゝに休息し時々散歩して呼吸を練習いたし居り候これも偏へに觀世音菩薩の御冥護なるべし慈悲光

普門院禪鑑慈光尼首座

と淨書致候觀音大士の御子なれば普門院と稱したり行住坐臥皆是れ慈悲圓通の光明弘誓海中の行持に有之候

時下一層御健祥祈上候佐藤尼外皆々樣によろしく御鳳聲願上候　可祝

大正十五年八月二日　　石禪

片桐慈光樣

○

肅啓　川合豐二郎樣遂に去る十一日を以て御逝去の事哀悼に堪へず候

春秋に富み而も有爲有望の材器にして不幸難病に侵され此悲しき運命を見る如何にも同情に堪へず況や貴法尼の愁傷落膽は如何許りならん深く同情の涙に咽び候逃れ難き夙緣と御あきらめ圓通の慈光に浴し弘誓の船に乘じ菩提に回向して冥福を資助し玉ふこと至要に候

衲呼吸も今に困なんなるも身體はいくぶん力づき候樣被感候佐藤尼外一同によろしく願上候　早早不備

候當山も觀音大士御本尊なり又自然石の尊像あり一昨日除幕式を行ひ申候
大慈悲光明は照さぬくまとてもあらじ箱根の月も千曲川の月もかはりなし君子は千里同風なり
自愛萬々又一同によろしく
南無大悲觀世音

寅四月二十日　　於信州玄照寺　石　禪

片桐慈光さま

當地は只今梅滿開櫻は少しく芽を出せしのみなり

○

同氏へ——大本山總持寺より（以下二通）

此程は佐藤尼をわざ〳〵御使はし且何よりの淨紙及過分の御見舞ありがたく御禮申上候每度の頂戴物却て勿體なく候師弟の緣結びぬる以上は決して〳〵物質上の御儀禮を見合せ被下度慈光塔建立の誓願あり其他財法二施多ければ衲への御心配なく心々相通じ信々相感じ候にて十分に有之候
昨日寶塔を揮毫するに臨みかねての用意により院號を御授與し首座號を附したく乃ち別紙の如く

○

同氏へ——大本山總持寺より（葉書）

たづねみよ教の外の法の花こゝろの奥のこゝろ根に咲く

きくまゝに聞くとも知らぬ鐘の音は軒端の梅の花や知るらん

初節分に歸山し八日ごろまた逗子に參るつもりに候御手紙拜見せり

寅二月五日

鶴山禪叟

片桐慈光さま

○

同氏へ——信州玄照寺より

過日も御上山萬々御厚意忝く存上候

慈光文筐別封の如く書したるも右にて宜しきや若し收まり工合思はしからずば何時にても書き換へ可申候

當地朝は中々寒くために息ぐるしく頗るなんぎ致し居候追々よろしくなるべく候へば御心配被下間敷

片桐慈光様

○

同氏へ――山形長谷道場より

貴書本日落手披見せしに増々御健勝にて改名の許可の指令ありつる由祝しあげ候

みほとけの御慈悲のひかりにてらされつゝ常に慈悲の光りを三業の上に放ち玉はゞ忍辱の力信念の行その身にそなはり草木叢林にも甘露のめぐみを感じ喫茶喫飯にも大道の圓通を證し佛法ならぬ天地なく宗乘ならぬ山河なし大涌谷のひゞきも眞如の古曲二子山の紅葉も實相のにしきなるべし家庭即殿堂隨處是道場なり

衲本日當地に安着同山には雪未だ融盡さず朝夕の冷氣身にしむこゝちせり地方人の純なるさま見るに快く候

御身大切になし下されかし

大正十四年九月九日　山形長谷道場

石　禪

片桐慈光さま

致居候

川合さまはいかゞにやと御案申上候御名號一枚は川合さまにさしあげ被下度候

御家内中によろしくねがひあげ候　可祝

大正十四年五月二十日　　石禪

片桐慈光様

○

大暑の折柄益々御健勝喜悦不過之候

傳光錄御看讀の由不順の氣候中にも清涼の甘露水を掬せらることなるべし衲も無事にて中々いそがはしく

送光致居候二十一日には大雄山へ上る考に候

此上とも御自愛專一に祈り上候

のりの道ひらく箱根の山の上に慈悲のひかりをみるぞたふとき

大正十四年八月十五日　　石禪

はれたし多數の筆にて成立することそ却て貴き因緣にてあるべし
時下一層御自愛專一祈上候若し上山被下ば三月一日とまりがけに

大正十三年二月二十六日　　石禪

一福慈光殿

○

豐川白麟方丈御遷化の御樣子並に遺偈御知らせ被下ありがたく存じ候東京名物の羊羹もいたゞき觀音大士へ御供養して後拜味仕り候

白麟方丈は最乘晉山式の歸途貴宅に寄杖それより因緣を結び玉へる由いろ〳〵の事思ひ浮べひとしほ哀悼の涙にむせび候

同方丈は孝行にすぐれ妙嚴寺住職後も御師匠の足腰を按摩せられき又衲が御油海岸の小林別莊に泊りし時は自分で溫飩をうち予に入浴の折背を流し玉へるに恐縮せしことありき近世稀有の道人なりしに惜しきことを致したり來る二十七日午前に豐川に參上し親しく眞前に香を捧げ可申候

それより一旦鶴見に歸り六月四五日頃また〳〵出かけ可申その後は身體に異狀なく十分用心しつゝ巡回

河合師も一月より東京本山出張所詰となり尤も大雄山の方も總督することに候寒さも強くなるべければ一層御用心動中の靜苦中の樂を占取する法喜禪悅こそ望ましけれ　可祝

大正十三年一月十六日　　石禪

片桐慈光様

○

御手がみ只今接手いたしうれしく披見候處いつもながら御親情こもりし文章まことに深きみのりのゐにし幾世つきせぬみ佛の慈悲の光りなるらん

小林無我の君大般若經を寫し玉ふ由ありがたき功德に候御耳の遠き御不自由はさることながら浮世のひびきに用なき場合は一心清淨のたよりとなることもありぬべし此功德力にて永く耳根圓通の妙果を得玉はんことこそねがはしけれ御詠歌の同行追々增加のよしやがて御地復興の御祈禱ともなりぬべし

衲は二十三日當地に來り明日は燒津に赴きて三月一日の午後三時ころ歸山し二日の午後六時の横濱發にて靜岡へ赴く豫定に候

大般若は都合三部一千八百卷なれば多くの信徒の筆力を願はねば相成らず貴尼もその内一卷御筆をそめ玉

を感じ候何卒爲邦家御盡力相願候
時下寒威料峭御自愛專一祈上候　草々不備

甲子一月十日　　　　　　　　石禪

川合豐二郎樣

○

同氏へ——大本山總持寺より（以下四通）

昨朝もはげしき地震ありければ御地はいかゞにやと案じ上候當山は多少かべのいたみありしが格別の災害もこれなく候三界無安みな世相の致す所只々國土昇平を祈り居り候
川合豐二郎さまより日めくり印刷の上贈り下され只世の人々に施しくださる由なによりの檀波羅密に有之候その御志實にありがたく存じ候
衲も本山と東京とを往復してすこやかにつとめ居り候又こたびめづらしき名作の觀音大士（一寸八分）寄進を受け明後十八日奉迎式を勤むることに致し候　良子殿下に御念持佛としてやはり大士の尊像を新彫し奉献する事と致し候

なし脚下正に是れ極樂の莊嚴也
御侍女達に宜布願上候　可祝

大正十三年一月十日　　石禪

片桐慈光様

○

同氏の生家（大阪市外花屋敷）へ――

肅啓　益々御健勝恭賀不斜候
御令姉慈光殿とは大阪に於て御緣を結び西國巡拜後當本山に參られ更に攝心會に加はりて修禪せられ其精進感入候
今回は『日日の修養』印刷早速御惠贈被下體裁印刷とも美事にて深く感喜し只々忝く奉存候
昨年九月の大震災に强羅方面も非常なる損害を被受候へども海內有數の勝地なれば回復の期も遠からさる事と相察し候
近時人心弛廢其極に達し爲めに不祥事件頻發實に容易ならさる時機に有之從つて國民精神の振作一層急要

勝沼賢契貴侍　　　　　　　　石禪

君在布哇我武陽　　太平洋上道情長
春風不隔東西岸　　萬里波濤浴旭光

　　　　　　　　　　　　　　總持石禪

寄勝沼賢契

○

片桐慈光氏（相州箱根）へ——大本山總持寺より

過日は攝心會に入會せられ行持にいそしまれ候事好箇の因縁さりながら定めしおつかれと案じ上候その後御手がみ被下新年もめでたく御迎へ被遊候を喜び居り候衲も東京と本山と半々にゆきゝ致し幸に無事御安心被下度候昨日川合豊二郎さまより『日日の修養』御送り被下ありがたく感謝いたし候災後の箱根はさみしかるべけれど遠からず回復可致とにかく御身體の愛護専一に候

山色清浄身溪聲廣長舌　柳に觀音微妙の相あり松に說法度生の聲あり山川到る處浄土ならざるは

○

勝沼富造氏（布哇ホノル、府）へ――大本山總持寺より

粛啓　御清況增々御康寧被爲迎平和之新日月候段恭賀不斜候　昨年御地滯錫中は初中後とも御厚情に浴し感謝之至りに堪へず候　迂衲歸朝後多く地方巡錫に從事し爲めに御無音に打過ぎ候　華府會議も將さに終結を告げんとし世界平和の曙光を見るに至り候　事人類文化の一進步と喜び居候　その成果は政治家としては種々の評論もあるべけれど今後は各國民の德性道義の觀念の向上に依り更に國際の圓滿と親善とを保障すべきものと存じ候　日本同胞の在外者は一層品性を高め信義を重んじ國際道德を進め交際を密にし誠意を披き進取怠ることなくんば信用自ら備はり他の尊敬を求めずして得べし況や宗教方面に於ける注意は最も大切なるべく佛耶互に親しみ社會的方面に於ける宗教的訓練の如きは互に一致の態度を取り謂はれなき猜疑嫉視は全然之を避け公平無私に人道の進步に貢獻致したきものに候　此等の點に於て精々貴下の御援護希望不盡に候

日布時事に揭げられたる日米親善の實行方法ありがたく拜見殊に貴說の如きは平時の實感に出たる事と存じ不堪同感候　各新聞社へも隨員より御挨拶申上しのみにて親く裁書の暇を得ず宜敷御致聲願上候　御家内中にも別紙同樣御致誠被下度候　早々頓首

大正十一年一月吉日

候へば御返事も致さず差支なきことならば可然回答可被下候
次に八月廿一日最乘寺へ參る途中松田在之某工場にて法話切望之旨中村舜次郎氏より先日鶴見に申出候に附時間追て通知すべしと挨拶致置候間松田へ午前九時か十時ごろ着の時間を調べ中村氏に御通知被下度候尙ほ中食は攝取菴にて致すべくに附先方にて用意不致樣御申添被下度候
十月一日本山に於て各宗管長懇親會開催に決定の由九月二十九日安養寺完戒後東頸城郡（祥雲師自坊の地方にて郡教育會）に應請の事決定三十日の夜行にて十月一日の早天歸山の事と相成候
次にとよはし龍拈寺檀中淺井常三氏絡子授與願出に附當方より贈與可致尤も法名不明に附龍拈寺へ照會中に候
盛田夏目河合の諸氏より色々見舞品頂戴致候
暑中一層自愛可被下候此程伊藤監院御來訪忝く存じ候
田中布教師より御書面あり横濱原田翁へ揮毫の事御申越敬承右は用紙着せば早速相認め一日も早く送り上可申此旨田中師に御報告可被下候　早々不備

大正十一年七月二十七日　　石禪敬具

神谷飯塚兩師

諸役司及海衆の安穩常恒祈居候衲の身體增々健康御省念且つ皆々樣に宜布願上候　頓首

大正十年十月七日拂曉　　沙港旅亭

石　禪

神谷老宗師

二伸　扇面文字男女兩樣さしあげ候歸朝土産用に候員數は議員方にも呈し度餘りてもさしつかへ無ければ副寺樣と協議少し多く急製相願候

○

同師へ――相州小田原向松菴より

肅啓　暑中增々健祥要務御辨理忝く存じ候衲無異狀體溫脉搏兩ながら順調に候

揮毫物意外に多く稍や困入候得共意任せに染筆致居り候猶ほ或る部分を除くの外は侍局の手數を省くため當地より發送を囑し置候

燕萬能寺梵鐘の銘頗る急ぎ候樣申居候へば寸法及山號寺號開山の名等相知れ次第御報被下度候

樺太及寶光寺分は全部六かしければ半數丈も染筆を了する考に候

二瓶一次氏よりは衲に宛たる書面もありしがなにか芳名をいただきたしとやら如何なる意味なるや不明に

但歯の老朽に依り船中より今日まで咬不得粥と乳のみ漸く戒會後前歯全部を拔去り今は眞の歯拔老僧となれり兩三日中には入歯出來の由されど會話位はさし支なし默してもはなしぢや　呵々

長谷川總裁伊藤監院外諸尊宿に宜布願上候　時下御自愛萬々　不備

大正十年八月三十日　　石禪（花押）

神谷老具壽　貴右

○

同師へ――北米沙港より

肅啓　山內無事最乘晋山の慶典何れも嬉しく候　晋山には專使等萬般伊藤宗師と協議御取計被下度候

於市俄古貴書に接し直ちに北太平洋鐵道列車に乘じ候

雜誌も最早切迫に付別紙題號及原稿とも來馬師に托し差し上候　昨夜當地に着以來始めて來馬師に値遇致候　一行無事來月三日歸山可致候

雜誌は弘德と總持との二樣を選びたるも弘德の方可なりと存候　佛慈とも思ひたるも語調面白からず見合せ候　遞信省の認可を得る樣豫め內願相成度候

當地は暑氣內地よりも烈しからず花のさかり果物の豐饒は自然の恩寵とや申すべき布教師も相當に活動致居候

時下山內一同無事健康至禱に不堪候　耕地出立時切迫に付餘情付後便　早々不備

大正十年八月十日　　石　禪　敬　具

神谷鐵髯宗師

○

肅啓　貴書昨日入手今朝電報に接し皆々之御厚情不堪感激候

渡米之期も相遲れたるも今後二ケ月以上之日子を得ること容易ならざるに付此機會に於て大陸之風物を視察可申十月中殊に最初の豫定の日程にて歸朝致度存居候

市左衛門殿令嗣遂に終焉不堪同情暑中特に出張弔慰被下且つ先師を始め幽明に渉りて御慰訪被下候段滿腔之滿足を以て御禮申上候

衲の滯在は寧ろ內地に於て經驗し能はざる安養を遂げたるもの法會の如きも授戒會を除くの外は大概夜分のみなれば日中は珍らしく閑散全く箱根以上の休養虐待に非ずして大優待にて候

旬療養せしも病勢僅かに十分の三を減ぜしのみ極暑の時となりしかば一先退院し一昨日當地に來り當分休養可致候 別段疼痛は感ぜざれど呼吸困難歩行殆ど不可能今後日々練習可仕候
貴宗師は猶多くの春秋を有し玉ふ健康にして十分回復せば將來活路可期而待迂衲の貴師に於ける深縁無比同生同死の感暫も不可忘此段卽通祈上候 時下極暑の折一層御長養祈上候 早々不備

昭和二年七月二十三日　　於跳龍莊

石　禪　敬　具

慶德眞英老宗師

○

神谷鐵髯師へ――布哇より（以下二通）

復啓 兩通之御書面及新聞共昨日布哇島より歸院一時に接手致し候 御厚意忝く感謝致候 加ふるに幾首の瑤吟篇々迂衲を思ふ切々の道情無限の欣幸に候
二島の巡錫中多少過分の辛勞もありしが別に故障もなく醫士の來診に依れば出立前よりも良好との事に候 明夜は加哇島に出立十七日歸院十九日より五日間授戒會それより敎約完了候へば便船を待ちて渡米すべくこの三十一日か又は來月七日かの出帆と可相成候 米國は急行視察十月中には是非歸朝可致候

同師へ——相州鎌倉跳龍莊より(以下二通)

○

肅啓　客月末以來無音に打過ぎしに去る二十五日聖上御崩御の爲め歸京の折神谷をして問候せしめ候が其後御動靜如何と被案切に倍舊の健康に被復候樣懇禱致居候
出張所の方は尚署部長一齊に辭表提出越山の方も同樣に付當方は結局小坂靈明保坂眞哉山本富賢三師を後任に選定することゝ相成り候衲も呼吸の困難依然激しく昨夕歸莊當分萬事を放下し靜養可致候
尊體も輕症の中に根治を要するに付精々煩緣を謝し心志を勞せず充分御靜養の程爲法爲宗切に相願候
先は寸楮御慰問まで　不備

昭和元年十二月二十九日　　石禪敬具

河合眞英老宗師

○

復啓　御尊書本日敬受欽讀御法身漸々御快復の由何よりの慶幸向後猶御油斷なく御精養可被下候
迂衲一昨年來の痼疾不癒益々相募り本堂への上下すら殆ど不可能となり無止秘密に帝大物療に入院し約六

同師へ——新潟縣帶織瑞泉寺戒場より

貴書拜誦　殘暑の折柄道況康寧恭悅不過之候　衲も幾分快方なるも呼吸困難强て勤居候　大雄山主老體頗る健全法幸無量に候

教界事々皆非如我宗別して蝸牛角上の爭多く宗運の發展遲々として進まず今にして適當なる換氣法を講ぜざれば十年を出ずして甚しき難局を見んかと杞憂致居候今議會には根本的宗是を定むるの御協議あらせほし他宗派の如きも醜態百出實に戰慄すべき情勢かと被存候

雄峰內外の經營實に想像以外に多事多端なるべく御尊體を過勞せずやと夙夜案居候一時も早く雄峰を整理し適當の時機に於て中央に馬を進められたく被切望候　されど雄峰の盛衰は宗門の臧否に關す只だ輔翼の人少なく萬端の計畫多く御一身に繫かる此上とも自重自愛祈上候十四日には一先歸京致候　草々頓首

大正十五年九月五日

石　禪　敬　具

河　合　老　宗　師

足柄の八重山いかに高くとも雲路をわけてはや登りませ

粛啓 今回貴師の進退は誠に眞誠眞實の行動にして之に依て一般人の同情却て一段の厚きを加へたるものあるべし然るに山主前始め信徒諸氏は貴師に屬して再建の業を就さんとすることを承り大雄山の爲め無限の喜びを感じ候是れ貴師の信望深く且つ高ければなり只だ宗務院を去ること實に遺憾に堪へざるも貴師の宗門的將來は迂衲幸に健全ならば力の及ぶ限りは保障の責に當るべし

大雄再建の事容易ならざるも山内主賓相和して奮勵斯業に當り成功を見ることを得るに至れば信者も緊張更に一段の力を加へ從前に勝さる盛大を見るに至らんこと豫想に難からず此上は山内一致の努力と信徒の信仰心を彌が上にも啓沃し其熱度を増し其信念を滿足せしむることに盡瘁を要す就ては法身の健康こそ第一要件なれ衲亦夙夜その復興の速成を熱禱して止まざるべし合山皆康全にて一身の如く同體の如く上下相扶け主賓力を協せ溫謙衆に接し誠實事に當り益々信力を增進し行持に精勵しなば事必ず成り功必ず彰はれ可申候

衲當地來錫以來呼吸彌困難上殿にも中々の苦痛を感じ殆と當惑致居候氣候と共に漸々緩和すべしと豫想しそれのみ願居候糟谷大脩氏も終焉人生無常萬事如是餘儀なき世諦也 先は右要用まで 早々不備

大正十五年三月念二日

石禪敬具

河合眞英老宗師

○

同師へ——敦賀市永賞寺より

拜復　道履御多祥宗務御掌理の段感喜　不斜候　巡錫開始以來格別の異狀も無之靜養しつゝ勤務罷在候間御省念被下度候

四月二十八日には伊藤監院横須賀まで御來訪　忝く存候　南間師御入寂の凶信に接し去る二日には妙嚴方丈遷化の報を受け昨夕は植村仙崖師急病の便りに觸れ尋で横井惠超師の死を傳へらる不幸に續ぐに不幸を以てす轉た不堪哀悼痛惜候　何卒皆々樣法身益　堅固爲宗門御自重　奉　祈上候

皇室已に敬老の典あり我宗亦八十歳以上の老僧を査し何等かの機會に敬老の儀を擧げなばと思ひ居候

正副監院諸尊師及所內御一同に宜布御致聲被下度候　草々頓首

大正十四年五月六日

石禪　和南

河合尊師　貴侍

○

同師へ——福岡縣田川郡伊田町成道寺戒場より

○

同師へ――大本山總持寺より

復啓　今回の大震災は有史以來未曾有と稱し相武最も甚しく其慘狀言語に絶す本山の如きも倒潰十有餘棟佛殿紫雲臺放光堂衆寮鐘樓者稍や無事なるを得たるは不幸中の幸なりしも其他は殆ど大損害を被り候但火災を起さゞりしと死傷者を出さゞりしを天祐とす

衲七日宇都宮に着し一昨日漸く歸山致候大雄山の事心に懸り不一方案じ居候も風況區々にして詳かならず昨夜鈴木典座來山貴書拜見且親く其實況を聞き乍今更驚入候御神殿開山堂法堂等の無事なりしは最も幸なるもの其他の破損豫想を超え山門の大禍不堪痛歎只山主師を始め會中大衆の無難を喜び居候本山といひ雄峰といひ最も敎域の中心たる武相を震害せられ復舊の事業に大障礙を致したるは遺憾不可言大遠忌の如きも修行困難なるべくに付來る十八日顧問會議開催の上萬々協議を遂ぐべく候其節までには幾分交通の便も回復すべく山主及貴宗師の御光來切望致居候餘情は鈴木師より御聞取被下度候山主前及海衆一同に別紙同樣御致聲相願候　頓首

大正十二年九月十三日

石禪　敬具

河合老宗師　貴右

當地風涼氣和養生の好適地一行幸に無事毎日根氣好觀光罷在候皆々に宜布御致聲被下度候

酉六月二十八日　　在布哇

石禪　敬具

河合老宗師

○

同師へ――參州廣瀨廣濟寺戒場より

肅啓　秘書敬誦乍毎度親言親句不堪感激候　内外の施設最も公明を要す向後は萬事に就て警戒第一と存じ候　秘言決して他に漏らすべからず如何なる事も御心のあらん限り御進言相願候　御山　及　東京の後任問題實に刻下の一大事本人に對する經歷比較的長者なるべきこと人格品位輿望は最も其要素として算入せざるべからず御尊意に映じたる賢君子あらば潛かに御進言被下度　奉　願　上候

猶十四日午後十時頃歸山可致候　雄峰役寮　及信徒諸氏に宜布御致誠被下度候　時下御自愛萬々　頓首

十二月九日　　石禪　敬具

河合尊師　貴右

先は取込中亂筆御願まで　早々頓首

申十一月十三日朝

石禪和南

河合老宗師

○

同師へ――布哇より（以下二通）

粛啓　益々御健勝恭賀不盡に候

陳者迂衲橫濱出帆第三日の拂曉少量の咯血あり船醫より安靜を宣せられ六晝夜室外不出折角の樂しみも止靜三昧に委却しあり候去れど氣分も宜く苦患もなく當地に安着後和洋兩醫の診察を受け二十二日以外絕對安靜今尚攝心中に御座候

經過頗る良好なれば入佛式後は徐々勤行も相叶可申兎に角十分用心致居候得者御痛神無之樣願上候

旬餘養病日猶年　杜室倣蹤摩渇仙
一夜檀山林下夢　逍遙布島幾山川
君在雄峰執紀綱　吾遊布島浴清凉
萬里雲程如咫尺　心々感應是同床

申十一月五日

石禪和南

河合老宗師

○

同師へ——大阪夕陽丘浄春寺戒場より

拜啓　紫雲臺猊下御大患焦慮不能措昨日本山よりも電報拜受 候 直ちに上京 御見舞可申上の處如何せん戒會の事とて一日の閑却を許さず一層痛心罷在 候

村上博士特に來訪せられたる要件は重大事なるも一生懸命の希望すげなく御斷りも出來ず精々先方の御旨意を諒解し十分の御研究と御考慮とを乞度 候 議會の形勢穩和の由宗幸此事に 候 教學上進一歩の名案望ましく 候

默仙會の事松崎樣より迂衲に副會長たれとの御尊書を蒙り候へども秋野師あり丘師あり右御兩師の中に御依囑被遊 候 事恰當と存じ 候 迂衲亦乍不及微力の及ぶ限りはその事柄の如何により盡力可致 候 得共日置老禪師を中心としての會に迂衲が重要の職名を有するは僭越の恐れなき能はず世人の視聽も如何あらん此事は決して松崎氏の御內意に背くには非ず依て御相談の上同君には打明けて 御申上被下度願上 候 同君等は故禪師に對し最も眞實心を以て盡され居ることとなるも法中には法中の事情ありその邊よろしく御 考 を願度若し秋野丘兩師等と御相談の上にての御都合ならば決してその勞を惜む者には無之 候

○

同師へ——靜岡縣駿東郡深良村興禪寺戒場より

肅啓　選擧後の議會形勢如何と潛かに案居候　流行的思想の潮流種々の變化を來し人心の浮動頗る注意を要するものあり此時機に於て何卒恒久的宗策の建設不堪切望候　迂衲佛教界の現狀に於て憂心忡々たるものあり何卒區々たる小葛藤を轉ぜられず宗運發展に餘力を盡すの壯擧望ましく候同志諸賢に宜布願上候村上專精博士先刻來訪重大事業に就き懇篤なる談話あり何卒十分研究し見るべしと申置候　右件は室橋師歸京の折詳細可申上候　猶同件に付來る二十五日追分出張所に再訪の約有之候　迂衲は同日歸京可仕その折御尊師にも出京御聞被下度願上候

各地を巡回して如何にも溪深杓柄短の感に堪へず一般に傳道的精神は進み居候得共世の進運と人の要求とに比して物足らぬこと夥しく被感遺憾無極　何卒議會に於ても此點に就て精々御尊謀を運らし被下樣切望不盡會期僅少の爲めその全力は豫算と當面の小問題とに奪却せらるゝを常とす此點は御察し申上候

禪暢の事案居候　三好師も御上京とやら宜布御取計願上候

隨分御多用察入候　御身體に障りなきやうとそれのみ祈入候

○

同師へ――新潟縣南魚沼郡中ノ島村龍泉院より

粛啓 貴書本日拜見仕候處山内無事大安心迂衲何の因果かと思ふ程急がはしく訪客の爲めに時間を失なひ「大雄」原稿を認むる暇なく且つ書面すらも十分執筆不可能申譯無之候
不老閣猊下密葬は十日との事乍御苦勞樣代理御會葬被成下度香資は便宜御取計ひ被下度候後董問題に就ては迂衲としては確たる見込も無之ツマリ兩本山の御意向に從ふ考に有之候唯宗門發展を促進し得べき人師を望ましく候此外何等の意見を有せず宗門第一の公器愼重を要することは勿論なるも可成鬩墻の弊竇を離れたきものに御座候
明鑑禪師の御圓寂は如何にしても如夢せめては今四五年も御在世あらば彼の誕生寺事業も大成可致かゝる人傑は容易に得がたし哀悼不能禁右につき紫雲臺猊下の御法身一層御愛護不堪熱禱候横尾師逝き諏訪師逝く也太可惜
東京四谷右京町矢野床子逝去同人は衲の信徒にて今の波多野子爵夫人の母堂に候へば一應御弔慰願上候
早々頓首

申九月七日　　石禪　九拜

河合老師　　石禪和南

○

同師へ――越後西蒲原郡半納村安樂寺より

拜啓　舊盆會にて御歸坊幾多之御勤勞奉　察入候　陳者不老閣猊下御大患に付電報被下先刻吉田停車場にて接手仕　候　恰も昨日御見舞に行きたる寺院に逢ひ其御樣子を聞きしに信州より去る二十五日駒林（北蒲原郡京ケ瀨村）養廣寺戒場へ御着後間もなく大患に被相成　候　趣　宗門の不幸不過之何卒一刻も早く御快方に被爲向　候　樣　奉至禱　候　迂衲も一日又は半日の敎約なるを以て御見舞に伺ふべき時間を得ること能はず苦心致し居　候　兎に角石龍を伺することに發狀致　置　候　又只今東京追分出　張所へも芝出張所へも御見舞可申上旨申聞け　候　依て大雄山としても夫々御見舞被下度又特別祈禱御修行願　上　候　先は大急御願まで　草々頓首

中八月三十日

河合老宗師　　石禪和南

海晏寺尊堂宗師 貴臺

境內及皆々樣に宜布御傳聲相願候

○

河合眞英師（相州大雄山最乘寺）へ——名古屋市外山田村福昌寺戒場より

拜復　本日當山に着し御尊書及用紙とも接手御申越之件萬々敬承仕候

諸事御手配感謝不盡に候　禪司の事も敬承但し五則は兩親の都合を聞き決定可致候　五月在山中に相勤めしめたく候　誓願文及額面は松田に送らしめ可申候

玆に特に御願申度は二名の小僧中學校に入學可成は通學せしめたき儀に候　一人は觀禪一人は山形縣三好克仙師の實子禪暢曾て迂衲の徒弟となすべき約束致候處本月尋常小學卒業の由に付上京中學校へ通學志願の旨太田祖禪老兄より御申越有之候　追分にては手狹といひ迷惑とは察入候得共小僧の事なれば可成通學せしめたく院代宗師にも御賴み申上べく何卒出張所の都合等も御諮問被下度願上候　同人の學校證明書は院代樣の方へ送りあげ可申候

右御返事旁御願まで　草々頓首

申三月十三日

先は暑中御伺ひかた〴〵御禮辭まで　草々不備

大正十五年八月六日　　跳龍莊にて

石　禪

小栗庸三様　御侍史

御家內中によろしく御致聲ねがひあげ候

○

海晏寺探童師（東京品川）へ――長州萩町より

信仰世に超え溫和貞順慈愛溢るゝ如き御母堂には去る十八日を以て安らかに御永眠被遊候趣御孝心深き御兄弟の御愁傷は如何計りと察入り不堪哀悼之情候

山門益々繁興し天龍亦一段の佳運を添へ法悦無限の間に御終焉その御安心は蓮臺請坐の感ありしならん恰も観音大士御命日に御化界圓通無礙感應道交の想彌々深し迂衲今朝その信に接し東望遙拜御回向申上候

先は不取敢御弔詞まで　草々不備

大正十五年十月六日　　於萩町

總持石禪

は過分の御見舞を賜はり御厚情海山無量奉鳴謝候

宿痾未癒本年は春來不成績にて病苦不衰爲めに何にか特殊の療法もがなと存じ帝大物理療法內科眞鍋先生の診察を受けしも共結果器械療法は病軀に適せず寧ろ一切の加工的療法を斷念して自然に任すの外良法なし清潔なる空氣と適宜の散策と出來得る限り休養を營むこそ安全の道なれとの意見に有之稻田久賀兩醫博も同感にて候依て鎌倉に塵事を避け居候處幾分つゝ宜しき樣に被感候されど色々の要務や來客のために十分安靜を保つこと能はず只能心靜便身安を學び居候明日よりは約二週間の豫定にて九州まで應請し歸來亦もや跳龍莊裏の人となり可申候此冬は三ヶ月に亘りて眞箇の安靜三昧に入りて病根斷滅を期すべく用意仕居候

御尊體は長々の御病床重々御察上候或時期までは病魔の侵略も中々に遮斷し難し但精神力を以て病を忘るゝを撥亂反正の術となすの外なかるべく衲は此程某氏の爲め六忘訓なるものをしたゝめ申候

堪忍を守りて怒りを忘れ業務を樂しみて疲れを忘れ因緣を觀じて愚癡を忘れ善行を好みて憂へを忘れ慈悲を施して私を忘れ佛法に歸して世を忘る

あながちに心の智慧をたのむまじわすれてさとる道もありけり

結局は忘れ盡すを療養の第一法と觀じ居り候

御尊父樣御健康いやがうへにも御健勝にてあれかし御令室御賢息も增〻康安にてあれかしと念居候

時々御音問その都度傳承感激仕居候　幸に異狀無之巡錫罷在候　冬季は可成靜地に就て休養致度用意致居候

常に藥石に親しみ玉ふ貴體も何卒自受用法樂に住して自由無礙に象外の天地に逍遙して病を忘れ我を忘れ安心三昧に入り玉ふやう念じ上候　白雲去來に忙はしきも青山は曾て動せず波動は靜止せざるも月影は更に搖かず至人に己れなし故に己れならざる處なし無一物中無盡藏有花有月有樓臺維摩居士は方一丈の蝸室に在りて八萬四千の獅子座を容れたりと聞く貴下の床頭亦別天地のあるあり此天地は佛光明に照され佛慈悲に抱かる松風鳥聲に妙法の古曲を味ひ樹影草色に端嚴の佛身を拜す是れ實に貴下の好生涯なるべし御嚴父及御令室等に宜布御致誠願上候　先は禪信まで　草々頓首

大正十四年十二月五日

總持石禪

小栗庸三大人貴侍

○

同氏へ——相州鎌倉跳龍莊より

拜啓　三伏大暑の折柄御尊體如何に被爲在候哉と深く御案申上居候　迂衲病狀に付常恒御懸念被下今般

法界に逍遙して物外の天地を打開し玉ふべし眼裏に塵あれば三界窄し心頭無事なれば一牀寛し但天を樂しみ佛慈を樂しみ永劫不滅の法身を樂しみ御心を安らかにし胸襟を宏くし漸次に病魔を退けて回春の期を早め被下度常に祈念致居り候

身にまとふころもが浦の春風にこゝろの花もさきにほふらむ

大正十三年二月七日　　石禪

小栗庸三様

御尊父及四郎様淸様御母堂及御令室御賢息等によろしくねがひ上候
衲も月末には駿遠地方に赴き尋て名古屋北在に到り引續き各地巡錫致し候當分御地に寄錫の餘裕なく遺憾に存じ居候
御尊父様にも久しく御無音申上候得共御消息は時々承はり安心致居候

○

同氏へ——勢州鈴鹿郡深伊澤村甕泉寺より

肅啓　御尊體近頃は稍御宜布被爲在候由承り安心致居候迂衲の病軀に付常恒御案じ被下神谷侍僧に

長養し玉はゞ蕩然として天眞の妙樂を薦取し玉ふことあらん
以上閑言語妄りに尊覽を煩はし申候　早々不備

六月三日　　　　護國石碑

小栗庸三様　貴右

○

同氏へ――大本山總持寺より

久しく音問を缺き候得共侍局への御狀を拜見し御氣分よろしく被爲入候事を知り喜悅不斜候每々迂衲の容態御心に懸られ御厚情不堪感謝候近頃は稍や心好く候へども息ぎれ未だ治せず自然活動に懶く在山中は成るべく休養致居候昨秋の大震災は京濱を焦土と化し空前の慘狀を呈し當山亦被害不少されど是れ天殃の致す所不能免の因緣なるべし之れが爲め御尊父始め深厚なる御同情に預り感激罷在候東宮殿下御慶事も萬民歡呼の間に御取り濟ませられ國家の福祉不過之候近來民心益々放縱百弊續出擧國皆な不安に襲はる可慨事に候窮則通漸次一般に自覺の期可有之候一段の大信心は震災にも動搖せず水火亦侵すこと能はず御貴下の如き長々の病牀堪えがたき御辛勞ならんも其堅固不動の信念は遍

小栗庸三氏（愛知縣知多郡半田町）へ――名古屋市奉安殿護國院より

粛啓　御書面忝く拜見仕候　先般御本宅へ參上の際は乍毎度御厚遇を被り感謝不斜候　其際御山莊へ御伺ひ申上度存候得共遂に御無禮仕候　年來の御病氣にて御困難の段恐察に堪へざるも今更如何共難致　此上は病魔を降伏して健康に復せらるゝこと唯一の御務めと存候

生命の消長は所謂天なり病者必ずしも夭ならず不病者必ずしも壽ならず箇は只だ因緣に打任して爲めに念頭を攪亂せざること至要と存じ候　養生の原は一箇の至樂に在り陽明猶ほ言ふ樂みは是れ心の本體七情の樂みに同じからずと雖も亦七情の樂みに外ならず則ち聖賢別に眞樂ありと雖も而も亦常人の同く有する所但だ常人は之れ有るとも自ら知らず反て自ら許多の憂苦を求む云云と陽明能く其道を悟了せりと謂ふべし

御貴下も亦願くは常恒に此樂みを樂みて以て御心を安穩和平ならしめ玉はんことを今後萬々が一の事ありとも妻室幼童の身計に於て懊惱するの要なし此事は衲の信じて疑はざる所に候　只妻室の思想と行狀とは永久に益々公明貞潔なるを要す一切の安心は收めて此中に存す

然れば御貴下は實に樂みを樂み得べき順境に在らせらるゝもの松風窓を訪ひ明月庭に遊び海天雲靜かに山林緑密なり天地の妙韻宇宙の靈動歷々として見つべし此光景を目睹し此清氣を呼吸す其心寛きこと海の如く其氣安らかなること山の如し何等の妙境ぞや朝に無量光佛を念じ夕べに無礙光佛を憶ひ益々御心氣を

○

同氏へ——越後南蒲原郡田上村本龍寺より

貴書昨日接手拜讀せしに御病臥八十七日目にて御浴養との事意外の御惱實に驚入候御病後の靜養最も大切なり夢々油斷なく御氣力御體力とも倍舊し健康に復せられたく切に祈上候

穴原は衲が十一二歳の頃母につれられて參りし處河流一帶水聲岩に激して獅子の吼るが如く水を隔てゝ危巖幾丈壁立して屏風を立てたらんが如くなりし餘りの絶景奇勝なりしかば今尚ほ彷彿として記憶に新たなり此水勢にて病魔を洗ひ此絶岩にて剛健身を養成被下度候

衲も本年は健康すぐれず講演は可成見合せよとの醫告に依り乍遺憾川俣の方も延期を願ふことと相成候歸梁も巡錫の連續にて本年はむづかしき樣子にて殘念に候來月八日歸京し約一ヶ月餘り萬事を拋ちて靜養可致候先は御見舞旁　早々不備

寅六月十八日　　石禪

穴原溫泉旅館　大竹安太郎樣

○

○

同氏へ——大本山總持寺より

御手紙はいけん致し候處たかゝりし熱も低下し追々御回春の由なによりうれしく候此上とも十分御靜養の上萬々歳無量壽を祈り上候

此程は世にもめづらしき夢を御覽のよしこれも常に孝と信とに充ちたるみこゝろの影にやあらん風呂あがりの氣分は脱然無我の心境これまた夢中の大說法なるべし

　幽明のへだてもあらん親と子のむつめる夢や淨土なるらん

衲も痼疾いまに癒へずされど從前よりの御約束を果さんため靜かに養生しつゝ巡錫致居候只今櫻花の滿開人の心も春めきて溫和の氣は病軀にも頗るよろしく候貴體この上とも御用心被下倍舊の御健康祈上候貞吉さま極めて御親切常に感謝致居候何卒御家内中及みな〳〵さまによろしく願上候

十一日午後當地發十二日の夜鶴見に着し大陽會員諸賢をたのしみつゝ御待受可致候　草々不備

　のどかなる鶴のみなとの櫻花にほひをつたう梁川の水

寅四月七日　於鶴港

石禪

大竹安太郎樣

〇

同氏へ――福岡縣田川郡伊田町成道寺より

肅啓　春寒猶料峭之折柄尊體此程より御持病にて休養被遊候趣驚憂に堪へず候尤も御令弟の書面に依れば心配に及ばずとの事なるも何卒御油斷なく御療養被下度候

粟川町は目下進展の機運に向ひ蠶業之發達彌榮を要する際にして貴體の如きは町務上最も重要なる住地に被居候事なれば今後一層の御健康こそ切望に不堪候況や先考は八十餘歳の御長壽めでたき御生涯なりしかば其瑞蹤に倣ひ可被下候

人生不如意多しと雖も一たび觀念の力を以てすれば日々是好日年々是好年殊に信仰の心の鏡には十方恒河の諸佛諸菩薩の映し玉はぬ時とてもなし佛を抱いて起き佛を抱いて眠る行住坐臥盡く佛の光明裏にあり何の樂みか之に如かん此佛力を以て最善の滋養物となし被下度候

安五郎様の懇書歡讀宜布御致聲被下度候　早々頓首

大正十五年三月二十四日　於筑前成道寺

石禪

大竹安太郎様

○

同氏へ――信州大廣院より

粛啓　益々御健勝の御事と存じ候
過日は御來山被下思ひ懸けざる面晤にて嬉敷存じ候　其後福井様御來山去る十七日上野出發の際は御見送り被下候　昨年臥龍山の授戒會後は一層因縁を新たにし郷關の御方々の御親愛忘れがたき御友情感激に堪へず候　右に就ても如禪方丈ましまさば父母在世ならば御親父あらましかば兄や姉の在らばと想ひ追慕の涙禁じ能はず候
大陽會は宗派の偏見を脱し渾然たる一佛敎の大精神に據り自利々他の德礎を培養せられたく又會員諸賢の御理想亦此に至る事明了なるを以て殊に敬意を表し居候　少年少女會も是非花も實もある模範的修養團と被致度此目的を達する方法に就て迂衲として施すべき道あらば内々御注意被下度候
此程は丹野善兵衛様より懇篤なる御書面を賜はり深く喜候　町長様始め皆々様に宜布御致聲相願候　早々不備

大正十二年四月念一日　於信州大廣院

石禪

大竹安太郎様

同氏へ——新潟縣中蒲原郡橋田岩松院より

復啓　貴書忝く拜見仕候處增々御健勝恭賀不斜候今般相州大雄山に移轉することとなり去る一日内入山式擧行間もなく北越に飛錫爲めに多忙を極め乍思御無音仕候何れ改めて御通知可仕候

同山は東京駒込追分に出張所も有之好便宜に有之候來る十二日より四日間右出張所に於て披露會相營み候是れ迂衲德量の致す所に非ず御本山の御慈愛と師僧之御遺德に依るもの迂衲としては寧ろ慚愧に堪へず候乍去雲遊萍處の身には別に奇特も無之唯だ御開山の御預りとして保任の任務を盡すのみに御座候

此等のため本秋は歸粱むづかしく存候師僧の御年回にも當ればせめて一晩泊りなりとも歸粱致度と期望しその日子を發見に苦心罷在候

御一同樣によろしく御願申上候大雄山へは是非御參詣被下度候

時下御自愛萬々　頓首

辰九月六日

最乘石禪

大竹安太郎樣

○

大竹安太郎氏（福島縣梁川町）へ――

拜啓 御令室御事養生不相叶去る廿四日遂に御逝去被遊候趣 奉驚入候 豫て御大患の由松五郎より傳承仕 不一方案居候得共猶ほ御回復相成候樣にと祈念罷在候ひしに突然凶信に接し今更の如く被思不堪悲歎候 母の驚憂は亦一層にて殆ど慰め兼申候

迂衲も一昨日卽ち御逝去の日に歸山今日凶報を受くるや直に念誦回向聊か追福の意を表し候 貴下始御渾家一同の悲哀想像有餘候得共 往者不再還 平生溫厚の質殊に信念堅固未來の生處定て是れ好妙淨土なるべし此上は貴下百年の壽を保ち孝子順孫和敬勤儉して家道を興隆し信行を增進せられんこと第一の用心と奉存候

先は不取敢御悔まで 草々 泣涕不備

明治三十四年十一月二十六日

大榮石禪

大竹安太郎樣 貴下

○

大正十一年十一月十八日

石禪

大橋惠光様

○

追々寒さに向ひ候處いつもお健やかにて何よりおうれしく候大倫御授戒の節は一方ならず御厚意かたじけなく御禮申上候

此度は結構なる奈良漬と甘栗何よりの好物ありがたく頂戴致し候又おてがみも嬉しく拜見致し候衲もその後追々に達者になり只今は一山之人々と同じ様に勤め得られ候明日は三重縣に赴き候へども來月八日歸山しそれより明年二月までは在山の豫定に候

震災後の東京横濱は今なほあはれなる姿なるも佛力人力は漸次に回復し枯木花開くの時も遠かるまじと思ひ候御地は氣候よろしけれどもなほ御油斷なく御身もいやましすこやかに相共に信心を喜び和合親睦愉快に朝夕の行持にいそしむこと諸佛菩薩の御心に有之候

心寛ければ天地ひろし信仰のたのしみは萬苦をすくふの力あり茶をのみ室を拂ふも福慧莊嚴の功德ならぬはなし

○

同氏へ――大本山總持寺より（以下二通）

追々寒さも加はり候折柄いよ〳〵おすこやかにゐらせられ喜び之に過ぎず候

此度は靈水のおくすりお贈り下されまごゝろこめ玉ひし二つのびん相とゞき殊に二通のお手紙さへあり一字々々みな御信心と御芳志のあふるゝを見まことにありがたく嬉しくてうだい仕候御注意の通り服用可致候

衲も去る二十七日には少々發熱いたし醫士も注意下されしが止むなき約束のため翌日奥州に下り候も不思議にもさわりなくその後は發熱もせず氣分もよく無事つとめ居り候來る二十三日より東北に赴き月末にかへり來月に入りなば暖地にてゆる〳〵靜養可致候間御安心被下度候

鶴見と神戸幾山河をへだつれどみほとけの光には照らされぬ隈とてもあらじ同じ花のうてなにすみ同じ淨土に遊ぶなり山の雲濱の松も七寶の莊嚴あらたにて電車のひゞき汽車の烟りにも菩提の影こまやかなり何卒日々夜々めでたくうれしくのりのみくにゝたのしみくらし玉はりたく候

道圓居士様等によろしく願ひあげ候　可祝

粛啓　日にまし暑氣相募り候處御障りも不被爲在候哉御案じ申上候此度は御親切をこめられし數々の御贈物まことに〳〵ありがたく深く〳〵御禮申上候

衲も客月富山新潟兩縣を巡回致し候得共身體に異常なく當山に歸りて盆會をつとめ人々の切なるおすゝめにより十九日の午後表記に參り來月十四日まで靜養可致豫定に御座候

此地は高臺にて空氣もよろしく道路やゝ不便なれど坐しながら湘南の海と箱根の山々とを眺め水天髣髴の間に大島を望み風光頗る明媚に有之候海氣山氣室に滿ち庭にみなぎり日中もあつさを知らず心靜かに休養致居候間御安心被下度候

御地は天然の風致に富まれ候へば須磨明石にも御出あるべし濱邊の松は風霜に色をかへず正に是堪忍の姿ともみるべし岸うつ波は日夜に息まず自彊勤勉の德ともいふべし摩耶の峻嶺は四時動かず御ほとけの御身とやいはん見るもの聞くもの盡くみのりのたよりならざるはなしこの天地の妙法をたのしみつゝいやましお健かにおはしますやう偏へに念じ上げ候

先は右御禮まで是の如くに候　草々不備

大正十一年七月二十二日　於向松庵

總持石禪

大橋道圓様

櫻花かすみにわらふの時御機嫌いかゞにや先般は御病氣なりしよし幸ひに御快復被遊その折御ねんごろなる御手紙嬉しく拜見いたし候過日停車場に御待受下されし由のところ迂衲風邪の爲め巡回中止いろいろ御親切の段うけたまはり忝く御禮申上候その後おひ／＼快方に向ひ候間御安心被下度候御許もます／＼御身を大切に信心をこらしみほとけの御慈悲をよろこび末長くみのりのたのしみこそねがはしけれ

うき波のよしやあるとも御佛のちかひの船にのるぞ嬉しき

立瀬川いかに波風あらくともわたるにやすき法の大橋

別にしたゝめしは昨夜夢に歡喜寺に到りしに御許さま元氣よく來詣せられけり持田樣西川多田の方々にも御一緒にてしばし佛法のおはなしせしによりさめての後そゞろにしたゝめたるものに候

大正十一年四月五日　　石禪

大橋一惠樣

○

同氏へ——相州小田原向松菴より

○

同氏へ――大本山總持寺より

新年の嘉祥天長地久恭賀不斜候

早々御懇書を辱うし御親情銘肝に堪へず候幾年月御目にかゝらず久濶の情切なり幸に御健祥欣慶此事に候

目下民心弛緩思想の動揺頗る甚しく國家重大の時期と被感候當此時愛國心の向上道德尊重の氣運を伸張すること最も急務なるべく存候何卒地方青年の御指導亦切望に御座候

寒中一層御自愛是祈候　早々不備

大正十四年一月七日　　總持石禪

小田英太郎様

小田恒太郎様

○

大濱かずゑ氏（神戸市）へ――大本山總持寺より

○

小田英太郎氏（新潟縣岩船郡鹽野町）へ——大雄山最乘寺より

拜啓　御尊父様永々御病氣の處遂に御逝去被遊候趣　御哀傷如何計ならん御同情に堪へす候　衲も十數年以前兩親を失なひ今尚ほ哀惜の新なるを覺え候　今朝も忠榮居士の御靈名を安じ燒香獻燭御回向仕候

過般は結構なる香筒御惠與各處巡錫のため侍局の通信に接するのみに候ひしが昨臘歸山の上始て開函實に御丹誠の籠りし法器御厚情難謝盡候　玆に謹て御禮申上候

今回御高囑の御墓碑早速筆を淨めて書し可申候

先は御弔詞併せて御禮まで　誠恐頓首

申一月四日

最乘石禪

小田英太郎様
小田恒太郎様　御侍史

○

同師へ——大本山總持寺より

復啓　道況康寧欣喜不斜候　御父君も御養生不被爲叶遂に御逝去哀悼不能措貴下の愁傷亦不堪　同情當時衲病氣のため湘濱に在り二月二十六日歸京するや直ちに神谷衣鉢を派して靈前に弔香を捧げんとせしに其地に至るに既に他に轉居して近隣に尋ねたるも行先不明不得止空しく歸山於　方丈　心　ばかりの追弔回向を營み申　候

病中も左こそ御不自由にてあられしならんと察し同情致し居り此上は貴下　彌　健康を保ち法運の隆盛を見んこと唯一の追孝なるべく　候

衲老軀多病漸くにして巡　錫　繼續可　憐　の狀態にあり溫暖の氣と共に幾分づゝ病勢も緩和すべく被感　候

先は囘答かたゞ弔意を表し度まで　草々不備

大正十五年三月二十三日　　石　禪

洞源靖臣殿

復思寄らざる病魔に被襲非常に心配せしも三寶佛天の冥護と國手等の手當に依り快癒せりとの報に接し愁眉を開き申候
今後は倍舊の健康に復するまで食物の大注意こそ一大事に候　病後の食物再び腸を損すること少なからずと聞く寸毫の油斷なきを要す　先は喜悅の餘り復啓如是　早々不一

巳十月十六日　　大雄山叟禪

大久保清臣具壽

○

元正啓祚慶幸　昨年は病魔に瞞ぜられしが本年は層一層自護自重金剛の法身を長養せられ度時期一來直ちに手を把りて光明臺に上らしむべし
僧寶の要は道心なり信念なり此二大精神は能く全生涯を神化し美化す自ら保任して御兩親をも濟度するの人となられよかし　至禱々々

戊午元正　　大雄山叟

九旬の安居も既に圓成の期に相成幸に無異行持を全うせられつるを殊に嬉しく存候

法戰場の狀況を聞き好成績にてありし趣無限の快感を覺え候遂空老漢も定めし大寂定中眉毛を開かれしことなるべし加之該法筵に於ける臨場法賢の顏觸れは本山も尙ほ不及殆ど稀れの盛況是偏へに御兩親の恩光なり此場に於て此立身ある曠劫の勝緣にあらずや此盛況は一生の記念なり

今後は道心を磨勵し曾て申せし如くありがたき人となり下さるべく一生を誤る者は酒色なり誓て愼み下されよ又僧寶には一己の富は用不着なり利を貪ぼること亦道心の魔障なり座下は衲も將來正直なる細心なる君子たらんとする性あるを見るその性を增々發達する樣賴み上候夢々御兩親及び御本師に不安の念なからしむる樣御勉强被下度候

法幢師は終生の恩師なり此亦報恩あらまほし衲亦座下を思ふこと甚だ切なり自分の子の如き感じがするためかゝる老婆言を以て結制圓成の賀詞に代ふ御諒察可被下候　法身健勝至禱

二月三日　　石禪

大久保濟臣第一座　禪窓下

○

大塚洞外宗師　　　　石禪敬具

○

拜啓　益々御健祥恭賀不斜候

迂衲此程漸く歸山し御惠贈の百畫餅に接し開卷劈頭其裝幀の高雅なるに感じ其内容に觸るゝに及び今更の如く無聲の詩有聲の畫　兩ながら目前に展開し禪天慧日の輝くを覺ゆ宗乘の横拈倒用奇想天外の感あり御苦心の跡每篇に歷々たり其の畫材の如きは全く虛空に眉を描くもの一見羽化の想ひなくんばあらず

先は不取敢御禮辭まで如是に候　時下御自愛千萬是祈候　早々不宜

大正十四年七月念三日

石禪

大塚洞外宗師侍史

○

大久保靖臣師（新潟縣南魚沼郡藪神村洞源寺）へ――大雄山最乘寺より（以下三通）

寅一月十五日

總持　石禪

長淵道根老宗師
堀熊太郎樣
菅原菊太郎樣
伊藤千代治樣

○

大塚洞外師（愛知縣知多郡阿久比洞雲院）へ――相州鎌倉跳龍莊より（以下二通）

肅啓　益々御健寧恭賀不斜候今後佛教美術に御勉勵の事欣慶に堪へず候
古代は美術の生命は佛者の手に在りし者近代は全く沒交渉の狀勢遺憾の至り何卒此點に於て天才を發揮せられなば佛門に於ける一大貢獻に候
今般迂衲の肖像御描寫被下御惠贈の由右は本山に轉送せられ候はん衲來月十日歸山致候厚く御禮申上候　時下御自愛萬々是祈候　不備

大正十二年三月三十日

の深信熱誠なる外護實以銘肝の外無之候加之太祖大師六百年大遠忌の法會を中心とせる華藏道場として新たに紫雲臺造立その他萬端の御設備皆是報恩の誠に出づ眞に是れ無上の行持法幸無量に候時下一層御自愛法運增榮唯是祈候法類隣峰並檀頭世話人等諸君に別書同樣御致誠相願候　先は御禮辭まで　早々不宣

大正十四年七月一日

總持石禪（花押）

長淵尊堂　大川道根老宗師

○

拜啓　貴師及檀徒惣代各位等も益々御健祥にて被迎丙寅之新日月候段恭賀不斜候過日授戒會記念御編纂の上御惠贈を辱うし法會の概況集會の淨侶等一見明了寔に好個の記述に有之世にその例少なき好典型を示し給へるものにて貴師及堀君等の御考案より出たるものと存じ難有詳見仕候向後授戒修行の寺院は皆此例に倣はれ度被感候將來增々寺檀一致山門の興隆化道の伸張に御精進被下平田道苗を長じ長淵瑞波を揚げ地方に德光を宣耀せられ度候
先は隨喜の餘り以尺牘謝意申述候　早々敬具

○

小野覺應師(秋田縣平鹿郡大森町大慈寺)へ——大本山總持寺より

肅啓　御道况益々御健祥恭賀此事に候　貴刹戸羅會の際は初中後共懇篤なる御待遇を蒙むり且隨喜諸寺院及檀信各位の御盡力を萬々不堪感謝候

老衲その後　幸に康安豫定の巡錫を了し歸山致候間御省念被下度候　今後增々御法身堅固に宗風擧揚の段偏に相願候　隨喜の尊宿及檀信諸賢に別紙同樣御致誠是祈候　早々不備

大正十一年六月五日

總持石禪(花押)

大慈尊堂　小野老宗師　貴右

○

大川道根師(山形縣飽海郡中平田村長淵寺)へ——大本山總持寺より(以下二通)

肅啓　道况益々御健勝恭賀不斜候

過般貴刹戸羅會之際は初中後とも甚深之御道情を辱うし不堪感謝之至候　猶隣峰及檀頭世話人等御一同

七月八日　　靈源寺

泰清尊堂老師侍史　　石　禪九拜

○

同師へ――越後新發田寶光寺より

拜啓　御道況增々御健祥奉賀上候　衲滿鮮巡錫完了十五日歸京昨日當地に參り幸に無事御省念被下度候

陳ば碧巖印刷の儀未だ注文不仕可成は御地に於て御印刷願はれまじきや若し東京の方宜く候はゞその部數を示し緊急御手元より大竹兼康師に御囑託被下度候　衲は暫く歸京せざるに付萬端不行屆不惡御宥免被下度候　時下御自愛專一に　頓首

未七月十九日　　於新發田

石　禪九拜

泰清尊堂老師

碧巖は五十一則より五則まで垂示と着語とはつくる方宜いかと存じ別紙見本さし上候

先は御禮旁々御報まで如是に御座候　草々不悉

大正十二年九月十三日

石　禪（花押）

梅原先生貴侍

○

岡本默音師（福井市泰清院）へ——越後糸魚川東今井村靈源寺より

拜啓　御聖況愈々御清祥奉恭賀候　御地講習會の講演等は未熟の迂衲に付都て宜布樣御指揮を受け然る後印刷にも付すべき考なりし爲め意外に遲了漸く兩三日前東京出張所へ原稿を廻し高井宏道師に萬事取急御送付方等依賴仕候　乃ち碧巖錄の中十二則（但し本則と頌丈に致し候　一席一則とすれば垂示着語を加ふれば提唱踈雜に流るゝが爲め）を印刷する事と致し候　其他は口演可然演題は禪學大綱として秩序的に講演候方初入の御人には便宜かと存じ候　尤も何か講本に就て演ずる方便法なりとせば坐禪儀なり用心集なり辨道話なり何れなりとも御命に從ひ訂正可仕候

尚ほ小衲は十三日迄當寺に滯在し十八日には本縣高田町太岩寺に赴き二十日の夜同地を發し二十二日の朝歸京の心得に御座候　先は取込中略筆にて通申迄　早々頓首

梅村欽三郎先生　貴右

御尊父様初め御渾家に宜布御致誠被下度候

○

梅原松樹氏（埼玉縣南埼玉郡幸松村）へ――大本山總持寺より

肅啓　今回の大震災に御貴宅も多大の御被害ありしのみならず當時御上京中にて危難に遭はせられ辛うじて危地を脱し無事御歸宅の由承り安堵仕候

迂衲は羽州巡錫中にて取急ぎ歸山の途に就き候が交通不如意の爲め宇都宮に泊し尋で不二山に寄錫候處特に御光訪の上結構なる座褥を賜はり御厚意忝く御禮申上候　去る十一日本山より自動車を以て突然被來迎愴惶發錫同日午後三時無事歸山致候　右の次第にて御伺可申上餘裕無之御無禮仕候　御惠賜の座褥は拜受持參いたし永く御厚志を感銘可仕候

京濱を始め相武房總に亙る大被害は前古未曾有の慘狀を呈し當本山の如きも災害甚大にて潰倒せる建築物二十棟に上り候　幸にして佛殿放光堂舍利殿僧堂紫雲臺は大體に於て無事なるを得申候　死傷者は更に無之是れのみ安心いたし候

はんこと祈上候鬧中に閑を占め動處に靜を修し太忙中綽然餘裕ある樂天地を打開せられなば隨處無礙なるべく被存候　先は御祝辭まで　草々不備

寅一月元旦

總持石禪

梅村甑三郎先生侍右

○

同氏へ――靜岡市顯光院より

拜啓　過日は御多用中特に横須賀まで御光訪被下御厚情奉感謝候

高著生命論再三拜讀仕候　科學と宗教の統一は當然の歸結なるも貴說に依りて最も簡明に且つ公平に說破せられ痛快を感じ申候　生命至上論を根幹として宇宙及人間生命に論及して此千古の懸案に一大斷案を與へられたる段教學者を裨益すること少なからざるべく其御信念と御識見とには深く敬意を表し候　頂戴せし本は此問題に研究眼を有する人々に頒與可致候

先は略書御禮辭迄如是に候　早々不備

大正十五年十月十八日

御尋の儀に就ては凡そ志氣ある者は熱心の餘り興奮せられ易きものなるも複雜なる社會に在りては矢張餘裕ある雅量を養ひ玉ふこと必要なるべし其心を大山にすると共に大海の如き寛量を養ふことも至要と存じ候前途洋々たる御身には猶更不動不屈の大勇氣を有せられ同時に百花叢裡に在つて一葉身を霑ほさゞる底の御訓錬を遊ばされ將來を研究的に博愛的に又愉快に進展せられ永くその活生命を涵養せらるゝこと國家の幸と存候

時下御自愛萬々是祈候　不備

大正十四年八月十二日　　石　禪

梅　村　先　生　貴右

御家内皆々さまによろしく願上候

○

同氏へ――大本山總持寺より

祝啓　益々御勇健恭賀不斜候

昨秋は特に名古屋まで御光訪被下感謝に堪へず候時下一層御康安にて民衆の身心に救療の慈手を垂れ玉

又参政権問題は謂ゆる職権問題に属するを以て男女同権と混すべからず男子に此種の権あるが故に女子も亦同様にせざるべからずと固唱せば女子に産児の能あるを以て男子にも其能技を分擔せしめよと言ふが如し故に参政権問題は女子の能力智力及實状より之を考究すべきものと思ふ此意味に於て貴下御研究の件の如きは好箇の材料として考慮に加ふべきものと認む

以上は前に認めたる衲の意見に候尤も繁務の際なれば十分之を研究するの餘裕なければ御滿足を得がたき點もあらんが御懇意の間柄とて一應御答へ致せしものに候

尚ほ従前特別の法縁を交へたる間なれば今後も御遠慮なく直接衲に御尋ね被下度切望致候　右取急ぎ御回答まで　早々不備

大正十四年五月一日　　於敦賀

石　　禪

梅村先生貴右

○

同氏へ――大本山總持寺より

極暑の折柄益々御健祥恭賀不斜候御懇書忝く拝見致候四月御参拝の砌りは甚失禮致候

復啓　貴書本日當地にて接手拜見候處衲の答文郵着せず再三鶴見に來られしも不得要領に終りしとて御憤激の段實に遺憾に存じ候曾て御逢ひせし翌日頃男女問題に就て鄙見を書し速かに御郵送可致旨侍僧に命ぜしに今に屆かざる趣誠に殘念千萬に候尙貴下の筆に成る文書を失ひしこと返す〳〵も御氣之毒に候依て衲の曾て御返事せし大要を再び左に申上候

男女同權及參政權に對する件

貴下が多年の實驗に係る男女の心理的生理的差異の研究は頗る興味を以て拜見せり男女の職業及待遇は必ずや此天分の性能を考慮せざるべからず

次に男女同權と參政權とは別々に研究する方便宜なるべし若し人格尊重の原則よりいへば男女同權と言ふを得べし父母ありて子孫を生殖し夫婦ありて家庭を組織す父尊母卑とも稱すべからず夫尊婦卑とも斷定し能はざる道理あるべし獨り男女のみならず老少長幼の間とても人格的には同等の權を有するの原理あり是を以て共敬相愛各々人權尊重の觀念を忘るべからず

女子は男子に對して低能なるべきも男子の企及し能はざる特能あり相對性に依り人類世界を建立す此意味に於て同權を主張するは決して之を否定すべからざることを信ず去れど相共に權力を持ちて相讓らざる時は寸時も平和を保つべからず故に秩序的には男主女從謂ゆる夫唱婦和自づから侵すべからざる節度あるを要す同權を濫用して女子が男子を凌ぐが如きは社會紊亂の基なるべし

再伸　本山大遠忌も無事圓成仕り震災後の復舊も稍や竣工致し多數道俗の參拜を得殊に　勅額之御下賜を辱うせるは是れ祖德之甚深に依るもの感激に堪へず候但參拜者接待之爲め第一義諦之報恩行持に於て物足らぬ心地致され仍て法會中僧堂丈は寂靜三昧の道場として道俗の參禪を許したるに幸に二十又は三十四十の入堂者あり中には二旬に亘り每夜徹宵端坐する居士大姉あり聊か重擔を卸すの感有之候委細は眞鍋師より御聞取被下度候門前酒井樣始め惣代之方々參拜せられ歡喜に堪へず宜布御禮辭奉煩候

東京齋藤家は一同無事鐵之助も健全に候豐川妙嚴寺白麟方丈は大遠忌中燒香師として又宗會議員として二回上山し迂衲の病弱を憂ひ熱心に靜養を勸められ且本月下旬自坊に於て大遠忌修行の爲め請拜までせられしに四月三十日突然遷化せられぬ人生無常猶如夢中事轉不堪哀悼候右の爛葛藤を露布し奉入尊覽候　不宣

石禪和南

宇野尊老師

○

梅村鐵三郎氏（愛知縣西加茂郡石野村）へ――敦賀市永賞寺より

由一向不存知大遠忌前に至り始て傳承奉驚入候　大遠忌法會には御上山被爲在候乎と御待申上居りしも御脚部之傷痕未癒爲めに御來山無之失望致候乍去御尊師こそ年來翹望せられし大法會に御參列不被爲叶何程か遺憾に思召し玉ふらんされど心證神契早く既に相見乃祖了御尊師の御遙拜感應道交難思議にて可有之相感居候

迂衲も去二月流感に罹り變じて肺炎一時は山内の龍象にも心配を掛けつるが不思議にも大遠忌の初日　勅額拜戴之時より熱下り氣和ぎ繁劇なりし三週之法要も安穩快樂に勤脩することを得候　佛祖之御加護と諸大德之御祈念に依ることと感泣罷在候　當地完戒後雲州へ轉錫に付三方の　慈尊に詣し且洗心院を拜訪せんとして御照會せしに既に能州へ御歸錫との事仍て　慈尊は三方通過之際車中にて遙拜し更に再來之嘉緣を待つべく候

自今以後一層法身御自愛不老之春秋に逍遙可被遊奉切望候　早々頓首

大正十四年五月四日　於永賞寺

石禪和南

宇野尊老師　貴侍

曾拈鍬子護閑田　種月耕雲八十年　切祈法身長保壽　祖山接衆振眞禪

眞鍋師の懇到なる隨喜海衆之親切なる勤行不堪感謝宜布御致誠被下度候

○

粛啓　只今特に電報を賜はり候御厚情奉感謝候　拝領の品飴製と心得後に蜜なることを知り貴重の珍品早速少量づゝ滋養に用ゐる事と仕候

不二山和尚病氣の爲め意外の御心配を相懸け候へ共幸にして漸次輕快に趣き候様子とて安心仕候何卒一刻も早く本復して院事に鞅掌せよかしと祈居候

迂衲是非御靈前に參拜致度存候も教務聯續寸暇を得ず何れ九月以後と可相成此段不悪御海恕被下御母堂様始め皆々様に宜布御致誠相願候　時下御自愛萬々

六月念六　　　護國石禪

岩本松四郎様　侍史

○

宇野玄機師（能州總持寺別院）へ——敦賀市永賞寺より

粛啓　薫風自南來殿閣生微凉　恭惟　道况近日如何に被爲在候哉昨冬不思懸御怪我被遊候

迂衲も痼疾少々づゝ快方に向ひ候やう被感候間乍他事御省念被下度候
時下御自愛専一是祈候　頓首

卯八月十日　　鎌倉跳龍莊

石禪

今井爽邦先生侍史

○

岩本松四郎氏（埼玉縣南埼玉郡堤郷村）へ——名古屋市護國院より（以下二通）

粛啓　御尊父御寫眞忝く拜受一見彷彿として神氣動ずるを覺え一層御なつかしく被感候早速内佛壇に安じ獻香回向仕候來月中旬には參上して御靈前に參拜致度存居候今後舊に倍して御尊體の健康を御圖り被下御家内増々輯睦家運御興隆是第一の御追善と存候
先は御禮迄如是に候　草々頓首

五月十九日　　護國石禪

岩本松四郎様

石　禪　敬　具

今　井　爽　邦　先　生　侍　右

○

同氏へ——東京市高林寺より

拜啓　今回當山戒會に出會致居候久しく靜養の結果幾分快方を感じ候間御省念被下度候二十一日午前九時半芝出張所へ歸り更に診察を受け再び靜養可仕候
時下御尊體益々御自玉祈上候

昭和二年五月十八日　蓬萊町高林寺にて

石　禪

今　井　爽　邦　先　生　侍　史

○

同氏へ——鎌倉跳龍莊より

拜啓　『藝術』御惠贈被下繪畫と宗教と武士道の御高說簡明にて剴切忝く拜讀仕候

大正十五年八月十三日

今井指月先生侍史　　石碑

○

同氏へ――相州鎌倉跳龍荘より

拜啓　昭和の新年天地肅然當此時　新帝御踐祚後第一年を迎へ陰雲の間に天日を拜するが如き觀有之候

先生昨冬感冒にて御惱ありし由流感猖獗の折柄此上とも一層御保玉奉祈候　昨朝御惠贈の福祿壽像に接し拜見候處瑞章の如く昭和の氣壽星の渾身に漲り室内に揭げつるに寒中一段の春風を喚起し盆梅の紅唇と共に佳瑞を示す感謝不斜候

本日は秩父宮殿下御歸殿其御心中を拜察し暗涙に咽び候　小衲宿痾未だ快方に向はず碌々休養慚惶に堪へず候　三月半まで靜居の豫定に候へば其内には幾分回春の兆も可有之と存居候

先は不取敢御禮旁々御問候まで　早々頓首

昭和二年一月十七日

先者不取敢御禮辭まで　早々不盡

大正十三年六月七日　　石禪　敬具

今井爽邦先生　貴侍

○

同氏へ――大本山總持寺より

復啓　驕陽爍石　尊大人益　御勇健恭賀不斜候　御懇書拜誦消暑辭感吟仕候　殊に暑來暑頭打の一聯は普化の棒頭を奪却して淸涼の別天地を打開するもの天下幾多の避暑客をして慚汗淋漓たらしむべし迂衲鎌倉に靜養せしも漫性の頑疾は容易に退去せず加ふるに種々の用務ありて十分に安養し得ずされど幾分か宜しきやう被感候　敎約のため去る七日出立し一昨日當地に着致候呼吸依然困難の爲め意の如くに活動しがたく慚愧に堪へず候　十九日頃再び鎌倉に戻り約一週間靜養して後再び巡回の途に上り可申候
一身如雲水悠々任去來隨處暑中に凉味を掬し活山水に觸着致候
時下十分御自愛被下度御令室は如何に被爲在候哉極暑之候殊に御案申上候　江木欣々女史に御逢の際はよろしく御致誠奉願上候　草々頓首

如來示此一大天譴に對し天意に順ずる理想的帝都の建設望ましく候さし當り罹災者救護は實に焦眉の急務萬々御助力不堪感謝　早々不備

大正十二年九月二十一日　　石　禪

今井爽邦先生　梧右

○

同氏へ——山形縣酒田町泉流寺戒場より

肅啓　日々陰晴不定にて鬱陶敷被感候處益々御健祥の段奉恭賀候　迂衲當地方巡錫中御饗宴に御召しの光榮を忝うし倉皇歸京參內し昨日當地に歸錫し御華墨を拜見仕候樣なる譯にて御返書遲了致候

江木欣々女史の御彫刻に係る印章拜見致し候　目のさむるを覺ゆる美事なる妙手ありがたく感謝仕候殊に關防といひ『三松關主之印』は曾てより希望せしもの一層ありがたく存上候　何れ御禮狀も可呈候得共貴先生より宜布御禮辭願上候

迂衲近來身體も稍快方にて心安らかに巡錫致居候間御省念被下度來月中旬には歸山可仕候

如來論社會の近狀才能彌進品性益低下殊に中流以上に著しきを感じ其影響は一般の國民に波及し兒童少年に至る迄一種の妖雲に蔽はるゝの觀あり國家の環境に對照して甚しき不安を感じ候御互に精神的復活を圖るの急務なるを覺え候

迂衲當地にありて痼疾の驅除に努め居候得共要務の爲め時々歸山致し十分の靜養も相成兼候得共徐々回復に向ふを覺え候間御省念被下度候

先者乍遲延御見舞旁御回信まで　早々頓首

大正十二年二月十二日　　石禪　敬具

今井爽邦先生　貴侍下

○

同氏へ――大本山總持寺より

空前の大震災に付御案申上候處幸に御無事との御狀本日拜見安堵仕候

迂衲去る十一日漸く歸山することを得候本山も東京よりは震動一層强烈なりし由にて乍遺憾待鳳館以下潰倒破損十餘棟に及び頗る混雜を極め居候

なし又自然味なし去れど物質の勢力は全世界を脅威するに足れり我國此脅威を受け乍ら確乎たる自衛に出でず紛々として物欲の奴隷となり小局の間に沒頭し去るの觀あるは苦々敷事に候

跳龍室八景御揮毫との御事迂衲もその希望ありしが實は特別の御筆勞を煩はす事ならんを憚り何なりとも願上んとせしに偶ま御尊意に感應せしこと無上の欣幸に候一八尊者の影光あるに於ては正に是れ錦上敷花もの感謝不可窮盡候

遊戯三昧を減少するを御忠告忝く存候その希望は伊藤副寺にもあり衲亦之を諒と致し居候

先者御禮旁近狀御報まで　早々頓首

大正十年八月十日　　於堡府別院

石　禪（花押）

指月爽邦畫伯　貴右

○

同氏へ——相州小田原向松菴より

肅啓　寒威尚未去雪華頻紛飛御近狀如何に被爲在候哉過日は細々の御華墨忝く拜讀仕候客臘來御病氣御難儀之趣一向不觸消息意外の御無禮何卒御病後の御攝養御大切に願上候

身書とも見ることを得べしと存じ候神明を説き佛天を談じ且大和民族の傳統的大精神を道破せられたる點は覺えず快哉を叫び申候 茲に恭く表感謝之意候

昨年は同情に堪へざる御不幸是亦諸行無常の世相如何とも致しがたし本年は何卒御健勝舊に倍し御機嫌好く御活動の程奉祈上候　早々頓首

大正十四年一月七日

總　持　石　禪

伊　井　蓉　峰　様　貴　侍

○

今井爽邦氏（東京市）へ――布哇ホノル、別院より

復啓　馬布二島を巡錫して歸院致し御懇書に接し繰返し拜見親情紙面に溢れ慷慨句々に漲り感讀仕候　衲船中少惱ありしも漸次輕快晝夜接衆の任に當り居り候

當地北越の人は第五位に居り隨處多數重もに北蒲岩船の人也布哇島に於て魚沼の人々に三五員を見受候

八島皆仙鄕天惠に富み芳花果物四季を通じて豐饒に候

日米關係の餘波種々の問題續出矢張五濁世界の窩窟を脫せず思へば淺間敷限りに候 米人の多くは未來觀

復啓　增々御健勝にて過去十有五年敎育の任に御勤勉の段爲邦家不堪感謝候園藝趣味を有する人の如き草木の培養にも無限の興味を抱かるゝを見る況や御國の寶たる愛らしき兒童の敎養を事とし日に月に其進步發達を目睹す人生最美の聖職その興致豈に園藝と比すべけんや萬兩の黃金にも百味の天供にも替へがたき者あるべし何卒將來も亦增々御健全に御盡力の程不堪切望候
時下盛暑一層御自愛是祈候　早々不備

大正十一年七月二十三日　　石　禪（花押）

石田宮三郎殿

○

伊井蓉峰氏（東京市）へ――大本山總持寺より

新年の佳祥天長地久恭賀不盡に候　昨年は屢ば御來山被下候へども不在勝にて失禮仕り候
種々御惠與に預り感謝に堪へず候　殊に日本演劇之說に關する起原沿革及其理趣說き得て入奄入細廣汎なる引證徹底せる理論は宛然演劇學の秘奧を顯揚して餘りあり取り分け第四章に於ける詳釋は正しく大乘演劇とも稱すべく其卓見創說深く感服仕り候　これ獨り劇の極致を開示せられたるのみにあらず一大修

茨木一如仁者

會員諸賢に別紙同樣よろしく

○

拜啓　天殃地災我が無辜の同胞に禍することの何ぞ夫れ是の如く悲慘なるや御惠贈の新聞を見て其狀況の一端を知り同情の涙に咽び居候

禪學會救濟托鉢御義捐の段忝く存居候迂衲未だ病苦を脫せざるも明後日より約一週日の豫定を以て九州に赴き申候

會員諸賢に宜布御致聲相願候　早々不備

大正十五年八月五日　　石禪

茨木一如居士侍右

○

石田宮三郎氏へ――

有多種二無兩般只報恩主義の徹底こそ望ましけれ
會員諸賢一層御强健奉至禱候　頓首

大正十四年十二月四日

石　禪

茨木一如先生　禪榻下

○

寒中雪街の托鉢遊行五夜に渉りて修行せられつることの尊とさよ供養の施主の心も河水の如く清かるべし安善方丈の道念と精進は隨喜に堪へず兩新聞社の御後援は他方世界の諸佛の來迎とも見るべし長生橋上の菩提回向はいかばかりか法界を莊嚴せしことならん遙かによろこび會員諸賢のいやまし御健康を祈り上候

雪をふむひゞきもうれし法の聲
寒行や河みづきよし鈴の聲

寅一月念五

石　禪

凍風冷雪の中霜鈴響き高く誦經聲淸く幾多の信衆合掌感激して信財を捧ぐ一粒米重きこと山の如く一錢財も珍寶より貴とし三十二員の菩薩行見聞の巨益果して如何計りや太祖大師大寂定中歡喜無量なるべし空軒大士よりも御書面あり天仗大士より新聞を惠贈せられ今亦詳細なる御報に接し遙に北越に向ひ合掌敬禮致候

何卒諸君子に別紙同樣宜布御致誠被下度奉希候先は右御禮辭まで早々不悉

大正十四年一月二十一日　　石禪

茨木一如仁者　貴右

○

寒威追日嚴敷候處禪學會員諸賢益々御勇健身心倶如金剛の段喜悅不斜候又もや托鉢の行持被遊候事隨喜に堪へず候寒風吹きすさむ中に遊戲して胸次春風の如き溫味を感じ枯木寒巖の間百花爛熳の觀ありぬべし

北越小作爭議蔓延の兆ありと聞き民心の惡化を案じ居候上流の人々此際根本的救濟策を講じ差別に偏せず溺れず中道一貫の大悲心に一大融合を圖られたく念じ居候隨處三毒の暴威を振ふこといとあさまし一

候

長生橋上の回向は鱗族鷗侶にまでも其化を及ぼせるならんと存じ最とありがたく存じ候雪途玉盤の如く塵を留めず飛雪天華の如く嘉祥を降す禪心皎々と一點の熱閙なし正に是れ一色光中の遊戯三昧寒殺闍梨の端的濕乎として佛慈を感じ玉はんと存じ候

人心日に動搖せんとす此時に當り禪界の諸大士直下に承當し去らば不言の中に幾百千人を感化することあるべし

諸大士によろしく願上候　早々不悉

大正十三年一月二十九日　石禪敬具

長岡禪學會代表　茨木一如大士　貴右

○

粛啓　貴下及び禪學會員諸賢益々御勇健恭賀此事に候去る十二日より十六日まで毎夜寒行托鉢を修行せられ一般淳信の親施を積聚して本山大蓮華修理の費用中に御寄贈を賜はり候事實に感激に堪へず隨喜の涙禁ずること能はず候

同會へ――

肅啓　會員諸大德益々勇猛精進大閙中に於て大寂定を坐斷し擧手投足の間に祖師意を拈來拈去せらるゝこと不堪隨喜候過般は無限の御懇情感謝不盡に候歸山後改めて磐州に赴き昨夜歸方丈幸に無事本月は重もに在山可致候

京濱地方も枯木一點之萠芽を生じ漸くに開展の兆あるが如し復興氣分も稍々活氣を帶び來れり大死一番大活現成の消息頼もしく候擧國一致の振興最も願はしけれ長陵の禪天地益々恢展し去らば古志の山川も一段の放光明あるべし只諸大德の御健康を祝禱致候

先は御禮辭まで　早々不悉

大正十二年十一月七日　　石禪

長岡禪學會諸大德　御中

○

同氏へ――（以下五通）

復啓　禪學會諸賢の寒中托鉢過日は北越新報に於て其寫眞を見今亦貴書に依りて其成績を知り法喜無量に

○

新年新陽新天地雪中禪居自らなる一色之王三昧寒中之禪生涯また一段之風情あるべし　至祝不盡

昨臘は安善道場に於ける成道の記念靜坐會員諸賢の提唱誠に好箇之法供養に候　石龍も追々法話に慣れ候事喜び居り候

臘來頻々之降雪御地も左こそと想ひ此上は禪身之健康のみ祈願致居候　東京は未だ一回の雪を見ず晴天のみ打續き居り尤も寒氣は例年より强し衲は來る十六七日頃より湘南に休養可致候

安善方丈等の道念に切なる會員諸賢の求道に親しき萬里一條轍不退轉之三昧歡喜無量　欲窮千里目更上一層樓　此上ともます／＼精進祈上候　早々不備

大正十二年一月六日　　石禪

長岡禪學會代表　茨木一如仁者　貴右

○

禪會諸居士法身益々堅固不二門中神通無礙治生産業の上に轉法輪之事　至禱々々

大正十一年二月念八　　於岡崎

石　禪

茨木一如仁者

○

同氏へ――（以下二通）

肅啓　成佛直指之行持綿々不斷臘八斷臂報恩之王三昧只空軒居士と共に獅子吼せられしを隨喜無量也天地は默を守り天心は常に不動なり而して百物成り萬象活す空軒に月を賞し萬法の一如を了す其樂しみは窮りなかるべし

昌福主之病氣痛心に堪へず去る二日附き來狀ありき間もなく臥床せられしものと見ゆ肺炎は難症油斷なりがたし療養三昧に入りて回復を圖られたく衲も直ちに三寶に祈請を捧げ候　寺内の人々にも衲の心事御傳へ被下經過の模樣時々報知ありたき旨御申聞被下度山家氏主治醫として極力御療治奉祈上候

會員御一同にも宜布願上候　早々不備

石　禪

衲本日當地に着 幸に無事御省念御一同に宜布願上候 不備

大正十一年二月十七日　　於大阪

石禪

茨木一如仁者　托鉢同情禪園　御中

赤紫殿鶴見に健在御安心被下度候

○

同氏へ――參州岡崎より

肅啓　今回石龍に托し御懇情のこもりし御手紙及び澤山之滋養資御惠與 忝く御禮述べ盡しがたく候 御注告に從ひ含嗽吸入及び歡味之修養に相努め可申候
山高水長之書禪韻あり仙味あり嬉しく拜見致し候 知見の山高ければ慈悲の雲常に漲り禪定の水長ければ信仰の波必ず飜へる一切の文字そのまゝ不立文字なり一切の諸法 悉く是れ宇宙之大文章なり一如之法門天地に充滿す可喜々々
衲昨夜鶴山を下り降雪中出發當地は晴天恰も陽春花期の如し石龍も同行に候 御地三月咄堂居士來演之由是亦隨喜不盡

會員諸賢冀くば健康を保任せられよ肉身を惜むに非ず法身を惜むなり喫茶喫飯裏にも打成一片ならば盡く是れ不染汚の妙行なるべし　珍重

大正十一年一月十九日　　　石　禪

長岡禪學會員　茨木一如居士　明窓下

○

同氏へ――大阪市より

肅復　禪心禪信禪行禪修之勇猛精進最も嬉し

親不知之慘禍は近代稀有之大厄同情之至り言葉にも盡しがたし禪員相愛之涙一大寒行となり風雪之間に鉢を托し兩夜の淨施擧げて救恤慰問に供養せられしを誠に有りがたく深く感激致し候

安善寺方丈の熱誠各行者之深信共に慈悲之結晶正に是れ如是經の轉讀忝く存じ候寒風骨を刺すも慈念溫きこと春の如く飛雪面を撲つも信心淨きこと花の如し眞に雪裡梅花綻一枝の感あるべし衲百里の外自ら其列に加はるの想ひあり　珍重不盡

松川廣井兩居士御不快なりし由不取敢一書を呈し候猶ほ宜敷日面佛月面佛之相見專一に候

關何れにしても國力の發展を視るに非ざれば根本的解決は不可能と被認候
國力開展の要機は民心の作興に在り此一大公案萬人齊く工夫肝要と存じ候
獨り山雲海月のみありて呵々大笑衲等の行動も混沌描眉之小技巧なるべし庭前の椰子樹說破して餘蘊なし
珍重

大正十年八月十日　　堡府別院にて

石　禪

長岡禪學會各位　禪榻下

○

同氏へ――

貴書拜見　會員諸賢入寒後依例寒行托鉢を行ぜられ淨財淨米を受けられたるは双互無上の福田也
寒風雪夜之經行　信力白於雪　淨行麗於花　沍寒の中菩提妙樂の溫味ありしならん　滅却心頭火自涼と古人も道破せり擧揚信力雪還溫の感あらん
今の世社會的にも國際的にも虛僞諂諛維れ多し滔々たる天下求道の眞人太だ稀なり寒行三昧中返照一番せば始て古佛と相見し去らん

八月五日六日七日の三日(但し七日は夜行にて上京の事)
右三日丈に御節約相願度尤もその間に五日間に相當する程の精進を試み可申候
頸城轉輪寺八月三日より五日まで敎約の處二日間に節し五日の早天同地より御地に參上することに豫定仕候次第に候
山雲海月は不言の中に領略被下度候 尾山濃野隨處安樂御省念被下度候 早々頓首

申六月一日　　　　石禪

茨木先生侍史

○

同會へ――布哇ホノル、別院より

肅啓 貴會員諸大士益々御健祥禪機御鍛錬平常裏圓轉無罣礙の御事と遙かに祝し居候
野衲の少惱も漸次輕快昨日まで約二旬の島巡りも別段異狀なく老軀増々元氣に御座候 過日御書面に接し同風千里御道情不堪感激候
當地は宛如たる人種の展覽會敎田開拓之好境地但し英語の力なければ不能遂其意勞働問題は當地最大の難

石井松五郎殿

○

貴書拜見　曾て不例なりし由寒氣に向へば一層御用心可被致候　墓石の事圖面の通りにてけつこうよろしく願上候

島倉さまの御注意ありがたく先般來理研ヴタミンAを毎日三回服用致し居候へばそれにて宜しきやとも思はる尚歸京後醫士とも相談の上肝油をも服用可致候　御一同に宜布願上候　不悉

大正十五年十一月念二　　石禪

石井松五郎殿

○

茨木一如氏(長岡市長岡禪學會)へ——

拜啓　過般者幾度か御送迎を賜はり奉感謝候　禪學會之事色々都合致し候へども八月は各地よりの法筵續出して餘日無之依て

石井松五郎殿

○

同氏へ――（以下二通）

復啓　嚴暑の際御健祥の段歡慶不斜候六月以來兩度貴地を通過せしもいつも深夜なりしため御通知遠慮せしめ候

衲病狀はかゞしからず夫々協議の結果帝大物療內科眞鍋先生の診察を去る十日に受け候先生も稻田博士とも打合せの上二時間に渉りて診察し結局器械應用は身體に適せず一切の加工的方法を避け自然療養に依るを安全の策とするの意見にて有之候他の先生方も同意見なりしかば兩三日中鎌倉に轉地することゝし目下適當の住宅を借受多少手入中の由に候右の次第に付兎に角安心可被下候

鐸木翁御健康恭賀不斜候金婚式の賀章別紙拜呈候故民報社に宜布御傳呈被下度候尙鐸木翁御兩所へは特に御致誠願上候

時下渾家及ひ親族一同無事安寧祝禱此事に候　早々不備

大正十五年七月十四日　　石禪

○

同氏へ——大分縣中津町安全寺より

此程は大勢にて御厄介に相成り萬々御厚待感謝に堪へす候新築の別邸閑靜にして幽致あり誠に居心地好く被感候

迂衲到着の日孫女の誕生ありしこと最も喜ばし隨處貴店の好評を耳にし歡悦に堪へす兩親若し在さばさこそ滿悦せらるゝならんと想像し追慕の念切なり

衲は東京の法筵終了し二十九日朝出立昨日正午當地に安著せり水明山紫の仙境福澤諭吉氏の出生地人氣頗る溫良なり

久賀博士横濱より來り東京にて診療病狀頗る良好との事にて水藥を見合すべしとの注意有之候間御安心可被下候

お岩どの高好どの近藤樣おとら殿おたか殿等に宜敷傳聲被下度候

先は御禮辭まで　早々不備

大正十三年十月一日

於大分縣中津町安全寺戒場

石井松五郎殿

○

貴書披見　浩一病氣なりし由驚入候　幸に快方の趣き安心致候　其他皆々無事にて且別に住宅を設けたる由今までの處は狭かりしに依り好都合と存じ候

衲は九月六日出立富山新潟より山形縣に至り同月二十六日の夕刻貴地着夜間講演の上一泊に付貴宅に御世話願上候　翌日午前梁川に赴き同夜行汽車にて歸京の事に決定せり就ては母上の年回は二十七日にては混雜にて緩々御燒香も相成るまじその以前に勤め被下候方然るべきか尤も衲は御墓參は申すに及ばず靈壇へも一片の御回向に及ぶのみのことなれば別に振舞等の事なくばその日にても宜しきかと思ふ右は貞吉殿及び大安樣とも打合せ可然御定可被下候

一昨日より東京に於ける特殊の療法たる按摩術を受け隔日參る事に致し候　大體に於て餘程氣分も宜しく候間御安心相成度候　いは子殿及び高好どの等に宜敷御傳聲願上候　早々不備

大正十三年八月三十一日

石禪

石井松五郎殿

石禪

石井松五郎殿

○

肅啓　過日歸梁の折種々御歡待を蒙り萬々感謝に堪へず候　歸途郡山まで熊田氏同車又島倉君も同行致し熊田氏より色々御話しを聞き同氏の思想といひ奇術といひ感服致候

歸京後病軀なるに中々繁忙晝夜苦患を感じ居候

梁川大安樣より兩親に軒號の事御注意ありたれば興國方丈に願ひ別紙左の軒號を附することゝなり候　父君は衲の淨春時代母上は大榮にての御逝去なれば大安さまの御意見に同意して軒號を附し候　石碑面の處大安さま貞吉樣に依賴致し候

衲は本月二十七日頃より鎌倉にて靜養三昧に入る豫定なり

おいわ殿高好どの兩人近藤氏外みな〳〵さまに宜布願上候　先は御禮まで　不備

亥十一月七日

石禪

石井松五郎殿

○

復 今次京濱を中心とせる震火の大災は其慘狀言語に絶し候 高好夫妻無事の由安堵致候 取引先全滅との事萬般御焦慮察入候
初六日の夜山形發光院にて深夜多數の送りを受け不堪感激候
宇都宮に本山員二名出張し居り同處に下車一泊の上更に淨春院に三泊漸く十一日に歸山致候 本山も倒壞破損約二十棟意外の被害幸に佛殿祖堂放光堂紫雲臺跳龍室無事にて漸次復舊に着手の心算死傷者一人もなかりしを喜び居候
大遠忌は一ヶ年延期に決定せり災後の京濱は目も當てられず同情の涙止めがたし只非常的罹災者に元來強きものあるを認め喜居候 此天災に依り國民の物質生活及び精神生活の上に一轉機を見るべく轉禍作福の結果こそ見まほしけれ
營業上にも種々困難あるらんと察入候 家內中及皆々樣に宜敷御傳聲被下可候 早々不備

大正十二年九月念四

家内一同無事なるや近藤家如何皆々に宜敷御傳聲可被下候　早々不備

大正十一年二月十日　　石禪

石井松五郎殿

晉山式は四月十六日と決定せり

○

貴書敬讀　御一同健全何より嬉しく候　飯坂様の逝去不堪哀悼本日恒二殿に宛弔詞を發し候　大陽會興風會多數參拜感謝致居候　衲も九州巡回中再度發熱せしが間もなく解熱致候　されど呼吸中々困難病魔と鬪ひつゝ勤行隨分難儀只到る處同情ある待遇にて聊か自ら慰め居り候　溫煖とならば氣分樂にならんとそれのみ待ち居り候　鈴木さま古稀に付祝宴いつ頃開かるや右に付先般御話しありしこと委しく御知らせ相成度候

仙助母病氣再發の由今一回の快癒を祈る寺町おまんどのも心臟病とやら案居候

何卒貴家一同無事安全專一近藤氏始め御妹達にもよろしく御致聲願上候　不備

亥四月十八日

送り候
お岩も達者なるべし來秋は梁川に授戒會あり其折先考の三十三回佛事をも勤めたしと思ひ居候
時下一層御身の用心専一なり
家内一同及び近藤家外皆々樣に宜敷飴屋さまへも早速書面可相發候　早々不備

酉十二月念八　　石　禪

石井松五郎殿

○

同氏へ――（以下五通）

肅啓　定右衛門殿突然之御死去不堪哀悼候千既に赴き會葬せられ候由忝なく存候病氣の事も知らず直ちに危篤の電報に接し翌日逝去の訃報あり恰も夢の如く涙を以て御回向致居候
衲の健康未恢復三四の醫師に診察を乞ひ一時は巡教中止の議もありしが昨日三浦博士來山非常に叮嚀に診察せられ其結果先生の注意を嚴守するを條件として十六日より應化の途に上ることゝ相成候間御省念被下度候

致候
石市様大安様貞吉様等に宜敷御致誠被下度　早々不備

酉三月十三日

石禪

石井松五郎殿

○

同氏へ――豆州熱海村井吉兵衛氏別墅より

此程は御書面嬉しく披見致し候　歸梁後月餘巡錫し多少の疲勞を感ぜしため內外の人々切に靜養を勸めらるゝに依り去十九日小田原の山莊に至り二十二日當處に移り幽居致し居り候　明日は歸山し一月の公式後亦復巡錫の豫定に候　大分氣分も宜しく殊に村井御主人の心支ひ當別墅全部を明け渡し只掃除人と炊士とを置くのみにて氣樂三昧に候

近藤主人御病氣の由案じ居り候　是非早く快方を祈上候　御挨拶狀を呈せざりしは侍僧の手落なるべく鶴山侍局へ申遣はし候

仙助の妻出産近きにあり男子なりとて命名を依賴し來れり依て壽太郎と名け若し女子ならば壽子として申

○

同氏へ——（以下二通）

過般遠路再度の來山萬々忝く存じ候貞吉殿へ案内漏れの由侍局の失念なるべしよしなになだめ可被下候

先考年回衲は到底歸國展墓の日を有せず明年歸梁の上相勤めたし本年は貴弟のみ參詣し親戚方にも可然御傳え被下度候

一同によろしく時下自愛萬々

二月念五

石禪

石井松五郎殿

餘は石龍より御回答

○

肅啓　其後御別狀無之哉本月は先考年回なるも衲は歸梁不可能に付明年改めて展墓供養可致本年は代表し御參詣香華を手向被下度候當方にては當日は略式供養を相營み來月は鶴見に於て大供養會を修行可

八月六日　　　　　　　　　　福井市孝顯寺にて

石井松五郎殿　　　　　　　　護國石禪

○

同氏へ――岡山市觀音寺より

貴書拜見候御變りも無之趣恭賀不斜候

兩本山貫首を失ひたる不幸之厄年痛悼此事に候鶴山後薫に付候補に推薦せられ不肖及びがたき大任なるも何事も國家と宗門との爲めなれば當選を得るに至らば努力すべき旨御答へ致し置候明年一月中旬に至らざれば決定せずその內更に室橋師より可爲申上候

高よりも書面ありよろしく御傳聲賴入り候その他一同にも時下自重祈入り候　不備

申十二日六日　　　　　　　　岡山市觀音寺にて

石禪

石井松五郎殿

宏御母堂十六日ころより少々快方に向ひたるも今尚半昏睡の狀態にて四五日は警戒期に可有之乍去稍や安心に候

迂衲も名古屋奉安殿に住職を本山より被命目下協議中に候　忙中略書　頓首

九月十九日　　　雲洞石禪

石井松五郎殿

一同によろしく

○

同氏へ——福井市孝顯寺より

暑中御變りなきや

迂衲今般兩大本山の命に依り相州最乘寺に移轉することゝなり九月一日假入山式相勤め申候右は突然の命令にて有之候十月廿二日頃晉山式擧行の豫定その折は來山可被下候大多忙中に付梁川にも別に御沙汰不仕何れ公然發表の上改めて可申上心得に付よろしく願ひ上候

暑氣嚴烈に付一層御用心高好も達者と存じ居候この上とも御注意專一是祈候　早々

肅啓　益々御淸榮恭賀此事に候　陳者迂衲來る十九日東京一番にて貴地東安寺樣へ赴き申候　實は其前に梁川へ參る心得なりしも歸國中多分の日子を費せし爲めその餘地無之又東安寺樣戒會後は東京本宗議會前にて暫時も猶豫不相成依て梁川行は後日を待つことゝ致し候
猶品川宏御母堂も多分東安寺の戒會に御出に可相成と存じ候　さる場合は貴宅にて御宿可被下候　寺は混雜なるべければ御泊り丈貴宅に於てせば御樂ならんと存じ候
何れ東安寺滯錫中緩々御話し可申候　皆々に宜布願上候　早々頓首

十月十三日　　　　雲洞石禪

石井松五郎殿

○

再三の御書面殆ど同時に着新用姉上遂に御逝去實に情けなきことに御座候會葬不可能の爲於此地特に法會を營み申候　四圍の境遇悲みに堪へず候
腫物にて御難澁被致候由これ亦心痛今後の御用心專一に願上候　御普請大造營併し慶賀の至り今冬は姉と伯母の供養に參りたくその節新築の二階入りを樂み申候

質鋭利の資加ふるに恩家の子なるを以て將來の發達を樂み居候處意外の禍事浮世の習とは申しながら慨歎の至りに御座候母上の御愁傷は實に非常にして氣の毒の至りに候

衲も本日水原と申す處へ參り十四日に歸寺候に付其折は多數の僧衆を集め懇懃に追善の佛事を勤修可致候いわ殿の愁歎は一層被察候得共千悔萬憾も亦及ばず此上は唯に身體の健康を專一にし他時異日吉祥雲に乘じ此度の愁を夢物語りに致すの期を待つこと肝要に御座候

母上は昨年に引換へ今年は大に御健祥に被爲渡候水野も鷲卷村東福寺江湖會に常在し衲に代りて心配致居候碩宗は寺內に在りて勉强せり何卒いわ殿始め鈴木樣及びいわ殿の御實家等へ宜布御鳳聲奉希上候。

出發際に付單に御悔狀まで如是御座候餘は後便に可申上候　不一

明治三十二年七月七日　　　石禪

石井松五郎殿

○

同氏へ——越後雲洞菴より（以下二通）

飯田大休師（新潟市法音寺）へ――羽前金山寳圓寺戒場より

○

粛啓　道況益〻御健勝恭賀不盡に候過日禪學會の折は初中後とも御厚情に預り忝く存じ候其後不老閣猊下御親臨の曇華教團發會式も貴刹に於て盛大に擧行せられ候趣欣喜の至りに候該教團は全然宗政の外に立ち縣下一致して時代的宣道の好機關として理想的に發達せんこと不堪切望候道俗諸賢に宜布御致聲相願候先は御禮辭まで　草々不備

大正十三年九月廿二日　　石禪　敬具

法音主盟　飯田大林老宗師

○

石井松五郎氏（福島市）へ

復啓　小衲儀此間中處々奔走し昨日漸く新潟へ歸り本日久し振りにて歸寺し直ちに貴狀披見候處八郎事幼稚園にて頓病相發し直ちに永眠候由夢かと計り打驚き貴家の愁傷察し遣るだに斷腸の思に不堪候性

井原徹學師（山口縣大津町大寧寺）へ――大本山總持寺より

○

拜啓　御道況益々御康安奉恭賀候　開祖石屋禪師五百年大遠忌報恩戸羅會御修行に就き御住山以來殿堂の修造紫雲閣等の新築境内の整理莊嚴の一新其事業其勤勞誠是法苑の芬陀利華と稱すべし迂衲親く戒場に臨み初中後とも深大の御厚遇不堪感激之至候　唯病軀勤行不如意閑却不少慚惶の至りに候　石屋開祖之法眼至今添一段之光輝龍窟雲密虎溪月圓祖風必や宣揚法幸無量奉銘肝候　檀信諸賢亦一段之信力を鼓して外護の誠を竭し青年及婦人會等の各團體も異常の援護を致され候事一々感謝に堪へず候

迂衲及入尾州病勢相加頗感苦患候ひしも去る十三四日頃より稍や緩和を來し無滯相勤居候間御省念被下度候　只今御懇篤なる御書面に接し御親情の程忝く存候

御山内及御門葉並檀頭信者各位に前紙同樣御致誠相願候　先は右御禮辭まで　誠惶不悉

大正十五年十月十八日　　總持石禪　敬具

大寧寶刹　井原徹學老宗師　侍史

安達石天様

○

石見哲成師（廣島縣比婆郡本村岳晉寺）へ――東京市芝公園永平寺出張所より

復啓　時下寒威日相加候處御道況益々御健勝恭賀不盡に候

今般御懇篤なる御芳書を賜はり忝く拜誦仕候處明年春期又は秋期之中來錫すべき旨御高囑之事不肖なる身に取りては光榮不過之直ちに御請け致度は山々に候得共明年は春秋とも他に御約束申居り殆ど寸隙を餘さず洵に以て遺憾の至りに候呉市よりも御交渉に接し候ひしも前記の次第に付三月中旬以後十月過まで敎務連續の爲め御辭退を願ひ置たる次第に有之候御懇狀を拜し參趨相務め度は山々なるも如何共差繰の道無之右不惡御諒恕被下度候

時下折角御自愛爲人法不堪切望候　誠恐拜覆

十二月十六日　　新井石禪　九拜

岳晉尊堂老宗師

場に於て信仰の體驗を說きて處世の根本力としての信仰を鼓吹せらるゝことは或る意味に於て宗教家の所說よりも一層深刻なる感激を與へ玉ふものと思ひます須賀川實科高等女學校々友會櫻內氏等の御手紙を拜見して實にうれしく感じました

一領の洋服を裁縫するにも身體に適合せざるべからず其縫ひ方裁ち方品質色相それ〴〵の調和整頓を要すること恰も人格を養成するに同じかるべし既に出來あがりたる上にても取扱方たゝみ方その他あいろんの掛け方湯通し方等みなそれ〴〵の方式に依らざるべからず是れ吾人が日々不斷の修養法に似たり此法なかりせば品格を保ち體裁を整ふることかたかるべし洋服一枚にも自づから聖賢の道を表示して意味深長なるべし貴氏が社會奉仕として現代必要の洋服に關する智能を啓發せしめ同時に活きたる信仰を宣傳せらるゝこと實に聖なる行事と申すべきであります

今後は一層御身の健康を保持し家道の興隆專要なり一家の繁榮は國力の基礎を造るもの殊に業務の發展は種々の點に於て國家の文化を向上せしむるの要素なるべし

快活なれ忍耐なれ雅量なきは服の窮屈なるが如し緊張味なきは服のしまりなきが如し緩急宜しきに適し寬嚴その中を得て始て平常心是道の古訓に相應すべし

右愚案のまゝ嬉しさのあまり申上る次第であります

大正十五年八月二十四日

蔓延し天道將に破れんとす此時に於て和合誠實親切忍耐信仰の五色の石を以てせば皇國民族の美德は燦爛として輝きを放つであらうと思ひます

それにつけても身體の健康最も大切なり衲も常にそれを祈りて居ります御家內も徒弟方もいづれその內修養訓をしたゝめて御贈り致します三澤さま相原さまによろしくねがひます

大正十四年九月二十六日

石禪

安達石天様

○

同氏へ――大本山總持寺より

復啓　殘暑の候益々御健勝歡慶不斜候今回細々の尊書嬉しく拜見致しました衲の事を時々夢に見らることは能々深き御因緣なるべし

又貴氏は常に自己の修養に務めらるゝのみならず商工組合の店員徒弟青年處女達に修養の友となり玉ふこと最も嬉し殊に今泉裁縫學校長どのゝ意見により特に洋服に關する知識技能を教授し延て各裁縫所その他多數に及び若松にまで御苦勞下さること實に好箇の大布施行にして現代必須の社會教育と存じますその

同氏へ――尾州七寶村天桂山より

過日は貴地通過の折換舌の貴書を受取りくりかへし〳〵幾度も之を讀み其まごゝろの溢るゝ計りなる筆のしづくの一滴々々に熱あり力あり仁あり義あることを感じました

多くの徒弟を使用し教養して自ら率先して業務にいそしみその技巧ます〳〵加はりて曩には香川縣博覽會に出品して一等賞をうけ平町に出品して銅牌をうくる等は誠に喜ばしき極みであります市內天野校長の贊辭も天の聲なり見習中の徒弟二人までも組合中の模範徒弟として表彰せられたるが如きは實に神聖なる芳譽と謂ふべし而も一年生の心持にて增々精進せらるゝこと何より嬉しくもありがたし

個人の富は國家の富にして個人の信用は國家の品位を向上せしむる所以なり況や現代服の裁縫の如きは國民の必需品なれば其業務は最も神聖なりとす此業務を擴張するには常に一年生たるの覺悟を忘れず小成に安んぜず小功に滿足せず彌が上にも勇猛精進し玉ふこと是れ卽ち忠なり孝なり報恩の行持なり無窮の功德なり雅量を養うて腹を立てず些々たる事には愚の如く魯の如くのんきなとうさんとなりすまし業に當りては熱心に眞面目に綿密に誠實に勤勉をたのしみ活動を好み家內和合常に笑顏を以て交はり如何なる事にも氣嫌の好い返事と挨拶とをなし御客を見ては皆な福の神と思ひ徒弟を誡めて酒色に心を移さず人の人たる道を守るを無上のたのしみとなし增々家運の隆盛を招致するやう切望致します

昔天の破裂せしとき女媧氏出でて五色の石を以て之を補ひたり今の世は人情浮薄に流れ虛榮放縱の風漸く

安達末吉様

○

同氏へ――大本山總持寺跳龍室より

肅復　此度はまごゝろのこもりし御寫眞と御手紙とを賜はり書面もうれしく披見寫眞は珠數を手にせられしは忍辱慈悲のすがた御信力のあつき御志の深き一方ならず喜び申候

珠數は信力のこもりし道の法具にて其珠の一顆〳〵は直ちに菩提の結晶とも見るべしたとひ如何なる時如何なる處にても之を手にせば佛菩薩の御前に居るに異ならず之を賴りに堪忍を守り正直に住し親切をつくし業務を樂しみ玉はゞ家安く身正しく信用を來し幸福の門を開くべし

此上とも健康第一に家運御興隆祈上候　早々不一

大正十二年三月十八日

總持石禪

安達末吉殿

○

九月念七　　　　　　新井石禪

淺井先生　侍史

○

安達末吉氏（福島縣郡山市）へ――石川縣鳳至郡門前總持寺別院より

復啓　增々御健祥業務御精勵恭賀不斜候高瀨消防組よりの謝狀嬉しく拜見致し是れ貴下の誠實勤勉の力求むる所なくして之を得たるもの乃ち自然の彰表に可有之因果歷然明々不昧此上とも精業專一祈上候
四の恩とは佛の敎ふる所一には君主の御恩二に父母祖先の恩三に衆生の恩卽ち社會のめぐみなり商業より申せば原料や材器を供するもの購買する者皆是れ恩人なり四には佛の御恩なり廣き意味にていへば敎への恩に候此四恩によりて人としての生活を爲すこと得べきを以て之に感謝の意を捧ぐること尤も深き意味に有之候
何卒健康第一に道德的御精業不堪切望候　早々不備

大正十一年九月十一日　　　　　　石禪

任し業務に精勵し敬神奉佛益々信心をはげみ常ににこ〱主義にて互に親しみ共に喜び此世に於て極樂のたのしみを得玉ふこと疑ひなかるべく繁久老師の心境は實に安心解脱の好伴侶なるべく候
御家内御一同によろしく御鶴聲下されたく候先は御禮まで

大正十四年七月五日

總持石禪（花押）

淺井ことさまへ

○

淺井織世氏（東京代々木）へ――

拜復益々御健祥にて學敎兩ら御盡力不堪感激候御高書只今於當山敬誦仕候御仰聞之件敬承仕候
碧巖は第一則にても第二則にても宜布候目下手許に書冊無之に付前記之内何れなり御選定被下度候但し本文全部にては長きに過ぎ候へば垂示と本則と頌のみとして着語も御省き被下可然と存候
長松寺方丈平常餘りに御心を過度に被使爲めに衰弱を致され候ものに被察候に付何卒靜養に被勤候樣御懇奬願上候道俗諸賢に宜布御致誠是祈候　誠恐頓首

岩手縣に赴く豫定に有之候
民心の弛緩日に其度を增し作興奬勵の事瞬時も等閑に付しがたし此際此時一層健康を保ち爲邦家御盡力是
祈候　早々不備

大正十三年五月六日

石　禪

阿部泰葬殿

○

浅井こと氏（高岡市）へ――大本山總持寺より

肅啓　益々御健祥恭賀不斜候
過日は大勢にて參上致し眞心を籠め玉ひし御饗應に預り乍每度御懇情の程不堪感謝候兩本山とも歷代の貫首に御因緣深く森田日置石川の各禪師も寄錫休息せられ候趣誠に尊く有りがたく感じ候御家內中打揃親切を盡され何等の窮屈なく恰も靜養所に遊びし如き心地被致候殊に總持寺にては曾てより深大の御外護に預かり恩功最も多し實にありがたき御因緣と觀じ候
只願くは御家道增々繁昌し柱子蘭孫いく千代かけて末ひろく御榮え家內和合の敬順慈忍を旨とし健康を保

同師へ――大本山總持寺より

肅啓 道況彌々御多祥 奉 恭賀 候 過般御地方巡錫の折は初中後とも御親切なる御扶護を被むり感謝不盡に 候 微軀 幸 に無恙豫定の巡回 を了し昨日歸山健康は日を追うて回 復致 候 間 御 省 念被下度 候 山内大衆中昨月來多數の患者を出し焦慮致候得共何れも輕快に赴き安 堵 仕 候 迂衲も人々の勸告に依り兩三日中に小田原に移り 暫時靜養 仕 可 候 昨日御華墨に接し御道 情の厚き銘 肝 罷 在 候 先は御禮旁々御消息まで如是に御座 候 時下向暑御自愛萬々 早々不備

大正十一年七月十四日　　總 持 石 禪 敬 具

繁久音老宗師 侍史

御地方道俗諸賢に宜布御鶴聲 奉 願 上 候

○

阿部泰葬師(福島縣信夫郡餘目村)へ――大本山總持寺より

肅啓 益々御健勝にて公務に精進し世諦流布の間に轉法輪の段不堪欣慶 候 尙ほ常恆不斷に法效の爲め御盡力の程衷心感謝致し居 候 今回寺院名鑑印刷配贈何よりの重 寶御心 入忝 く存じられしく接手致 候 衲病軀未癒なるも隨意勤同樣に藥用しつゝ 巡 錫 致 居 候 來る九日長野縣に移錫し十五日頃御地通過し

鶴山は嚴正中立の御事と奉存候何卒餘りに爭競せず和合尊の實を得度奉切望候爲宗萬々御指導所希に候　亂筆御有免　頓首

申九月十九日　　石禪九拜

繁久尊臺老師　貴侍

○

拜復　寒威漸相加候處御道況彌御康寧奉恭賀候紫雲臺牧牛老禪師の御遷化は教界の不幸嶽山の最大禍事不堪哀悼之至候後董に關し不肖禪を御推薦の光榮を辱うし只々恐縮の外無之御道情の深厚奉感激候若し尊位を汚し奉ることと相成候際は祖眞に近事し故禪師の御志を襲ぎ奉るを唯一の行持となし鶴山事業の完成を期し諸大德御補導の下に鞠躬盡瘁可仕向後一層御庇蔭奉悃願候御尊體此上とも御自愛是祈候　早々頓首

申十二月十四日　　石禪九拜

繁久寺尊堂老師　御近侍

○

高岡市芳野繁久寺在田如山師へ――

○

粛啓　今般御親化戒場御啓建法門の大幸不過候　迂衲當地に教約ありて御伺申上ること不相叶甚だ遺憾に存じ候　今回は新董猊下北陸最初の御親化萬般可然御注意被下化風の扇揚法澤の霑洽相成候様奉布上候

五百應供の御供養定めし御盛大の事と察上候　此大法要を記念として御地の教田一層の開拓靈草異苗漫々地不堪切望

御隨喜諸大德に宜布願上候　誠恐頓首

六月廿一日　　石　禪　九　拜

繁久尊董老宗師

○

同師へ――大雄山最乘寺より

拜啓　十三日附の御狀只今拜受不取敢電報を以て御答申上候

推薦狀署名の事は事後承諾になりしもの尤も以前同師推薦同意を被求宗門の長者にてあれば御同意致置候

○

同師へ――名古屋市禪芳寺より

貴書披見致せしに健康にて事業も着々進行又横濱布教所も引受決定の由意外に發展の緒を開きし段歡喜無量に候只だ擴張に急にして之を約するに困難を感じてはならず能々前後を斟酌し將來の安固を圖らるべく候

嘉本老宗師不一方御隨喜感謝不能措候　宜布御申上可被下候

田邊様の事承知致候來春三月好時日を發見に努むべく候衲の主治醫たりし井谷先生御逝去に付本日正午美濃原邸を辭し臨葬今夜信州に出立致候

時下十分自愛あるべく候　不備

大正七年十一月二日

石禪

新井覺禪殿

ほしけれ　向後文長分付來日長養是努哉

大正五年十二月五日

適水叟

覺禪禪和子座右

○

同師（神奈川縣都築郡都岡村福泉寺）へ――新潟縣長岡市松隱舍より

復　貴座下增々健全雄山隨喜滿足の至りに候　衲無事不相變雲遊萍寄觸處隨分攝利御省慮可有之候
三國大姉有緣の信尼新發意攝取菴投歸志望の事好因緣衲の最も喜ぶ所に付可然世話有之度候
衲も來月北海道行本月二十六日には歸山可致候　九月には三島常林寺に結制戒會あり故先師深緣の地なれば貴座下も出會ありたく思ひ候
古屋の出物約束相調候は珍重不盡その事進行せば出會も困難なるべく八九名常在の豫定に付出會せば可成常在を要し候　何れ後日親く御話し可致候　世話人諸氏に宜布　不備

大正七年七月三日

大雄山叟

東京宏梅田等の御母堂も歡喜不斜候　貴子は稽古の風あり若しその風標を操守せば末法の燈明ともなりぬべし　至禱至祝

大正四年六月五日　　雲洞石禪

投老丈室

○

同師（相州足柄上郡大雄山最乘寺侍局）へ――信州下伊那郡神稻慈恩院戒場より

孝心厚き書面うれしく披見致し候　衲氣分甚だすぐれざりければ隨時勤として療養昨日より熱も去り本日久し振りにて入浴せんと思ひ居る先以て安心ありたし

尊前多年禪場に往返道念と信力の堅固なる澆季の菩薩なりとも謂ふべし向後は是非僧堂中の人となりて佛祖の深恩に報ぜられよかし酒類は絶對に禁ぜられよ一點の縫罅萬劫の覊絆なり又清貧は甘んずる處なるも他より厘毛の借錢もなすべからず無一物中無盡藏全く空乏なる時は渇を忍び飢を忍び遂に借資を求めざれ恁麼すれば天供自然に到らん此二點を嚴守して內外玲瓏ならば衲は最愛の嗣として常恒不離身ならん
最乘は僧堂教育の地には非ざれど開祖の冥鑒愛護豈に參禪の士を見棄て玉はんや何卒僧堂の發展こそ望ま

べし
東京に於ける衲の婆言は決して束縛せんとにはあらず住職當時は可成在院して檀信を化導せざれば信嚮不可生且奔走維事とすれば冗費の爲めに倒るゝ恐あるを以てなり然るに毫も之を用ゐるの證蹟なし是れ衲不德の致す所と存じ候
本日他より面白からざることを聞きたれば乍涙此狀を認めたり衲に誤解あれば恕之

大正三年十一月廿六日　　雲洞菴主

覺禪殿

○

同師へ――高岡市龍雲寺より

啓　此程兩度の書面に接し會心感應其喜悅無數なり不覺南望合掌せり枯淡の生涯定めし簞瓢屢虚なることもやあらんされど道心の存する所必ず衣食足る唯た如何なる場合にも分限を踰ゆべからず此儘にて三年の烏兎を送過せば三寶の加被力は求めずして得べし而して吾門の好種草として將來繁茂の佳運を見んこと不可有疑

貴書披見　住持三寶の行持詳細報告實に嬉敷存候　僧風の墮落殆ど其極に達す當此時嶄然古路を履踐するは衲僧の大行持尊前に待つもの只これなり故に老師の報恩亦不過之候

石の上に三年の古言今や尊師の肩上にかゝれり把住の微々たるは儉素なれとの警誡なり必ず沮喪すべからず今後時期を見て布教的法會を修行せられよ化門層々開張することを得む米なくんば托鉢せよ味噌なくんば檀徒に就て少量を奉加せられよ耻づることにはあらじ而して竹箒を拈じ鐘磬を友とし禪誦不怠ならば德不孤必有鄰の功あるべし希くは道心堅固行持不退　珍重

大正三年五月廿一日

雲　洞　禪

投　老　覺、禪　殿

○

同師へ——若州三宅久永寺より

過日濱松講習の節は來侍を期待せしに失望に了れり其折行先を聞きしに誰も知らず衲甚だ面目なく感じたり衲の婆言も貴子の聞く所とならず住持の責任上差支なきやと痛心に堪へず萬一檀中に苦情を生じ又は負債を出す等の事あらば衲無地容身此等の憂は斷じて無之樣堅く申聞候　住職以來の狀況委曲申越す

○

同師（靜岡縣磐田郡阿多古村投老寺）へ――越後國加治村禪定寺道場より

其後更に書面もなきゆへ如何せしやと案居候　宏御母堂は思ひ懸けざる御心配何とも恐れ入り感謝に堪へず是れ山門興隆の端なるべし此恩を恩として必ず忘れず益々勤儉精勵して寺觀を莊嚴すべし必ず不自由に安ずることを忘るべからず又宏母堂へは疊が出來たとか庭を掃除したとか云ふことや若し檀徒より寄附がありしならば其事抔も時々報告して御安心をさせ申すべし又閑暇無聊を感じたらば普濟寺には僧堂もあれば時々上山して雲衲のために一刻の提唱なりとする心得あるべし酒を嚴禁せられよ無益なる金は厘毛をも消費せざれ當分の内は汽車以外の徒歩然るべし辨當は搏食がよし禪的生活を相續すべし　至禱

大正三年四月廿二日　　雲洞菴主

覺禪具壽

○

同師へ――山形縣莊内鶴岡町般若寺より

他人の懐をあてにして借金を輕くし途中の活計を算して無駄なる入費を使ふが如きは衲の家風に適せず衲は借金は大嫌ひなり借るべき時は頼む人の快諾を得て後にする然らざれば托鉢するも借りぬといふが衲の家風と思ふべし

二百五十金を以て投老の御譲りを得たりと聞くこは衲の擔任とす一時入院するには組寺の披露も入用なり依てそれらの費用と五十圓を支給すべし宏家より助成を請ふべきものと思はざれ他は防寒一袈裟を足れりとして自己の力量にて衣食を辨ずべし

予が不二山に住せし時二年間餘も冬袈裟一枚にて夏の盆會を勤めたり而して梁川方丈前に一錢でも自ら下附を願ひしことなかりき天人共に他より惠み來り一生受用不盡なり是を以て子を責むるに非ず脚跟地に點せず無斷に横濱にゆき成田にゆき宿所たる出張所すら行先を知らぬ而して言ふ旅費なきため借金せりと子の肚裏果して恁麼の言舌を吐却し得るや再思せよ三考せよ

皈地を發するに臨み必ず舊恩の方々に無遠慮なることをなす勿れ

大正三年二月十四日

雲洞菴主

覺禪子

新井覺禪殿　　　　　　　　　　雲洞石禪

○

同師へ――尾州河和町心月齋より

過日も進退共に可成知らせてよと頼みしに何の沙汰も無きゆへ東京とのみ思ひしに八日東京を退きしとのこと十二日附の書にて通告に接し衲の命令も些の價値だも存せざることゝ思ひ諦めたり是れ衲が強て申すに非ず子の今日は頗る大切なる實驗室に入りたる如き處ゆへ何事も親しくやさしくあれかしと思ふは子の一身を可愛う思ふ爲めと承知可被下候　宏御主人樣に五十圓を借用せしとのこと是れは子が胸算ありての事なるべし衲に話なくして借用せし物は衲斷じて關知せざれば此段豫め堅く命示致すものなり

東光方丈始め大阪の篤信の方々に恩分を受ること深厚なり衲に對するが如き態度を以て其の方々に對せぬ樣希望致候　宏御主人及母堂樣には最も溫情を以て時々の音信をも怠り玉ふな

又投老寺の事左もありなん併し楊岐の孤住の意にて屋根さへ漏らねば他は壁の破目は新聞位にて張り障子の破れは故紙にて張るといふ風に辛抱せられよ晉山は決して急ぐに及ばず此志あらば人は見棄てぬぞよ

ひ乍ら將來有望なり禪的にして品行嚴肅の道人出づれば地方の教勢をも發展し得べし就ては住職常在せねば功なし縱ひ常在難しとするも半年や一年は常在せねば宜しからず兎に角權利を得るやうに決定し來られしとの事なり依て大竹氏にては目下修學中に付暫時の常在も出來ざるを以て辭任止むなし同寺は宏御主人等も避寒避暑の道場にも致度又道心堅固の人に非ざれば不可なり就て段々協議し貴力生を推すことゝ致したり右は本月中に引移りを爲すべしとのこと其の前に願書を呈出し指令を仰ぐことゝ致度事情切迫の模様に付東光老師に申上げ大急ぎ上京可被致兎に角同寺に住名を出し二年なり三年なり實地に住持三寶の境界を打出し將來開運の端を開かるべし脚跟落着の後は亦適宜の方法を取り阪地の方へも出入することを得べきは勿論とす此機會を逸するは甚だ不可なれば只今電報にて上京をとも思ひしが先々書面を以て要領を聞け申候

寺は伽藍も相當にて屋根替は出來居るも道具等は勿論大不如意の様子此際一層の道心を廻らし實地に修行するは好風流なり

濱松西來院方丈萬事擔任せらるれど兎に角上京し宏御主人様にも相見し第一に履歴書を調製せさるべからず其の心得にて早速上京有之度候

先は要用　東光老師に別啓同様

大正三年一月二十二日午後

有馬郡の講習は大概七月下旬ならばと思ふ左もなくば八月下旬より九月上旬の內なれば都合相成候福井縣高林方丈の方はどうしても都合あしく爲めに見合すことに決し候遺憾なれど是非なし父親在所なれば安心に候何卒來詣者に親切を盡し所の興隆を益するやうに希望候間此旨宜布申上可被下候

廣島行は大概來月廿八日か廿九日なるべし未だ日時決定せず尤も講習は三月三日より八日までなるもそれより兩三日前に參る都合になる見込

大阪大火に就き外護の菩薩に障り無きや特殊の外護の方々の姓名町名等次での節御知らせ被下度候奏衡力生にも宜布

明治四十五年一月廿九日　　雲洞禪

覺禪宗匠座右

○

同師（大阪市外岡町東光寺別院）へ――東京市芝公園永平寺出張所より

迂衲先刻歸京し電報二通に接し候　色々餘計な配慮を相懸申候

只今宏御主人來られたり投老寺へ大竹兼康氏を連れて特に視察に赴かれ昨日歸京然るに同寺は骨山とは云

の一小菴ともいふべし然るに今般超宗は他に移轉することゝなれり就ては大急後住を定めざるを得ず碩宗は福昌寺に住せしを以て今は動き難し依て其許は如何と存候尤も普請の計畫等着手せし由なれば兎に角住職せば當分常任せねばなるまじと思ふ又住職するには一度は超宗に相見し同人の處に至り同行して貰ふかして檀家にも相見し經營せる事に十分の責任を以てせねばならず依て能々勘考して松江市洞光寺にあて回答可有之候

先は右緊急要用まで　早々不一

明治四十四年八月二十日　雲洞菴主

新井覺禪殿

○

同師へ――東京市芝公園永平寺出張所より

此程梅田内田兩母堂來り其地滯在中篤き御世話になりしとて大喜び且つ貴子が運水搬柴の勞に服し綿密に行持すとて讃歎不少迂衲滿足不過之これに就ても今後とも相續無退に禪僧の清生計を營まれ度大器晩成德遂不孤將來益々人格の向上と共に法運開發すべし　綿服とじゆばんとを送ること品川母堂と御話しせし故最早送られしやも知れず

子は濟門に出入すること幾年月子の性能にては必ず一分の印可をも受くべき筈なり又印可を受くる程の力量あらば師家に代りて接得の一部を擔任することもあるべき筈なり不幸にして之を聞かず禪和子は自ら是を求むるに於て怨家を問ふが如く又其の志氣は人天の導師を以て自ら任じ且つ其の任務を盡すに於て常に奮闘的勇氣を鼓するの氣力あらまほし願はくは子よ十分に鍛錬して早く來りて我門の神足とも爲り接化の功を顯はすの覺悟あらんこと至切悃禱の至りに堪へず

東光尊師に宣布御鳳聲を乞ふ

明治四十三年三月一日　石禪

覺禪殿

○

同師（攝津國武庫郡寶塚温泉曹洞宗布敎所）へ——尾州半田町小栗氏方より

無事着所の由安心致候　過日相見の際婆心呈苦言候段罪過不少乞恕衲明夜出立京都にて諏訪師の病を問ひ直ちに舞鶴に直行すべく決定せり依て皆々樣に宜布願上候

陳者靜岡縣濱名郡村櫛村隨緣寺は曾て迂衲が靜養地として普濟寺（濱松）方丈よりいたゞきしものなりその當時徒弟中に適任者なかりければ熊倉超宗をして住職せしめたり右は貧院且つ少檀にはあれど閑居的

て其身を處するの法と爲す是れ一身の生計を中心とするより出たる妄計なり寺を得るは化他行の主任となるが爲めなり佛祖に代りて敎化門を開くが爲めなり子の如きは決して急ぐべからず尤も予は近き將來を期して化門の小道場を擇び與ふべし衲の言ふ所は一身の心力を鍛錬して隨處爲主底の心操と氣概とを鑄成し自己學得底の物を施し同時に自己の實修を增長するに在り人は必ず獨立の英氣なかるべからず單純なる自修の時は格別なるも他の法務を隨喜する場合の如きも尙ほ且つ自修と同樣なる資力を他に求めんとするが如きは獨立の氣概あるや否やを疑ふに至るものなり尤も其操行にして鐵石の如く觸處僧寶の功德を保任せば何の憂ふることかあらん唯だ一點の魔子胸次に伏在せば見聞の爲め誘惑せらるゝこと多かるべし

山僧曾て本校に在る三年先師與ふるに月二圓の資を以てす而して命じて曰く多少の餘剩を作れと衣服調度も大半は自ら求めざるべからず依て本鄕冠氏を始め三戸の施主を作り每月一回理趣分を讀み三戸より三十錢を受け之を冠母堂に托したり其他の特入金をも併せ托し三年の後預金三十圓餘に達したりき冠氏を親分とせしも洗濯物の外は一厘も一紙も此方より要請せしこと無し廿九歲の冬能山に安居し翌春大阪京都名古屋を經て粕壁に歸るに當り行脚の心にて路費全部二圓を超ゆべからずと誓ひ非常の艱難を甞め大荷物を擔ひ拜宿點心して途中多少の草鞋を得歸後算するに二圓の支出尙ほ少分の餘りありき是れ己れを以て人を方するに非ず亦曩時と今日とにては金力の價値にも大相違あり予は唯だ自己の行爲等の爲めに他を滯累する勿らんことを誡むるのみなり

○

迂衲昨日歸京し貴書披見致候

三月より七月に至る豫定の補資拾圓別紙爲替を以て送附候條受領可有之候猶雲衲として修行中は入を計りて出を算し特殊の事由あるの外は自己の身分を以て他の恩顧に酬ゆるを要す身に一資なくして財力以て仁義道中の活計を打するは宜しき所に非ず

明治四十三年五月卅一日　　雲洞石禪

覺禪殿

○

同師（大阪市外下三番萩の寺東光院内）へ――東京市芝公園永平寺出張所より

啓　衲來る四月北越に赴くも主として頸城及び中魚沼方面を巡錫し日程の報ずる所に依れば歸菴の時なきが如し故に來書の事は他日を期することゝすべし是れ實に止むを得ざるものとす

子も最早少壯の極に達せり安心立命の基礎を樹つべきの時なりと思ふ尤も天下の人往々一寺に住するを以

○

必ず少賣弄なること莫れ濟門の鐵關を透破して師家の證明を得んことを望む證明を得るに至るも大事了畢にはあらず眞の風光は其後に在るべし

然れども一度證明を得て更に第二第三の證明を得べし是れ迂衲が聞かんと欲する所なり　至禱々々

酉六月七日　　雲洞石禪

覺禪老具壽

○

七月より十月分金八圓を送附す領納すべし本年も既に七月を過ぎ秋風梧葉を訪ふの日不遠　未審禪觀の進況如何　光陰如轉丸　暫時不在　如同死人　刹那も怠慢あるべからず思之惟之

近頃の書面を見るに字畫不整　正非楷　非草　封筒の如きも亦た七顚八倒裡に執筆するもの丶如くに相似たり毫頭の細事に干渉するに非ず要只心地の穩密如何を憂ふるのみ

予此頃子が爲めに推擧して轉衣遙授を得たり而れども請疏を傳付するは之を他日の事とすべし十有餘年の老雲水未だ自ら一疎布衣をも製し得ず予は之を責むるに非ず只だ德の進まざるを悲しむ　珍重

明治四十二年七月念六　　雲洞叟

酉一月念七　　　　　　　　　　雲洞石禪

覺禪嗣子座右

○

復　大昌崇禪兩刹の戒會には久保田實宗和尚隨行すること丶相成り一名にて忍べよとの內啓ありたれば他には隨侍を伴なはざる積りに候尤も尊前の如きは近處の事なれば先方と談し合にて任意隨喜となれば迂衲の方は毫も差支なし兎に角迂衲は一笠一杖主義の傳道を試みるを主意とすれば單身にて來れとあればそれにても喜んで勤むる程なるを以て一人でも約束外の人を伴ふことは致すまじと思ふ此段了承ありたし次に越後高田在私立中學の優等卒業生にて東京の大學に入るまで一二ケ月の處參禪したしとの志願なるよしにて石月師より迂衲に照會ありたり是の如き人は寧ろ臨濟下に投ぜしむる方法益多からんと思ふ就ては南禪建仁の內にて臨時參禪せられ得るや若し出來るとせば如何なる準備と心得を要するや其邊の事不案內なれば當職の方にも內聞して至急通知ありたし

殘寒料峭保任莫懈　珍重

明治四十二年三月十五日　　　　雲洞石禪

覺禪具壽

製し居れりその際親しく授與すべし前途は丹波なり歸路東光を拜訪せんとす狂水の瞞を受け玉ふな修行地油斷あること勿れ佛祖の眞風を荷擔するの大事を忘れざれ　至禱々々

明治四十一年十一月念一　　雲洞石禪

覺禪子へ

衡具壽に別紙同樣賴むぞよ知見に誇らず細行を愼しむべし跨跳佛地の活機用は自から此中に現出せん

○

典座の重任無事行畢之段歡慶不斜候

過日在田老師に相見偶ま大阪東光精舍面授の事を演ぶ老師喜悅溢面唯だ今後の恪養を望み居られ候

思ふに禪風落地すること尙し再興今日に在り子幸に叢林に住すること多年實に是れ夙緣の餘慶なるべし唯た降伏一切大魔の念力に住し生々世々を期して酒類を遠離し異時衲に代りて雲洞の衆を接すべし近きに於て我は師家分上の位地に當るべきものとの觀念を忘れずして小成に安んずること無く參學不退轉なるを要す

東光方丈を訪はゞ宜しく申上ぐべし在阪中一日同方丈に於て迂衲受用の菓子兩三點購取す告別の際償還を忘却し歸京の後小爲替にて二圓を送呈せり而れども未だ御返書に接せず拜芝の時相伺ふべし　珍重

金拾參圓參拾錢願に依り相送る去れど落處を誤らざらんこと此上共に深く之を望む書面を閲するに運筆稍や謹愼を缺くが如し而して閑語の多きを見る衲は此等の些事を咎むるにあらず然れども一言一句戲論に渉らざらんことを要す鐵石膓を鍛錬し盡して徹底不動の境に進みなば閑言漫語亦何憂要只平生の道念を把定し三寶を欺くことなきに在り一滴の狂水唇頭に觸着せば三十年の禪骨七花八裂ならん　至切々々

明治四十一年九月廿四日　　雲洞石禪衲

覺禪子へ

○

病魔退散無爲辦道祝着不盡　今後不懈勇猛精進行解相應の鐵漢たらむことを要す士雲禪師垂語曰如行而行如說而說西天此土一團生鐵這箇之一着以て禪身を養なひ禪心を打着するに堪たり今や四維上下荆棘繁茂雖然與麼若夫此人ならば七通八達脚下無一絲ならん六魔子應需贈與魔子を弄して佛衆と倣すべし迂衲をして熱惱せしむる莫れ泰衡具壽同安居の由歡喜無量相俱桶底を脫し一滴不存にし去り異時眞風を煽揚して蓋天蓋地なるべし

迂衲來月十日午前三時名古屋を發し其地を通過すべしその際停車場に來るべし綿入今無し宏母堂に賴みて

〇

同師へ——北海道札幌區中央寺より

尺牘本日落手せり依て金五圓を送附す唯た是れを贈與するに臨み尙ほ鴆毒を度與し去るの感あり書中の記する所を見れば鍛錬の功怠り無きが如くなれば稍や安堵すと雖も昨年まで殆んど厘毛の與ふる無も尙ほ其行持を相續し來れり本年に至る多少の贈與あるも却て其不足を訴ふ尤も支出の表示するも毫も無理なりとは思惟せざるも昨と今と何に由てか庭徑すること恁地なるや若し纖塵の缺陷を胸臆裏に生ずるあらば宿魔立ろに襲ひ來るべし衲の忡憂する所這箇の一事に在り而立の老雲水尙ほ且つ蹉過すること有らんか永劫鬼窟裡に死在すべし此地是重々の鐵關切宜省察

明治四十一年七月念六　　中央安居　雲洞菴主

覺禪子

狂水涓滴口邊に觸るゝ勿れ古衣は來月中旬歸京の上贈與すべし

〇

同師へ——東京市芝公園永平寺出張所より（以下七通）

や終始叢林に止住す眞是道人也迂衲の衣鉢を嗣ぐに堪へたり唯だ酒是魔假令熱鐵丸に觸るゝとも酒盃を手にすること勿れ是れ萬人の希望する所なり賴む〳〵

明治四十一年四月七日　　雲洞石禪

新井覺禪　具壽

爲替の着否共東頸城郡松之山村觀音寺に宛報ずべし廿四日迄同寺に在り

○

同師へ――東京市芝公園永平寺出張所より

來書に依り爲替を以て金四圓を贈る此是幾回か佗を熱惱せしめたる魔兒なり轉識得智の分なくんば太險也愼勿被瞞

禪に禪病あり學に學疾あり皆不調和より起る子夙に佛門に投じ佛場に坐臥すること二十年是れ廣大の因緣たり唯だ一點酒魔の襲ふ所と爲りしため屢々平地に蹉躓することを致す眞に惜むべし衲が一微財を贈るも恰も毒を與ふるが如き心地せられ焦心不可言　能諒々

明治四十一年六月二日　　在東京雲洞菴主

新井覺禪子

精錬し生涯の安心を獲得するまでは相見も亦之を爲さゞるの約にあらずや皆川の親切なる取做により僅かに相見を許し而して將來の針路に至るまで夫々照會し居るに至れるも若し其行履不安なるに於ては依然として舊時下山の約に回るの外なし

平生の誓約慷慨の意見何の處にや在る自今以後心地を徹底するまでは撥草瞻風只管に僧堂裡に打坐し圓覺場裡を縱横するの機用を具せんことを要す尙ほ衲の徒弟たるの緣に依り篤信家より特殊の外護を受くること誓て之を禁ず行履未徹なるに於ては德に報ずること能はざるの恐あればなり其許の精神及目的並に自ら規する所を記し衲又水野に上申すべし

明治三十六年九月三日　雲洞衲

覺禪子

○

同師（京都市東山南禪寺專門道場內）へ――越後國古志郡栃尾町常安寺より

復　衲三十日夕東京を出立し當地に來り來月廿七日歸京すべし先般の書面は歡讀了別券送附せり又先日高知市の寓處に宛金壹圓券を送りき回答に接したるや

些少の財も亦毒蛇の毒なきに非ず必ず〳〵其毒に觸れず善財の藥草に於けるが如くなるべし尊前性質直況

要し而して山僧の雲堂を負擔し爲人度生の功を擧ぐべし若し一點野狐涎に觸着せば喫咬不下なるべし山僧合掌至囑只これのみ

山僧數多の徒弟あり鐵眞老漢又三四の嗣子ありと雖も箇々阿轆々地子獨り從來の枷鎖を截斷し死生叢林の漢となり格別の宗旨を保任し溷濁せる洞上の臭氣を一洗して隨處に禪機を活提し去らんこと至囑々々

山僧亦一隻眼の在るあり雲烟千里を隔つるも子を護念することは閑却あらず只々更に一層樓に上り圓覺を窮盡すること一二三歩せんことを望む　敢乞

明治三十六年三月十日　　雲洞菴主

新井覺禪衲子　明窓下

○

殘暑之候身體如何にや

過日在京中の書面も出先にて披見せしに出處進退の餘りに不定殊に先便の回答も未了なるに熱海行東京假寓等太だ其安心に疑なき能はず仍て品川と大佛老師にのみ鄙書を呈し其許には其儘回答もせざりき其後鎌倉へ歸單せし樣子なるも行履僧堂に落着せざるやの風評ありて予に自坊へ呼戻すことを勸告する人すらあり果して然らば何等の手脚ぞや曾て衲の膝下を離れ行脚の途に出る時の誡規如何と顧照せよ禪機を

雪裡任他梅未發　筆奪陽春別有花

寒中の勉道一層の愛護萬々祝祈　　雪屋凍眠閑翁

一月初七日

新井覺禪具壽　明窗下

○

端書落手西有寺聞法を了し歸單の由安心致候　此程は有卦の祝儀たまはり歡喜更に宏老母よりも細かに來狀ありき

衲も無事安居來る廿五日より大衆を引率して澤海方面及彌彥の方へ行化致し候　寺は玄道力生外六七箇內安居の豫定なり小關主人重病のこと氣の毒千萬今日見舞狀をリテ殿に出したり

禪風の萎靡日を追うて甚しく洞上正宗の命脉は四面盡く楚歌慨歎の至りなり唯だ一氣禪定に止住し禪機を撥轉し禪風を鼓吹するの眞獅子兒なくんば天下滔々蝙蝠羣に入り去らん子幸に錫を圓覺に掛け日進月步箇の安心の地を占取し以て禪床下の風流を嘗む若し能く相續不斷にして徹底金剛圏を超出し鐵蒺藜を咬破し不與萬法爲伍底の妙氣を恪習し去らば豈只迂衲の慶幸耳　朝訪天台暮參甯嶽亦　可也唯楞伽窟中其頂顊を窮め物外に逍遙し性海に遊戲し降魔成道轉輪行化一に禪乘に駕して七通八達ならんことを

逆水揚波の自由を得べし鐵眞老漢の正法眼藏貴子の双肩に懸在せり歩一歩進一進精進勇往禪關を透破し鳥道を踏飜して玄妙の至道に逍遙無礙ならんこと切望に堪へず

迂衲無爲與大家加年只當地は凡て舊暦なり四邊皚々好雪片々不落別處なり瓊林玉樹も春色を含むに似たり衲の寐語一二

雪生涯

三冬安住雪生涯　萬里溪山景轉奇
麵市散華倶祝瑞　袁門鎖夢獨吟詩

又

庭前竹表神光節　殿後柳垂瓔珞絲
堪笑玉人徒費力　乾坤何處不摩尼

新年

探盡風光眼着沙　金城駐錫臥烟霞
迎新送舊雲門餅　改往箴來趙老茶

又

不變乾坤三尺拂　無量福壽一袈裟

幸に明師に投ず子の慶幸なり衲の意志實に獅子の其兒を斷崖に蹴却するの思あり深思諦觀せよ小成に安ずることを休めよ小苦に屈すること勿れ大器晩成の箴焉に在り草鞋錢の需用は子の身に落在して自ら綽々たるものあらん

衲の眼光は常に子を射透し時に臨んで攝取すべし　言外の意深く之を諒とすべし　至禱

明治三十四年十二月念一　　　　穆　英

覺禪子　卓　前

○

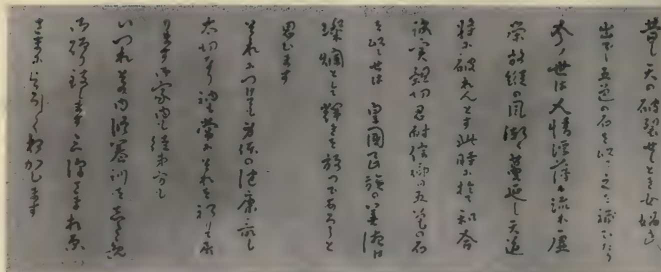
元正啓祚萬象咸新　乘此辰七尺單前無恙參究新年之佛法迓衲之喜何事如之　猶賀詞祝餅及數篇之偈頌被及贈與歡慶不盡

ラツセル夫人自遠邦來參禪問法其熱心其優情感歎の外無之扶桑國裡又一人の此夫人に似たるなきか可謂傍人無眼それに付ても貴子が圓覺に錫を掛け一閲年修證の觀つべきあり詩偈片々自ら慕道の志氣相見え鐵眞門下此鐵漢をして不咬破着たらしめんかと思へば賴母敷存じ候　唯だ寸水尺波動もすれば他を惱殺して漂流不羈ならしむ世尊曾て降魔の化儀あり孔子又不惑の言ありこゝ暫くの處尤も緊切なり重々の關鎖前に橫はり層々の危岩後に聳ゆるも安心衲僧の脚跟を妨ぐべからず　爭怪得老衲底の獨立ありて始めて

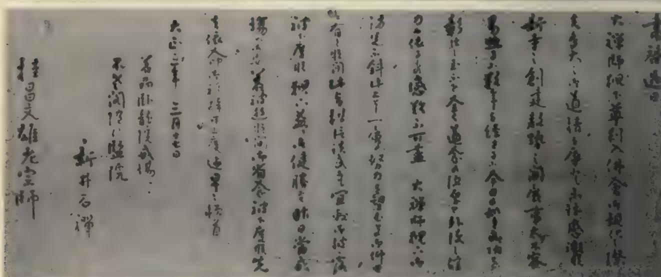
○

新井覺禪師（鎌倉圓覺寺僧堂）へ――新潟縣南魚沼郡三和村雲洞菴より（以下四通）

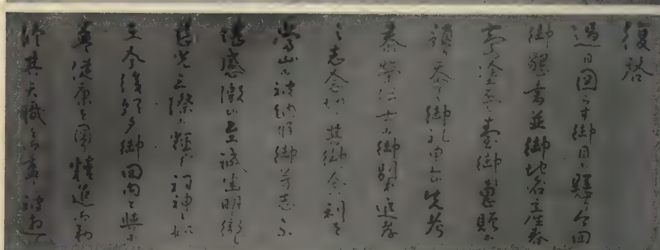
書狀到達近狀を詳かにし稍や安心を得たり　衲の子に待つ所頗る多きも亦深く其病あることを知る故に子が大死一番して絶後再蘇の期を待つや切なり、童龍の子に於ける慈愛徹悃なり子夫れ之を知るや衲頃日隆明に歸り龍と共に談偶ま子に及ぶ流涕之を久くす而して子が信施物たる梁川大嘉献納の品を擅使し去るに至つて衲痛歎殆ど斷腸の思あり若し子にして慚惶骨に徹するに非ざれば罪過消滅し易からず然れども衲嘗て子を惡まず只だ子が其本分を守り其心膽を錬り其知見を開き其才能を磨するを是れ望む近來の苦學果して眞ならば衲の歡喜許多ぞや然れども少かに髓地を知て玄關透得し去らば且喜沒交涉自今以後幾般の蒲團を坐破し幾條痛棒を喫し幾重の虎穴に入り幾箇の苦辛を甞て始めて佛祖の深恩に報い奉ることを得べし



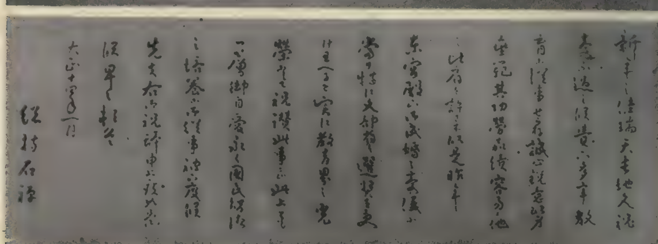
郡山市　安達石天氏所藏



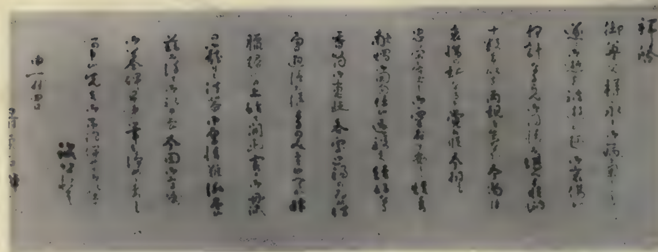
福岡縣　清水文雄師所藏



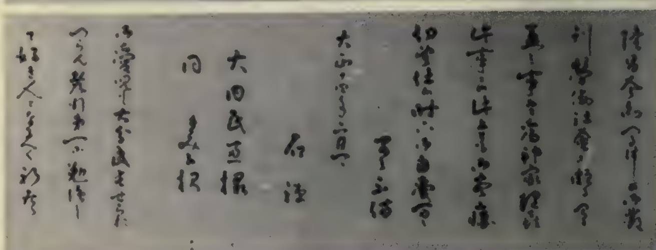
秋田縣　金野仁三郎氏所藏



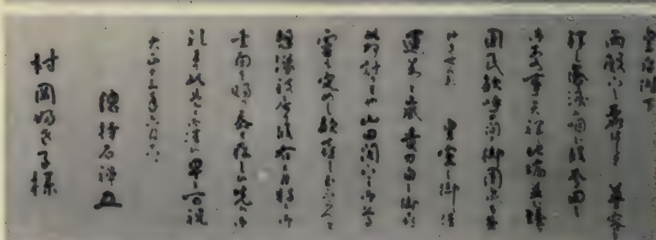
愛知縣　成瀬涓氏所藏



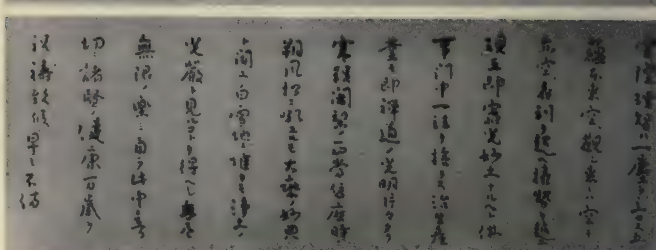
新潟縣　小田英太郎氏所藏



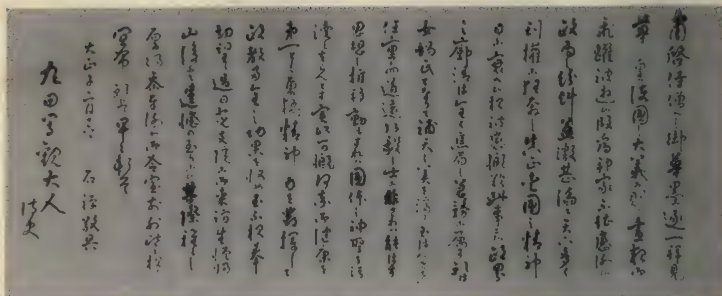
福島縣　大内民恵氏所藏



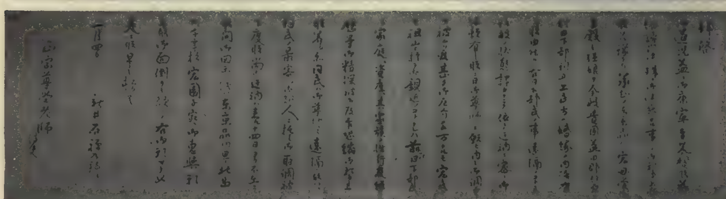
東京　志村甚一氏所藏



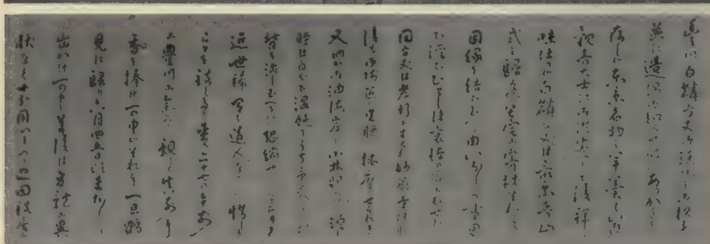
長岡市　茨城一如氏所藏



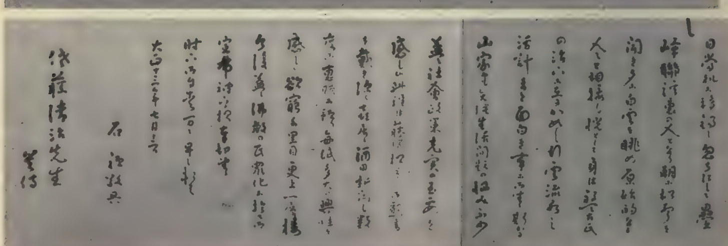
新潟縣　丸田等觀氏所藏



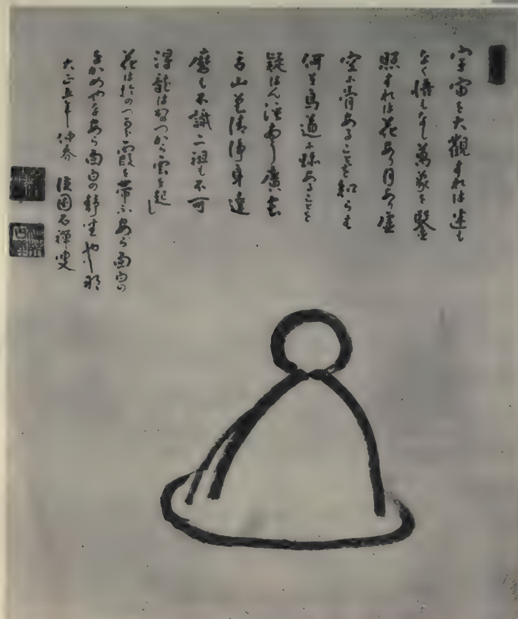
岐阜縣　都築靈源師所藏



箱根　片桐慈光氏所藏

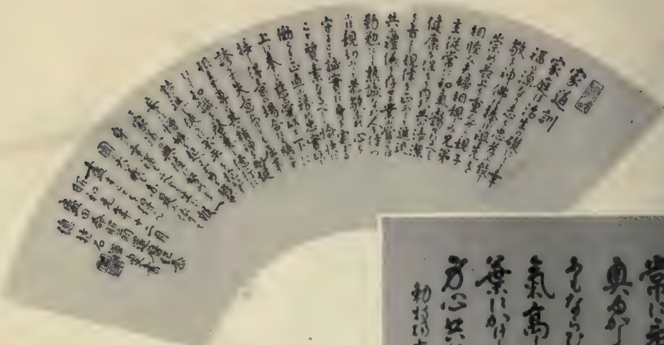


山形縣　佐藤精治氏所藏

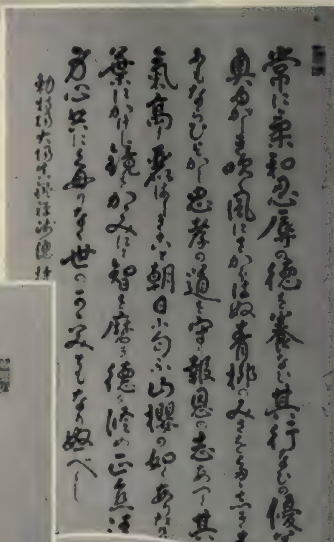


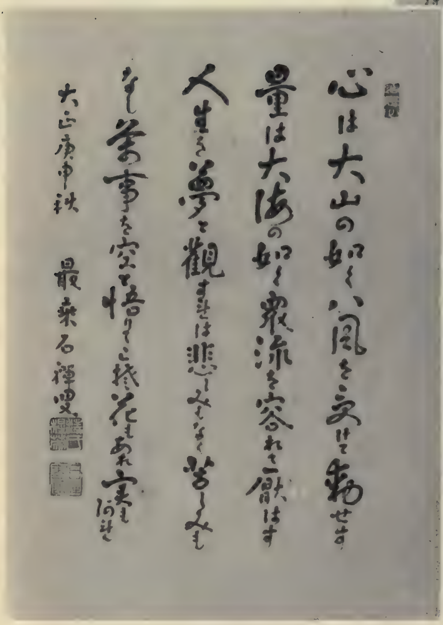


東　京　山田麻績子氏所藏

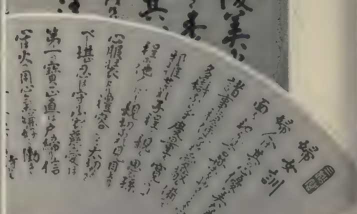


名古屋市　盛田命昭氏所藏

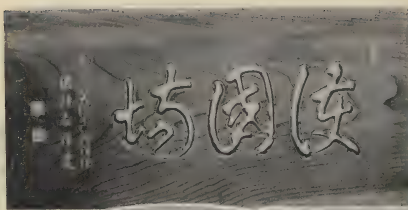




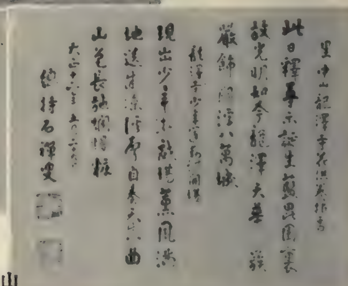
新潟縣　小田英太郎氏所藏



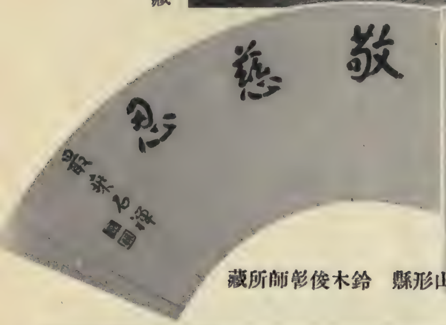
名古屋市　盛田命昭氏所藏



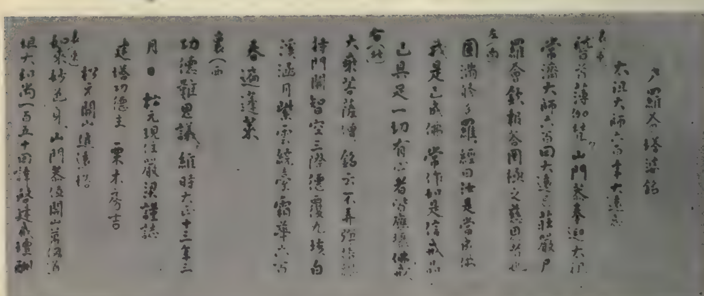
新潟縣　定光寺殿所藏



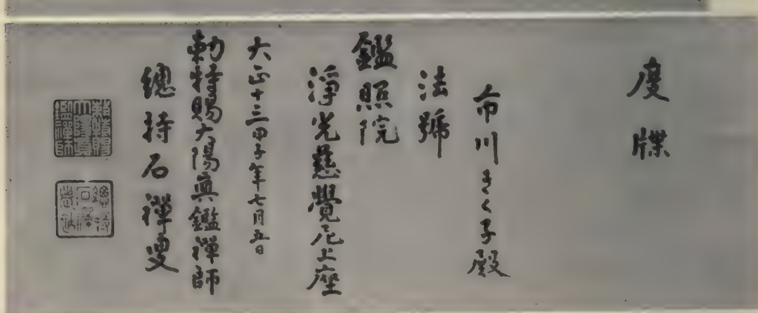
里中山龍澤寺殿所藏



山形縣　鈴木俊彰師所藏



松元久田師所藏



度牒

市川きく子殿

法號

鑑照院

淨光慈覺尼上座

大正十三甲子年七月五日

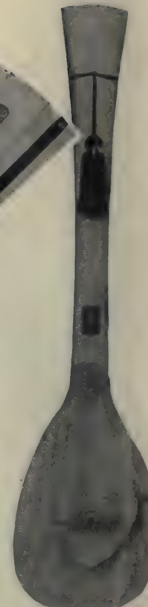
勅特賜大陽眞鑑禪師

總持石禪叟

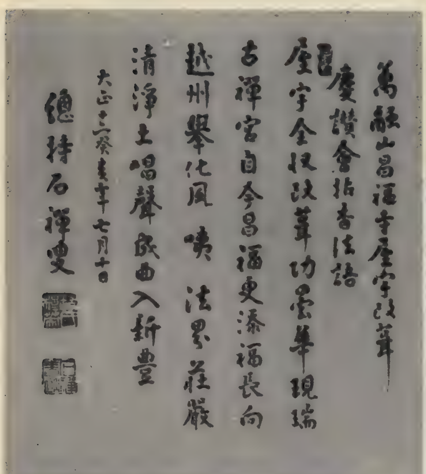
新潟縣　市川茂平治氏所藏



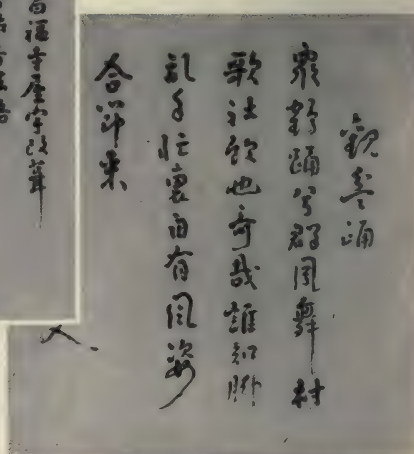
石川縣　星野保五郎氏所藏



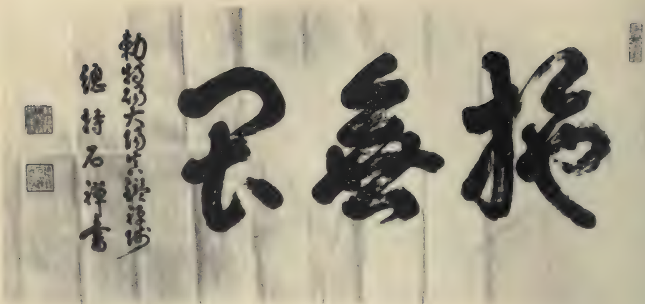
東京　服部太元師所藏

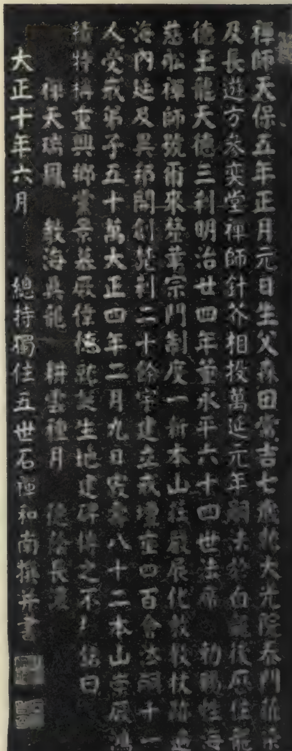


新潟縣　赤柴哲禪師所藏

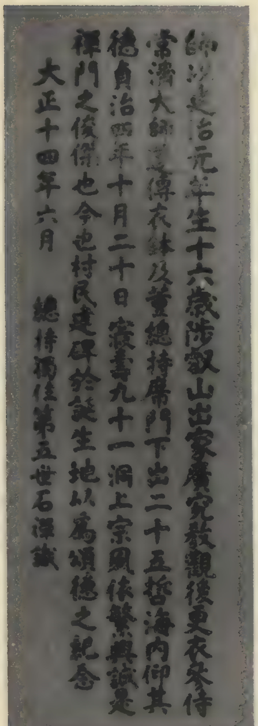


新潟縣　赤柴哲禪師所藏

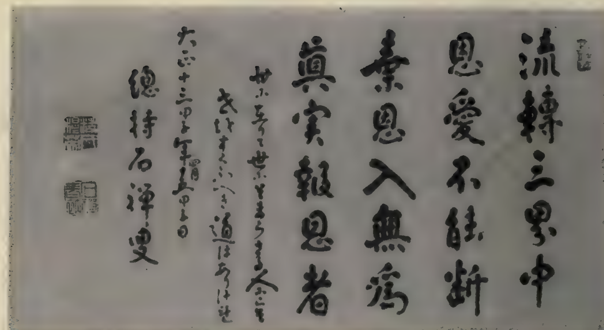




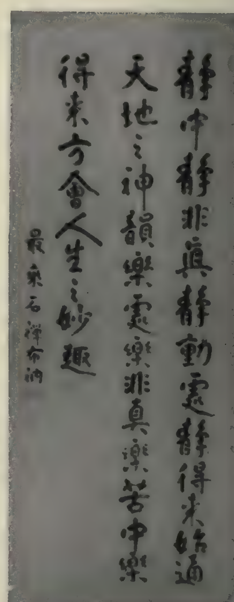
森田悟由禪師誕生地碑文



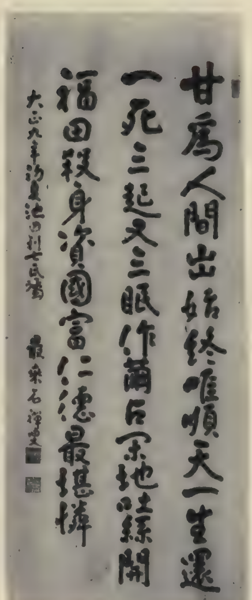
峨山禪師誕生地碑文



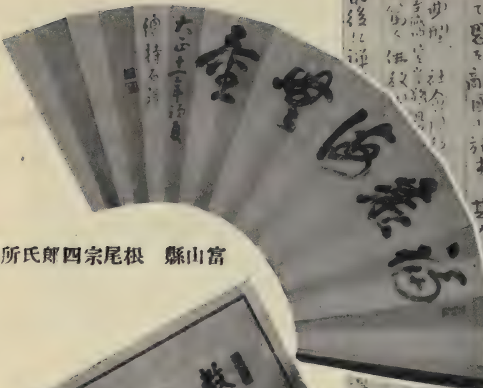
箱根　片桐慈光氏所藏



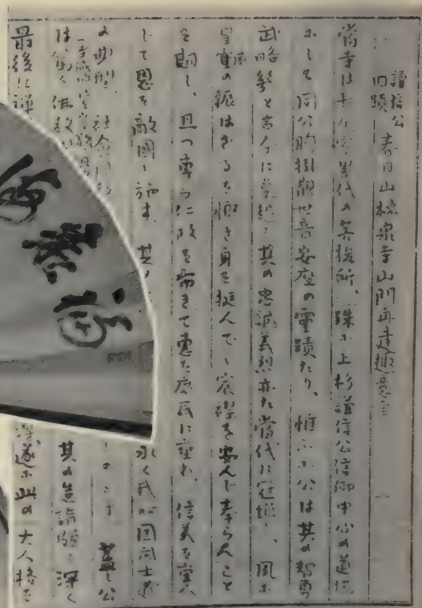
東京　山田藤吉郎氏所藏



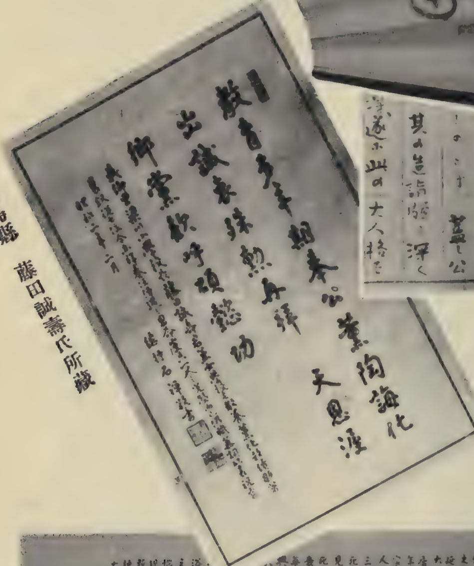
福島縣　池田利七氏所藏



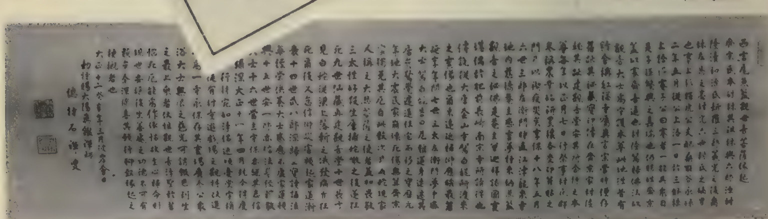
富山縣　根尾宗四郎氏所藏



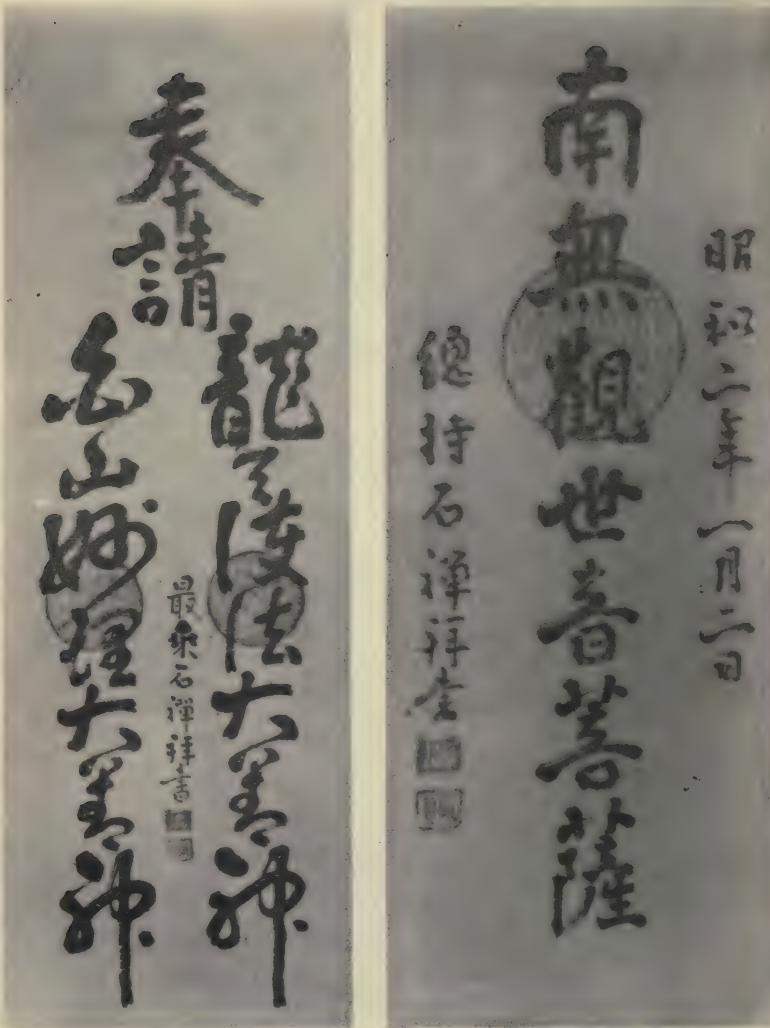
新潟縣　林泉寺殿所藏



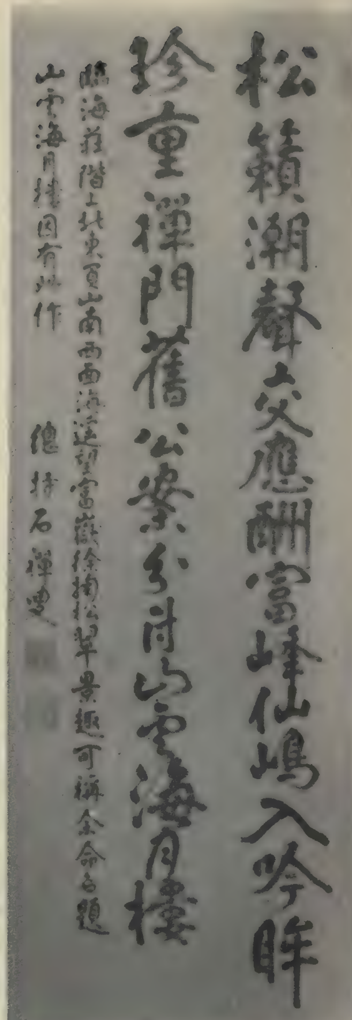
福島縣　藤田誠壽氏所藏



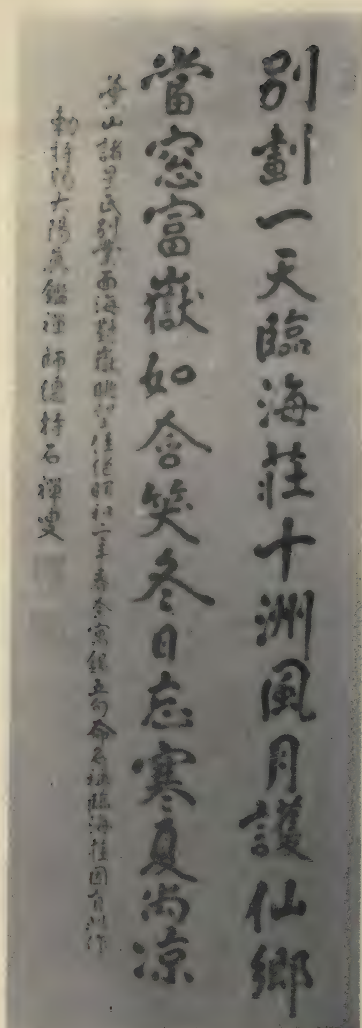
新潟縣　齊京守道氏所藏



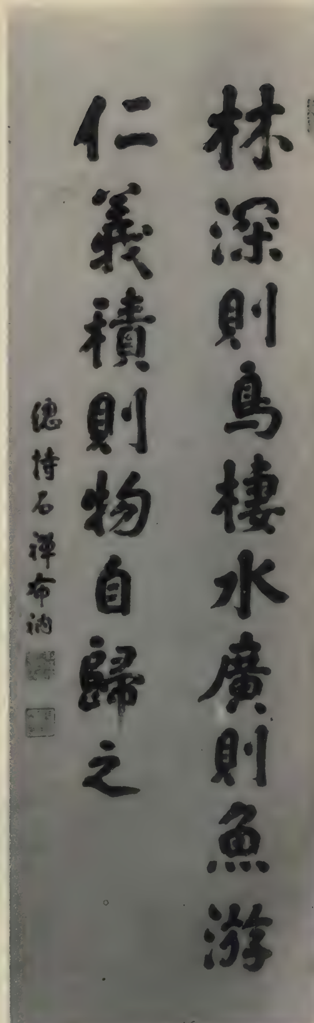
郡山市　安達石天氏所蔵



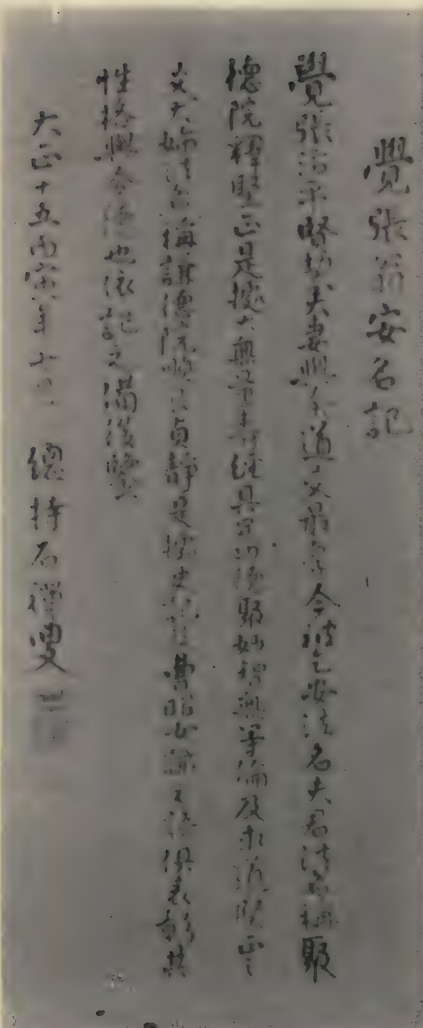
横濱市　諸星千代吉氏所蔵



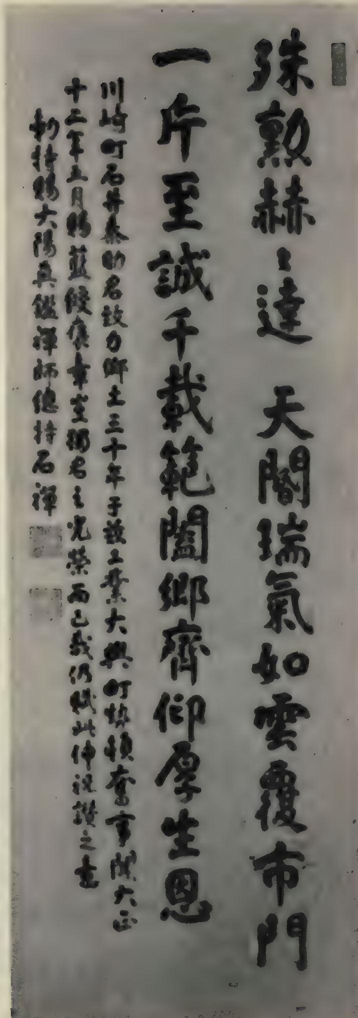
横濱市　諸星千代吉氏所蔵



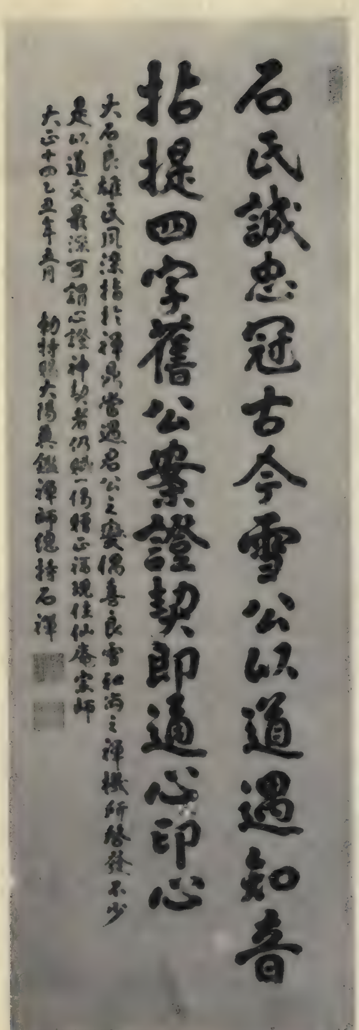
新潟縣　市川茂平治氏所藏



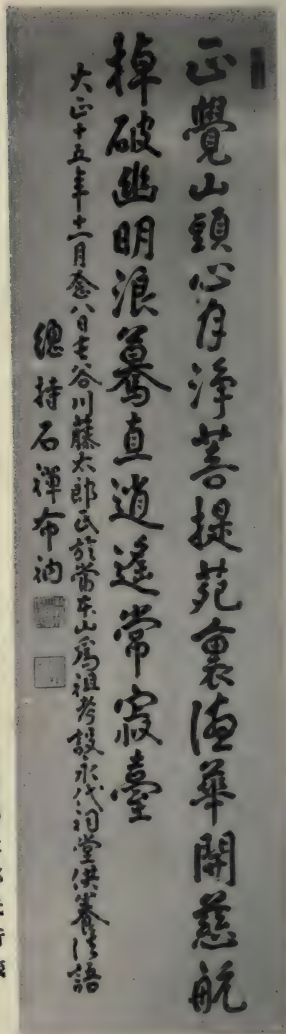
新潟縣　覺張治平氏所藏



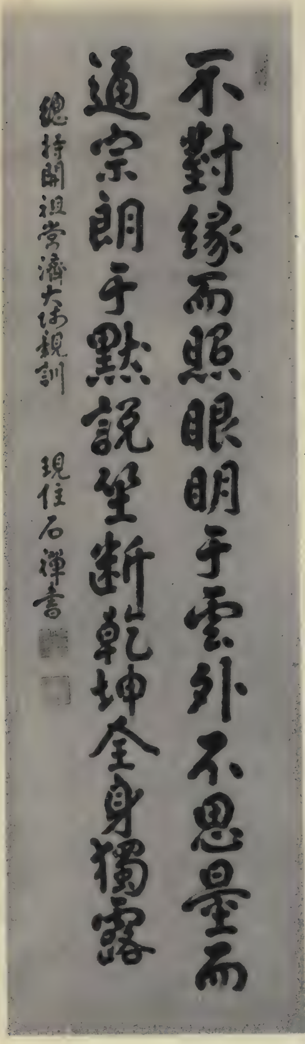
川崎市　石井泰助氏所藏



兵庫縣　鈴木仙庵師所藏



熊本縣　長谷川藤太郎氏所藏



熊本縣　長谷川藤太郎氏所藏

書簡遺墨篇

書簡遺墨篇

目次

一異彩を加へるものとして世に歡迎されるに相違ありますまい。

この序の中に帝都上空飛行のことがありますがそれは止むなき事情のため實現を見るに到りませんでした。

（譯　者）

開くの鍵鑰であつた。

禪師の御精神の敏活に且つ公明であつたことは、禪師が、佛教は儀式や式文の陳腐な化石的な組織體ではなく、智識のあらゆる發展と人間の能力の總ての增大とを利用することに目醒めた活き力を成せるものだといふことを世人に印記せしめんがため、空中の可能を利用され首都東京の上空を飛行されたことが、よくこれを證明して居る。

禪師の悼ましき御入寂は實に全世界の損失である。しかし禪師の生き〲しい柔しい御人格は他の人に取つては一箇の靈感として長く世に殘るでありませう。

禪師の御著作は：——若し英語に譯された短い論文から判じ得るとすれば、即ち一斑を見て全豹を察すれば——明晰なる論理と無比の熱望といふ二大特點を有つて居る。今これが公刊されるのは最良種の日本文學に

（右の歐文はベーティー氏より寄せられた序であります左にその譯文を掲げます）

序

佛教思想の西洋に與へた影響は大體間接的であつた。ヨーロッパ・アメリカには日本佛教を説明するものは殆ど一人も居ない。隨つて佛教に對しては極々奇怪な考が一般に行はれて居る。故新井禪師のぢかにこの無智を除かんと試みられたことは、これ禪師獨特の御長所である。禪師は奮然として西の世界へ傳道旅行を行はれ、これによりて御自身精神の國土に於ける開拓者たることを示された。而して禪師は自國民の啓發を強くすることを以て滿足せず、如何にかして光輝を海外に擴げようといふ衝動を感じた過去の先驅者と同位に居らるべき御方である。禪師御自身の貴く光ある御人格はその教の最善の説明者であつた。總ての門戸を

Preface

The influence of Buddhistic thought on the Occident has mainly been indirect. ~~The~~ Japanese Buddhism has had scarcely a single exponent in Europe and America. The most grotesque conceptions of Buddhism popularly prevail. It is the special distinction of the late Lord Abbot Arai, that he attempted to remove this ignorance at first hand. By his courageous ~~[illegible]~~ missionary journeys to the Western world, he ~~was a great~~ ~~[illegible]~~ showed himself a ~~great~~ pioneer in the realm of the spirit, and must take rank with his great fore-runners who were not content with intensifying the enlightenment of their own people, but who felt the impulse at all costs to spread illumination abroad. The Lord Abbot's own gracious and radiant personality was ~~[illegible]~~ the best recommendation of his doctrine. It was a key which opened every door.

How quick and open a mind was his is evidenced by his taking advantage of the possibilities of the air, and making a flight over the capital city of Tokio, in order to impress the people with the fact that Buddhism is no antiquated and fossilized ~~[illegible]~~ system of

ceremonial and formula, but constitutes a living force, awake to take advantage of all developments of knowledge and ~~of increase~~ every increase of human capacity.

His lamented decease is indeed a loss to the whole world. But his vivid and benignant personality will ~~long be an example~~ long remain as an inspiration to others.

The Lord Abbot's works, — if one may judge from short treatises which have been translated into English: ex pede Herculem — are marked ~~by~~ at once by ~~their~~ clear logic and invincible aspiration. Their present publication ~~must appear~~ must be welcomed as constituting a conspicuous addition to the best class of Japanese literature.

序

新井石禪師は禪道の巨擘にして、學深く識高く、特に其の圓滿無礙の人格は能く大衆の歸依を繫ぎ、道俗齊しく其の溫容を慕ひしに、憾む可し、天此の人に齡を借さず、壽域尙ほ遠くして生緣早く盡くるを傳ふ。痛惜、何ぞ堪へん。幸に遺響のある有り。文に詩に偈に歌に、或は講演、或は筆錄、其の稿累積して山を爲す。這回編纂して、全集を刊行す。禪師身は朽つるも靈は滅せず。慈眼猶ほ此の遺著中に輝くを思ふ。渴仰の情、以て聊か慰む可し。所感を叙して序とす。

昭和四年十月

濱口雄幸

(32)

新井石禪全集

